安達常正編

漢字ノ研究

序

凡そ人生日用に必要なるもの、衣服飲食より宮室器皿の類に至るまで、一としてその製作を討ね、その用法を究め、以て善美にして便利ならんことを求めざるものなし。文字の人生に必要なる、蓋し亦一日も缺くべからざる所なり。而して今日普通に使用せらるゝ漢字は、名は漢字と

いふと雖も、その實は即ち國字なり。然るに世人漫然として之を省みず、漢文學に從事するものも、亦その製作用法の如何を討究して、之が整理を圖るもの寡し。是に於て、その使用は益〻亂雜に流れて、殆ど底止する所なからんとす、これ豈憂ふべきの至ならずや。

安達常正君は、職を師範學校長に奉じ、久

しく力を普通教育に竭す、固より漢文學專攻の士に非ざるなり。然るに漢字の研究に從事せらるゝこと十數年、刻苦勵精この書を著はす、日用漢字の各方面に於て、既に粗ゝ網羅せりといふべし。彼の射利の徒が、一時の好尚に投じて編著せしものと、日を同じくして語るべからず。余この書を校閱するに、或は一二の余と意見

人を異にするものなきに非ず、されども人各見る所あり、亦何ぞ妨げん。余はこの書の偏く海内に行はれ、今日に於ける漢字使用の亂雜なる弊習を一洗せんことを希望して已まざるなり。

若しそれ漢字の根本的研究に至りては、更に說文及び金石文等によりて、その淵源を探り、その變遷を詳かにし、以て東洋

の文明に於ける研究の基礎を定めざるべからざるなり。されどもそは一科專門の業にして、日用漢字の研究とは、自らその撰を異にするものなれば、この書のよく盡す所にあらざることは勿論なれども、亦或は之によりてその端緒を得ることあるに庶幾からんか。

余はこの書の發行、日ならずして、既に再

版の擧あるを喜び、爲めに一言を弁する
こと此の如し。

明治四十二年十二月三十日

林　泰　輔　識

結繩鳥跡雖邈焉。籀文篆隸自古傳。六書八法用不窮。紀事纂言貴要玄。經史百家千萬卷。西來千有五百年。制誥令典將簡牘。一用其字爲關鍵。文敎蔚起彝倫敍。絃誦相和滿八埏。永爲國文明上下。修齊治平非偶然。涵養德性道問學。人皆可以至聖賢。日東別開君子國。赤縣屢見蟻腥羶。輓近藝術自歐米。格物窮理通人天。佔畢研鑽皆蟹行。各從所好不免偏。漫以漢文爲難解。束之高閣蠹蟫穿。安知日用應酬間。如無此字言豈宣。所謂懲噎終絕食。無乃得魚忽忘筌。載道之具視芻狗。世道人心轉變遷。本出漢土今我文。萬古不朽心肝鐫。却怪聵聵耳食徒。忠孝節義忘源淵。嘲比糟粕擬糞土。魯魚不辨亥豕愆。稱呼謬誤恬不恥。筆畫勿論失後先。吾友安達君常正。學

通內外識媸妍。取長補短嫌固陋。溫故知新事精硏。講餘鉛槧力考證。訂僞辯訛積百千。十年之功非容易。出之問世數十篇。行文平易尤可悅。論駁公正無拘牽。閱覽不知卷已盡。授諸青衿資陶甄。予亦髫齔學咿唔。螢案雪窓親簡編。白首窮經死章句。平生傳謬罪難蠲。爽然自失汗濕背。瞑目思之有所緣。砂上建屋輒傾覆。可知基礎終不堅。自今折節愼尋繹。舌耕筆耨治吾田。明晝正音不貳過。誓使斯文益聯翩。

安達先生著漢字之研究成。見貽一本。繙閱之餘。賦此以謝。並述鄙懷。即乞是正。

東北帝國大學　湘香老人新居敦二郎拜手

自序

私は元と支那の本國に生れ、天授の一人息子として、寵愛せられ、尊敬せられ、年齡は今日にては、五千年であります。本國では、將來永劫、不老不死であります。人は私に親むときは、賢となり、私を疎んずるときは、愚となり。國も私との親疎如何に依つて、古來盛衰榮枯が、分れたものであります。適者生存とか申す理法に依り、私の子孫は、非常に繁榮し、且つ何れも不老不死でありますから、幾百千代の父祖も、子孫も、皆東亞の諸國に同棲し、今日にては、一族五萬、東亞四億五千萬人の尊敬を受けて居るのであります。

今より千五百年以前に、御國よりの招待を受け、遙ゝ渡海して

參り、別に分家を構へることになりました。是より一同御國のためにも貢獻し、本國の文物制度をも、一族の努力に依つて、御紹介致したことは、勿論であります。殊に一族中の或ものは、實に冠を脫し、沓を去り、所謂具體的に粉骨碎身致して、特に御國の御爲めのみを圖つて居るものもあります。

私共の一族は、何れも容姿方正、性質嚴格にして、各人各箇の名前のあることは勿論、又各人各箇の意見をも有して居ります。然るに近年に至り、御國にては、名前をも、性質をも、種々に混同せられて、頗る迷惑を感じて居るのであります。殊に最近四十年以來は、他の競爭者の出たために、大に一族の眞價を疑はれ、隨分厄介物扱にせられて來ました。回顧すれば四千九百六十

年の長い年月の間は、實に智の化身、而も唯一の化身として、無比の尊敬を受け、惟神至聖、苟も一族の面目を傷け尊嚴を冒すものは、天罰を蒙るものの如く、信ぜられたものが、近年に至り、如何に競爭者の輕便に運動すればとて、一朝文明と申すものの妨害者と見做され、教育と申すものの仇敵とまで思做されるとは、誠に遺憾千萬であります。殊に近き將來には、私共の一族は、御國より退去を命ぜられ、御國に於ける分家は、斷絕の宣告を受けようとして居る有樣であります。相當の相續者、否後繼者があつて、御國の御爲め、文明のため、教育のため、十分の貢獻をなすものがあれば、私共の斷絕は、決して厭ふ所ではありませぬ。御國の御爲め、慶賀の至であります。

唯今更愚痴がましくはあるが、せめて千五百年間に於ける勤勞の狀況を認められ、將來に於ける記念帖として、現今に於ける狀況をも、一つ御登錄し置かれる譯には、參らぬものでせうか。

はあお前は「漢字」と申す一族であるか、適者生存の理法をも承知して居るやうであるから、競爭者が出たからとて、さう遽に悲觀するにも及ぶまい。容姿は餘り方正であり、性質は餘り嚴格であるから、多少世渡の仕惡いこともあらう。多少了見を改め、當世向の才子を、ちと眞似るやうにした方が、善いかも知れぬ。余は一つ「研究」して見よう。

明治四十一年六月　　安達常正識す

例言

一人には一つの道樂があるものである。「漢字の研究」は余の專門の事業ではないが余の消閑の一つの道樂は、是であるのである。本書中第十一篇に收めて置いた漢字の字書は、明治二十七年に起稿して、「眞字點畫の誤」と命名して置いた。廣島、鳥取及北海道には、其謄本が多少殘つて居る。又第七篇乃至第十篇に收めて置いた漢字熟字の讀方に關することは、二十九年に起稿して、「漢字熟字の讀方」と命名して置いた。又第三篇乃至第六篇は其後起稿して、時々教育雜誌に掲載したことがあつた。

二最近二年間、閑暇毎に筆を執り、右等の諸篇を取纏め、多少材料を取捨訂正して、玆に之を公にし、廣く同好の士の批正を乞ふことにした。

三假名遣法に關しては、本書結論及其他の諸篇に於て述べた通り、余は假名を以て音符的のものとしたいのであるが、本書は暫く現今普通の假名遣法を使用した。字訓に於ても、字音に於ても同樣である。但し字音假名遣法中、第七篇に於て論じ

た如く、漢字の四聲中平聲蕭、上聲篠、及去聲嘯韻に屬するものの漢音を「ヤウ」「キヤウ」等としたのである。又諸種の拗音促音等は、普通の假名通りに發音するものと區別して

しやう(Shō)は　しやう　てふ　(Chō)は　てふ
ちや　(Cha)は　ちや　きよ　(Kyo)は　きよ

と綴りたいのであるが、印刷の都合にて、特種のものの外は、眞直に書下したのである。

四、本書は明治四十一年六月中に脱稿したものである。故に本書中の年月に關することは、其當時よりの起算である、又其後文部省に於て小學校令施行規則中の一部を改正せられ、小學校に於ける漢字の制限、字音假名遣法及使用すべき假名の種類の制限を解かれたことであるが、本書には自然是等に關して、別に説述してないのである。

五、本書は專ら通俗的に漢字の全般に涉り、淺く、廣く其結果を發表したのである。他日「續研究」として、更に漢字の變遷、字體、音韻及書法等の方面に涉り、稍々深く其結果及理由を發表したい豫定である。

六、本書第一版乃至第三版は勿論第四版の印刷も、韓國併合以前より著手したのである。故に本書には朝鮮を韓國と言つてある。併し序に漢字の研究に關して、朝鮮併合は、天意に合して居るといふ閑話を附加へようか。

南朝鮮の深山に、「方夫人戈口或禾多」と刻せる碑がある。是は五百年前、李朝の初に當り、碩儒道洗老師が、李朝の前途をトし、其運命を豫言したのであつた。併し古來其意義を解するものはなかつたが、此頃に至り始めて其意義が解せられた。卽ち

方夫は庚。　人戈は戌。　口或は國。　禾多は移。

とて「庚戌國移」となる。詳しく言はば「戌」は「戊一」であつて、「人戈」は「戍（ジュ）」となるのであるが、豫言だけに用捨せねばならぬ。言換ふれば、「庚戌の年に國が移る」といふことになる。

第四版發行に當り此一項を追加した。

漢字の研究目次

第一篇　總論

第二篇　漢字使用の現狀

目次終

漢字の研究

安達常正編

第一篇　總論

第一章　國字としての漢字の生命

二十世紀の今日「漢字の研究」などの表題を掲げることであるから、世人は定めて「彼はどうかしたのでないか、頗るの茶人でないか」と言ふかも知れぬ。言はれても致方はないのである。元來漢字は、永遠に國字として採用せられるか、どうかといふことは、余は今申さぬのである。汽船もあり、汽車もあり、電車も出來、自轉車を飛越して、自動車が駈出す時代に至つても、急に下駄や草履の製造を廢する譯には往かない。煉瓦造や石造の家屋が、將來如何なる山間僻地にまで、行渡るに相違ないとの見据が附いたにしても、遽に木造の家屋も、殊に藁葺の家屋をも、止める譯には往かぬ。其他

衣服なり、飲食なりも同様である。現在のものは、如何に不完全であつても、不便利であつても、急劇に皆之を廢止して新奇のもののみを採用するといふことは、出來ぬものである。國字として、全く假名文字を採用するか、全くローマ字を採用するか、或は其他の文字を採用することになるにしても、其なるまでには、漢字は矢張一の告朔の餼羊である（こんな漢語は使用せぬ方が、善いかも知れぬ）余も理想としては、漢字廢止には、贊成である。國字としてこんな面倒臭い、不便なる漢字を全く驅逐して、新奇に面倒のない、便利な文字を採用することは、至極適當であると思ふ。併し其曉に達するには、如何に方法を講じても、如何に順序を考へても、少くとも一世紀や、二世紀は懸るかも知れぬ。唯夫のみでない。現今の英語も、佛語も、ドイツ語等も、固より普く世界に共通とは往つて居ない。而も各〻文法も面倒であり、又語數も多い。寧ろ近頃流行し懸つて來たエスペラント語のやうなものになれば、世界共通、至極便利ではあらうが、若し之になると想像しても、是になるには尙ほ一層長い年月を費さねばならぬ。迚も五世紀や、十世紀では覺束ないのである。殆ど永遠に其時代が到達しないかも知れぬ。故に現今英語や、佛語や、其他の國語を使用するものは、是等の流

行は流行として、頓著なしに、矢張自己の使用すべきものを研究するが善い。又研究せねばならぬ。言はずとも、やつて居るのである、併し又一方には、是等世界共通語の研究も、使用も心懸けて善い。至極便利なことである。

先頃高等小學校の讀本中に、ローマ字を採用するか、否かとの問題があつた。余は此採用には賛成である。唯夫のみでない。高等小學校の讀本中に、全く假名計の文章をも採用したいのである。尋常小學校の讀本中には、其初歩に於て、澤山採用せられて居るが、是は單に漢字交りの普通文に入る階梯の如く見做されて居るのであつて、決して、假名のみの一文體が我國に存在して居るとは、認められて居らぬ。既に漢字交りの普通文に入つてからは、小學校に於ては、假名文は全く度外視せられて居る、余の假名文といふのは、無論現在活きて居る國語の假名を以て寫出したものである。彼の中世以前に於て行はれ、現今既に死んで居る「ナン、メリ、コソ、ケレ」等を書き連ねた假名文を言ふのではない。高等小學校の兒童には假名文をすらすら讀めないものがある。綴れないものは、殆ど總べてであると言つても過言でないかも知れぬ。正しい假名遣の出來ないのは勿論のこと、長短拗促の音が、適當に出來るものが少い。

余は曾て小學校を卒業した中等學校の初年生に就いて、二三度實驗したことがあつたが、後には駄目と思つて、試驗することを止めた。其代に師範學校の卒業間近の生徒には、卒業後の準備として、此假名文を綴らせることを奬勵して居るのである。

余はローマ字論者や、假名論者の提燈を持つのではないが、何れも我國語を寫出す國文の一體として、普及せしめたならば、將來一つの最も適當な優勝劣敗が起り、適當な改良が出來るであらうと思ふのである。從來一方の論者は、兎角馬車馬の樣に脇見をせずに、自己の目的の一方にのみ馳せ、自論の短所は棚に上げ、他論の長所はそちらに取除け、其短所のみを掘ぢくり立てて、急劇の中に其勝敗を決しようとしたのである。是は何れも間違つて居るではないか、遂に雙方共倒となつたのである。

彼のローマ字會も、假名の會も、各〻其歷史を持つて居るのである。

詰り、國字としての漢字は、既に鼎の輕重を問はれて居る、輕いには相違ない。基礎が餘程動出して來て居る。併し全く之を取除けるには、中〻の年月を要することであらう。

第二章　國字としての漢字の歴史

現今でも世間の一部には、神代文字といふものを傳へて居る。又備後國の比婆郡の高野山の頂上に、一の碑文があつて、所謂神代文字とは、餘程違つて居るのがあるのである。余は其山下までは往つたが、其山上に登り、其碑文を見なかつたのを、今でも遺憾に思つて居る。又北海道小樽區の字手宮に於て、明治十一年道路改修の際、發見した斷崖の面より顯れた一種の文字もある。余は曾て其斷崖をも實見したし、今も其寫眞を所有して居る。由來アイヌには文字はない。又此斷崖の文字は、神代文字とも違ふし、又世界中他に類似のものもないさうである。何れも其由來が明でない。即ち我國に於て、上古文字があつたか、又はあつたのが、完全に傳らなかつたのであるかは、今は不明であると、言はねばならぬ。是等のことに關しては、普通の文學史等に於いても、古語拾遺及釋日本紀等を引證して十分に論じてあるから、余は詳細なるとは、言ふに及ばぬことと思ふのである。

然るに漢字は、應仁天皇の十五年、即ち紀元九百四十四年に、始めてはしりとして輸

入せられ、其翌年に論語十卷、千字文一卷となつて、大に輸入せられたのである。而て最初は所謂士太夫の間、即ち上流社會に傳習せられ、何時の頃よりか、上下一般に傳習採用せられ、遂に國字となつたので、其年代は不明ではあるが、今より約千五百年以前と見ても、格別の大差はなからう。

是より漢字は我國語を寫す所の最大要具となり、最初は音博士を置いて、字音を調べさせ、漢文を棒讀にしたこともあつたが、後には字訓と字音との混用となつた。其字音の部分を萬葉假名と稱して、現今でも或種類の人々の間に採用せられて居る。又其草體より一層簡單なる平假名が出來、又其楷體の一部、即ち偏旁頭脚の一小部分より、片假名も制作せられて、共に我國語を寫す要具となつて來たのである。世間にては、此片假名は吉備眞備(一三五三―一四三五)の制作、平假名は弘法大師(一四三四―一四九五)の制作であると傳へて居るが、果して是等兩人の獨力にて、悉く制作したのであるか、否かは不明である。併し此兩人は是等の制作に力のあつたことは事實であらう。

余は曾て先哲百家の拙稿中、此二人を詠じて次の如くした。

儒術兩朝稱帝師。　能書六道古今埀。　尤欽頭脚半身字。　寫出言靈幸國詞。
般若六波羅蜜多。　收之四十七文歌。　大師法界埀功德。　敎育因緣亦不磨。

漢字は此の如くにして、採用せられたが、唯其漢字のみではない。漢語も漢文も大に利用せられて來た。畏多いが、神代の上古からの　列聖の御諱名、御諡號をも、漢字又は漢語に依つて、記し奉ることになつた。又其　御盛德を始め奉り、所有事項を記す所の國史を始め、其他官府の公文より、民間の私書に至るまで、普く漢字、又は其漢字より出來た假名を以て記述することは勿論、其漢語又は漢文をも採用せられ、純粹の漢文を自由に使用しかねたためであつたらうが、我國にて一種の轉倒讀をなすべき言はば準漢文をまで、尊重せられる樣になつて來たのである。國文として、國語のまま、其發音の順序にて記載すべからざるものを採用することは、世界中他に其例はなからう。余は決して適當な方法ではないとは認めるが、事實は已むことを得なかつたのである。而も現今でも、其遺物が幾分か存在して居るのである。世界中何れの國語か、其國文を讀むのに、逆にとんとんと讀み上らねばならぬものがあらうか、余は淺學にして、未だ其例を聞いたことはないのである。

前述の如く、漢字渡來より德川時代までは、學者が一の事項を記載するにも一の意見を說述するにも、自國の歷史や地理を記述するにも、漢字を用ひたことは勿論、殊に中等以上のものを相手とすべきものには、漢語及漢文若くは準漢文でなくてはならぬ。さうでなければ、相當のものが、見て吳れぬのであつた。我國の最古碑と稱せられ、紀元千三百六十年に、建立せられた、那須國造碑は純粹の漢文である。尤も是は韓國歸化人の撰文らしいからでもあるのである。千三百七十三年に編纂せられた我國の最古典たる古事記は、純粹の漢文ではないが、無論漢字及漢語を使用せられて居る。千三百八十年に、舍人親王(一三三六、—一三九五)が編纂せられた日本書紀を始としたる六國史は、各〻純粹の漢文である。千五百六十五年に、紀貫之(一五四二—一六〇六)の上つた古今和歌集の序文の原文の一は、有名なる純粹の漢文である。當時では所謂書き下しの國文の著書は、全くないではないが、是は主として女子のものとなつて居つたので、現今の言葉でいふと、稍〻敎育のある中等以上の人士は、漢文又は準漢文でなくてはならぬ樣に感じて居つたのである。故に貫之の其前後に於て作られた彼の土佐日記は、書き下し文であるから、眞面目に遠慮せられたの

か、或は滑稽的であつたのか知らぬが、自ら女子を粧うて、物せられて居るのである。又夫よりずつと降つて、徳川時代に至り、紀元二千三百三十年に、林春齋(二二七八、―二三四〇)の編纂した本朝通鑑などは、無論純粹の漢文である、又其非國家的なることを憤慨して、二千三百三十二年に、徳川光圀(二二八八、―二三六〇)が、自ら筆を執つて大義名分を明にするために、編述に著手せられた有名なる大日本史も、純粹の漢文である。又稍々降つて、二千四百八十七年に、頼山陽(二四四〇、―二四九二)が、勤王の志氣を鼓舞するために、著作した日本外史も、又其後の日本政記も同樣である。當時若し是等の書が、漢文ででもなく、又漢字も少い文體を以て、發表せられたならば、其旨趣の如何に拘らず、其書の効力は、比較的少かつたに相違ない。是は時世の然らしめる所で致方はない。西洋諸國にても、今より二百五十年以前頃までは、學者が、自己の研究の結果を發表するにしても、自己の意見を論述するにしても、自國語にては往かぬ。是非ラテン語、ラテン文でなくてはならなかつたのと同樣の有樣で、あつたのである。

而も當時は誰一人として、漢字は面倒であるとか漢語漢文は困難であるから、排斥

しようとのことを言つたものは、殆どなかつたのである。若し强ひて求めるならば、加茂眞淵(二三五七—二四二九)は、

漢字は一字にて種々の意味を有し、又一語にても種々なる字を當て、餘分の骨折ありて煩し。

と申したことがあり。又本居宣長(二三九〇—二四六一)は、

本邦には假名といふものあつて、自由にかかるるに、それをすてて、不自由なる漢文を以てかかんとするは、いかなるひが心ぞ。

と申したことがあるが、一般の人士の耳には、殆ど入らなかつたのである。而して夫等の大家自身も、實行し難かつたのである。漢語漢文殊に漢字は、學問上當然の最大要具と認められて居つた。即ち此所謂漢學は、智者と無智者との別れる一の關門となつて居つたのである。

第三章　國語改良論

前述の次第に依り、德川時代までは、國語改良論などは、世人は夢にも思はなかつた

のである。然るに其末年に及んで、即ち慶應三年(二五二七)十二月に至り、突然今の男爵前島密が、漢字廢止論を唱へ、開成所頭取松本壽太夫に請うて、時の征夷大將軍德川慶喜に建白せられたことがあつたさうである。是は實に國語改良論者の元祖であるであらう。併し爾來天下は維新の大業翼賛のために忙殺せられ、世間にては、近頃まで、此意見のあつたことさへ、餘り多く知られなかつた位である。其後明治二年に前島男爵が、廢漢字私見書を時の集議院に提出せられ、又南部義壽が、國字論を著し、洋字を以て、漢字に代ふべしと建言せられた。同六年に、西周が明六雜誌上に於て和文をローマ字にすべしと論ぜられた。又多分其前後であつたらう。後の子爵森有禮が我國語には漢字漢語等が多くして、學習にも、使用にも、困難であり、不便利であるから、根本的英語を採用しようとの意見を有せられたことがあつたが、當時米國人ホイットニーの諫言に依つて、思止められたさうである。

當時一方に於ては、福澤諭吉は特に國語改良論などと、標榜はせられなかつたが、所謂文明開化の旗幟を立て、大に西洋主義の鼓吹を務められた。而して其著書たる學問のすゝめ、或は西洋事情等に於て、大に漢字漢語の面倒なるものを排斥し、通俗平

易なる一種の文體を創出せられた。是は實に將來の漢字制限及言文一致の萌芽となつて居るかも知れぬ。又福地源一郎は國語に關し、稍〻同一の筆法を以て、政治上の意見を發表して居つた。

依つて余は慶應の末年頃より、明治十年頃までを、國語改良論の第一期となすことが、適當であらうと思ふ。此期間に於ては、漢字廢止論もあり、又言文一致の準實行者も多少あつたことである。

明治十年以後は文明開化西洋主義の多少の反動として、國家主義の學說も少しく起り、第一期に於て、反故紙同樣に取扱はれた所謂漢籍も、多少取出される樣になつたが、夫よりも所謂國粹といふ言葉が、唱道せられ、其結果として、國語の上に於て、假名採用論が始つた、十六年に至つて、今の文學博士大槻文彥、近藤眞琴、丸山作樂等が主唱となつて、假名の會を組織した。而も其論者中には、三派が出て、一は從前の古風の假名遣法を墨守するもの（月の部）一は國語の發音の儘を、其發音通の假名にて書綴るもの、（雪の部）一は此二法を折衷するもの（花の部）であつた。依つて假名の會も、自然三派に分れ、其會名に、月、雪、花と云ふ名稱を冠らせて居つたのである。又之と相前

後して、ローマ字會が組織せられ、各〻機關雜誌を發行し、演說に討論に中〻の論戰があつた。今是等諸會の前後に於ける國語改良論として、其重なるものを擧げれば、

一、十四年十二月に、後の理學博士伊藤圭介は、東京學士會院雜誌上に「これもまたくちよくいふべくして、そのことはおこなはれがたきのせつ」を揭げ、

二、十六年十月に、ペ、マエットはドイツ協會で漢字の不便を演說し、

三、十六年十月に、成島柳北は、溺濘（デキデイ）生の名を以て、朝野新聞紙上に於て、殊更に解し難き假名文を揭げ、假名論者を揶揄した。

四、十七年二月に、後の文學博士外山正一は、東洋學藝雜誌上に於て、漢字を廢すべしと論じ、

五、十八年二月に、片山淳吉が、大日本敎育會雜誌上に於て、かなのけういくを論じ

其他加藤、松井、矢田部、坪井の諸博士當時はまだ學位令が行れて居なかつた等の勇將もあり、甲論乙駁、相互に鎬を削り、火花を散して、共に漢字交りの普通文を破壞せんとせられた。併し一方には、又普通文防禦の雄將も出て、矢野文雄の大に漢字の便利を唱へてより、茲に一段落を告げ、二十年前後に至つて、何時となく國語改良に關

する諸會が、皆共倒となつて仕舞つた。

依つて余は明治十一年頃より二十年頃までを、國語改良論の第二期となすことが適當であらうと思ふ。此期間に於ては、國語改良の聲が、稍ゝ廣く世間に傳へられ、敵味方とも、雄將弱卒は、其數頗る多く、又將來に於ける國語改良論者に、多大の經驗となるべき教訓をも、隨分澤山に遺したことである。

明治二十一年以後は、一般の文學は、漸次發達し來つたが、國語改良に關する諸會は、暫く起らなかつた。是は以前に於ける失敗に懲り、餘り突飛な計畫を立てなかつたのである。併し氣運は漸次言文一致を唱道し、其準備として、標準語の選定や、口語文法の制定などを主張する樣になつて來た。此言文一致の大勢には、小數の反對論者の抵抗はあつたが、其論據は何れも薄弱であつて、到底抵抗し切れるものではなからう。而して此言文一致の文體が、漸次實施上に顯れ懸つて來た。是までは小學校に於ける敎科用書には、唯所謂文語體に入るべき階梯の如く、見做されて居つたものが、今度は稍ゝ一種の文體と見做され懸る樣になつたし、是までは、新聞雜誌等にても、演說の速記錄等の外には、多く用ひられなかつたものが、漸次此文體にて起稿す

るものも、多くなつて來たし、又稗史小説等に至つては、殆ど全く此文體でなくてはならぬ樣になつて來た。殊に三十年前後には、言文一致會が組織せられ、大に其普及を奬勵して居るのである。

又明治三十三年に至り、文部省が小學校に於ける字音假名遣法を制定し、又尋常小學校に於ける漢字の制限を規定せられた。字音假名遣法には、多少の不同意者はないではなかつたらう。最初全國の師範學校長に諮問せられたとき、余は實は不同意の旨を答申した。其理由はかうであつた。國語假名遣法と一致しての改正なれば賛成ではあるが、二重の假名遣法の存在は、非常の混亂を來すからである。元來假名は音符文字である。然るに從來の歷史上音符的の任務を盡して居ない。現今では漢字に假名を附けても、讀めない、更に別の假名を附けねばならず。夫でも猶ほ讀めないものもある位である。

一、福井縣の「武生」は「タケフ」と假名を附けても、果して Takefu であるか、或は Takeu であるか、不明である。

二、北海道の「敷生」は「シキフ」と假名にて書いても、果して Shikyu であるか、或は Shi-

kifu であるか、不明である。

三、廣島縣旅行中、或橋に「みやうちはし」と書いてあるのを見たが、讀めない。通過の後振返り見れば「美屋宇智波志」と書いてあつた。隨分御苦勞な役人もあつたものである。余は多分「宮内橋」ならんと思つたが、後にて聞けば「明治橋」であつた。

四、沖繩縣廳の所在地たる「那覇」に「ナハ」の假名を附けても、那覇の地に足を蹈まない人は、其果して Naha と讀むべきことを知つて居るものは少からう。

又字音と字訓と同一なるもの、又は不明なるものは、頗る多いものである。

一、「白菊」を「シラギク」と讀む。其「キク」は字音であるか、字訓であるか、又は同一のものであるか「カハラヨモギ」又は「アキグサ」は、今は死語である。併し是は假名遣法に關しない。

二、「繪馬」を「ヱマ」と讀むは、二字共に字音（呉音）であるのか、又は二字共に字訓であるのか、少し穿鑿せねば不明である。

故に假名遣法は、早晩大改正を施すべき必要があるとのことは、余の持論であるのである。字音も字訓も同一でなければならぬとの卑見であつた。併し文部省の英斷

は英斷であつて、進歩に相違ない。果然是が字音及字訓假名遣法を共通的のものとなすべき要求の輿論を作る動機となつたのである。

明治三十六七年頃よりは、國語改良の問題が、再び盛になり、國語假名遣法の問題の火の手は、大に高まつて、三十七年頃には、文部省より、又〻國語假名遣法改正に關する諮問を發せられたから、當時余は豫ねて待受けたることであり、職務上當然の意見を答申したのみならず、一己の意見として、贊成の旨趣を教育時論に掲載し、殊に改正の旨趣を一層擴められんことを論述したことであつた。余の持論の大旨趣は、凡そ假名遣法は、教授上の便不便は問ふ所ではない。從來音符文字を音符文字として取扱はないことは、根本的に不適當であるといふのである。言換ふれば、現今では前述の如く、假名に再び假名を附けねば、其發音が分からない、附けても從前の方法では、到底十分に分からなくなつて居るといふのである。併し同年に於ける高等教育會議にては、決議の延期を答申したことであつた。爾來是までは、是等のことに、餘り意見を發表せられなかつた大政治家や、貴族方なども、或團體の擁立に餘儀なくせられ、遂に種々の故障を申込まれた姿であつて、又〻論戰が非常に盛になつて來

て、國語調査會も公設せられ三十九年の高等教育會議にては、相當の決議をなすに至つたから、將來其結果が、事實となつて顯れ來ることであらうと思つて居たのに、意外にも貴族院の問題にも上り、暫時頓挫の有樣となり、甚だ遺憾の至である。又一方同年頃よりは、彼のローマ字採用論が再び盛になり、今度は多少樣子を代へ、ローマ字ヒロメ會として、組織せられて來たのである。今度は頗る著實な作戰計畫を以て、顯れて來たことで、其基礎も、其論據も、頗る堅固な樣である。余は其旨趣にも贊成である故に其實績の擧らんことは、蔭ながら希望して居るのである。

依つて余は明治二十一年頃より、四十年頃までを、國語改良論の第三期となすことが、適當であると思ふ。此期間に於ては、言文一致が頗る其領域を擴め、稍ゝ一種の文體として認められたのと、漢字の制限の實施と、假名遣法の制定改正とがあり、又ローマ字ヒロメ會が成立したのである。

國語改良論の第四期に至つては、果して如何に解決するであらうか。

第四章　國語改良に關する意見と實施

是は國語改良にのみ關する譯ではないが、凡そ意見と實施とは別種である。余は國語改良に關しては、專門的ではないが、常識以上に贊成の意見を有し、國語假名遣法改正には、多大の贊成であり、又ローマ字ヒロメ會の旨趣にも贊成である。併し夫と此漢字の研究とは、決して矛盾はしないのである、衝突はしないのであると思ふ。我國民の總べてが、如何に便利な假名遣法に熟しても、如何に便利なローマ字の使用が、廣まつたにしても、現今活きて居る我國語の主要部分は、漢字漢語より來て居るではないか、大槻博士の言海の語數は三萬九千百三箇にして、其內譯は、

和語		二萬千八百十七語
漢語及漢語の混合するもの		一萬三千八百八十五語
內譯漢語		一萬三千五百四十六語
	唐音語	九十六語
	其他漢語の混合するもの	二百四十三語
其他		三千四百一語
計		三萬九千百三語

であるが、其和語の殆ど八九割までは、矢張漢字を以て、記載せられて居るのである。故に假令前述の時代に達するにしても、其語源を知るべき漢字漢語の知識を要しない樣になるとは思はれぬ況や彼の時代に到達するには、迚も半世紀や一世紀の短年月ではなからう故に現今の中等諸學校に於ては勿論、小學校に於ても、普通敎育として、相當の漢字漢語に關する敎育をなさねばならぬ。故に國語改良に關する意見は意見、研究は矢張研究である。卽ち現今に於ける國語國文中の主要部分を占めて居る、漢字漢語の或程度までの、知識の授與に關する爲めの研究は矢張固より等閑に附してはならぬことゝ、余は確認するのである。

漢字漢語に關しては、從來祖述的の著書は全くないことはない。卽ち述べて作らず、信じて古を好む的のものは、固より澤山にあるかも知れぬ併し又一方に於ては、稍ゝ批評的の意見を有するもの、改良的の意見を有するものは、漢字の研究や、其敎授法などのことは、全く度外視して、隱居の閑事業に拋任して居るのである。又是等の方は、專門的の知識に就いては、固より堪能ではあるが、國語改良とか、ローマ字使用とかに關しては、全く無頓著である。ローマ字どころか、普通の算用數字さへも、現今

尙ほ外國文字の如く思つて居られる、漢文專門の博士方もあるさうである、又是等の方は、漢字の研究などは、數百千年以前に、旣に濟んで居るもので、今更喋々すべきものでないとして居られる樣である。こんな有樣にて、現今「漢字の研究」などに喙を容れるものはないのと、若し喙を容れるときは、世人より時代後れのものと思はれるかと、恐れるためなのとで、漢字の學習が、困難な上に、其使用法が一層亂雜に流れつつあるのである。是は國語改良の必要を促すための動機となつて、却つて都合が善いと、思ふものがあるかも知れぬが、余はさうは思はぬのである、

余は「漢字の研究」に關しては、固より專門の事業ではないのである。併しさう言ふのは、決して責任を逃れるためではないのである。余は從來普通の國語殊に漢字漢語に關する敎員等の研究上に關して、不滿足を感じて居るのである。敎育上他の總べての事項に就いては、大に研究の步武を進めて居るに拘らず、此漢字に關しては、前述の次第に依り、全く別物とせられて居るから、余は如何に時代後れと思はれても、頗るの茶人と言はれても構はず、獨り勇氣を鼓して、請ふ隗より始めんとの旨趣にて、此研究をなし、讀者の批評をも受け、是正をも請ひたいのである。

第二篇　漢字使用の現狀

第一章　漢字使用の亂雜

國語改良に關する意見は、如何なる傾向であらうとも、現在の國語國文は、依然として現在の國語國文であることは、勿論のことである。故に改良の議論が、如何に盛になつたにしても、未だ全く改革せられざる以上は、議論は議論として、實施は矢張正當に實施せられねばならぬ。殊に敎育上に於ては、然りであると思ふ、然るに國語改良の議論が起つて以來、從來の國語殊に其國語中の主要部分を占めて居る國字としての漢字の生命が、見くびられて來たことは、甚しいものである。是は從前でも、多少さうであつたのではあるが、近頃は一層甚しくなつて來た樣である。初等敎育に於ても、中等敎育に於ても、同樣である。國語は國民の智識交換の最大、否唯一の要具である。高等又は專門の敎育に於ては、夫々特種の知識技能の敎育が、必要であらうが、初等又は中等敎育時代に於ては、是非是等の基礎たるべき普通の知識を得しめて、置かねばならぬことと、余は思ふのである。然るに實際は甚だ然らずして、非常の

亂雜を極めて居る樣である。殊に奇なるのは、是等漢字の使用を亂雜にするもの程、新思想に富んで居る證據である如く思つて居る位である。

初等教育に於ける漢字使用の現狀は、どうであるか、從來余の直接實見したもののみにても、非常な亂雜を極めて居る、但し是は兒童の誤謬を言ふのではない。教員のなせる誤謬を言ふのである。曾て某縣小學校に於て、教員は

一、「源義經」を「ゲンノギキヤウ」と教へて居つた。其理由は、講釋話し方のときのと、區別を附けるためである。

二、「猿蟹合戰」を「エンカイガフセン」と教へて居つた。其理由は問はなかつたが、無論前のと同樣である。

三、「元寇」を「ゲンクワン」と讀んで、年號であると教へた。

四、「有脊動物」を「イウハイドウブツ」と教へた。

其他純粹の誤謬とは言はぬが、單語の講釋に、

戰爭とはタタカヒアラソフことである。

と言ふのはまだしもであるが、

障子は「ササヘコ」

彈丸は「ハジキダマ」

と言ふに至つては、實に捧腹(抱腹の誤植でない)の至である。現今でも、是等の話は、少しも珍らしいことではない。曾て某縣小學校長の小言話に、近頃の教員は、新知識はあると言つても、國語の教授などは、迚も任せては置けない、一時間も見て居れば、漢字の誤を教ふることは、三箇や五箇では濟まないのであります。過日も、

一、「大猷公」を「ダイケンコウ」と教へたから、後にて注意致しましたが、中々承知致しませず、

二、「夕陽」を「ユフヤウ」と教へまして、是は一層承知致さず、昔はどう讀んだか知らぬが、唯今では附屬にても、訓導始め皆さう讀むことに、極めて居ります、

との答辯で、誠に困りました。依つて附屬云々は、無論……であります が、私は附屬ではどうであつても、我校では、是非「タイイウコウ」又は「セキヤウ」にして貰はねばならぬと申しました。兎角文字のことなどを申すと、舊思想であるかの如く思つて、若い卒業生などに嘲笑せられるのに、閉口でありますとのことであつた。

初等教育に於ける是等の實例を擧げるときは殆ど際限はないかも知れぬ。

中等教育に於ける漢字使用の現狀は、どうであるか、是も中〻不完全であり、亂雜であると言はねばならぬ。今一の實例を示さう。某年東京高等師範學校生徒募集試驗のとき某縣の應募者三十人あり、就中師範學校卒業者二十人縣立中學校卒業者十人であつた。而して國語中、書取答案の結果を傳聞し、余は左の統計を作つたことがあつた。

甲。左の上欄の漢字に讀み假名を附けよ。

中等諸學校に於ける字音假名遣法は、未だ改正せられて居ない。乙種の問題に依つて推測して見ても、發題者も從前の假名遣法に依られたものであらう。併し余は小學校に於ける字音假名遣法に依れるもの、及其他略〻同一の發音の出るものを假に許容すべきものとして、別に一欄を設けたのである。

	正シイモノ		許容スベキモノ	純粹ノ誤謬
牛蒡	ゴバウ	師七 中三	師一一 中三	師二 中三
百舌	モズ	師一一 中二	師五 中四	師四 中四
平仄	ヒヤウソク	師三 中二	師三 中二	師四 中一六

誤謬中最モ甚シイモノ等

アサガホ(師一) ウシビシ(中一) シヤベル(師一) チシヤベル(中一) ユリ(中一) ホノカ(師二) ホノメク(師一) ヒラホノカ(師一) ヒラカ(中一) ヘイジン中一)

氷柱	ツララ	師六 中四		師一四 中六	コホリバシラ(師三)キララ(師一)ツヅラ(師一中一)
熨斗	ノシ ヒノシ	師一九 中六		師一 中四	チウノ(中一) ヒツツイ(中一)
繻子	シユス	師八 中一	師一 中四	師一 中五	リンズ(師一中一) ドンス(中一)
埋木	ウモレギ	師一九 中六		師一 中四	
逆茂木	サカモギ	師二〇 中六		師〇 中四	シヤクナギ(中一)
案山子	カガシ	師一七 中六		師三 中四	カホカシ(師一)
東宮大夫	トウグウダイブ	師六 中一			是ハ正シイモノノ外必シモ皆誤レルモノトモ思ハレナイモノモ多イカラ其他ノ欄ハ暫ク缺イタ

乙。左の上欄に假名に相當する漢字を示せ。

	正シイモノ		許容スベキモノ		純粹ノ誤謬	誤謬中最モ甚シイモノ等
ジユエウキヨウキフ	需要供給	師五 中一	需用供給(ヨウ)	師一〇 中二	師五 中七	滋養供給(中一)自營供給(中一)銃遊競技(中一)需ヲ儒、襦、繻トスルモノ(師三中二)給ヲ求トスルモノ(中一)
テンキヨハウ	天氣豫報	師九 中一	報ヲ少シ誤ルモノ	師一〇 中六	師一 中三	天氣像報(中一)轉居法(師一)豫ヲ甚シク誤ルモノ(中二)
グフウ	颶風	師七 中一			師一三 中九	禹風(中一)颶ヲ誤リ又ハ知ラヌモノ(師一三中八)
ゴンゴダウダン	言語道斷	師〇 中〇	言語同斷(ドウ)	師一三 中五	師七 中五	言語同談(中二)金剛堂壇(中一)斷ノ俗字(師三中一)斷ヲ甚シク誤ルモノ(師三)
テンビンボウ	天秤棒 天平棒	師一七 中一			師三 中九	秤ヲ坪又ハ手偏トスルモノ(師二中三)棒ヲ捧トスルモノ(師一中一)棒ヲ杆トスルモノ(中一)
キンケンチヨチク	勤儉貯蓄	師一六 中三	勤ヲ少シ誤ルモノ	師二 中一	師二 中五	勤儉停蓄(中一)貯ヲ肉偏トスルモノ(中二)貯ノ偏旁ヲ取違ヒタルモノ(中一)蓄ヲ誤ルモノ(中三)
ミソシヤウユ	味噌醬油	師二〇 中五			師〇 中五	味糟醬油(中一)記サヌモノ(中四)

マンヂユウ	饅頭	師一七 中一三		師三 中七	滿頭(中一)滿重(中一)万頭(中一)漫頭(師一)萬蒸(中一)饅ヲ口偏又ハ人偏トスルモノ(中二)頭ヲ什トスルモノ(中一)
タンヅメ	罐詰 鑵詰	師一一 中一		師九 中九	鑵ヲ勸、灌、官、管又ハ玉偏トスルモノ(師三中四)詰ヲ誥、結、積、佶、又ハ糸偏トスルモノ鑵と罐とは何れをとも定め難し金偏トスルモノ、食偏トスルモノ(師六中七)
キソバ	生蕎麥	師五 中〇		師一四 中七	誤謬ノ答案十二種他ニ記サヌモノアリ、生麥(師一中一)木蕎麥(中一)生麥蕎(師一)生麥粉(師一)ハ文字ノ混同又ハ誤用、其他ハ任意ニ製作シタ文字、頗ル多イ、中ニハ麥扁ニ喬ヲ記スアリ、麥扁ニ巴ヲ記スアリ、奇態百出否十出、

又明治四十年二月發行の雜誌「教育界」を見るに佐々醒雪の述べられた意見中の實例として、三十九年末に於ける東京高等師範學校生徒入學試驗の答案中修學旅行の模樣を父兄に知らせる「手紙文」に、左のものがあつたとのことを揭げてあつた。尤も是は唯一人にて書綴つたものでなく、多數のものを取集めて、更に一文とせられたのであらう。

兼て通知致せしい如く幣校の修學旅行は秋高く馬肥の好時節をトし一泊の豫(矛偏に象)定にて汽笛一聲○○のステイショを一番例車にて出達致し一車千里別(號の字の偏に立刀)情なく翼日后後○○に倒着致し廣々然たる海に對して○停の二楷の帶在中に御在候明日は名にし合ふ風光明美の○○を經て后

後○時歸家致し候間なつかしき父母君よ豪も御心おきなく鶴首御待ち下され度候、

併し是等の漢字漢語の使用の亂雜は、唯中等諸學校の卒業生、又は小學校敎員中のみに限つた譯ではないのである。

最近施行の文部省に於ける中等學校敎員試驗檢定の際、習字、圖畫、體操、音樂、手工、裁縫科の受驗者に豫備試驗として、施行せられた國語の答案中、左の如きものがあつたさうである。

一、空前絕後を解釋し、或ものは「空」の音を喰ふと訓し「前」の音を膳に通はせ、是は「飯を喰つて然る後」といふ意義であるとし、或ものは「前方開豁にして、空地多く、後方は絕壁である」とした。

二、世襲財產とは「惡人が世の中を襲擊して、集めた財產である」とした。

學問の最高府たる大學に至つても、殆ど同樣である。織田法學博士は、曾て次のことを話されたことがあるさうである。大學の學生中、

一、本問題に就いては接局說を主張す。

二、天皇の大憲、……

三、法人は法の犧牲にして、……

などの答案を出すものが、往々ある、

併し是等の漢字漢語の使用の亂雜は唯大學の學生生徒のみに限つた譯ではないかも知れぬ。

第二章　漢字使用の亂雜(其二)

漢字漢語の使用の亂雜は唯小學校兒童、敎員、中等諸學校生徒、又は大學の學生、生徒のみに限つた譯ではない。學士、博士の學者先生方でも、時としては、同一の亂雜をなされることがある。

一、某文學士は心理學の講義中「觸覺」と言つて「觸」の字を角偏に腹といふ字の旁に横の一畫多いものを附けられた。

二、某文學士は「障碍」を「シャウトク」と讀まれた。

三、某文學士は「荷田春滿」を「……ハルミツ」と讀まれた。

四、某文學博士は「大伴家持」を「……イヘモチ」と讀まれた。
五、某文學博士は「本居宣長」を「……ノブナガ」と讀まれた。
六、某文學博士は講義中「隋煬帝」を「ズヰノエキテイ」と言はれたとき、聽講生は「ズヰノヤウダイ」のことでありますかと、質問したら「ズヰノエキテイ」は十八史略にでもある。そんなことを知らねばいけないとて、大に叱付けられた。
七、某文學博士の文章を中學校國語讀本中に登載してある中に「谿溪」の熟字を用ひてある。是は作者も編者も「溪」を「谿」と別字であると思つて居られる樣である。
八、某敎授は歷史の敎科用書を編纂せられた原稿に、「歷史」の二字を始終「歷吏」と書いて、置かれたのを、印刷所の小僧が、私に「歷史」と訂正したら、敎授が後に校正して、悉く「歷吏」に復活せしめられた。
又文學以外の學士博士の先生方にては、
一、某農學士は講義中「ガガンス」と言つて「穿貫」の文字を示された。
二、某法學士は「砥礪」を「トレイ」と讀まれた。
三、某法學士は「弛張」を「チチヤウ」と讀み「漸次」を「ザンジ」と讀まれた。

四、某法學士は「輸贏」ヲ「ユルキ」と言はれた。
五、某法學博士は「一穗寒燈照眼明」の漢詩を朗吟して「イッポノカントウガンメイヲテラス」とやられるさうである。
六、某教授は生理學の講義中「截域」を「タイキキ」と發言して教へられた。
七、故外山博士の葬式のとき、其次第書に「第一擊柝……第二擊柝……」とあつたのを、某分科大學の教授博士先生中「擊柝」の二字を讀まれた方は一人もない。唯某博士は「ゲキセキ」と讀まれたが、其意義が遂に不得要領であつた中に「第一の擊柝」が鳴つて來たさうである。
八、某外國文學博士は講義中「サイダイ」と言つて「尤大」の文字を示された。
又學士博士の肩書はないが、政治上に於て樞要の位置を占められる貴族大家又は學者中にても、亦左の逸話を有せられる方はないでもない。
一、某公は「歐米」を「ヨウベイ」と言はれる。是は却つて理由があるかも知れぬ。
二、某侯は曾て警察監獄學校開校式の祝詞中「……を設置す」の「設置」の所に至つて三分間休止の後、遂に「マウケオクス」と讀まれた。

三、某侯は「詳細」を「ヤウサイ」と讀まれた。
四、某侯は「枚擧」を「ポツキヨ」と讀まれた。
五、某伯は「競爭場裏」を「キヤウソバリ」と讀まれた。
六、某子は神戸水產博覽會の祝詞中「黽勉」を「ジヨウベン」と讀まれ又「倍蓰」を「バイジユウ」と讀まれた。
七、曾て某大臣たり、又政治上及文學上有名なる某大家は「枉駕」を「キヤウガ」と讀まれた。
八、曾て清國公使たり、又文學上有名なる某大家は、賴山陽天草の詩を評して「煙横ニ蓬窓ニ」は句をなさぬと言はれた。是は「蓬窓」を「芳草」と思つて居られるのであらう。又唐詩の「江楓漁火對ニ愁眠ニ」の「江楓」もいけぬと言はれた。是は「紅楓」と思つて居られたのであらう。
九、某大家は曾て大槻磐溪の揮毫を得られた禮狀に「永く長物と可致候」とあつたから、磐溪翁は、長物とするなら、始より賴まぬ方が善いではないか」と言つて、笑はれたことがあつたさうである。

十、某博士大日本地名辭書出版祝の席上、某大家は著書の頁數を擧げて「何千頁（コウ）」と言つた。次の某大家は之を「頁（ケツ）」と訂正したが、其次に某伯が又誤つて「何千頁（コウ）」と言ひ懸けて直に「頁（ケツ）」と訂正せられたのは感心である。

十一、某大家は曾て秘密の手紙の末に「御一覽の上丙丁子に御附し被下度候」とあつたから、受信の方は、誰彼の別なく廣く吹聽せられた。發信の方は、丙丁とは「火（ヒ）の兄（エ）、火（ヒ）の弟（ト）」であるから、直に燒捨てて呉れとの意であつたのを、受信の方は丙丁とあるから、甲乙丙丁と廣く見せるのかと解せられたのであつた。

又是より稍〻下つた所では、

一、曾て某縣知事たりし某氏は祝詞中「兩毛の地」を「ウマウノチ」と讀まれ、又「遵守」を「ソンシユ」と讀まれた。

二、某代議士は「矛盾」を「ホコトン」と言つたのは、頗る有名のものとなつて、今日にては普通にさう言はねばならぬ位になつて居る。

三、某代議士が議會にて、宇佐八幡宮の「ジンキヨ」が破損して、不敬であると連呼した。後に聞けば「神橋」のことであつたさうである。

四、曾て貴族院にて、某子爵は「蒸氣船」を「ショウキセン」と言はれたのを、當時某新聞が、衆議院の某代議士の「チンキフドウギ」（緊急動議）と好一對であると書いたことがあつた。併し「蒸」の本音は「ショウ」と濁らぬのであるのを、何時の頃よりか、一般に濁つて居る。唯高知縣人に限つて、清んで讀んで居る。寧ろ正しいのである。彼の「緊急動議」の「チンキッドウギ」は地方的發音で、他人にさう聞えるのは、氣の毒なのである。彼等は無論例外ではあるが、序に述べて置く。

五、又某衆議院議長が、公報に日程が、カッサイ（掲載）せられてないと、宣告したるとき、滿場喝采、カッサイ議長の名喧傳すと、某新聞に掲載せられてあつた。併し「掲」の字音には「ケイ」と「ケツ」（呉音「カツ」）との二種あるので「ワタル」のときは字音「ケイ」なれども、是は通常不用である。「カカグ」のときは寧ろ「ケツ」又は「カツ」と讀むのは、本來の字音であるのである。併し通常之を讀み分けるものがなかつたのを、某議長は天下に獨り之を讀んだために、却つて揶揄せられたので、余は是も多少氣の毒に感ずるのである。

六、某政黨の總務たりし某代議士は、曾て「蝦」といふ字は、中々旨い。其體は段々に

節をなして居るから、虫偏に段の字を書くのであると言つたとき、傍より某氏は「蝦」の字の旁は「假」の字の旁と同一なので「段」の字ではないと言つたら代議士は顧みて他のことを言つたさうである。此「蝦」の字に就いては、別に述べることがあるが今は之を略する。

七、某陸軍大尉は日清戰爭後、某縣敎育會のために、講演せられたとき「世人は動もすれば、臺灣には樟氣があるとて、移住することを嫌ふが、元來臺灣の樟樹は、多くは生蕃地に在るので、吾人の移住すべき地方には甚だ少い。余は殆ど一本をも見なかつた……」とて、最も眞面目に、最も熱心に辨明せられた。余は其主旨には、固より感服したが、實例には、頗る氣の毒に感じた。是は言ふまでもなく「瘴」と「樟」とを混同せられて居るのであつた。

八、所謂紳士の集會の席にて、甲某は「私は最早還暦になりました」と言つたら、乙某は「還暦何年でありますか」と問ふた處が、甲は意地惡くも「還暦元年で古稀元年より九年後である」とやつたら、乙は「さうですか、お若いやうでありますが」と返事した。

又其他某郡長は「容喙」を「ヨウタク」と言つたとか、某縣會議員が「植林事業」を「チョクリンジグフ」と言つたとかの實例を列擧するときは、際限はないことであらう。

第三章　漢字使用の亂雜(其三)

一昨年秋の末頃、ローマ字ヒロメ會茶話會の席上で、林伯爵は次のことを話されたさうである。即ち昔から文字を知らぬものを嘲けるに、最も人口に膾炙して居るのはとて、

一、兩(アメ)大師などと澄して讀んで行き。

二、一朱の來(ライ)といふ字を米(コメ)と言ひ。

三、兩國の兩(アメ)といふ字を面(メン)と讀み。

又「郁々乎文哉」を「都々(トド)平文哉(ヘイブンサイ)」と讀み、又「比叡山獻上の鹹辛」の字を正しく書けるのは、學生社會でも少い。我等は今日にても容易に書けないと言はれたさうであつた。

余は此鹹辛のことで思出したことがある。彼の徒然草の中にも、次の話があつた。

昔或所に如何なる文字にても知つて居るから、尋ねて下さいといふ文字自慢

の男があつたとき、或人が然れば「シホ」といふ字は、如何にと尋ねたれば自慢男は、聲に應じて「土偏に」と言ひ懸けたれば、其人は夫れにて宜しいとて、其後を言はせなかつた。

文字即ち漢字といふものは、昔より六ヶ敷い面倒臭いものとせられて居つたことである。

又某縣内にて、第一等の某漢學先生が、戊辰戰役殉難(殉難の熟字は、是等の場合には不適當であると言ふものもあるが)者の碑文を撰(ツク)られた中に「新瀉縣」の文字があつた。時に同縣に於て、一般の人は、第二等の漢學先生であると認めて居るが、先生自身では、前の先生と頡頏し、寧ろ上は手であると思つて居られる。意地悪い方があつて、除幕式の後、衆人の面前にて「あの縣名は何と申しますか」と尋ねられたことがあつた既に石に刻せられた後であるから、如何ともなし難く、其後も依然「ニヒソソギケン」のまゝとなつて居る。

又某縣に於て、是も縣内第一等の某漢學先生があり、當時他に轉任せられた某知事に記念(紀念の誤植でない)として、部下のものより贈進した金杯に刻すべき文字を

選び且つ其下書をもなされた其文字中春霞といふ字があり霞を「雨冠に段の字を書かれてあつた是では「カ」といふ字音が出ない。是では子孫に遺すべき家寶としては、少し困るではないかと、余は思つたことであつたが、是も既に出來上つた後であつたから、余も部下の一人でありながら、無言で止めて置いたことがあつた。

第四章　漢字使用の亂雜の原因

前數章に於て、漢字漢語使用の亂雜に關して、種々の實例を掲げ、殊に大家先生方の分までを列擧して、甚だ相濟まぬことであるが、是は決して誹謗的の意味を持つてなしたのではない。漢字漢語の使用の困難が、各方面、各階級に廣まつて居ることを申すのである。殊に大家先生方は、假令是等の逸話的のことがあつても、決して其方の學德なり、人格なりを傷けるものではない。人には各〻長所短所があるもので、其長所に依つて、世の尊敬を受けて居られるのである。併し尋常の人ならば、注意すべきことは、注意するに超したことはなからうと、余は思ふのである。而して是等漢字漢語の使用に關する注意をば、余は初等教育時代及中等教育時代に望むのである。

世間一般に是等使用の亂雜になつて居るのは、余は之を二種の原因に歸するのである。

第一の原因は、右の教育時代に於て教員が文字を粗忽に教授した結果であるのである。高等教育又は專門教育に至つては、當然或特種の知識技能に重きを置かねばならぬから、是等基礎的知識を顧る暇がない。故に是非中等以下の教育時代に於て、正確を期する必要はあるものである　余は確認するのである。斯く言はば、中等以下の教育に從事する教員殊に國語又は漢文の教員は、必ず次のことを述べるであらう。兒童又は生徒の智識は、唯國語又は漢文に就いてのみ、斯く不正確なるのではなからう。其他何れの學科又は教科に關しても同一であらう。……成程、其點は余も全く同情を表しないのではない。他の學科又は教科に關しては、余は又別に述べることもあらうが併し余の見る所では、總べての學科教科中、國語殊に漢字の使用に關する程、不正確に取扱はれて居るものはなからうと思ふのである。

又第二の原因は、東洋に於ける豪傑傳などに於ては、「章句を事とせず」とか、「讀書五行共に下る」とかのことが、澤山あつて、是等豪傑の特徴となつて居て、自然讀書をする

ときに、文字文句に注意しない習慣があるのである。而も此習慣は兒童生徒のみの習慣ではない。寧ろ教員自身の習慣である。教科用書にも、誤謬の文字や文句はないことはないが、之を教授するときに當つて、教員は故らに、念入りに誤謬を注入することが、却つて多いのである。殊に近頃になつては、國語改良問題が起り、漢字の生命が旦夕に迫つた如く考へて、一層厄介物扱にせられて居るのであるではないか。斯く言はば、初等又は中等教育の教員よりは、漢字は其字數は非常に多い、且つ其字畫も繁雜である。迚も一〻吟味し切れるものではないと、言はれるかも知れぬ。併し思つて見よ。兒童生徒の手前では、一時に斯く多くのものを教授せられるのではない、其程度に應じて、一時間に新出文字は一字二字乃至數字づつに止まるのである。之を其教科書通に教授すれば、其誤謬は少いのである。何の面倒があらうか、何の困難のことがあらうか、若し夫も面倒であり、困難であるといふなら、最初より文字に關する教授をせぬが、善いではないか。

第五章　漢字の字數及字畫

世人殊に國語改良論者は口を開けば、輙ち曰く、漢字は字數は多い。字畫は繁雜であると。成程夫は尤である。固より同意である。ローマ字は僅に二十六字、假名は四十七字に、濁音半濁音を加へても、六七十字を出でぬ。然るに漢字の數は、實に夥しいことである。從前漢字のオーソリチー（典據）となつて居る所の康煕字典に依ると其字數は實に左の通である。

康煕字典本文	四、二一七四字
同補遺及備考	四〇四二字
總計	四、六二一六字

（備考。大數を記すに、三位毎に點を附ける習慣はあるが、余は我國にては四位毎にするを適當と思ふ）。

康煕字典は紀元二千三百七十年の編纂である。爾後約二百年間に、新に制作せられたるものもある。殊に我國に於ても新に制作したる漢字も多いことであるから、是等を合計したならば、今日は約五萬字と見て、大差はなからう。此五萬字を以て、彼の二十六字或は六七十字と比較するときは、固より話にはならぬのである。併し彼の

二十六字或は六七十字は、則ち文字即ち音符文字であつて、其一二を除く外は、一の意義を有せぬのである。漢字の五萬字は、文字であると同時に、各〻意義を有して居る言葉、即ち語である。伊澤貴族院議員は、最も熱心なる漢字保存論者であつて、次のことを言はれたことがある。世人は漢字の五萬字を以て、ローマ字二十六字に比較するは、不當である。漢字は悉く意義を有する語であるから、此語を以て、ローマ字に比較するはいけぬ。ローマ字二十六字に比較するならば、漢字の基本たるべき永字の八法を以てすれば、足れりであるとのことであつた。是は少し極端かは知れぬが、多少の眞理は、確にあるのである。併し余の比較論は、此外に別に存するのである。唯漢字の五萬は、各〻語であるといふことは、誰も異論はなからう。若し字書の語數を比較するならば、

ウエブスター大字書

(西洋紀元一八六四年の分)　一一、四〇〇〇〇語

(西洋紀元一九〇〇年の分)　一三、九〇〇〇〇語

即ち漢字は五萬字、五萬語にして、英語は十三萬九千語であると言はねばならぬ。若

し又一方の論者は、漢語は康煕字典の外、佩文韻府又は淵函類鑑等のものを加ふれば、一層多數に上ることを言ふかも知れぬ。然れば英語に於ても、エンサイクロピデイヤ、ブリタニカ(百科全書)等のものを加ふれば如何と、言はねばならぬ併し是等は比較にはならないのである。何となれば英語の最多數は、幾何であらうとも、日用事を達するには、程度がある。漢字漢語の最多數は幾何であらうとも、日常事を辨ずるには、程度がある。康煕字典或は其他の字書を開いて見よ。如何なる漢學先生でも、極端に言へば。其字書編纂者自身でも、其知らざる文字は、毎葉其八九割以上であるかも知れぬ、即ち字書中の八九割以上の文字は、實に不用のものである。最初は何かのはずみにて、一旦制作せられたが、其後何百年間字書以外には、使用せられたことのないものが多いのである。英語其他の外國語の字書に於ても同樣であらう。故に如何なる場合に於ても、文字の最多數或は語の最多數は、比較論究すべき性質のものではないものであると、余は確認するのである。

漢字の字數に就いては余は豫ねて制限論者である、余は豫ねて次の制限論を主張して居つた。

尋常小學校使用の漢字　六〇〇字　六〇〇字
高等小學校使用の漢字(新出)　九〇〇字　累計　一五〇〇字
中等學校使用の漢字(新出)　一五〇〇字　累計　三〇〇〇字
漢文專門學者間使用の漢字(新出)二〇〇〇字　累計　五〇〇〇字

余の此標準は決して机上の空想ではないのである。余は十餘年前より余の意見に依り使用漢字表を選定して居つたことであるが、其後數回訂正を加へたのであるが、是は後篇に至つて更に掲出することとする。明治三十三年に至つて、文部省が尋常小學校に於て使用すべき漢字約千二百字を制限せられた。備考として多少の取除はあつたが、當時吾人に必要缺くべからざる「米」及「鹽」の漢字さへないとて「多少の非難はあつた。併し余は大體に於ては、至極適當な措置であると思つた。但し千二百字の漢字を尋常小學校に於て、使用することは、過多であるとの意見であつた。果然其後文部省に於て編纂せられたる、所謂國定教科書たる尋常小學校讀本中振假名なき漢字數約五百字、振假名ある漢字數約五百字となつたので、余は大に其措置の適當なることを申したことであつた。

余の右に述べた意見は、國定敎科書編纂後に至つて、先見のあつたらしく思はれるために、申す樣に感ぜられる人があるかも知れぬが、實は其以前即ち三十二三年頃鳥取縣敎育會雜誌中に於て、余の標準說を掲載したこともあつたのである。此頃に至つては、文部省より帝國敎育會に對して、尋常小學校に於ける漢字の制限に關し諮問せられ、同會よりは調査の後、多少增加すべき答申をなしたることを諸新聞雜誌等にて見たことである。併し余は格別增加すべき必要を認めないのである。成程帝國議會最近一回分の速記錄中の漢字の種類は約二千字に達し居るさうであるが、是は余の所謂中等學校使用の漢字數の約三分の二に相當するものである。

併し余の右に掲げたる標準は、尋常小學校修業年限四箇年の場合であつたのであるが、今日は六箇年修業のこととなり、高等小學校の修業年限も多少變更したから、自然其標準も變更せねばならぬことである。依つて次の如く訂正した。

尋常小學校使用の漢字（六箇年）	一〇〇〇字		
高等小學校使用の漢字（三箇年）	七〇〇字	累計	一七〇〇字
中等學校使用の漢字（高等小學校の分をも含む）	二〇〇〇字	累計	三〇〇〇字

漢文專門學者間使用の漢字　二〇〇〇字　累計　五〇〇〇字

前述の如く、余は漢字制限論を主張し、殊に其減少を希望するが、一方に於ては、一々正確なる知識となし、其應用を自在ならしめんことを希望するのである、即ち被敎育者をして、其知りたる漢字と知らざる漢字との、限界を正確にすることを期待するのである。知らざる漢字に出遇ひたるときは、人にも尋ね自己にても調査をもするものであるから、自ら誤謬に安んずることはないが、不正確なる半知のものに至つては、恬然として誤謬のまゝにて濟まし、其使用を亂雜に至らしめるものである。又漢字の字畫は繁雜であるとの非難はある。是も尤なることである。併し是は如何なるものでも、知識なくして見れば、同樣である。始めて外國人を見れば、何十人見ても、同一人の樣に見えるものである。外國語を話すものを聞けば英語でも佛語でもドイツ語乃至淸語でも、韓語でも、同一の樣に思ふかも知れぬ。又有形物に就いて言つても、同樣である懷中時計の內部も、空盒晴雨計の內部も、同一の樣に見えるものである。併し之を分解的に吟味すれば、自然と明白になるものである。漢字も其通にて、之を分解すれば、各〻多少意義を有する母字、子字の部首等よりなつて居るもの

である。漢字の字畫の繁多なる例には、何時も引かれる「鬱」の字の字畫は次の通である。

鬱　二十九畫

併し物好きに、尚ほ例を擧げるならば、固より普通に使用するものではないが「龍」の字を四箇集めたもの、即ち

𪚥　音テツ義多言　六十四畫

こんなものもある。併し語で言ふならば、他の國語にて

リユウグウノオトヒメノモトユヒノキリハヅシ(植物名)　二十一字

又英語にても、長い綴りのものがある。

インコンプレヘンシビリチー Incomprehensibility　十九字

是は隨分長いものとして、何時も例に引かれるが、又物好きに、より長いものを擧げるならば、

プロアンチトランサブスタンシエーシヨニスチカル
Proantitransubstantiationistical　三十二字

殊に國語又は其他の外國語は長さの長いものになると、一々順に拾讀みにせねばならないが、漢字は字畫が多くとも、其面積は、殆ど他のものと同一であるから、一目して、其讀方も意義も分る。（一旦學んだものなれば）又漢字は所謂象形文字であるから其讀方は一々記憶せねばならない。（多少類推が出來ても）が、其意義即ち性質は、多少推測が出來る便利もあるのである。

第六章　現今に於ける世人の漢字に對する措置

子供が片言交りの話をなしても、又外國人が、

アナタ　ソレ　タカイ、ペケ　アリマス。ヤスク　マケル　ワタシ　カフ。ヨロシイ　アリマス。

と言つても、日用事を辨ずるには足る。併し國語として、夫で完全であらうか、貿易場は何れの貿易場でも、ブロークン、グランマー（破れ文法）と言つて、文字の知識のない仲仕連中の使用する不完全なる外國語にても、用を達して居るのである。我農商務省のことなどでも、彼等は六ケ敷いから、

アキレカヘルホド　コマラセル　デバートメント（アグリカルチユア　エンド　コンメルセル　デパートメント（Agricultural and Commercial Department））とやつて除けるさうである。

又某英和學校の生徒が、曾て英語の讃美歌の諳誦に困つたとき、次の通にて記憶し、

庄兵衞、庄兵衞冷米半分喰ラヒ。（ショーベル、ショーベル。ヒヤマイハンブルクライ（"Saviour, Saviour, hear my humble cry"））

而も外國人の前でも其通にやつたさうである。

其他ゼーとエーとが違つても、イズとアールとが違つても、先方では其意義を了解して呉れるであらう。又之を書綴るにしても、エルとアールとが違つても、サイレント（發音せぬ字母）の一つや二つなかつても、夫でも矢張事を辨ずるには足るかも知れぬ。而も苟も外國語を課する以上は、外國語を學ぶ以上は、中等以上の人士にして、外國語を使用する以上は、相當の學習を積み、研究を重ね、以て其誤謬のないことを期せねばならぬことである。又現在一般に斯くあらんことを期しつつあるのである。然るに我國語に對しては、同一の注意を以て、措置せられて居るであらうか、どうか

は甚だ疑なき能はずと言はねばならぬ。各箇一字一字の文字の讀方は如何、一般の朗讀法は如何、句讀に對する注意は如何、外國語のリーディング即ち讀方の注意に對して、遜色はないであらうか、又文字即ち漢字を筆寫する場合に於て、其字畫の誤謬のないことを期する注意は、外國語のスペルリング即ち綴方の注意に對して、逕庭はないであらうか、甚だ疑なき能はず。寧ろ疑ふまでもなく、彼に對しては、熱誠で苟も學生の本分を失ふまいか、紳士の體面を損せざるかと恐れて居るにも拘らず我に對しては、冷淡であると、言はねばならぬと、余は思ふのである、是は決して我國語の名譽ではないことであらう。

昔は我國は言葉の國であるとか、言靈（コトタマ）の幸（サキ）はふ國であるとかの、自負心を一般の國民が持つて居つた。公平に言へば是は少し極端であらうが、近頃は國語改良の問題があつたために、未だ確乎たる改良法も、實施せられざる内から、自ら卑下して、自暴自棄しつつあるといふことは、決して適當の措置ではなからうと余は確認するのである。

第三篇　漢字の起源

第一章　漢字の起源

漢字の起源は、今より約五千年以前、支那の黄帝の時代に、蒼頡が始めて文字を制したと傳へて居る。併し其時代に於て、現今の所有文字、即ち漢字を悉く制作したのでないことは、固より明なことである。唯蒼頡が或小數の漢字を制作したものであらう。爾後人智の進むに從つて、必要の度に應じて、其旨趣を擴め、漸次漢字を制作し、遂に現今の數にまで增加したものに相違ないのである。

現今まで殆ど漢字のオーソリチー(典據)とも稱せられて居る康熙字典の字數は、實に四萬六千二百十六字である。康熙字典は清聖祖の康熙四十九年の勅撰なれば、我紀元二千三百七十年のものである。其後約二百年間に於て、支那にて新に制作したる漢字も隨分あることである。又我國に於ては、其以前又は以後に於て、矢張漢字の形式を踐める新文字、即ち漢字を制作したことも、亦實に少くないのである故に今是等のものを合計するときは、漢字の總計は約五萬字に達して居ると見て格別の

大差はなからう。

是より是等漢字の制作に關する基本たるべき方法を述べよう。即ち漢字の起源たるべき方法は六種ある。而して其中、第一象形、第二指事、第三會意、第四形聲の四法は、其重なるものである。前の三法は、多少順次前の方法、を應用して居るが、主として事物の象形に基づいて出來、後の一法は半は形質に依り、半は聲音に依り、共に前の三法に依れる既成の文字を基礎として、出來たものである。此外更に第五轉注、第六假借の二法がある。共に前の四法を應用して、出來たものである。是等の方法を總稱して、漢字の六書と云ふのである。以下順を追うて、六書の大要を説明しよう。

第一章　象形文字

象形文字とは、事物の形體を模擬したる文字である。元來畫は形を取り、書は象を取るといふことがある。形とは諸物の外に顯れ、直に目擊すべき形體である。象とは元と獸名にして、此獸は支那にては、往古其生きたるものを見ることが出來なかつた。依つて死象の骨を得、又其圖を案じ、以て其生象を想像したのであつた。故に諸人の

意想を加へて、會得したる形體を象と云ふのである。斯の如くにして、文字は最初一種の圖畫より變遷したのである。故に象形文字の效用は觀るものをして、直に其事物を辨識せしめるものである。是は漢字の制作の基本中の基本とも稱すべきものである。例へば

一、日は  又は  より來る。

二、月は  又は  より來る。

三、山は  又は  より來る。

四、川は  又は  より來る。

五、艸は  より來る。

六、木は  より來る。

七、鳥は  より來る。

八、魚は  又は  より來る。

九、牛は 牛より來る。

十、馬は 馬より來る。

等の類である。而して象形文字は、皆多少の變遷があるから、現今では其文字を見て、直に皆悉く其如何なる象形に屬して居るかを、辨識し難いものは少くない。而も一旦其說明を聞いたならば容易に了解せられるものが、多いのである。卽ち象形の則るべきを知るには、現今の楷書の以前に使用せられた、彼の篆書を見れば、則ち大抵のものは、明に分るものであるが。尙ほ詳しく言へば漢字の最も古い古文、卽ち科斗と稱する字體を見れば、最も明に分るのである。併し是は普通の場合に必要はないから、現今にては、象形文字といふも、唯其歷史を知るに止るものかも知れぬ。

象形文字は前述の如く漢字制作の本源ではあるが、所有事物を悉皆其象形に依つて模擬し、相互に混同せしめないで制作するといふことは固より出來ないことである。故に是よりして更に指事、會意、形聲の諸法が出來、又更に轉注假借の二法も出來たのである。實際漢字中、純粹の象形文字は、僅に六百字程である。而も是は六書中の本源に位するものであるから、現今世界中の文字の種類を論ずるものは、漢字を

總べて象形文字といふ種類の下に、一括して居るのである。是は穴勝不適當とは言へないのである。

凡そ世界の文字中、此象形文字に屬するものは、固より唯漢字のみではない。エヂプト、アッシリヤ等の文字も之に屬して居るが、彼のローマ字も二十六字の一字一字は、殆ど一種の象形的に出來たものである。併し諸外國の文字の發達改良は、文字其物より、寧ろ言語の方に向つたのであつたが、支那のは、最初より同一の旨趣方針にのみ、向つて進んだために、漸次容易に動すべからざるものとなつたのである。

第三章　指事文字

指事文字とは最初一旦事物の象形の則るべきものは、之に依つて文字を制作したが、直に其象形の則るべからざるものは、其事物の意義を指示する方法に依つて、制作したものである。而して是は主として象形文字を基礎として、多少其形狀を變更し、又は點畫を增減して、其意義を顯したものである。例へば

一、二、三、は、事物の方圓曲直又は有形無形に拘らず、總べて一、二、又は三といふ

性質を指示するものである。

二、上は丄又は𠄞より來る「●」は基本の位置「一」の上を指す。又「卜」は「人」の篆書である。

三、下は丅又は下より來る「●」は基本の位置「一」の下を指す。又「𠃌」は「人」の篆書である。

四、旦は「日」の地上に出でたる事を指し、其時を示す。

五、夕は、月」即ち三日月の地上に在り、其半を見す事を指し、其時を示す。

六、本末の二字は「木」を本體として、下に「一」を加へ、根本の位置を指し、上に「一」を加へ、末端の位置を指す。

指事文字を又處事文字とも云ふ。固より同一の意義である。而して指事文字は象形文字と其性質頗る相類似するに依り、同一の文字も諸書に依り、或は象形とし、或は指事としてあるものも少くない。故に余は自ら標準を定め、已成の象形文字に多少の變化を與へたものは、兩說あるに拘らず、指事文字となすことゝした。

第四章　會意文字

會意文字とは、既に或意義を有する文字を二箇又は三箇以上結付けて、更に複雜なる一の意義を顯す文字を制作したるものである。例へば

一、武は元と或にして、止戈の二字を結付けたものである、是は武は干戈を鎭止する德あることとの人意に會合するのである。

二、信は人言の二字を結付けたものである。言として信でなければ、人たることが出來ないことを會意するのである。

三、忠は中心の二字を結付けたものである。

四、恕は如心の二字を結付けたものである。

而して此會意文字には、二種類がある。一は同母會意にして、一は異母會意である。同母會意は同體の文字二箇以上結付けたものである。例へば

一、林　炎　赫

二、森　晶　轟

三、《水水水水（音マン義大水）魚魚魚魚（音ゲフ義魚盛ナリ）龍龍龍龍（音テツ義多言ナリ）》

此括弧《　》内のものは、余の所謂使用漢字以外のものではあるが、他に適當のものがないから、假に附加へて置いたのである。

又異母會意とは、異體の文字二箇以上結付けたものである。併し此場合には更に合體と省體との二小別がある。合體會意は二箇以上の文字有りのまゝ結付けるものにて、省體會意とは其結付けるときに於て、或一字又は二字以上のものの點畫を省略するものである。

合體會意文字は會意文字として、前段に擧げて置いた武、信、忠、恕の四文字も固より之に屬して居るが、其他

一、明　晨　晴　曇　暮

二、盲　眇　看　直　睡

三、袍　被　袷　裸　襯

の類である。又省體會意文字は。

一、孝は老省に从(シタガ)ひ、子に从ふ。　耋(音テツ義八十歳ノ人)は老省に从ひ、至に从ふ。
二、寐は寢省に从ひ、未に从ふ。　寤は寢省に从ひ、悟省に从ふ。
三、妖は女に从ひ、笑省に从ふ。　臭は鼻省に从ひ、犬に从ふ。

の類である。

(从は從の古字ではあるが、漢字の字畫の解釋には、習慣上此古字を用ふる。)

會意文字の制作の方法は、至極便利なものであるから、漢字中此方法に依つて制作せられたものは頗る多い。實に六書中の第二位である。殊に我國にて新に制作したる漢字は、其過半は此方法を採用したものである。此我國にて制作したる文字は、漢字的の形狀性質を有するものであるから、矢張漢字と稱して差支ない。猶ほ我國にて製造したのを、洋館、洋服或は洋食と云ふのと同樣である。

我國にて制作したる會意文字は。

働(ハタラク)　噺(ハナシ)　峠(タウゲ)　杣(ソマ)　枡(マス)　梻(シキミ)　榊(サカキ)　糀(カウヂ)　綛(カスリ)　襷(タスキ)　躾(シツケ)　辷(スベル)　込(コム)　辻(ツジ)　凧(タコ)　凩(コガラシ)

凪(ナギ)　鯱(シヤチ)　鰰(ハタハタ)　鴫(シギ)

等の類である。就中凧凩及凪の三字は、共に風の省體會意に屬して居ると言つても、宜しいのである。

又本來の漢字中、其字音及意義を使用せず、我國にて前項のものと、同樣の意義を有せしめて居るものもある。是も我國にて新に制作したる會意文字と見做しても、善いのである。

伽（トギ）　伋（フルマフ）　偲（シノブ）　噓（ウソ）　喰（クラフ）　掟（オキテ）　据（スウ）　椛（モミヂ）　樋（ヒ）　溜（タマリ）　錆（サビ）　雫（シヅク）　鞄（カバン）　髱（タボ）　鵺（ヌエ）

等の類である。

又本來の漢字にて既に其意義を有するが、其會意の跡が餘り明なるために、前二項のものと、殆ど同樣のものと思はれて居るものもある。

噤（ツムグ）　歪（ユガム）　甦（ヨミカヘル）　碇（イカリ）　縋（スガル）　謎（ナゾ）　辿（タドル）　鏈（クサリ）　釦（ボタン）　閂（クワンヌキ）

等の類である。

故に此會意の方法を應用するときは、漢字は容易に制作せられるものである。今玩弄的に會意に依つて、文字を拵へるならば、

㊟錢吾唯知足

𧏡 子好孔孟學

𧈧 月と風裸になつて相撲かな

會意文字の象形文字又は指事文字に異なる所は、象形文字及指事文字は、大抵一箇の獨立したる文即ち所謂部首等であるが、會意文字は獨立したる文、即ち部首偏旁等の更に結合つて、一箇の文字をなしたるものである。而して會意文字中、次に述べんとする形聲及其他の性質を兼有するものは少くない。故に余は又自ら標準を定め、苟も已成の文字を結付け、合成的の意義を顯すものは、皆會意文字となすこととした。併し他を兼ねることを附言するを可とするのである。

第五章　形聲文字

形聲文字は又諧聲文字とも云ふ。寧ろ普通の書には、殆ど總べて諧聲文字と稱へてある。形聲文字とは既に或意義を有する二箇、又は三箇以上の文字を結合はせて、一箇の意義を有する文字を制作することは、會意の方法とは、同樣であるが、其一部は

主として形質、即ち意義を示し、一部は主として聲音、即ち字音を表すものである。例へば、

一、桐は木の屬であるから、木に从ひ、同の聲を附けたものである。
二、筒は竹の屬であるから、竹に从ひ、同の聲を附けたものである。
三、銅は金の屬であるから、金に从ひ、同の聲を附けたものである。
四、城は土の上に築かれるから、土に从ひ、成の聲を附けたものである。
五、盛は皿の上に載せられるから、皿に从ひ、成の聲を附けたものである。
六、誠は言を行に一致させるから、言に从ひ成の聲を附けたものである。

凡そ漢字には、一文字中數箇の部分に分解することを得るものが多い。即ち左右、上下、內外等である。其詳細なることは、後篇に於て說明することにしようが、此には此形聲文字に關して、必要であるから、此區分のあることを附加へて置く。

而して此形聲文字の制作の方法は、從來六種に分つて居る。即ち

一、左形右聲　文字の左部が形質、右部が聲音のもの。　江梅評陽
二、右形左聲　文字の右部が形質、左部が聲音のもの。　頭雞飄鳩

三、上形下聲　文字の上部が形質、下部が聲音のもの。　究界草霞

四、下形上聲　文字の下部が形質、上部が聲音のもの。　裟裳桊饗

五、内形外聲　文字の内部が形質、外部が聲音のもの。　問悶聞輿

六、外形内聲　文字の外部が形質、内部が聲音のもの。　匣匍園閣

形聲文字の會意文字に異なる所は、會意文字は主として、各〻獨立したる二文字、即ち二母字が結合つて制作せられて居るが、形聲文字は獨立したる母字と、其他子字と稱するものとが、結合つて制作せられ、母字は形質を表し、子字は直に其まゝ聲音を示すか、或は其聲音を示す根元となるものである。例へば左表の如し、但し表中上欄は子字を示し、下欄は形聲文字を表す。又形聲文字中特に字音を附けぬものは、子字の字音のまゝ、又は上のと同一の字音のものである又一字に二箇の字音を附けてあるは二音あるか、又は下のは呉音であるのである。

形聲文字表

几（キ）	机肌飢
卂（ジン）	迅訊

聲符	字例
九（キウ）	仇究鳩尻（カウ）
又（イウ）	友右佑祐有侑宥囿尤疣就（シウ）
	僦蹴郁（イク）
干（カン）	刊奸忓汗扞杆旰旱罕秆桿
	竿訐骭軒（ケン）
天（テン）	忝添呑（ドン）
元（グワン、ゲン）	完莞玩翫頑
升（シヨウ）	昇陞
予（ヨ）	預豫
且（シヨ、ソ）	助鋤狙沮殂祖粗組齟査（サ）
艮（コン）	恨根痕墾懇艱（カン）眼限銀（ガン、カン、ゲン、ギン）
丞（シヨウ）	拯烝蒸

聲符	字例
丸（グワン）	紈
乂（カイ）	刈苅艾
于（ウ）	宇汚吁芋迂盂
夭（ヤウ）	妖殀沃（ヨク）笑（シヤウ）喬（キヤウ）嬌橋矯蕎驕
亢（カウ）	伉坑抗杭航頏
舛（セン）	舜（シユン）蕣瞬
矛（ボウ、ム）	茅務霧鶩（ボク）
旦（タン）	但坦怛袒靼壇擅檀亶（セン）氈
良（リヤウ）	粮浪（ラウ）狼郎朗琅
亟（キヨク）	極

臼（キウ）	求（キウ）	臽（カン）	東（トウ）	采（サイ）	岡（カウ）	幸（カウ）	易（エキ、イ）	叚（カ）	尃（フ）	尞（リヤウ）
舅	毬	陷	凍	採	剛	倖	埸	假	傅	僚
舊	救	餡	棟	彩	崗	睾	剔（テキ）	瑕	博（ハク）	寮
齨	球	焰（ニン）		菜	綱		惕	暇	搏	撩
	逑	閻			鋼		掦	遐	縛	瞭
	裘	啗（タン）					蜴（セキ）	葭	薄	遼
		諂（テン）					錫	蝦	簿（ボ）	療
							鯣	霞		繚
							賜（シ）			鐐
										潦（ラウ）

臼（キヨク）	朮（ジユツ）	舀（ヤウ）	柬（カン）	釆（ハン）	罔（マウ）	幸（タツ）	昜（ヤウ）	段（タン）	專（セン）	奄（エン）
學（ガク）	怵	滔（タウ）	揀	番	惘	達	陽　傷（シヤウ）	椴	傳（デン）	掩
覺（カク）	述	稻	諫	幡	網	燵	揚　觴	緞	轉	庵（アン）
	術	蹈	煉（レン）	潘	魍	撻	楊	鍛	囀	菴
		韜	鍊	蕃			瘍		團（ダン）	
			闌（ラン）	藩			颺			
			瀾	翻			湯（タウ）			
			爛	飜			蕩			
			蘭	播（ハ）			盪			
							腸（チヤウ）			
							暢			
							場（ヂヤウ）			

叉（サ）	丯（ガイ）	王（ワウ）	公（コウ）
杈	害	汪	蚣
釵	割（カツ）	旺	松（ショウ）
	豁	枉	訟
	轄	狂（キヤウ）	頌
		皇（クワウ）	鬆
		遑	翁（ヲウ）
			蓊

刃（ジン）	丰（ボウ）		壬（ジン・ニン）	㕣（エン）
仞	邦	豐	任	沿
忍	峰		妊	鉛
認	逢		衽	船
	蜂		賃（チン）	袞（コン）
	蓬		淫（イン）	
	鋒		婬（イン）	
	縫			

刅（シヤウ・サウ）	㐄（クワ）	𡈼（テイ）		召（チヤウ・セウ）	
(木+刅)	降（カウ）	廷	廳	招	韶
梁（リヤウ）	絳	庭	聖（セイ）	迢	超
粱		呈		昭	
簗		程		照	
		裎		紹	
		桯		詔	
		聽		貂	

前表は固より唯形聲文字の一斑を示すものである。

形聲文字は前述の如く、母字は主として形質を表し、子字は主として聲音の根元となつて居るものではあるが、其聲音は必しも子字の聲音と、全く同一でないことは、前表に依つても明である。而して此漢字の字音には、系統があるものである。其間に於ては幾多の法則も存して居るものである。詰り漢字の研究は、將來此方面にも、非

常に發展することであらう。

而して形聲文字即ち最大多數の漢字の子字は、多くは文字の旁、即ち「ツクリ」を形造つて居るものであるから、其「ツクリ」のみを當にして、誤讀をすることを、從來百姓讀と稱へて、排斥するものである。今其特に子字に甚しく相違するものの數例を示さう。但し括弧中の文字は、所謂使用漢字以外のものである。

一、因姻は各〻字音「イン」であるが、咽(ムセブノトキ)は「エツ」烟は「エン」である。

二、吉詰は各〻字音「キツ」であるが、結は「ケツ」黠は「カツ」髻は「ケイ」である。

三、卓(倬)は各〻字音「タク」であるが、悼は「タウ」掉は「チヤウ」綽は「シヤク」である。

四、俞愉は各〻字音「ユ」であるが、偷は「トウ」輸は「シユ」鍮は「チユウ」(「トウ」の呉音)である。

五、(昷)溫は各〻字音「ヲン」であるが、媼は「アウ」慍は「ウン」である。

六、甚斟は各〻字音「シン」であるが、勘は「カン」碪は「チン」である。

七、鹿麓は各〻字音「ロク」であるが、塵は「ヂン」麈は「アウ」麤(ムラガルトキ)は「グン」である。

八、散(繖)は各〻字音「サン」であるが、撒は「サツ」霰は「セン」である。

九、堯僥は各々字音「ギヤウ」であるが、撓は「タウ」燒は「シヤウ」磽は「カウ」遶は「ジヤウ」又は「ネウ」（呉音）である。

十、辟僻は各々字音「ヘキ」であるが避は「ヒ」嬖は「ヘイ」擘は「ハク」である。

又此に一の例外として多くの母字の位置に當るもの即ち偏が、却つて殆ど總べて聲音の根元ともなつて居るものがある。而も是は唯一箇の種類に限る樣である。即ち「爿」の偏に屬する使用漢字の總べてのものは、皆其「爿」の字音「シヤウ」（呉音「サウ」）であるのである。即ち

壯妝牀狀戕莊將裝奬獎漿牆醬

東京の或名所の銅像の銘に「戕定」の文字が刻せられてある。是では「シヤウテイ」の字音は出ないのである。即ち此「戕」は無論「戕」の誤である。

又前述の如く形聲文字は會意文字とは、固より特種の性質を有するものではあるが、時として形聲文字中會意の性質を兼有するものも澤山ある。例へば

一、忘惑

二、晴暮
三、穽窮
四、箭蘿
五、譟錘

等の類である。又前章會意文字の例中、之に屬するものも、少しはあつた。
元來此形聲文字の數は六書中の第一位である。實に漢字總數の約九割弱である。漢字の此方面に於ける研究に注意すれば、漢字の學習及使用上に關して、其困難を輕減することは多大なることであらう。

我國にて制作したる形聲文字は、左の如し但し。何れも其讀方を聲音と見做す。

匁(モンメ)　杢(モク)　柾(マサ)　樫(カシ)　畑(ハタ)　畠(ハタ)　粂(クメ)　縅(ヲドシ)　裃(カミシモ)　褄(ツマ)　俥(ジンリキシヤ)　鋲(ビヤウ)　鑓(ヤリ)　颪(ヲロシ)　麿(マロ)

右の内「匁」は「文」の草體と片假名「メ」との形聲文字である。が、又「錢」の略體との説もある。
又「畑」又は「畠」は乾田(ヒタ)、火田(ホタ)又は白田(ハクタ)の轉である。是等は會意の性質をも兼ねて居る。

又本來の漢字中其字音及意義を使用せず、我國にて前項のものと同樣の意義を有せしめて居るものもある。是も我國にて新に制作したる形聲文字と見做して善いのである。

扨（サテ）　槇（マキ）　絽（ロ）　錠（ヂヤウ）　鰹（カツヲ）

の類である。但し是等も會意の性質を兼ねて居るのもある。

第六章　轉注文字

轉注文字の解釋には二樣ある。第一は最初に「考」「老」の二文字を掲げ、左に轉ずるを「考」とし、右に轉ずるを「老」となすとて、考老の二文字の字畫の終の撥ね方に依つて、二文字を生じた樣に說明してある。而も其他の例解はない。第二は文字の字畫に關係なく、文字中一文字に數義あるものを掲げ、其本來の意義より展轉し、更に他の意義に注ぎて流用するものである。而して余は此後說に從ふことを可とするのである。何となれば、前說の如く文字の字畫にのみ關係するときは、此轉注に屬する文字は、甚だ少いことである。或は此考老の二文字の外には、殆ど全くないかも知れぬ。余は最

初數種の參考書を見たが、何れも「考老」の二文字の外には、說明してなかつた。而も一字にして數義に轉注するものの說明は、他の五法中に於て、何れにも屬せざるものである。依つて余は後說を採用したのであつた。此第二說にて說明すれば、

老考

の二字は說文に依れば、老は考なり、考は老なり」と循環的に說明してある。即ち後說に依つて、相互に轉注するものと見做して善いのである。併し前說の如く、字畫のことを言はねば、滿足せぬものがあるかも知れぬ。然らばかうである。元來「考」は余の說にては、會意文字にして、「老省に从ひ、丂(カウ)に从ふ」のである、「丂」は氣の舒びんとして、「一」に碍げられたる指事文字である。若し此「丂」が「木偏」に从へば「朽」とて腐朽のこととなるのである。依つて之が老省に从つて「考」となつたので、相互に殆ど同一の意義を有することが分るのである。

是より余の適當と認める轉注の解釋に依る文字を說明しよう。

一、塞は音「サイ」義「トリデ」即ち邊塞の塞であるが、塞は敵を蔽塞するものなるに依り、其義轉注して、蔽塞の塞、義「フセグ」となり、隨つて音「ソク」となる。

二、度は音「ド」義「ノリ」即ち尺度の度であるが、物度あれば、長短を測るに足る。故に其義轉注して、忖度の度、義「ハカル」となり、隨つて音「タク」となる。

三、惡は音「アク」義「アシ」即ち善惡の惡であるが、惡は憎むべきものなるに依り、其義轉注して憎惡の惡、義「ニクム」となり、隨つて音「ヲ」となる。

四、數は音「スウ」義「カズ」即ち算數の數であるが、物數あれば密であるから、其義轉注して、繁數の數、義「シバシバ」となり、隨つて音「サク」となる。

五、樂は音「ガク」義「音樂の樂」であるが、音樂は人心を喜ばしめるものなるに依り、其義轉注して、喜樂の樂、義「タノシム」となり、隨つて音「ラク」となる。

等の類である。殊に「樂」の如きは前例の外、猶ほ多數の轉注を有して居るのである。是等は後篇に於て、別に詳論するのである。

漢字の意義の轉注するときは、大抵其字音も變ずるものである。併し我國に於て、發音する所の字音にては、區別のないものもある。是は我國にては、彼の平、上、去の三聲は、發音上區別がないからである。例へば

一、令は號令のときも、轉注の縣令(官名)のときも、我國にては、共に同音である。

二、長は長短のときも、轉注の長幼のときも又官長、君長のときも我國にては、共に同音である。

三、聽の義「キク」のときは、其音平聲の「テイ」(呉音「チヤウ」)である。又義「ユルス」のときの音は、去聲の「テイ」(呉音「チヤウ」)である。

四、重の義「オモシ」のときは、其音上聲の「チヨウ」(呉音「ヂユウ」)である。又義「カサナル」のときの音は、平聲の「チヨウ」(呉音「ヂユウ」)である。

從來世間にて、時として是等の區別に氣付かず、聽の義「キク」のときは、音「チヤウ」義「ユルス」のときは音「テイ」であるとか、重の義「オモシ」のときは、音「チヨウ」義「カサナル」のときは音「ヂユウ」であるとかと、思つて居るものもある。

一字にて數音數義を有するものは、大抵皆轉注の方法に依つて、制作せられたるものである。上古文字を制作するときに當つて、一字必ず一音一義のみであれば、言語餘りあつて、文字が足らざることがあつたに相違ない。其場合には、其意義の轉注すべきものを制作したのであつたらう。現今に於ける漢字の總數は、前述の如く、約五萬字にも達して居るが、支那の秦時代(紀元約四四〇年)までは、約三千五百字、漢時代

(約六六〇年)までは約五千字、後漢時代(約七七〇年)までは約一萬字、梁時代(約一一六〇年)までは約一萬五千字、唐時代(約一四〇〇年)までは約二萬五千字、宋時代(約一八〇〇年)までは約四萬字、明時代(約二一〇〇年)までは約四萬五千字といふ様に、漸次增加し來つたのであつて、支那の建國の後或時代より春秋戰國の末頃までには、漢字の總數は、存外少かつたのである。故に古書を見るときは、此轉注及次に述べんとする假借の方法は、隨分多く利用せられて居つたのである。

併し轉注及次に述べんとする假借は、古來多數の人が、使用したものでなければ、任意の獨斷的に制作しても、人には通ぜないものである。故に我國にて新に制作したる轉注文字は、今餘り多く見當らない。併し全くないことはないのである。今一二の例を述べよう。

一、様は音「シャウ」義橡實、即ち「トチノミ」であるが、之が轉注して揍音「ヤウ」義法即ち「ノリ」方即ち「カタ」と同一の音義を有するものとなるが、現今我國にて使用する模様、又は敬稱に用ふる「方」の義には、揍を使はずして唯様のみを専用して居る。但し德川時代には階級の低いものに却つて手偏のを用ひたことが

あつた。

二、撰は音「サン」義作即ち「ツクル」又纂即ち「アツムル」である。故に撰文新撰のときは、共に其本來の音義であるのである。然るに撰は轉注して、選音「セン」義「エラブ」と同一の音義を有するものとなるのである。即ち撰擧、撰擇のときは是であるのである。然るに撰は其轉注の場合のみを認められ、本來の音義たる撰文新撰等の撰までをも、音「セン」義「エラブ」と誤讀誤解せられて居る、但し「杜撰」の一熟字のみは、本音の遺物として「杜」の呉音「ヅ」と共に熟して「ヅザン」と讀んで居るのは、獨り「杜撰」な讀方ではないのである。然るに隨分大家の著書にても此「杜撰」の讀方を怪んで唐宋音であるなどの說をなすものこそは、却つて「杜撰」ではなからうか。

又我國にて其轉注せることを知らずして、矢張本音本義の如く誤讀するものもある。例へば

一、「危急存亡の秋」の「秋」を「トキ」と讀まずして「アキ」と讀む、

二、「進退維れ谷る」の「谷る」を「キハマル」と讀まずして「タニマル」と讀む、

曲の中にては、雙方共に「アシタ」と歌つて居る、是は曲譜の都合上に出たのであらう。又朝夕の朝は本義にして、朝野の朝に轉注するのであるが、謠の類もあるのである。又進退維れ谷るの場合には、故らに滑稽的に讀むこともあるが、一部のものは、眞面目にやるものもあるのである。

第七章　假借文字

假借文字とは、文字の使用上、唯其文字の字音を借るまでにして、決して其文字の本義を取るのでないのを云ふのである。例へば

一、它の字は元と蝮類の蟲であるが、自他の「他」に假借する。
二、蚤の字は元と蝨類の蟲であるが、早夜の「早」に假借する。
三、筦の字は箏筦とて、竹の中の薄皮たる筦であるが、管絃の管、隨つて管鑰の「管」に假借する。
四、節の字は竹節であるが、㐅(音「セツ」義減少シテ度アルコト)約の「㐅」に假借する。
五、有は元と有無の有であるが。又「又」に假借する、

六、由は元と田に从ひ、其首を出す其經行の徑を指す。故に由行の「由」であるが「倘可」の意を有する「猶」に假借する。

の類である。併し筭は余の所謂使用漢字以外のものであるが、便宜上、唯此に掲げた。

又節の假借が成立つてからは「之」は殆ど全く使用以外のものとなつて居る。

有の又に假借する實例は論語に「吾十有五而志學」とある。其他誰でも使用する。由の猶に假借する實例は、孟子に「由緣木而求魚」と使用して「ナホキニヨリテ、ウヲヲモトムルガゴトシ」と讀むが如くである。

又一字にて二字の熟字の假借をすることもある。例へば

一、叵の音は「ハ」即ち不可の二字の音の促つた「不可切」であるから、「不可」の二字の代に「叵」の一字を假借して、「アラズ」又は「カタシ」と讀む。字畫は元と「可」を裏反にしたのである。

二、爾の音は「ジ」即ち「如是切」であるから「如是」の二字の代に、「爾」の一字を假借し「シカリ」と讀む。

三、盍の音は「カフ」即ち「何不切」であるから、「何不」の二字の代に、「盍」の一字を假借し

て「ナンゾ……セザル」と讀む。

四、「**耳**」の音は「ジ」卽ち「而巳切」であるから、「而巳」の二字の代に、「耳」の一字を假借して、「ノミ」と讀む。

五、「**諸**」の音は「シヨ」卽ち「之乎切」であるから、「之乎」の二字の代に、「諸」の一字を假借して、「コレ……カ」又は「コレヲ……ニ」と讀む。

六、又「**若干**」の二字を分解して、更に結合すれば、「一若十」となる、卽ち「一カ若クハ十カ」とて「ソコバク」のこととなる。

七、「**吉田**」の二字を分解して、更に結合すれば、二つの「十」と「一」と「回」とになる。故に松陰吉田寅次郎は、自ら二十一回猛士と號して居つたのである。

八、「**華甲**」とは六十一歲のことである。是は「華」の字を分解すれば「六十一」となる。又「**桑字年**」は同樣に四十八歲のこと、「雙井年」は八十歲のこと「米壽」は八十八歲、「喜字祝」は七十七歲の祝のことである。是は「喜」の字の草體は「七十七」と書くからである。又「松」を「十八公」と云ふことがある。

九、「**日光山**」を「晃山」とし「鹿兒島」を「麑島」とするもののあるのも、此類である。

今前例中の實例を少し附加へて置かうか。

一、叵は通常多く用ひない。漢詩中には平仄の都合上「難」の字の代に用ふるのである。「氣同生固均、數異測誠叵」は專門の漢文學者は知る所である。又句の中間に用ふることもある。余は明治三十七八年事件中、鐃歌百絕の拙稿中、廣瀨中佐を詠じて「三索二兵曹一意叵レ平」と使用したことがあつた。今大家の用法がちよつと思出ないから、假に狗尾を續いで置く。

二、爾を「シカリ」と讀むことは、通常人の使用する所である、卽ち「云爾」を「シカイフ」又は「イフコトシカリ」などと讀むのである。

三、盍の用法は漢文中には澤山あるが、論語に「盍三各言二爾志一」とある。是は「何ゾ各々汝ノ志ヲ言ハザル」と同樣である。

四、耳の用法は漢文中には、頗る多い。史記に「與二父老一約二法三章一耳」とある。是は「父老ト法三章ヲ約スルノミ」と讀むのである。

五、諸の用法は前例に擧げたる二種とも、漢文中には澤山ある。孟子に「文王之囿、方七十里有レ諸」とある。是は「……コレアルカ」と讀むのである。又禮記に「射、求二

正ﾚ諸己ニ」とある。是は「射、求ニ正ﾚ之乎己ニ」又は射、求ニ正ﾚ之於己ニ」と同樣……之ヲ正スコトヲ己ニ求ム」と讀むのである。其他「己所ﾚ不ﾚ欲、勿ﾚ施諸人ニ」の類も多い。是も同樣「……コレヲ人ニ施スナカレ」と讀むのである。若し是を「……諸人ニ（ショニン）施スナカレ」と讀んだならば人にも笑はれ、自身にも其眞の意義が分からないのである。

英語の中にても是等の類がある樣に思つて居る。

一、「イット、イズ」(It is)の代に「イッツ」(It's)を使用する。

二、「ホワット、イズ、イット」(What is it ?)の代に「ホワッツ、イット」(What's it ?)を使用する。

等の類である。

又前例と反對に、一字の代に、二字を以て、假借することもある。例へば

一、老は潦到切音「ラウ」であるから、「老」の代に「潦到」の二字を假借する。

二、癃は龍鍾切音「リユウ」であるから、「癃」の代に「龍鍾」の二字を假借する。

今又此實例を示さうか、

一、唐詩の中に「故園東望路漫々、雙袖龍。鍾。涙不ﾚ乾」といふのがある。是は「……老病

ニシテ涙脆イ」といふのである。全く「龍鍾」即ち杯等には關係のないのである。

二、先年或新聞紙に在つた漢詩中「龍鍾潦到化駑馬、斷向西風思舊林」といふ句があつた。最早説明するには及ばぬ。

又其他玩弄的のものを擧げるならば、

一、「黄絹幼婦、外孫韲臼」は「絶妙好辭」となるから、他人の詩歌文章を褒めるに「黄絹幼婦」であるとか、「外孫韲臼」であるとか言ふことである。余は曾て之を詩句中に用ひたことがあつた下野天明郷に在る須藤溫の建てた中根東里(字敬父)の有名なる菅神廟碑を見たとき。

素封休道已成墟。　菅廟碑存千古譽。　敬父外孫韲臼撰。　苦心截綴魯公書。

固より見るに足らぬものであるが、序に記したのである。

二、「妙齡」の「妙」は「少女」であるから、少女のことを「妙齡の婦人」などと言ふのである。是は故らに優美な文字を選んだのである。序に一つ述べよう。「工女」又は「女工」とすべきものを故らに「工」と同韻同音たる「紅」を用ひ「紅女」又は「女紅」とすることがある。併し「土紅」又は「紅夫」などとはせぬ。是は却つて不釣合であるからで

ある。又「仁」は人の最大の德にして「人」とは同韻同音であるから「人」の代に用ふることもある。

余は先哲百家の拙稿中貝原益軒を詠じたとき、此「紅女」を用ひた。

說レ道慇懃以二國詞一。　牧童紅女秉二其彝一。　誰知二百年前外。　夙作二斯民敎育基一。

三、「岩山不レ看、峴山崩。姜女去、孟子未レ來」は「硯盖」となる。

四、「林下祖師現二半身一、水邊尊者隱二頭脚一」は「禁酒」となる。

五、「一人堂々、二曜同レ光、泉深尺一、點去二氷傍一、二人相連、不レ欠二一邊一、三梁四柱、烈火烘然、除二去雙勾一、兩日不レ全」は、曾て支那の淮南の大明寺の壁上に在つたもので「大明寺水、天下無比」といふことの謎であつた。

六、「寒ければ山より下を飛ぶ厂や物打荷ふ人ぞ戀しき」とは「炭を所望したときの誰かの和歌であつた。

七、東京淺草の觀音堂の額面に「大無人、天無人、王無中、罪無非、吾無口、交無人、切無刀、分無刀、丸無丶（シュ）、千無ノ（ベツ）」と記してあるさうである。是は無論「一、二、三、四、五、六、七、八、九、十」となる積であらう。隨分閑暇なる人もあつたものである。

八、一昨年頃まで、東京牛込區肴町の行願寺に、太田南畝の隱語の碑文があつたさうである。其裏面には

癸卯天陽月八、二人不戴九人讐、同下有田十一口、湛乎無水納無糸、

と記してある。一話一言に記載せる解は左の通である。

二人は天なり、九人は仇なり、敵うちしものは、富吉といひし故、同下の田は富の字、十一口は吉の字なり、敵の名は甚内といひし故、湛に水なく、納に糸なきは甚内なり。

九、序に一つ述べよう。此太田南畝の雅號は又別に蜀山人といふが、最初は四方(ヨモ)山人(ヤマ)であつたのである。然るに或とき支那人が來つて、其揮毫せるものを讀み、草書の「四方」の二字を「蜀」と誤讀しことがあつた。夫より本人は蜀山人としたのであるさうである。

大分横道に入つたから、止めよう。

又國字若くは國語中、從來此假借の方法を應用したものは、頗る多い。例へば

丁度(チヤウド)　世話(セワ)　何卒(ナニトゾ)　人柄(ヒトガラ)　同斷(ドウダン)　宜敷(ヨロシク)　尾籠(ビロウ)

成程(ナルホド)　村雲(ムラクモ)　棚引(タナビク)　無代(ムタイ)　矢庭(ヤニハ)　祝着(シウチヤク)　穴賢(アナカシコ)

等の類は、是である。殊に妙なのは「同斷」は元と「同理」の字訓に假借し、「オナジコトワリ」として居つたのが、之を字音讀とし「尾籠」の字訓を「嗚呼」の字音に假借し「ヲコ」として居つたのが、之を字音讀とし、「無代」は元と「ダイナシ」に假借し、共に之を字音讀としたのである。其他是等の類は尚多いが、後篇に讓ることにする。

又近年になつてからは「武力細工(ブリキサイク)」「汁粉(シルコ)屋」の看板より「貸家有升(カシヤアリマス)」或は「貸間有⧄」と象形的文字(?)の貼札をも見受けることであるが、是等は多少、否頗る滑稽的の成分を含んで居る樣である。

我國にて近年行はれる普通の假借中

唱導(唱道の假借、以下之に準ずる)　寄送(寄贈)　志想(思想)
意思(意志)　抱腹(捧腹)　制肘(掣肘)　嶄新(斬新)　智惠(智慧)
東修(東脩)　根底(根柢)　爛熳(爛漫)　糢糊(模糊)　淺黃(淺葱)
萌黃(萌葱)　紀念(記念)　需用(需要)

等の類は差支ないものとした所で、

保儉（保險）　候爵（侯爵）　大低（大抵）　大炮（大砲）　差操（差繰）

幣害（弊害）　收獲（收穫）　段楷（段階）　發堀（發掘）　訓陶（薫陶）

等の類に至つては、假借の範圍を超えて、濫用の域に至つて居ると思ふ。若し尙ほ此濫用の實例を得たいならば、隨分何れの所にも、無言で供給して吳れるものが、澤山あることであらう。又余は稍〻敎育のあるものにても、時として濫用に陷り易いものの四。五百種を書留めて置いたから、之を後篇に揭げることにしてある。

假借の一例として、蛇足ながら一つ附加へて置かう。此十年以來「ハイカラ」高襟といふ言葉程新流行のものはなからう。何れの場合にも使用せられ、又之に語尾を附けて、「ハイカッテヰル」「ハイカラレル」などとも使用せられるし、又「ハイカラ振ル」とも使用せられ、又此節では所謂「ハイカラ振ル」ものは、其語尾をのみ使用して單に「ブル」と言はねば、少し時代後れにして、「ハイカラレナイ」有樣である。併し是は別として、最近では、此「ハイカラ」のことを「イエス、フロム」（Yes from）を以て假借し、其反對の「バンカラ」

(蠻襟?)のことを「エビニング、プロム」(Evening from)(晩カラ)を以て假借するさうである。

第八章　六書に分類したる漢字數

六書の名稱は、倉頡が漢字制作の當時に於て、存したるものではない。多分周時代に至つて、始めて生したる類別法である。故に漢字の分類は人に依り、書に依り、未だ一致しないものもある。而して象形、指事、會意、形聲は結構法にして、轉注、假借は使用法である。

後世宋時代、紀元約千八百年頃に於て、編纂したる鄭樵の六書略の漢字の總數は二萬四千二百五十五字であるが、其六書に分類したる字數は次の通である。

象形文字	六〇八字
指事文字	一〇七字
會意文字	七四〇字
形聲文字	二一、八一〇字

轉注文字	三七二字
假借文字	五九八字
合　計	二、四二五五字

第四篇 使用漢字

第一章 漢字の總數

第二篇及第三篇に於て述べたるが如く、現今に於ける漢字の總數は約五萬にも達して居ることであるが、固より制作の當時より、一時に斯く大數に達して居るのではないことは、申すにも及ばぬことであらう。今支那の各時代に於ける字書の漢字數を示さう。

時代	日本紀元ノ概數	字書名	收容セル漢字數
秦	四四〇	蒼頡篇等	三三〇〇
漢	六六〇	訓纂篇	五三四〇
後漢	七七〇	滂喜篇等	七三八〇
同	七七〇	說文解字	九三五三
魏	九〇〇	聲類	一、一五二〇

同	九〇〇	廣雅	一、八一五〇	
晋	一〇〇〇	字林	一、二八二四	
後魏	一〇五〇	字統	一、三七三四	
梁	一一六〇	玉篇	一、六九一七	一本　二、二七一七
唐	一四〇〇	廣韻	二、六一九四	
宋	一八〇〇	六書略	二、四二五五	
同	一八〇〇	集韻	四、三五二五	
明	二一五〇	字彙	三、三一四九	一本　四、五五五〇
同	二一五〇	正字通	三、三四四〇	
清	二三七〇	康熙字典	四、六二一六	

就中、康熙字典は、清聖祖が、従前の字書の不完全なることを憂へ、諸儒に詔して、編纂せしめたもので、現今まで漢字の字書中の最も完全無缺なるもの、即ち漢字のオーソリチー（典據）とせられて居るものである。而も未だ粗漏を免れざるものがある。余

も偶然其解釋の相互に衝突し、撞著したるもの數種を發見して居る位である。編纂の當時より餘り間もない乾隆年間(紀元約二四〇〇)に、王錫侯といふものが、自ら字貫を作り、字典の不足を補つたために、死刑に處せられ、字貫を沒收せられた。併し世間には其傳本が存して居る。

爾來約二百年間に於て、支那にて新に制作したる漢字も、大分あることではあるし、其以前よりも、又其以後も、我國にて、新に制作したる漢字も頗る多い。我國にて、本來の漢字の音義以外、別種の意義を有せしめ、又本來區別のない古字又は俗字等を殆ど別種の如く、取扱つて居るものも少くない。是等を合計するときは、現今に於ける漢字の總數は約五萬以上に上つて居ることは確である。現に我國にて新に制作したる漢字を收容しないのではあるが、明治二十四年石川英の編纂した日本大玉篇の漢字の總數は、四萬九千四百五十字である。

此石川英の增訂篆文詳註日本大玉篇は、現今に於ける漢字の字書中、最も完全に近いものと、余は認めて居るのである。併し多少の錯誤は、免れないことは、ないでもない。例へば「漆」「暝」の字畫を誤つて居ることとか「擧」の一字を「手」の部首と「臼」の部首とに

「辮」の一字を「糸」の部首と「辛」の部首とに、重出せしめ、殆ど同一の解釋をも重出せしめてある。又普通に使用する「礁」(是は康煕字典にもない)「罐」の字はないことなどはあるが、他の字書には、より多くの錯誤を充して居るのである。

併し何れの字書の漢字の總數は四萬であらうとも、五萬であらうとも、其八九割以上は、全く不用の文字である。何れの專門學者でも、又何れの字書の編纂者自身でも、其八九割以上の文字は使用したことはないであらう。是等は最初何かの機會にて、一旦制作せられたが、爾後數百年間、字書以外には、全く使用せられたことのないものであらう。唯字書より字書に輾轉して居るのみであるのである。

近頃東京に於て漢字統一會が組織せられ、必要なる漢字約六千字を選定し、不日發表の運に至るさうであるが、余は多年の經驗に依り、我國にて使用すべき漢字約五千字を選定して居るのである。

余は僭越ながら、余の選定したる使用漢字表を次章に揭げることとする。

第二章　使用の漢字

余の選定したる使用漢字は、支那にて制作したるもの約四千五百字、支那にて制作したるも、我國にては、本來の字音及意義を使用せず、我國にて特に別種の意義を與へたるもの、又我國にて新に制作したるもの等約五百字、合計約五千字を得たことである。

併し是にて現今に於ける所有漢字を悉皆辨じ得られるとは、固より申されぬのである。現今の物名、地名其他のものに於て、時々意外の漢字に出會ふことがある。是等を一々知悉し置くといふことは、到底不可能である。是等は其必要のときに當つて、專門家に敎授を受けるか、何かせなくてはならぬものである。現今世間にある大部の漢字の字書を調査しても、不明の文字は、矢張あるのである。例へば下野國足利に在る

鑁阿寺

此「鑁」の字は何れの字書にもない。是は「バン」と云つて、金剛界の種字、又「阿」は「ア」と云つて胎藏界の種字、二字熟して「バンナ」と云つて「大日」のことであるさうである。又同國日光に在る。

憾⿰羊合淵

此「⿰羊合」の字は、又「⿰羊舍」とも作り、漢字の字書にはある。二字にて「ガンマン」と云ふ、元と孔雀經慈救呪の末句であるが、今は普通に「含滿淵」を使用する。面倒なる地名等は、追々こんな風に改正することを希望する。又豐臣秀吉征韓のとき、加藤清正が、佩刀に刻し、先頭の日露戰爭の際にも、數多の軍人中には守符となしたと云ふ

⿰扌⿱亼手抬⿰扌⿱亼手⿰扌⿱勹吕

は、「ケンイケンボウ」と讀むさうであるが、五千字は愚か、五萬字の漢字の字書にもない守符とするには、必しも讀めなくとも、其本人さへ信仰すれば善いのであるから、漢字の制限をなしたからとて、五十歩百歩、固より差支はなからう。

使用漢字表

部首	漢字（「―」符以下ノモノハ、我國ニテ新ニ訓義シタルモノ「＝」符以下ノモノハ、我國ニテ新ニ制作シタルモノデアル。）
一（イチ）	一丁七丈三上下不丐丑且丕世丘丙丞並
丨（コン）	个中丱串

丶（チュ） 丿（ヘツ） 乙（オツ） 亅（ケツ） 二（ジ） 亠（トウ） 人（ジン）

丸丹主丨丼
乃久之乍乎乏乖乘
乙九乞也乳乾亂
了予事
二于云互五井亙些亞亟
亡亢交亥亦亨享京亭亮
人什仁仆仄仇今介仍仕仔他付仙仞仗代令以仰仲件任
企伉伊伍伎伏伐休伯伴伶伸伺似佃但佇位低佐余何住
佚佛作佞佩佯佳併佾使侃來侏侈例侍侑供依侮侯侵侶
便係促俄俊俎俑俗俘俚保俟俠信修俱俳俯俸倆倉倍倏
倒候倚倜借倣値倦倨倩倪倥倫倭倖偃偈假偉偸偬偕停
健偲側偶偵傀傅傍傑備傖傘傚傭催傲債傪傷傳傾僅僉

儿 ジン	入 ニフ	八 ハチ	冂 ケイ	冖 ベキ	冫 ショウ	几 キ	凵 カン	刀 タウ

像僕僚僞僥僧僭僦僮僵價僻儂儀億儉儒儔儕償儡優儲
儷儼｜伽佗俵偖儘‖佛働
兀允元兄充兆兇先光克兌免兎兒兜兢
入内全兩
八公六兮共兵其具典兼冀
冊再冑冒
冗冠冢冥冪
冬冱冲冶冷冽凍凊凋凜凝
几凡凭凰凱
凶出凹凸函
刀刃分刈切刊刎刑列初刪判別利刮到刳制刷券刹刺刻
剄則剃削刺前剋剞剖剔剛剝剸剪剩副割創剴剿劂劃劇

	劈劉劍劑劓斲
力（リョク）	力功加劣助努劫劬勃劾勁勅勇勉勒動勘務勝勞募勢勤
	勳勵勸
勹（ハウ）	勺勿匆包匈匍匐匏＝匃勾匁
匕（ヒ）	匕化北匙
匚（ハウ）	匝匠匡匣匱
匸（ケイ）	匹匿區
十（ジフ）	十千廿卅升午半卉卑卒卓協南博
卜（ボク）	卜占卦
卩（セツ）	卮卯印危卵卷卸卺卽卻卿
厂（ガン）	厄厚原厠厥厭厲－厘
厶（シ）	去參

又（イウ）　口（コウ）　囗（ヰ）　土（ド）

又叉及友反叔取受叛叟叡叢

口古句叫叩叨召只可台叱史叮右司吃各合吉同名后吏
吐向吊吞君吝吟吠否含呈吳吶吸吹吻吼吾告呂呦周呪
呱味呶呻呼命咀咄咆呵和咎咨咫哂咸咬咽哄哀咯品哉
員哦哭哨哲哺唄唁唐哥哮唇唯唱唳唾啄商問啓啞啖啻
啼善喁喉喩喘喙喚喜喞喊喟喧喃喫喪啣喬喨單嗅嗇嗄
嗜嗣嗟嗚嗤嗾嗽嘉嘖嘗嘔嘯嘲嘶噎嘩噪噞噌噦器噫噬
噴嘴嚙嚮嚠嚴嚼嚶囂囀囃囊囈囑｜叶吋吩哩喰噇嘘嘸
噂嚊‖叺呎听嗙嗎噸嘶

囚四回因囮困囹固囿圄圃圈圊國圉園圓圖團圜

土在圭地址坂均坊坐坑坤坦坩坪垂型垓垣埃埋城埒域
執場培基埼堀堂堅堆埴堊堡堤堪堯堰堝報塲堵堺塉塊

坐塑塔塗塘塚塙塞塡塵塹塾境墅墓墜墝增墟塀墨墮墳
墺壇墾壁壑壓壔壘壞壤｜壜

士 シ

士壬壯壹壺壻壽

夂 チ

夊 スヰ

夏

夕 ヤキ

夕外夙多夜夢夤夥

大 タイ

大天太夫夭央失夷夾奄奇奈奉奎奏契奐奔奕套奘奚奋
奠奢奧奩奪奬奮

女 ヂヨ

女奴奸好妁如妃妄妊妒妓妖妙妣妝妥妨妹妻妾姆姉始
姑姓姤委姦姪姬姸姻姿姚威娑娛娟娠娩娜娶娼婆婉婚
婦婢婬媒媚媛嫩嫗媾媼嫁嫉嫋嫌嫡嬋嬉嬖嬰孃＝婲

子 シ

子孑孔孕字存孜孝孟季孤孥孩孫孰孱孵孳學孺孼

宀	ベン	宅宇守安宋完宏宕宗官宙定宛宜客宣宥室宮宰害宴宵家容宸宿寂寄寅密寇富寒寐寓寔寞察寡寢寤寥實寧寨審寫寬寮寰寵寶
寸	スン	寸寺封射將專尉尊尋對導
小	シヤウ	小少尖尙尠
尢	ワウ	尤尨就
尸	シ	尸尹尺尻尼尾尿局屁居屆屈屋屍屎屑屓展屛屠屢履層屬
屮	チツ	屯
山	サン	山屹岌岐岡岨岫岬岸峙峨峯島峻峽崇崎崑崔崖崙崩崢嵎嵐嵯嶂嶄嵩嶇嶮嶷嶸嶺嶼嶽巍巒巓巖‖峠
巛	セン	川州巡巢巤

部首	讀	漢字
工	コウ	工左巧巨巫差
己	キ	己已巳巴巵巷巽
巾	キン	巾巿市布帆希帖帙帛帑帝帥師席帳帶帷常帽幄幅幌幕 幔幗幟幡幣‖凧
干	カン	干平年幷幸幹
幺	ヤウ	幻幼幽幾
广	ゲン	庇序底庖店庚府庠度座庫庭庶康庸廂廈廉廊廓廐廚廛 廟廡廢廠廣廩廨廬廳
廴	イン	延廷建
廾	キヨウ	弃弄弊
弋	ヨク	弋式弑
弓	キウ	弓弔引弗弘弛弟弦弧弩弱張强弼彀彈彊彌彎

ヨ（ケイ）	彗彘彙彝
彡（サン）	形彤彥彩彪彫彬彭彰影
彳（テキ）	彷役彼往征徂待徇徉徊律後徐徑徒得徙徘徜從御徧徨 復循微徵德徹徽
心（シン）	心必忖忌忍志忙忘忝忠忡快忱念忽忿忸怏怒怖怙思怠 怡急性怨怩怪怯怱怜怵恃恒恍恐恕恙恚恢恟恣恤恥恨 恩恪恭恬息恰悃悄悉悌悍悖悔悅悚悛悟悠患悧悲悴悵 悶惘悸悼悽情惆惇惑惕惜惟惠惡惚惰惱惛想惴惶惷惹 惺愁愆愈愉愎愍意愕愚愛感慍愨愧愷愼愾愿慄愬慂慈 慇慊態慕慘慙慟慝慢慥慧慨慮慫慵慳慶慴慾慷慯憂憑 慣慰憊憎憔憐憚憤憮憋憩憫憲憺懇懈憶應懌憾懊懃懣 懦懲懷懶懸懺懼懾懿戀戇―忰惣＝怺

戈 クワ　戶 コ　手 シユ　支 シ

戈戊戍戌戎成我戒戕或戚戛戟截戮戰戲戴

戶戾房所扁扇扈扉

手才打扞扣扮扱扶扼承技扑抉抔把抑投抗折拈披抱抵

抽拂拉拊拍拓拌拗拘拙拐招拜押拔抹拒括挍拮拯拱拳

拾持挱指挈拖挂按拭挌拷挑拿挨挫振挺挾捆捉捏捐捕

捃挽捨捫捧据捲捷捻捺掏授掉捩採掌掛排掖掘掠探接

控推・掩措掬掣掃描揆換揉提揷揚揖握揣揀揭揮援損搏

搔搖搢搴搬搜摘摧摩搦搤摸摭摺摟摯撓撞撤撮撥撲撰

撫播撒撻撿擅擒擇擊操擎擘據擁擔擢擣擥舉擦擡擬擯

擲擴擾攀擺攘攝攜攣攪攫｜扨拵拤捌捗掟揃擽摑＝扒

搾

支

部首	讀	文字
攴	ホク	收攸改攻放政故效敍敎敏救敖敗敢散敦敧敬敲敵敷數 整斂斃
文	ブン	文斐斑
斗	トウ	斗料斜斛斟斡
斤	キン	斤斥斧斬斯新斷
方	ハウ	方於施旁旆旅旋族旌旒旗
无	ブ	既
日	ジツ	日旦旨早旬旭旱旴旻昂昃昆昇昊昌明昏易昔春映星昧 昨昭是昵時晉晃晏晒晩晝晡晦晨景普晰晢晴晶晷智暇 暈暉暑暗暖暄暢暫暮暴曇曉暾瞭曆曖曚曙曜曠曦曩 ‖ 朂
曰	エツ	曰曲曳更曷書曹曼曾替最會

月グツ　木ボク

月有朋服朔朕朗望朝期朞朦朧

木未末本札朱朶朴机朽杉村李杏材杓杖杠杜杆杞杭束

柿杯東杲杳杵松枉板杷枇析枕林枚果枝枯柄柘枴枸枳

架柁柏柑某柚染柔柝柢柞柩柯査柰柱柳柵柴桑栖栗栞

校株核根格栽桁桀桂桃案桎桐桓栓栴桶梁梅梃梓梗桔

條梟梢梧梭梯械梳梵梨棄棋棒棍棗棘棚棟棉棠棣棧棲

棹椅森棺植椀椎棨棕榜椒椿椽楊楠楔楓楯楚椰楡楢楫

業楮楷極榔榕榲榭槓榻榮槀槊榾構槌槍槐榎榴槭槃槽

樂樅樊槻樓樗模樣樟槿標樵樸樹橇橋橐橘橙機橡檣橫

樽樺橄檀檄檎檐檜檠檢檣檻櫃櫂檳櫓櫟櫚櫪櫻欄櫸權

欖｜柆梔梶椹樛槙樋槶橅[illegible]＝杤杣杢枌枠柾栂桝桛梺

[illegible]梠椙椚榀楾榊樫

欠（ケン）	欠次欣欲欷欸欺欹欽款歉歌歎歇歐歔歟歡
止（シ）	止正此步武歪歳歷歸
歹（ガツ）	死殀殂殃歿殄殆殉殊殖殘殤殫殲
殳（シュ）	段殷殺殼殽殿毀毅毆
毋（ブ）	毋母每毒
比（ヒ）	比毘
毛（マウ）	毛毫毬氈
氏（シ）	氏民
气（キ）	氛氣氤氳
水（スヰ）	水氷永氾汀汁求汎汐汜汗汚汝池江汞汪汲沍沌汰決沃 汽沈沐沒沓沖沙沛沫沮河沸泊油沼治況泄泉泌法泝泛 泡波泣泥注泰泯泱泳沿洋洒洗洛洞洩津洟洪洶洲活洽

派流淩浣浦浩浪浮浴海浸浹涅消涉涌涎涓涕淤涯液淬
涵涷涸涼淑淒淙淘淡淨淋淪淫淮深淆淳混淸淹添淺淚
淵渚渟減渝渠渡渥渫測渦港湫渴滋游洶渾渺湊湍湖湘
湛湯溶湮溜溝溘溟溺滑溢溽滂滄滅滌滓滔準源溷溫滯
滲滿漁漂漏漿漆漉漑演漕漓漠漢漬漱漸漲漣滴漾漫潑
潔潛潟澗潤潦潭潮潯潰潺潸澄澆澀澤澱澹激濁濃濕濘
濛濟濤濫濡濯濱濠瀆濺瀏濾瀑瀉瀕瀧瀨瀚瀝瀰瀾灌瀟
灑灘灣｜汾浬

火 クワ

火灰灼灸災炊炎炙炷炭炮炬炳烈烏烙烝烽焉烹焙焚無
焦然焰煉煎煙熙煑煖煤煥煦照煩煽熊熱熟熾燐燎燒燈
燗營燥燦燭燧燃燼燿燹爍燻爆爛爨｜熨＝燵

爪 サウ

爪爭爰爲爵

父	フ	父爺
爻	ガウ	爻爽爾
爿	シヤウ	牀牆
片	ヘン	片版牌牒牓牖牘
牙	ガ	牙
牛	ギウ	牛牝牟牡牢牧物牲牴特牽犀犁犒犖犢犧｜犇
犬	ケン	犬犯狀狂狄狎狃狐狙狗狸狡狩狹狠狽猅猖猝猜猛猥猩 猫猪猴猶猷猾猿獄獅獗獨獪獰獲獵獸獺獻＝狆
玄	ゲン	玄玆率
玉	ギヨク	玉王玩玲珀玳珊珍珂珠班現琅球理琉珪琥琢琴琵琶瑕 瑙瑟瑚瑞瑁璹瑣瑤瑩瑪瑳瑠瑾璋璃璞璧璣環璽瓏瓔
瓜	クワ	瓜瓠瓢瓣

瓦	グワ	瓦瓶甌甍甑甕
甘	カン	甘甚
生	セイ	生産甥
用	ヨウ	用甫
田	デン	田由甲申男甸町界畏畎畔畚留畝畜畢畤畦略番畫異畸 當畷畿疆疇疊＝畑畠
疋	シユ	疋疏疑
疒	ダウ	疔疝疚疣疥疫疱疹疵疽疾病疼痏疲痍痒痔痕痙痛痘痢 痣痼痴痰痲痾痺瘋瘠瘡瘦瘕瘧瘴療瘤癇癆癈癘癰癖癒 癢癨癩癪癬癯癱癲＝症（康熙以後支那ニテモ用フル）
癶	ハツ	癸登發
白	ハク	白百的皆皇皐皎皓皚

皮 ヒ	皿 ベイ	目 モク		矛 バウ	矢 シ	石 セキ		示 シ		内 ジユ	禾 クワ
皮皴皺	皿盂盆盈盍益盒盛盜盧盟盞盡監盤盥盪	目盲直相盾省眄眇眉看眞眠眥眩眷眸眺眴眼睛睚睥睨	睡督睫睦睹睪瞑瞋瞞瞠瞰瞳瞬瞥瞻瞼瞽矍矚	矛矜	矢矣知矧矩短矮矯	石砂砌砥砲砭破砮砧研砦确硝硯硬硫碍碎碑碓碇硾碌	碩碧碟磁磐確磊磧磨磬磠磯磽礁礎礪礫礬礴｜礒礑	示社祀祉祇祈祐祓祖祗祚祝神祟祕祠祥票祭祿禁禎禍	福禦禧禪禮禰禱	禹禽	禾禿秀私秉秋科秒租秦秧秩秤秣移稀稅稈稍程稔稗稜

稾稠稚種稱稷穉稻稼稿稽穀穆積穎穗穡穢穩穨穫穰

穴（ケツ）

穴究穹空穿突穽窃窕窄窒窘窠窟窪窩窻窯窳窮窺窶竄
竅竈竇竊

立（リツ）

立站竟章竢童竣竦竪竭端競

竹（チク）

竹竺竿笄笏笑笈笙笛笞笠符笥笳第笊筏筆等筋筌筍筇
筐筑筒答筈策筧筠筲筥筴筵箇箋箏箕算箙箝管箚箔箆
箒箭箱箴箸節篁範篆篇篋築篝篥篠篡篤篩簇篳簀簑簟
簞簣簡簧簪簫簾簿籃籌籐籍籠籟籤籥｜筓筊‖笹

米（ベイ）

米籾粃粉粒粕粗粘粧粟粢粤粥粱粲粳粹粼精糓糒糖糙
糜糞糟糠糧糯糲糴糵糶‖粂糀

糸（ベキ）

系糺紀紂約紈紅紊紋納紐紓純紗紙級紛紜素紡索紫紬
累細紲紳紵紺紹紾組絆絃結絶絖絛絞絢絡給絨絮統絲

缶フ　网マウ　羊ヤウ　羽ウ　老ラウ　而ジ　耒ライ　耳ジ

絳絹紹綏絺綌經綜綠綢綬緇維綮絢網綱綴綸綺綽綾綿
緊緋緒緘線緞締緡緣編緩緬緯練緻縈縊縋縛縝縞縟縣
縫縮縱縲縷總績繁繃繆繇繦織繚繕繙繡繞繩繪繭繫繰
繹辮繻繼繽纂續繿纏纓纔纖纛纜｜綛縅繢
缶缺罄罅罋
罔罕罟罪罫置罰署罵罷罹羅羆羇羈
羊羌美羞羣羨義羹羶羸
羽翁翅翌習翔翕翠翩翫翰翳翻翼
老考耄者耆
而耐
耒耕耗耘耙耜耦耨
耳耶耽耿聊聖聘聚聞聯聰聲聳職聽聾聢

聿（イツ）	肉（ニク）	臣（シン）	自（ジ）	至（シ）	臼（キウ）	舌（ゼツ）	舛（セン）	舟（シウ）

聿肄肅肆肇

肉肋肌肘肓肖肛肝股肢肥肩肪肯肱育肴肺胃胄背胎胖

胝胚胞胡胤胥胯胱胴胸能脈胾脂脅脊脚脛脆脱脯脹脾

腆腊腋腎腐腑腕腔腫腰腦腮腴腸腹腥腿膀膏膂膚膜膝

膠膨膩膳膺膽膾臀臂臆膿臍膩臘臟＝腺膣膵

臣臥臧臨

自臭

至致臺臻

臼臾叟舁春舄舅與興舊

舌舍舐舒舖

舛舜舞

舟舫航般舳舸船舶舵舷艀艇艘艟艕艤艦艨艫

艮（コン）色（ショク）艸（サウ）虍（コ）虫（キ）

艮良艱

色艶

艸艾芋芍芒芙芝芥芭花芻芳芹芽芸苑苔苗苛苞苟苹若

苦苧苫英苴茂茄茅茗茜茨茫茶荊草茸荏荒荷荻莅莊莖

莠莢莨莩莫莪莽莞菁菅菊菌菖菘菩菫華菰菲菴菽菱萋

菜萄萌萍萎萩萬萱萸萼落葉著葛葡董葩葦葬葭葯葵葺

蒜蓳蒐蒔蒙蒟蒡蒲蒸蒻蒼蓄蓆蓉蓊蓋蓐蓑蓬蓴蓮蓰蓼

蔑蔓蔔蔕蔗蔟蔚蔥蕉蔬蔦蔭蕈蔽蕊藩蕎蕓蕗蕞蕣蕨蕩

蕪蕭蕾薄薇薑薙薤薹薦薨薩薪薯薫藉藁藍薺藎藏藕藜

藝藤藥藩藪藷藺藹藻蘆蘊蘚蘭蘿‖椛

虎彪虐虔處虛虜虞號虧

虫虬虱虹虻蚊蚌蚓蚣蚪蚤蛇蚯蛉蛋蚫蛙蛛蛟蛤蛭蛹蛾

血（ケツ）　行（カウ）　衣（イ）　襾（ア）　見（ケン）　角（カク）

蛻蜀蜂蜈蜃蜆蜑蜓蜒蜘蜻蜚蜜蜴蜷蝎蜥蝕蝦蝮蝌蝟蝙
蝸蝠蝶螢融螟螌螭螯蚤蟀蟋蟄蟆螂螳螺蟬蟲蟹蟻蠅蠕
蠑蠖蟷蠡蠟蠢蠣蠹蠱蠶蠻‖⿰虫登
血衄衆
行衍術衒街衙衝衞衡衢
衣衫表衰衷衽衾衿衲袂袍袈袒袢袖袋袞袤被袷裁裂袱
袴裎裏裒裔裕裘補裝裙裟裨裳裸裹裼製裾複褌褓褐褫
褰褥褪褶褻襁襄褒褸襖襟襦襤襪襲襯襻｜襠‖裃褄襌
襷
西要覃覆覈覇
見規覓•視覘覡覦覩親覬覲覺覽覿觀
角觝觚解觴觸

言（ゲン）
言訂訃計訊訌討訐訓訖託記訝訟訣訥訪設許訛訴訶診
訾詆詈詎詐詔註詞評詠詢誄詣試詩詬詭詮詰話詳該誅
誇誌諫誓誕誑認誘誼誠語誡誣誤誥誦誨說誰課誹誾調
諂諄談請諏諍諒論諛諡諦諧諭諤諱諳諷諸諺諾謀謁謂
諮諜謄謎謐謇謗謔謙講謠謝謦謨謬謳謹謫譁證譏識譖
譚譜譎議警譬譯譴護譽讀變讎讒讓讔讖讚讜讛｜証詑
誂諚

谷（コク）
谷谺谿豁

豆（トウ）
豆豈豎豌豐

豕（シ）
豕豚象豢豪豫

豸（チ）
豹豺貂貉貌

貝（バイ）
貝貞負財貢貧貨貪販貫責貯貰貲貳貴貶買貸貺費貼貽

貿賀貢賂賃賄資賈賊賉賑賓賚賜賞賠賢賣賤質賴賭賻
購賽贅贄贈贊贍贏贐贔贓贖贗

赤 セキ

赤赦赧赫赭

走 ソウ

走赴赳起趄超越趙趣趨

足 ソク

足趾趺跌跖跙跚跛距跟跡跣跪跫路跳跨跼踁踊踏踐踟
踞踣踪踰踶蹂踵蹇蹉蹈蹕蹙蹟蹠蹣蹲蹴蹶蹼躃躅躇躊
躍躑躓躕躔躚躙躡

身 シン

身躬軀軁＝躮躵躻躾軈

車 シャ

車軋軌軍軏軒軟軫軸軻軾軿較輅輊載輒輓輕輔輛輗輜
輝輟輦輩輪輯輸輻輳輿轂轄轅輾轆轉轍轎轔轟轡轢轣
轤＝俥

辛 シン

辛辜辟辣辨辭辯

部首	讀	文字
辰	シン	辰辱農
辵	チヤウ	迂迄迅迆迎近迓返迢迤迴迪迫迭述迷迸追退送逃逅逆 透逐途逕逗通逍逝逞速這造逡逢連逮進逵逸逼逾遁遂 遇遊運過遏遐遑遒道達違遙遜遝遞遠遡遣遨適遭遯遮 遲遵遷遛選遺遼遽避邀邁邂邃還邇邈邊邏｜逌＝辶込 辻辿適
邑	イウ	邑那邦邪邯邸郁郊郎郡郢部郭郵都鄉鄙鄭鄰鄲
酉	イウ	酉酊酓酌配酎酒酖酢酣酤酩酬酭酪酲酷酵酸醇醉醋醍 醒醐醜醢醪醫醬醱醴醵釀釁釂
釆	ヘン	釆釉釋
里	リ	里重野量釐
金	キン	金釘針釜釧釣釦釵鈍鈇欽鈔鈕鈞釿鈴鉈鉋鉛鉅鉞鉢鉤

鉦鍘鉾銀銃銅銓銖銘銜銚鋭銷銹鋏鋒鋤鋩鋪鋼錄錐錙
錡錢錦錨錫錮錯鍊鍋鍍鍛鍪鍮鍬鍵鍾鎌鎔鎖鎚鎧鎮鏃
鏈鏑鏖鏘鏗鏝鏡鏢鏤鏽鐃鐐鐏鐙鐔鐘鐵鐶鐸鑄鑊鑒鑞
鑛鑢鑰鑷鑵鑼鑽鑾鑿｜銑鋳錠鍔鎬鐚鐺＝鈨[illegible]鋲[illegible]錺
鎹鈿鑓

長 チヤウ

長

門 モン

門閂閃閉開閏閑間閘閙閣閤閥閨閫閭閲閹閻閾閼闇闊
闔闕關闌闖闡闢闥＝閊閙

阜 フ

阜阡阨防阮阻阿陀陂附陋陌降限陛陟院陣除陪陬陰陲
陳陵陶陷陸隃隅隆隈隊隋階陽隔隕隗隘隙際障隤隧隨
隩險隱

隶 タイ

隷

隹 スヰ	隻隼雀雁雄雅集雇雉雌雍睢雕雖雙雛雜雞離雝難
雨 ウ	雨雪雰雲零雷雹電需霄霆震霍霑霎霓霏霖霙霜霞霧霪
	霰露霹霽霾靂靄靆靈靉｜雫
青 セイ	青靖靛靜
非 ヒ	非靡
面 メン	面靦靨
革 カク	革靫靴靼鞅鞄鞋鞌鞏鞘鞠鞦鞭韃韆＝鞆鞐
韋 ヰ	韋韓韜韛
韭 キウ	韮
音 イン	音韶韻響
頁 ケツ	頁頂頃項順須頌頑頏頒預頓頗領頡頰頤頭頹頸頷頽頻
	顆題額顏願顛類顧顯顰顱

風(フウ)　風颯颶颺飄＝颪凩凪

飛(ヒ)　飛飜

食(ショク)　食飢飧飩飮飯飴飼飽飾餈餅餉養餌餐餒餓餘餞餾館餬餮餼餽饅饉饋饌饑饒饘饕饗饞

首(シユ)　首馗馘

香(カウ)　香馥馨

馬(バ)　馬馮馭馱馳馴駁駐駒駑駕駘駙駝駟駛駭駱駸駻駿騁騅駢騎騂騃騏騙騷騰驅驒驕驎驗驛驚驟驥驢驤驩

骨(コツ)　骨骰骸骾髏髓髑體髕髗髖[illegible]

高(カウ)　高

髟(ヒヤウ)　髦髣髯髻髮髫髭髴髷鬆鬘鬢鬟鬣―髢

鬥(トウ)　鬨鬩鬪鬮

鬯（チヤウ）　鬯鬱鬲鬻

鬼（レキ）　鬼傀魁魂魄魅魏魎魍魑魔

魚（ギヨ）　魚魯鮏鮑鮒鮨鮫鮮鯁鯉鰊鯤鯨鯖鯯鰈鰐鰓鰌鰥鰤鰮鰻
鰭鱒鱖鱗鱠鱸鱣｜鮎鮭鮪、鮹鯛鯡鯣鰒鰆鰍鰉鰕鰺鰹鱶
＝鮗鮱鯑鯒鯏鯰鯱鰯鱈鰀鱜

鳥（チヤウ）　鳥鳧鳩鳳鳴鳶鴆鴇鴉鴃鴟鴛鴞鴿鴣鴕鴦鴨鴻鵅鵝鵜鵠
鵑鵲鶉鵬鶩鶯鶴鶺鷁鶿鷓鷙鷗鷲鷦鷩鷸鷹鷺鸕鸚鸛鸞
鸝｜鴴鵺鵯鶸＝鴡鵃

鹵（ロ）　鹵鹹鹼鹽

鹿（ロク）　鹿麁麋麒麑麓麗麝麟

麥（バク）　麥麩麭麴麵

麻（マ）　麻麼麾＝麿

黃	クワウ	黃黌
黍	シヨ	黍黎黏黐
黑	コク	黑黔默黛黜點黠黧黥黨黯徽黶
黹	チ	黻黼
黽	ビン	黽鼇鼈
鼎	テイ	鼎
鼓	コ	鼓鼙鼛
鼠	ソ	鼠鼬
鼻	ビ	鼻鼾
齊	セイ	齊齋齎
齒	シ	齒齕齟齡齦齧齬齪齷齶齲
龍	リヨウ	龍龕

龜キ	龜
龠ヤク	龢

本來の漢字	四千五百六字
我國にて訓義したる漢字	八十七字
我國にて制作したる漢字	九十七字
合計	四千六百八十八字

第三章　使用漢字の異體

余の選定したる使用漢字は、前章に於て述べたるが如く、約四千七百字ではあるが、是等の漢字中、字書の異なるに依つて、殆ど別字の如く思はれて居るものもある。又實際習慣上、別種の意義を有せしめて、使用するものもある。而も其實は何れも古字、本字又は俗字にして、本來の別字でないのもある。

是等同字にして、異體なるものは、後篇に於て、詳述することにはするが、今此に其最

も著しいもの數十種を掲げることとしよう。

使用漢字の異體表

部首の畫數	各欄中上字ハ普通ノ使用漢字下字ハ其異體				
一	乃 迺同				
二	作 做俗	俯 俛又通	兎 兔本	凭 凴俗	刈 苅俗
	創 剏本				
三	升 陞俗				
	同 仝俗	吝 悋俗	周 週俗	咽 嚥俗	唇 脣本
	嘗 甞俗	回 囘本 廻俗	坂 阪本	壻 婿俗	孃 娘俗
	宴 讌同	岡 崗俗	嶽 岳古	巖 岩俗	從 从古
	徧 遍俗				
四	恥 耻俗	憩 憇俗	懼 惧俗	朝 晁古	杆 桿俗

杯 盃俗　果 菓俗　棋 棊本 碁俗　棲 栖同　檐 簷俗

歸 皈俗　涌 湧俗　準 准俗　牀 床俗

五

踈 疏本　痴 癡本　砲 礮本　碍 礙本　禮 礼古

竊 窃俗

六

笑 笑 咲俗　箇 個俗　綿 緜同　糧 粮俗　繞 遶同

肉 宍古　草 艸本　萬 万同　著 着俗　菴 庵同

蓋 葢本 盖俗　蘇 甦俗　虎 乕俗

七

谿 溪俗　跡 蹟 迹本　踪 蹤本　野 埜古　贓 賍俗

八

針 鍼本　鈔 抄俗　鑛 礦俗　雙 双俗

九

駄 馱本　驅 駈同

十

鬭 鬪 閗俗　鬱 欝俗

十一

鹽 壚 塩俗　麁 麤本

計　　　　七十四字

本表中のものは、大抵何れをも併用するが、習慣上別種の意義を有するものとして、用法を異にするものも、全くないではない。例へば

一、七曜の一週の場合には、「周」を用ひずして、「週」を使用する。

二、疎密の場合には、「疏」を用ひずして、疏通の場合には、「疎」を用ひぬ。

三、咲は主として「花咲く」の場合に專用する。

四、顯著、著述の場合には「着」の俗字を用ひずして、附着、著席の場合にのみ「着」の俗字を併用する。

等の類である。

第四章　我國にて訓義したる漢字

漢字中本來の字音意義の外、別に我國にて新なる意義を有せしめたるものがある。又時として本來の音義を殆と全く使用せず、我國にて新なる意義及一種の字音を有せしめたるものもある。

是等の漢字中には、矢張余の所謂使用漢字以外に屬するものもあるが、其總數は餘り多くないことでもあるから、序に余の備忘録に存する重なるものを皆掲げることにする。

我國にて訓義したる漢字表

部首	漢字
一	丁(チヤウ)（町の略何丁目、偶數、書籍の紙數）
丨	串(クシ)
丶	丸(マル)（船名、又丸の内） 丼(ドンブリ)
ノ	乍(ナガラ)
人	仙(セント)（英國の錢名の譯） 仕(ツカマツリ) 伋(フルマフ) 位(クラヰ)（概數） 伽(トギ) 侘(ワビ) 作(サク)（豐作） 併(シカシ) 係(カカリ)（庶務係） 俵(タハラ) 倩(ツラツラ) 倥(ヌカル) 候(サフラフ) 偖(サテ) 偲(シノブ) 健(シタタカ) 儀(ギ) 儘(ママ) 儚(ハカナシ) 儲(マウク)
八	共(トモ)（打消の詞） 兼(カネ)（豫めの意、又難しの意）

部首	漢字
刀	判(ハン)（捺印）　割(ワリ)（十分の一）
卩	卸(オロス)
十	半(ハン)（奇數）
厂	厘(リン)
口	叶(カナフ)　吋(インチ)　呉(クレ)　吩(イヒツケル)　呎(フート)　听(ポンド)　呆(アキル)　咋(アカラサマ)　咄(ハナシ)　哩(マイル)　喰(クラフ)　嗎(ヤード)　嘘(ウソ)　噇(ドツト)　嘸(サゾ)
	噂(ウハサ)　噸(トン)　嚊(カカ)
土	坏(ツキ)　坪(ツボ)　壜(ビン)
女	娘(ムスメ)　娵(ヨメ)　嫁(ヨメ)　嬉(ウレシ)
子	存(ゾンズ)（思ふの意）
宀	安(ヤス)（容易のこと又安直）　宛(アテ)　寄(ヨル)（寄合、車寄）
寸	尉(ジヨウ)
尢	尤(モツトモ)（打消の意）

部首	文字
尸	屆（トドケ）
山	崎（サキ）　嵐（アラシ）　嵩（カサ）
工	差（サス）（差引、杯を差す）
巾	帖（デフ）（紙數）
干	平（ヒラニ）
广	庄（シヤウ）　床（トコ）　庇（ヒサシ）　序（ツイヅ）
弓	弗（ドル）
彳	徒（イタヅラ）（惡戯）
心	忍（シノブ）（思の意、昔を忍ぶ）　悋（リン）　悴（セガレ）　惣（ソウ）（總の草體と混同）　態（ワザ）（態々）
戸	戻（モドス）（引戻）
手	打（ダース）　扠（サテ）　抔（ナド）　扱（アツカフ）　折（ヲリ）（折々）　拵（コシラフ）　挊（ガセグ）　捌（サバク）　捗（ハカドル）　掟（オキテ）　掛（カカリ）　据（スウ）　揃（ソロフ）　揉（モム）　摑（ツカム）　摺（スル）　擋（トテモ）　擽（コソグル）

日	晴ハレ（天晴、晴著）暮クラシ（暮し方）
木	杜モリ 柆クヒ 柄ガラ 柊ヒヒラギ 柏カシハ 株カブ（株式） 桙ホロ 椛モミヂ 梶カヂ 楠クス 極キマリ（確定の意） 椹サハラ 椿ツバキ
	楢ナラ 槇マキ 榎エノキ 樛ツガ 樋トヒ 樣サマ 樅モミ 槶クヌギ 橅ブナ [illegible]ヒヒラギ 檜ヒ
殳	殿トノ（他人の尊稱）
水	沖オキ 汾ウケ（相撲のとき水を入れて後の分け）法フラン 浬カイリ 淋サビシ 淦アカ（舟底の水）渡ワタス（引渡）湫クテ 溶トケル 溜タマリ（溜所）
	澪ミヲ 潟カタ 瀞トロ 瀧タキ 灘ナダ
火	熨ノシ
片	片ペンス
牛	犇ヒシメク
犬	狛コマ
玉	珊サンチ
瓦	瓦グラム

田	疒	目	石	示	禾	立	竹	米	糸	肉	艸
甲(カブト) 申(マウス) 町(マチ) 畦(ウネ) 番(バン)(番人) 番(ツガヒ)(蝶番) 疊(タタミ)	癪(シヤク)	睜(ミツメル)	石(コク) 砌(ミギリ)(其砌) 砲(オホヅツ) 磅(ポンド) 礒(イソ)(磯の草體と混同) 礑(ハタト)	社(ヤシロ) 社(コソ)	私(ワタクシ)(自家の稱呼) 程(ホド) 稼(カセグ) 積(ツモリ)(積書)	立(リツトル)	笧(シガラミ) 笯(ド)(鰻鰌を捕ふる具) 筈(ハズ) 筒(ツツ)(銃のこと) 節(ノツト) 籞(イケス)	米(コメ)(稻實) 米(メートル) 籾(モミ) 粟(アハ)(粱實) 粹(スヰ)(粹人)	糸(イト) 紋(モン) 組(クミ) 給(タマフ) 絣(カスリ) 絽(ロ) 縞(シマ) 縮(チヂミ) 纏(マトヒ)(消防夫の持ち物)	胴(ドウ) 能(ノウ)(能樂) 膳(ゼン)	芯(シン) 芝(シバ) 若(ワカシ) 茨(イバラ) 茸(タケ) 荒(アラシ) 菅(スゲ) 萩(ハギ) 薄(ススキ) 藪(ヤブ)

虫　虫（ムシ）　蚕（カヒコ）　蚫（アハビ）　蛸（タコ）　蜷（ニナ）

衣　襠（マチ）　襖（フスマ）

角　觸（フレ）（布告）

言　計（ハカリ）　許（モト）　詫（ワブ）　証（シヤウ）　詠（ナガム）　詰（ツメ）　誂（アツラフ）　認（シタタム）　諚（ヂヤウ）

貝　貼（テン）　貰（モラフ）　賄（マカナヒ）

辵　通（トホリ）　這（ハフ）　遉（サスガ）

金　鉢（ハチ）　鉈（ナタ）　銑（ヅク）　錆（サビ）　鋺（ワン）　錧（タタラ）　錠（ヂヤウ）　鍔（ツバ）　鎰（カギ）　鎬（シノギ）　鋅（カヂカス）　鎖（チエーン）　鐚（ビタ）　鐺（コジリ）　鐺（コテ）

隹　雛（ヒイナ）

雨　雫（シヅク）　露（ツユ）（少しの意）

革　鞄（カバン）

頁　頁（ページ）　預（アヅケ）

食　餅（モチ）

部	字
馬	騙（カタル）
髟	髱（タボ）
魚	⿰魚也（ハエ）　魳（カマス）　鮲（コチ）　魦（ハゼ）　鮎（アユ）　⿰魚米（コウナモ）　鮬（ゼイゴ）　鮊（カマス）　鮩（アミ）　鮠（ハエ）　鮭（サケ）　鮪（シビ）　⿰魚巠（ウゴヒ）　鮼（アヂ）　鮹（タコ）　鯡（ニシン）　鯥（ムツ）　鯛（タヒ）　鰑（スルメ）　鯷（ヒシコ）　鰒（フケ）　鰆（サハラ）　鰍（ウナギ）　鰍（カヂカ）　鰍（イナダ）　鯽（チヌ）　鰉（ヒカヒ）　鰡（ボラ）　鰤（ブリ）　鰺（アヂ）　鰹（カツヲ）　鱓（ゴマメ）　鱖（サケ）　鱧（ハモ）　鱶（フカ）
鳥	鳧（ケリ）　鴴（チドリ）　鴇（トキ）　鶇（ツグミ）　鵯（ヒヨ）　鶞（ウグヒス）　鶸（ヒハ）

計　二百九十一字

右の内割註にて其使用の場合を示したものもあるが、容易なものは、示さないこととした。但し「厘」は本音「テン」にして、「店」と同義ではあるが我國にては、「釐」の省體となし且つ「リン」と呼ぶこととした。又「石」は「斛」と通じ「コク」と呼ぶこともある。又此に一つ附加へて置くのがある。卽ち「米」とは元と穀物の籾を去つたものの總稱であつたが、其内最も重なるものは、稻實であるから、其名を專用したのである。又「粟」とは穀物の籾

のままのものの總稱であつたが、遂に粱實の專用となつたのである。彼の支那の伯夷叔齊が周の粟を食はぬと言つたのは、周の穀物を食はぬと言ふ意義であるのである。併し又後には支那にても粱實として用ひられた。又虫、蚕等は支那にても、我國と同じく蟲又は蠶の略字として使用せらるゝこともある。又左に掲げる諸漢字の如きは、世人は時として前表中の諸漢字と同一のものゝ樣に思つて居るものもあるが、其實は本來の意義と同一なのである。唯其會意の跡が餘り著しいために、斯くは誤解せられたのである。

唸（ウナル）　啀（ユガム）　噤（ツムグ）　囃（ハヤス）　囮（ヲトリ）　坌（アクタ）　姥（ウバ）　嬲（ナブル）　憧（アコガル）　憖（ナマジヒ）　慥（タシカ）　搗（ツク）　桁（ケタ）　櫟（イチギ）　歪（ユガム）　燗（カン）

甦（ヨミカヘル）　眴（メクハス）　碇（イカリ）　箍（タガ）　縋（スガル）　聟（ムコ）　蒔（マク）　蔦（ツタ）　諦（アキラム）　讔（ナゾ）　讛（チゴト）　辿（タドル）　鏈（クサリ）　鈕（ボタン）　閂（クワンヌキ）

計　三十一字

第五章　我國にて制作したる漢字

漢字中本來の漢字の字書になく、唯我國にて新に制作したる漢字も、亦少くないのである。今其重なるものを掲げることにする。

我國にて制作したる漢字表

部首	漢字	
人	俤（オモカゲ）	働（ハタラク）
勹	匁（モンメ）	匂（ニホヒ）
ム	ム（ゴザル）	
口	叺（カマス）	噺（ハナシ）
女	婲（ハデ）	
山	峅（クラ）	峠（タウゲ）
巾	凧（タコ）	
心	怺（コラヘル）	
手	扖（ハメル）	搾（シボル）

日	木	毛	火	犬	田	疒	石	竹	米	糸
⿰日古（ヒコ） ⿱日明（サヤケシ）	朸（アフコ） 杢（モク） 杣（ソマ） 枌（ソギ） 枠（ワク） 枡（マス） 柾（マサ） 栂（トガ） 栃（トチ） 桛（カセ） 梺（フモト） 梠（コロ） 梻（シキミ） 椙（スギ） 椛（モミヂ） 椚（クヌギ） 榀（コロヒ） 楾（ハンザフ） ⿰木香（カツラ） 榊（サカキ） 榥（クルミ） 樫（カシ）	毟（ムシル）	燵（タツ）（炬燵）	狆（チン）	畠（ハタ） 畑（ハタ） ⿰畐寸（ハバ）	症（シヤウ）	碗（ワン）	笹（ササ） 簓（ササラ）	粂（クメ） 糀（カウヂ）	緫（カスリ） 縅（ヲドシ） ⿰糸賢（カセ）

耳	肉	艸	虫	言	衣	身	車	辵	酉	金	門
聢（シカト）	腺（セン）	⿱艹宅（トコロ）	⿰虫宅（クラゲ）	諚（ヂヤウ）	裃（カミシモ）	躮（セガレ）	俥（ジンリキ）	辷（スベル）	酛（サケノモト）	鈨（ハバキ）	閊（ツカヘ）
	膣（チツ）	萩（クタビル）	⿰虫魚（カキ）		褄（ツマ）	躵（チラフ）		込（コム）		⿰金曲（クマデ）	⿵門周（ジヤマ）
	膵（スヰ）		⿰虫刷（アハビ）		褌（チハヤ）	躻（ウツケ）		辻（ツジ）		⿰金孫（カスガヒ）	
			⿰虫竟（クラゲ）		褳（タスキ）	躾（シツケ）		迚（トテ）		鋲（ビヤウ）	
			蟶（マテカヒ）			軈（ヤガテ）		遖（アツパレ）		錵（ニヒ）	
			⿰虫逼（アハビ）							錺（カザリ）	
			⿰虫登（ヒトリムシ）							鎹（カスガヒ）	
										鎺（ハバキ）	
										鑓（ヤリ）	

部	文字
革	鞆（トモ）　鞐（コハゼ）
風	凩（コガラシ）　凪（ナギ）　颪（オロシ）
魚	魞（ヱソ）　鮎（ナマヅ）　魬（ハマチ）　[illegible]（イサザ）　鮃（ヒラメ）　鮗（コノシロ）　鮄（サバ）　[illegible]（ヒラ）　[illegible]（ウナギ）　鮢（カマツカ）　鮟（アン）　[illegible]（イカ）　鮱（ボラ）　鯆（サバ）　鮲（マテカヒ）　鰄（ウケヒ）　鯐（スバシリ）　鯑（カズノコ）　鯒（コチ）　鯏（アサリ）　鯱（シヤチ）　鯰（ナマヅ）　鯲（ドヂヤウ）　鰚（ハラカ）　鯤（ギギ）　鰙（ハエ）　鰯（イワシ）　鰰（ハタハタ）　[illegible]（アイ）　[illegible]（ハエ）　鱈（タラ）　鱇（カウ）（鮟鱇）　鱛（ヱソ）　鱚（キス）　[illegible]（サバ）　鱫（アイ）　[illegible]（キヤウ）　鱪（シヒラ）　鱬（ハタハタ）　鱲（ハエ）
鳥	鳰（ニホ）　鴫（シキ）　鴾（トキ）　鵥（カシドリ）　鶎（キクイタタキ）　鵺（ヌエ）
麻	麿（マロ）

計　　　百四十六字

右の内「枡」は通常「桝」とするものもある。是は「升」を「舛」と誤るより、延いて之にも及ぼしたのである。又「碗」は「椀」より變じ來り、「笹」は「葉」より變じ來つたものであらう。

是等の漢字をば、從來和字と稱することもある。又漢學者は時として作り字と稱するものもある。此作り字といふは最も意味のない話ではないか、彼等の考にては、本

來の漢字は、人爲上にて作らざる天然のものと思つて居るのであらう。そんな人に限つて、成るだけ是等の漢字の使用を嫌ふものである。成程中には通常多く使用せざるものはあるが、中には通常多く行はれ、至極便利なものである。

今序に第二章乃至第五章の漢字を合計するときは、左の通となる。

本來の漢字	四千五百六字
本來の漢字の異體	七十四字
我國にて訓義したる漢字	二百九十一字
我國にて訓義したと見做されたる本來の漢字	三十一字
我國にて制作したる漢字	百四十六字
合計	五千五十字

右我國にて訓義したと見做されたる本來の漢字中、少數のものは、他の漢字中のものと重複するものもある。

第五篇　漢字の偏旁

第一章　漢字の部首偏旁

凡そ漢字は、一字にて字畫の基本部分をなして居るものがある。之を漢字の「部首」と云ふ。此部首の總數は二百十七種である。此部首は各〻單獨に皆或字音と意義とを有して居ることは、勿論である。又此部首を更に字畫に依つて、細分するときは、所謂永字八法の筆行となるものである。

又漢字は一字にて、左右或は內外等の數箇の部分より結合つて制作せられたものがある。寧ろ是は漢字の大多數である。其部分が左右に在つて、一箇の漢字をなしたるときは、其左部を「偏（ヘン）」と云ひ右部を「旁（バウ）」又は「ツクリ」と云ふのである。而して偏は大抵一箇の部首より成つて居るが、旁は必しも、一箇の部首より成つて居るものではない。中には部首を形造らないものもあり、又數箇の部首が結合つて、制作せられたものもある。寧ろ後段のものが最も多いものである。

又此部分が上下に重合つて、一箇の漢字をなしたときは、其上部を「頭」又は「カシラ」或

は「冠(カウ)」又は「カムリ」と云ふのである。是も大抵一箇の部首である、又其最下部に在るものを、時として「脚(キャク)」或は「沓(クツ)」と云ふことがある。併し是は通常の場合ではなくて、唯書法を論ずるときなどに用ふるのである。

又漢字の上部より懸けて、左部に長く延びて居る部分を「垂(タレ)」と云ひ、又主として、左部より長く引いて、他の部分を載せて居るものを「遶(チウ)」と云ふのである。但し遶と稱するものの中には、必しも他の部分を載せず、唯左部より下部を經て、右部に長く尾を曳いた様になつて居るだけのものもある。

又左右の二部より他の部分を包むか、又は上部と左右の二部とか、或は左右の二部と下部とか等の如く、雙方又は三部分或は更に多く、即ち四方よりして、他の一部分を包圍するが如きものを「構(カマヘ)」と云ふのである。

併し漢字は偏旁の二箇の部分より成るものが、最も多いものであるから、是等の各部分のことを總稱して、單に漢字の偏旁と云ふのである。

今永字の八法及部首偏旁を例解しよう。

一、「永」字の第一畫は、「點」又は「側」第二畫の前半は、「平横」又は「勒」其後半は「中直」又は

「努」にして、其終は「勾」又は「趯(ヤク)」第三畫の前半は「挑」又は「策」後半は「撇(ヘツ)」又は「掠」第四畫は「擎(ケイ)」又は「啄」第五畫は「捺」又は「磔」である。（永字八法ノ例）

二、「一」は單純にして、固より部首であるが、「龜」は複雜にして、矢張部首である。（部首ノ例）

三、「机」の木は偏にして、几は旁である。「謝」の言は偏にして、射は旁である。（偏旁ノ例）

四、「全」の入は頭にして、「窺」の穴は冠である。（頭冠ノ例）

五、「公」の八は上部に在れば、頭であるが、「典」の八は最下部に在れば、脚と云ふこともある。（脚ノ例）

六、「厚」の厂及「痛」の疒は、共に垂である。（垂ノ例）

七、「起」の走、及「先」の儿は、共に遶である。（遶ノ例）

八、「術」の行、「間」の門、「出」の凵、及「園」の口は、各々構である。（構ノ例）

第二章　部首偏旁の名稱

漢字の部首は、最も單純なる一畫の「一」より、最も複雜なる十七畫の「龠」まで、總數二百

十七箇あつて、各〻其字音と意義とを有して居る。又是等の部首が、他の部分と結合つて、一箇の漢字を制作したときは、此部首を母字と云ひ、他の部分を子字と云ふのであつて、母字は新字に於ける重なる意義性質を顯し、子字は其細なる意義性質の外、更に聲音、即ち字音の根元となるものである。故に最も詳細に漢字の意義を知らうとするには、先づ是等二百有餘の部首の意義を吟味して、其他に及ばねばならぬのではあるが、吾人の通常使用する漢字は、是等多くの部首を餘り必要とせざるものである。就中或部首に屬する數十百の漢字中、余は或一二字を除く外、全く使用せざるものとして、除去つたものもある位である。故に今本章に於ては、之を詳述することを止めた。

本章に於ては、二百有餘の部首中、通常主として、字訓を以て、使用する數十箇の偏旁の名稱を示すこととする。其他極めて簡單なるものは、常識を以て判斷することが出來るし、稍〻困難なるものは、其字音を第四篇使用漢字表の上欄に掲げて置いたことである。其意義性質は、其部首に屬する諸漢字に就いて、推測すれば、自ら明白となることであらう。

漢字偏旁ノ名稱表

偏旁	名稱
乚	オツネウ　乙遶
入	イリカシラ　入頭
几	キネウ
匚	ハコガマヘ
土	ドヘン　又ツチヘン
宀	ウカムリ
巾	キンヘン
ヨ彑	ケイカシラ
戶	トカムリ
斤	オノ
亠	ケイサンガムリ　卦算冠
冂	ケイガマヘ　冂構
凵	カンガマヘ
厂	ガンダレ　厂垂
夂	スヰネウ
尸	シカバネ
广	マダレ
彳	ギヤウニンベン　行人偏
手扌	テヘン
方	カタヘン
人亻	ニンベン　人偏
冖	ヒラカムリ　又ワカムリ
刀刂	リツタウ　立刀
口	クチヘン
女	ヲンナヘン
山	ヤマヘン
廴	エンネウ　延遶
心⺗忄	シタゴコロ　心下、リツシンベン　立心偏
支	エダ
日	ニチヘン
儿	ニンネウ　人遶
冫	ニスヰ　二水
勹	ツツミガマヘ
囗	クニガマヘ
子	コヘン
工	タクミヘン
弓	ユミヘン
戈	ホコ
攴攵	ボクネウ
曰	イハク　又ヒラビ　平日

月 ツキヘン
殳 ツバモノツクリ 又ルマタル又
爿 シヤウヘン
玉王 タマヘン
目 メヘン
示 シメスヘン
竹 タケカムリ
老耂 オイカムリ
舟 フネヘン
行 ユキガマヘ
豸 ムジナヘン

木木 キヘン ヒラギ
水氵氺 サンズヰ三水 シタミヅ下水
片 カタヘン
疒 ヤマヒダレ
矛 ホコヘン
禾 ノギヘン ノ木偏
米 コメヘン
耒 スキヘン
艸艹 クサカムリ 又サウカウ草冠
衤 コロモヘン
貝 コガヒ

欠 アクビ
火灬 ヒヘン レンクワ連火 又レツクワ烈火
牛牜 ウシヘン
癶 ハツカシラ 發頭
矢 ヤヘン
穴 アナカムリ
糸 イトヘン
耳 ミミヘン
虍 トラカシラ 虎頭
角 ツノヘン
走 ソウネウ

止 トメヘン
爪爫 ツメカシラ
犬犭 ケモノヘン
皮 ケガハ
石 イシヘン
立 タツヘン
网罒 アミガシラ
肉月 ニクヅキ 肉月
虫 ムシヘン
言 ゴンベン
足 アシヘン

身 ミヘン	車 クルマヘン	辵⻌ シンネウ 之遶	邑⻏ オホサト 大里
酉 コヨミノトリ 又ヒ(日)ヨミノトリ	釆 ノゴメヘン ノ米偏	金 カネヘン	門 モンガマヘ 又カドガマヘ
阜⻖ コザトヘン 小里偏	隹 フルトリ 舊鳥	雨 アメカムリ	革 カハヘン
韋 ナメシガハ	頁 オホガヒ 大貝	食 ショクヘン	馬 ウマヘン
骨 ホネヘン	髟 カミカシラ	鬥 タタカヒガマヘ	鬼 オニ
魚 ウヲヘン	鳥 トリヘン トリツクリ	麥 ムギヘン バクネウ	齒 ハヘン

右の內「三水」を時として「散水」「聚水」の二種に分つことがある。例へば

江池

等の如く、旁の短いときは、三水の中央の點を左方に出し第三點の挑を右方に出して書く。此ときのを散水と云ひ、又

清溝

等の如く、旁の長いときは、三水の三點を殆ど一直線上に書く。此ときのを聚水と云

ふのである。

第三章　漢字の口述法

漢字は通常目にて見るべきものにして、口にて述べ、之を耳にて其字畫を聽くことの出來ぬものの樣に思はれて居る。尤も見る聽くといふ言葉の意義を嚴格に解釋すれば、固よりさうであるかも知れぬ。併し英語及其他の外國語なれば、口にて其綴方を言へば、一々其語を字母にて示さずとも、明に分るものである。漢字も是と同樣に、其部首偏旁を口にて述べるならば、一々其文字を書いて示さずとも、亦明なるものである。小學校初步の兒童には、偏旁の名稱を敎ふる譯にも往かないから、時として手指を以て、空中に書くこと、即ち所謂空書に依つて、互に相話すこともあらうが、稍ゝ進步したる兒童、又は中等學校の生徒等には、漸次其偏旁の名稱を知らせ置き、恰も外國語の綴方を言へば、足れる如くにする習慣を養ふことが、必要であらうと思ふ。是は故らに面倒なる譯でもないし、又特に漢字の字畫を正確に會得せしめるに、便宜なる方法であるのである。

今漢字口述法の數例を示さう。

一、「ニンベン」に「コトバ」と言へば「信」となる。

二、「ムギヘン」に「ツツミガシラ」に「コメ」と言へば、「麴」となる。

三、「ツノヘン」に「カタナ」に「ウシ」と言へば、「解」となる。

又偏旁の名稱を知らぬときは、任意に之を分解して、口述しても、亦明なるものである。例へば、

一、「八」と「一」と「八」との下に「皿」を書くと言へば「益」となる。

二、「月」を傾け、右に「又」を書き、下に「示」を書くと言へば「祭」となる。

三、「虎頭」に「一」に「口」に「ケイガマヘ」に「八」に「丁」を書いて、旁に「犬」を書くと言へば、「獻」となる。

第六篇　漢字の運筆

第一章　從來の運筆の順序

漢字の運筆は、何のために研究する必要あるか、唯漢字の書寫上の便宜に供するに外ならぬのである。文字に貴ぶ所は何であるか、其字畫の正しうして、且つ其排置の整ふに在るのである。故に運筆の順序は、漢字の字畫と排置とを失はずして、書寫の敏速なることを期せねばならぬと思ふ。

從來漢字の運筆の順序を講述したものは、全くないことはない。而して其方法は、之を二大別とすることが出來る。其第一法は清人唐彪の著述した父師善誘法に示したもので、大抵の書法論などでは、之を遵奉し、所謂書家等にては、之を金科玉條として居るのである。其方法は主として漢字の字畫の排置の體裁に拘泥して、順序を定めたものである。而して同書には、稍〻面倒らしい漢字約五十字の運筆の順序を示してある。今其中二三の例を示せば、

一、弗は先づ丿次弓

二、老は先づ土次匕次ノ

三、亞は先づ亚次口次丄

右の内第一例は之に從うても宜しいが、第二例は中間に在る字畫を後にせねばならぬ。却つて其間隔を取るに困難にして、其排置を整ふるに面倒である。第三例は最も不都合なるものではなからうかと、余は思ふのである。何となれば、此方法に從へば、「亞」の字の畫數は、少くとも十畫となるではないか、而も「亞」の字は從來字書の「二」の部首に屬し、其六畫の部に在るものであれば、總畫數は、八畫でなくてはならぬ。從來かやうな運筆法が行はれたために、中等敎育に於ける生徒は勿論、專門の漢字に關する學者中にても、漢字の畫數を度外にし、字書を取調べる際などには、自己の豫定の部内を見、若し此に在らざれば、無意味に其前後の部内を見る等、二倍三倍の手數を懸け、若し發見すれば、其理由をも考へずして、其まま止めるために、將來類似の漢字を搜索する場合には、矢張何回となく同一の手數を重ね、不便を感せねばならぬのである。是は分つべからざる單畫の部分を分けて、其一部を書き、他の一畫に移り夫も中途にして、再び元との殘部に移るやうな譯から來るのである。此方法は此の

如く、概して迂遠に流れ、特に敏速に書寫することが、出來かねるものである。元來支那人は文字を貴重する餘、之を神聖のものとして、文字を書寫するために費す時間は、少しも之を惜まざるものである。併し諸事多忙の時代に於ては、節減し得べき時間は、遠慮なく之を節減することを務めて善いではないか。

第二法は主張者及著書名は、今之を記憶しないが、是は主として漢字制作の起源に遡つて、其順序を立てるのである。故に類似又は同一の字畫にても、制作の起源に相違あるときは、各〻別種の運筆に從ふのである。今其中二三の例を示せば、

一、土は先づ二次丨

二、士は先づ十次一

三、王は先づ三次丨

此第一例「土」は六書中の指事文字であつて、地は萬物を生ずるものなれば、「二」は「地の下」と「地の中」とを象とり、「丨」は物の出るに象とるのである。故に「土」は「二」を先にし、「丨」を後にすべしとのことである。第二例「士」は殆ど「土」と同一の字畫ではあるが、是も指事文字にて、「士」は四民の首である。數は一に始り、十に終ふ。孔子曰く、十を推し、一に合す

を士となすと。故に「士」は「十」を先にし「一」を後にすべしとのことである。第三例「王」は是れ亦指事文字にして「三」は天地人の三德を象とり、之を「一」人にて兼備へる人であるから「王」は「三」を先にし「丨」を後にすべしとのことである。若し此法に從ふときは、

一、歲は步戊の會意文字であるから、先づ止、次少、次戊とせねばならぬ。

三、術は行朮の形聲文字であるから、先づ行、次朮とせねばならぬ。

此の如き運筆の順序は、なせるものではない。唯夫のみでない。若し此法に從ふときは、「木」の字の如きは、元と象形文字にして「丨」は木の幹を象とり「一」は其枝を象とり「人」は其根を象とるものであるから、其運筆の順序として、枝たるべき「一」を先に書くことが出來ない譯となるではないか、此法の不都合のことは、唯是のみではない。文字を書寫するには、一々其文字の制作の起源を知らねばならぬのである。又類似或は同一の部首偏旁に對しても、共通の方法は、發見すべからず、規定すべからざることとなるではないか、故に余は此二大別たる二法は、共に取るに足らざるものとなすのである。

第二章　余の運筆の順序

今余の研究したる運筆の順序は、次の通である。即ち漢字の運筆の順序は、其字畫及排置を失はざる範圍内に於て、成るだけ共通の方法を發見し、之を結合はせて、漢字を構成し、且つ時間の經濟をも圖つたのである。從來彼の書家といふものの中にては時間のことを考へ、敏速を尙ぶなどのことは、殆ど絶無であるかも知れぬ。又余の研究したる所の順序も、必しも一の方法にのみ拘泥する譯ではないのである。唯從來多く行はれつつあるものの內、成るだけ普通にして且つ便宜なるべしと認めたものを取纒め、稍〻規則正しく述べ立てたのである。

併し凡そ文字は、如何なる運筆の順序をなしても、苟も其字畫及排置を誤らぬ以上は、其文字たる性質を失はぬものであることを知る寛量は、吾人に必要のものである言換ふれば運筆の順序は、斯くなさねばならぬと言ふべきものではない。斯くすれば都合が善いと言ふべきものである。

第三章　運筆則

余の運筆の順序は、二十二則より成立つて居る。二十二則と言はば、隨分多くして、記憶するにも不便であらうと思ふものもあるに相違なからう。併し此中には世人は自然であるとか、當然であるとか、思つて居るものも含まれて居る。總べて所有運筆に關する場合を悉く數へ上げたのである。

第一則　横畫は左よりする。

例。「一」は左端に筆を下して、右方に運ぶのである。

第二則　縦畫は上よりする。

例。「丨」は上端に筆を下して、下方に運ぶのである。

第三則　斜畫は通常上よりする。但し書法にて言ふ挑のみは下よりする。

例。一、「丿(ヘツ)」「乀(フツ)」は共に上方より筆を下すのである。

二、「子」の「㇀」は、挑なるに依り、下の方より筆を下して、上の

方に挑ねるのである。

第四則　上部下部又は上部中部下部のものは、上部より順にする。

例。一、「三」は上の「一」より、中の「一」、次に下の「一」に及ぼす。(以下接續の言葉を略する)

二、「老」は十ノヒ

第五則　左部右部のものは、左部よりする。

例。「計」　言十

第六則　左部中部右部のものは、通常左部より順にする。

例。一、「川」　ノ川

二、「盛」　ノ一丁皿戈

盛は楷書として、通常二樣に書く。若し「盛」の如く、成と皿との重り合つた上部下部の二段より成るとなすときは、固より第四則に依るのである。

第七則　左部中部右部より成るものの中、左右の釣合を取ることを要するものは中部より左部に、次に右部に及ぼす。

例。一、「小」　亅八

二、「幽」　丨玆凵

第八則　上部と横畫とのものは、上部よりする。

例。一、「上」　卜一

二、「土」　十一

第九則　横畫と下部とのものは、横畫よりする。

例。一、「下」　一卜

二、「干」　一十

第十則　横畫と縦畫と切合ふものは、横畫よりする、但し横畫三箇以上あるときは相切らぬ縦畫にても、最後にすることがある。

例。一、「十」　一丨

二、「王」　一二丨一又は三丨
三、「隹」　亻丨一　又は亻亠丨
四、「書」　⺺曰　又は⺺曰丨

第十一則　横畫と縱畫と切合ふものにても、筆端輕く拔くべきものは、之を後にする。

例。「廾」　丨一一丨

第十二則　横畫と縱畫とが、一點より出るときは、縱畫よりする。但し筆端輕く拔くべきものは、之を後にする。又筆端輕くとも、其後筆を運ぶべき字畫が横畫に連るときは、矢張縱畫よりする。

例。一、「冂」　丨𠃍
二、「厂」　一丿
三、「成」　丿一丁戈

第十三則　縱畫と左部の横畫の小なるものとは、縱畫よりする。

例。　一、「北」　丨 冫 匕

　二、「非」　丨 三 丨 三

第十四則　縦畫と右部の横畫の小なるものとは、縦畫よりする。但し縦畫下部に連るときは、之を後にする。

例。　一、「上」　丨 一 一

　二、「兆」　丿 丫 く 乚

第十五則　左畫にても、下部に連るとき、中部大なるときは、中部よりする

例。　一、「匡」　一 王 乚

　二、「區」　一 品 乚

第十六則　左畫にても、下部に連るとき、中部小なるときは、中部を後にする。

例。　一、「甚」　甘 匸 儿

　二、「心」　 乚 丶 丶

第十七則　偏旁は總べて偏よりする。又部首等にても、偏旁に準ずべきものは、偏に

相當するものよりする。

例。一、「讀」言賣

二、「卵」レ、ノ𠃍、丨

第十八則　遶は大なるものは、之を先にし、小なるものは、之を後にする。

例。一、「起」走已

二、「遶」堯辶

第十九則　右部の點は、後にする。又左部に在るものにても、他の字畫に接續せぬのは、矢張之を後にする。

例。一、「戈」戈、

二、「刃」刀、

第二十則　橫畫の上下に在る二點は、之を先にする。又橫畫と縱畫と切合ふときにても、縱畫小なるときは、之を先にする。

例。一、「母」口⺀一

二、「毋」　𠃊　ノ　一

第二十一則　斜畫の結合ふものは、上部の右方に在るものよりする。又斜畫の上に單畫中の横畫が在つても之に同じい。

例。

一、「文」　亠　ノ　乀

二、「叉」　フ　乀

第二十二則　如何に屈折が多くとも、單畫は、之を分つては善くない。

例。

一、「凹」　𠃊　𠙴　凹　凹

二、「亞」　一　丅　亍　亞　亞　亞　亞

以上二十二則は、稍〻論理的に排列したから、隨分多數となつたのであるが、實際耳新らしいものは、前述の如く少くして、殆ど半數にも及ばぬことであらう。

第四章　運筆則の適用

所有漢字の運筆の順序は、前章に於て列擧した運筆則を適用すれば、最も容易にし

て、且つ一貫したる理法があると思ふ而も固より字畫をも誤まらず、其排置をも端正にすることであると思ふのである。今前例に擧けたるものを除き、稍ゝ面倒らしき漢字の運筆の適用を示さう括弧內に記すものは、其適用したる運筆則の重なるものである。

及　ノ　乃　及　（第十二則）

匹　一　兀　匹　（第十六則）

凸　丨　ㄱ　ㄣ　凸　凸　（第二十二則）

必　心　必　必　（第十六則）

左　一　ナ　左　（第十則）

出　丨　中　出　（第七則）

戍　ノ　厂　F　戍　（第六則）

羽　习　羽　（第十七則）

臣　丏　臣　（第十五則）

舟　⺆ 舟 舟　（第二十則）

州　丿 州 州　（第六則）

坐　从 坐 坐　（第四則）

壯　丨 丩 爿 爿 壯　（第十三則）

告　⺧ 牛 告　（第十則）

明　日 明　（第十七則）

門　戶 門 門　（第十七則）

來　从 來 來　（第七則）

長　丨 巨 長　（第十四則第十六則）

虎　⺊ 𠂛 虍 虎　（第四則第十二則）

飛　飞 飞 飛 飛　（第七則）

姬　女 妒 姬 姬　（第十五則）

馬　丨 馬 馬 馬　（第十四則）

敵　十 敵 敵　（第七則）

恐　工 巩 巩 巩 恐　（第十一則）

鬼　由 鬼 鬼　（第十六則）

卑　白 卑 卑　（第二十二則）

梁　氵 汈 汈 梁　（第十九則）

牽　玄 牽 牽　（第二十二則）

祭　夕 祭 祭　（第二十一則）

鹵　卜 卢 鹵 鹵　（第十九則）

帶　廾 帶 帶 帶　（第六則）

無　𠂉 無 無 無 無　（第四則）

黽　冂 黽 黽 黽 黽　（第七則第十七則）

登　ヲヲ′㲋癶登　（第十七則）

塞　宀宔寉寒塞　（第十則）

麥　十巫夾麥　（第七則）

肅　ヨ肀肀聿肅肅　（第七則第十三則）

鼎　目鼎鼎　（第十七則）

鼠　臼臼臼鼠　（第六則第十六則）

祿　示礻祿祿　（第五則）

盡　ヨ聿盡盡又ハ盡盡　（第十則）

爾　丆行币爾爾　（第七則）

聚　取聚聚聚　（第七則）

綴　糸綴綴　（第四則）

齒　止齒齒齒　（第四則）

鼠　𠂒 𠂒 鼠 鼠　（第六則第十六則）

輿　同 舁 舁 輿　（第七則）

龜　乡 龟 龟 龜 龜　（第七則第十七則）

齋　亠 亣 亣 齊 齋　（第七則）

燕　廿 甘 苫 燕 燕　（第七則）

豐　丨 丰丰 曲 豐　（第七則）

關　門 閞 閞 關　（第十七則第四則）

嬴　亡 吂 亯 嬴 嬴　（第七則第十一則）

鬪　𠂤 臣 鬥 鬥 鬥 鬪 鬪　（第二十二則）

鬱　缶 林 樊 鬱 鬱　（第七則）

鸞　言 䜌 鸞　（第七則）

第七篇　漢字の字音

第一章　漢字の讀方

漢字の讀方は多種である。之を大別するときは、字音讀と字訓讀との二種となる。而して字音讀には、又漢音讀と呉音讀とあり、其外唐音讀、宋音讀元明清音讀及朝鮮音（韓音）讀もある。併し唐音讀以下のものは、餘り多く傳つて居らぬから、先づ大多數のものは、漢音讀と呉音讀との二種があると見て善からう。次に字訓讀にも、漢字の使用の場合に依り、一箇の漢字にても、數種又は十數種の讀方をなさねばならぬものも少くない。又一箇の漢字にても、其漢音又は呉音として、本來の字音の外、其意義の轉注より生ずる數種の漢音又は呉音を有するものも少くないのである。

朝鮮の國名は韓と改つたから、朝鮮音も韓音とすべきではあるが、漢音の字音と殆ど同一であるから、本書には、暫く之を改めない。

今是等の讀方に關する二三の實例を示さう。

一、「善」を「ゼン」といふのは、字音讀にして、「ヨシ」といふのは、字訓讀である。

二、「行」を「カウ」といふのは、漢音讀にして、「ギヤウ」といふのは、呉音讀、又「アン」といふのは、宋音讀である。

(字音讀ト字訓讀トノ例)

(漢音讀、呉音讀及宋音讀ノ例)

三、「爲」を「ナス」といふのは、本來の字訓讀であるが、殆ど同一の意義であつても、時として「シ」(商シの如し)「ス」(商スル)「セ」(商セシム)となり、又「オコナフ」「ツクル」となり、又各〻意義の異つた「タメ」「マナブ」「タスク」「シワザ」「ウ」(得)「カウムル」「エラブ」「マネル」「イツハル」等の十五種となる。

(字訓讀ニ十數種アルモノノ例)

四、「樂」を「ガク」といふのは、本來の意義たる音樂の樂であるが、同じ漢音讀中にても、「ラク」といふことがある。是は意義が轉注して、喜樂の「樂即ち「タノシム」のときの字音である。又「ガウ」といふことがある。是は矢張轉注して、「好」と同じく、「コノム」のときの字音である。又「リヤウ」といふことがある。是は「療」と同じく「イヤス」のときの字音である。又「ロク」といふことがある。是は「祿」と同じく「サイハヒ」のときの字音である。又「ラウ」といふのは、「勞」と同じく支那の人名のときの字音である。即ち彼の能く馬の鑑定をなした「伯樂」は、元と此讀方をなしたので、

時として又「博勞」とも用ひたのである。

（漢音讀中ニテモ、其轉注ヨリシテ數種アル例）

前例は多少故らに、其讀方の多種あるものを選出したので、總べての漢字は、皆悉く此の如く多種ある譯ではない。殊に「樂」の如きは、通常專門の漢文學者にても、「ガウ」以下、殊に「リャウ」以下の音義のあることを注意して居ないものもある位である。故に「伯樂」の讀方にても、現今は「ハクラク」と讀まねば、世人には勿論、學者にも通せぬ位になつて居る。

又是等の漢字が、二字或は時として三字以上連續して、所謂熟字となつたときは、其意義の如何に依つて、又習慣の如何に依つて、是等の各種の字音及字訓が、相互に錯綜して、種々の讀方をなさねばならぬのである。

漢字の熟字の讀方に關しては、後篇に於て、別に詳說することとする。

第二章　漢字の字音

約五萬の漢字は、皆各〻一種以上の字音及意義を有することは勿論である。故に字

音の總數は、亦非常に多數であるが、ウイリヤムの漢英韻府に依れば、字音の區別は五百二十七種であるさうである。故に同一の字音を有する漢字は、每字音平均約百字づつある勘定となるのである。余は未だ其著書を見ないが、其字音といふものは、無論現今の淸音のことであらう。

元來漢字の字音は、支那にては、其音韻の如何に依り、之を平、上、去、入の四聲に大別する。平聲(ヒヤウシヤウ)、去聲は各〻三十韻、上聲は二十九韻、入聲(ニフシヤウ)は十七韻合計百六韻である。是等の音韻の正しい發音は、我國には傳つて居らぬ。故に平、上、去の三聲の音韻上の區別はないのである。專門の漢文學者中、之を知ることを必要とするものは、一々器械的に記憶して居るのである。入聲の字音は、其音尾に必ず「フ」「ツ」「ク」「チ」「キ」の何れかが附いて居るが、「フ」の假名の附いて居るのは、他の三聲中の「ウ」の假名の附いて居るのとの發音上の區別は、矢張ないのである。併し漢字に此四聲のあることは、專門の漢文學者の外には必要ない。只漢詩を作る人は、平聲に屬する漢字を平字と稱へ、上、去、入の三聲に屬する漢字を仄字と言つて居る。少し漢詩を試みた人は、何れの漢字は平字であるか、又は仄字であるかは、大抵心得て居る。又稍〻進んだ人は、四聲中何れの韻

に属するかといふことも明であるから、是等の人の中にて、多少國語との聯絡に心懸の深いものは、從前の漢字の字音假名遣法は、格別の困難はないのであつた。從前の漢字の字音假字遣法に關しては、本居宣長の字音假名用格といふものがあつて、而も殆ど唯一のものの樣であつた。併し其著書は、漢字の一字一字に就き漢音又は吳音を示してはあるが、統一したる共通的の假名遣法は示してない。依つて其他の著書等にては、假名遣法に關する口調善き和歌等を工夫して、之を諳誦し、使用の都度、之を應用する方法を取つたのである。余は今より十餘年前、某縣師範學校に在職中、一の字音假名遣法を起草し、國語敎員敎授の參考に供したことがあつた。是は主として漢字の音韻に基づき、成るだけ統一的の方法に依つたのである。音韻の心得のない、中等學校の生徒等には、理解し難い節は、全くないことはない。依つて其後更に字音一覽表をも制作して、多少檢出に便利なものを拵へたことであつた若し少し研究したならば、從前の字音假名遣法は、國語假名遣法よりは、寧ろ基本的の理由があるので、之に熟するにも、容易のものではあるが、通常中等學校以下のものには、望み難いものである。其後明治三十三年に文部省が小學校に於ける字音假名

遣法を改正せられ、又近き將來には、國語假名遣法の改正と同時に追〻中等學校等にも適用せしめられることであらうから、余は今此字音假名遣法に關することは、述べないこととする。

唯字音假名遣法に就いて、此に一言書加へて置きだいことがある。是は平聲蕭、上聲篠、及去聲嘯韻に屬する「イヤウ」即ち「ヤウ」「キヤウ」「ギヤウ」「シヤウ」「ジヤウ」「チヤウ」「ヂヤウ」「ヒヤウ」「ビヤウ」「リヤウ」の假名遣に屬する漢字は「エウ」「ケウ」……「レウ」を呉音の假名遣とすることは適當である。通常漢字の字書等には、主として此法に從つて居るが、前述の本居宣長の假字用格には、此呉音の分を漢音のものとしてある。由來此韻に屬するものの假名遣法には、變遷があつた樣である。即ち最初は皆「エケセテネ……」の「エ」列に「ヲ」の聲、即ち音尾を附けて居つたのである。彼の俳人芭蕉は、時として假名にて「バセヲ」と記したのは、或國語學者は、「ヲ」は「男」の假名にて、男子の通稱であるから、故らに之を用ひたのであると言つたものもあるが、實は「蕉」は此蕭韻に屬し、他の漢字と共に、「ヲ」を音尾として居つたことがあるのである。

第三章　漢字の漢音及呉音

漢字の始めて我國に傳つた當時は、如何なる字音にて、之を傳習したかは、今之を詳にせぬ。其後對馬國に法明と稱する支那の尼が渡來して漢字を傳習し、隨つて漢字の字音が、此對馬國より廣く全國に傳つた。依つて當時は儒佛の兩書は、皆此字音にて、誦讀することとなつた。然るに其後又別種の字音が傳り來つた。後のは支那の京師の字音であるとて、之を漢音と稱へ、前のは彼の法明の出生地の方言であるとて之を呉音と稱し、又時としては、對馬音と稱することもあつた。爾來此漢音呉音は、共に我國に使用せられることとなつたが、桓武天皇延暦十一年(紀元一四五二年)明經の徒に詔して、主として漢音を學ばしめられた。同十七年よりは、明經の徒をして、五經を悉く漢音にて讀ましめられた。是より自然儒書は漢音にて讀み、佛書は呉音を用ふることになつた。

其後我國は、支那との交通が頻繁となり、彼の唐代には、多數の邦人が渡唐し、彼の國にて學習し來つた所の字音は、又別種である。依つて之を唐音と稱へた。又其後宋音

とか、元、明、清音とかも傳り、又朝鮮音と稱するものゝ傳つて來たが、其數は何れも餘り多くはない。

前述の理由よりして、從來儒者は大抵漢音を使用し、佛家は呉音を使用し來つたのである。然るに通俗にては、佛家の影響を受けることは儒者の影響を受けるよりも大である。且つ呉音は漢音よりは、發音に角のあることは少い即ち國語の發音に近いからして、從來俗語に同化したる漢字の字音は、多くは呉音を採用せられて居るのである。例へば「人生」及「人情」は共に漢音「ジンセイ呉音「ニンジヤウ」であるが、

一「人生」は常に漢音にて「ジンセイ」と讀む。是は主として儒者の使用したる熟字にして、通俗のものとならなかつたからである。

二、「人情」は常に呉音にて「ニンジヤウ」と讀む。是は佛家にても使用し、殊に通俗の言葉となつて居つたためである。

維新以後に至つては所謂儒者の子弟が、政治上樞要の地位を占めたるに依り、公用の言葉も、彼の漢音讀のものが多くなつて來た。又新に制作したる熟字も同樣のものが多い。又從前呉音讀であつたものも、漸次漢音讀に變じた傾がある。例へば同じ

「停止」の熟字も、古今に依つて、其讀方の相違がある。

一「嗚物停止」など、從前は「‥‥チヤウジ」と呉音讀にした。

二「發行停止」など、現今は「‥‥テイシ」と漢音讀にする。

其他「得業生」を從前のは「トクゴフシヤウ」と呉音讀にしたが、現今のは「トクゲフセイ」と漢音讀にする。序に述べよう。「博士」も從前のは「ハカセ」と讀み「文章博士」を「モンジヤウハカセ」と讀んだが、現今のは「ハクシ」と讀むのが正當である。明治二十年頃學位令公布の際、當局者が、其讀方を示されたことがあつたさうである。「博士」の讀方に就いて曾て國語漢文に堪能なる某文學博士は、

近來漢字の讀方が、亂雜になり、博士連中でも自分の學位の「博士」の讀方を知らずして「〇〇ハクシ」などと言ふものがある。若しそんな讀方をするなら、「權大納言」の官名を「ケンタイダフゲン」と讀まねばならぬ。

とて、非常に歎息せられたことがあつたが、余は却つて如何かと思つたことである。現今地方の小新聞などは兎も角、東京、大阪の大新聞等には、「ハクシ」の振假名を附けて居るものが多い。又曾て文部省より米國シカゴの博覽會に出品するために、編纂

せられた英文にほん歴史には、其編纂者重野、星野二博士の學位をローマ字にて、矢强「ブンガクハクシ」と記してあるのである。是は漢音呉音の相違ではない所謂音便に關するものであるが、古今讀方の相違の例の序に述べたのである。

第四章　漢字の反切

我國にては、文字の讀方に、振假名を附けて之を知らせる方法はあるが、支那にては反切法を用ひるのである。我國にても、反切といふものはないことはない。例へば、

一、「東京ニアル上野」といふことを、「東京ナル上野」といふのは、「ニア」の發音が、促つて「ナ」となるからである。

二、「馥郁トアル梅花」といふことを「馥郁タル梅花」といふのは「トア」の發音が促つて「タ」となるからである。

三、「國語の改良トイフコト」といふことを、「國語の改良テフコト」といふのは、「トイ」の發音が促つて「テ」となるからである。

四、「男ニモアレ女ニモアレ」といふことを、「男ニマレ女ニマレ」といふのは「モア」の

發音が促つて「マ」となるからである。

是等は皆反切法の應用である。又

「勉強セラレタル結果」といふことを「勉強サレタル結果」

といふ様に、矢張反切法を應用するものも多い併し是は保守的の古風の國語學者は、餘り贊成しない。其理由は古書に其例がないからであるとのことである。是は現今多數に使用せられて居る。數年前文部省に於ても、文法上許容すべきものの中に、加へられた様に記憶して居る。當時文部省より此許容案を發表せられたとき、教育に關する各雜誌は勿論、普通の新聞雜誌にても、大抵贊否の意見を發表した。就中反對意見を發表する論文中、

此の如き許容案は、到底採用されるものにあらず。

などと自分が、疾うの昔より既に許容どころか、實行しつつ居ることを表白したものもあつたことである。

又反對に反切法に依つて、短いのを長くすることがある。例へば

一、「申ス」を「申サク」といふことである。

二、「見ム」を「見マク」といふことがある。
三、「即カセタマフ」を「即カシメタマフ」といふことがある。
四、「語リ」を「語ラヒ」といふことがある。

併し又餘り反切法を應用すると、

「ツバクロ」(燕)が「タコ」(蛸)になる。

とのことである。即ち「ツバ」の反が「タ」、「クロ」の反が「コ」であるからである。是等の例の如く、反切は名詞には適用することは、固より不適當である。

閑話休題、漢字の反切には、字書に依り、「○○反」、又は「○○切」として、漢字の聲音即ち字音を示すのである。此反切の二字中の上字を「父字」と云ひ下字を「母字」と云ふのである。其反切の規則は次の如くである。

横は本に歸り、縱は末に止り、　　父字の行、母字の横、
父字の頭へ、母字の尾を繼き、　　母字の表に、父字の位を取る。
輕重清濁は、父字に依り、　　平上去入は母字に依る。

横とは五十連音圖の横列のことにして、縱とは縱行のことである。例へば「心」は「息林

反」とあれば「林」の音頭が連音圖中「ラ」行の第二位であるから、「ラリ」と手指二本折り、「息」の音頭が「サ」行に屬するから、上より數へて、「サシ」と手指を撥ね、第二位「シ」に至つて止り、此「シ」に「林」の音尾「ン」を附加へ、「シン」となるのである。

又父字の音頭が、濁音であれば新字の音頭が、濁音となり、母字の音尾が、若し「フ」「ツ」「ク」「チ」「キ」の附く入聲であれば新字の字音も自ら入聲となるのである。

又同理に依り、

一、木は　莫北切音沐

二、京は　擧卿切音驚

となることも明であらう。又此反切の父字及母字を呉音にて讀めば、新字は呉音となり、唐音にて讀めば、新字は自然唐音となつて顯れるものである。其他の場合も同樣である、即ち此「莫北切」を「バクホク切」とすれば「音ボク」となり、又呉音にて「マクホク切」とすれば「音モク」となる。又「擧卿切」を「キヨケイ切」とすれば「音ケイ」となり、又唐音にて「キヨキン切」とすれば「音キン」となるものである

第五章　漢字の呉音

漢字の字音は、支那にては反切法に依つて、之を示し、反切中の父字母字を漢音にて呼ばば、新音は漢音にて顯れ、呉音にて呼ばば、新音は呉音にて出る。又唐音宋音等も之に準ずることは、前章に於て、これを述べたことである。而も各漢字には如何にして漢音より呉音、又は唐音宋音等に變ずるか、即ち其間に如何なる關係あるかは明でなかつた。是は各漢字を四聲中の各韻に配當し、又各音に分類せば、一定の關係ありて、一目瞭然たるものである。併し通常の人は、此關係を知るために故らに漢字の音韻を吟味することの勞を執るといふことは、固より厭ふべきである。拙稿字音假名遣法には、無論是等の關係を述べて置いたのではあるが、今之を僅に一章か二章かの分量に、言ひ縮める譯には往き難いのである。故に本章に於ては、唯種々の漢音が、呉音に變ずる多くの場合を列擧することとする。

左の例解中、漢字の下に於ける假名の右方は漢音、左方は呉音である。又「|」の符號を附けてある下は、其呉音に變ずる關係が、上のと相違あるのである。

第一例　「ア」列音を音頭とする漢字

一、愛（アイ／エ）　介（カイ／ケ）　亥（ガイ／ゲ）　才（サイ／セ）　對（タイ／ツヰ）　杯（ハイ／ヘ）　穢（ワイ／ヱ）

（本例中、呉音に音尾更に「イ」を附けることがある但し「ウ」列の音頭のものに限つて「ヰ」）

二、拗（アウ／エウ）　教（カウ／ケウ）　梢（サウ／セウ）　嘲（タウ／テウ）　豹（ハウ／ヘウ）　―杏（カウ／キヤウ）

三、甘（カン／コン）　―山（サン／セン）　―凡（ハン／ボン）

四、客（カク／キヤク）　錯（サク／シヤク）　宅（タク／チヤク）　白（ハク／ヒヤク）

五、軋（アツ／エツ）　轄（カツ／ケツ）　殺（サツ／セツ）

第二例　「イ」列音を音頭とする漢字

一、有（イウ／ウ）　九（キウ／ク）　牛（ギウ／ゴ）　手（シウ／ス）　壽（シウ／ジユ、ズ）　浮（ヒウ／フ）　流（リウ／ル）

二、央（イヤウ、ヤウ／アウ）　香（キヤウ／カウ）　壯（シヤウ／サウ）　―夭（イヤウ、ヤウ／エウ）　喬（キヤウ／ケウ）　小（シヤウ／セウ）

繞（ジヤウ／ゼウ、ネウ）　朝（チヤウ／テウ）　條（ヂヤウ／デウ）　票（ヒヤウ／ヘウ）　苗（ビヤウ／ベウ、メウ）　僚（リヤウ／レウ）

三、宮（キユウ・ク）　崇（シユウ・ス）　風（ヒユウ・フ）

（本例中、呉音に音尾更に「ウ」を附けることがある。）

四、巨（キヨ・コ）　語（ギヨ・ゴ）　鼠（シヨ・ソ）　如（ジヨ・ニヨ）　呂（リヨ・ロ）

五、供（キヨウ・キユ、ク）　從（シヨウ・ジユ、ズ）　重（チヨウ・チユ）　龍（リヨウ・リユ）　―應（イヨウ・オウ）　興（キヨウ・コウ）

（本例上段中、呉音に音尾更に「ウ」を附けることがある。）

六、衣（イ・エ）　希（キ・ケ）　戯（ギ・ゲ）　―子（シ・ス）　―期（キ・コ）　―幼（イウ・エウ）

七、音（イン・オン）　今（キン・コン）　品（ヒン・ホン）　臨（リン・ロン）　―人（ジン・ニン）

八、一（イツ・イチ）　吉（キツ・キチ）　七（シツ・シチ）　窒（チツ・チチ）　必（ヒツ・ヒチ）　―乙（イツ・イチ、オツ）　乞（キツ・キチ、コツ）

九、肉（ジユク・ニク）

十、抑（イヨク・イキ、ヨク）　極（キヨク・コク）　織（シヨク・シキ）　直（チヨク・チキ）　匿（ヂヨク・ヂキ）　逼（ヒヨク・ヒキ、フク）　力（リヨク・リキ）

域（ヰヨク・ヰキ）　―辱（ヂヨク・ニク）

第三例　「ウ」列音を音頭とする漢字

一、鬱（ウツ／オツ）　屈（クツ／コツ）　弗（フツ／ホツ）　物（ブツ／モツ、モチ）

二、和（クワ／ワ）　―花（クワ／ケ）　畫（グワ／ヱ）　繪（クワイ／ヱ）　外（グワイ／ゲ）

第四例　「エ」列音を音頭とする漢字

一、榮（エイ／イヤウ、ヤウ）　京（ケイ／キヤウ）　正（セイ／シヤウ）　丁（テイ／チヤウ、）　評（ヘイ／ヒヤウ）　明（ベイ／メイ、ミヤウ）

令（レイ／リヤウ）

二、妻（セイ／サイ）　稅（ゼイ／ザイ）　帶（テイ／タイ）　。禮（レイ／ライ）

三、鹽（エン／アン）　煩（ヘン／ハン）　晚（ベン／バン）　―元（ゲン／グワン）

四、建（ケン／コン）　言（ゲン／ゴン）　遠（エン／ヲン）

五、月（ゲツ／ガツ、グワツ）　發（ヘツ／ハツ、ホツ）　伐（ベツ／バツ）　越（エツ／ヲツ、ヲチ）　―結（ケツ／ケチ）

第五例　「オ」列音を頭音とする漢字

一、故（コ、ク）　五（ゴ、グ）　素（ソ、ス）　圖（ト、ツ）　奴（ド、ヅ）、布（ホ、フ）　模（ボ、ム、ホ）　汙（チ、ウ）

二、空（コウ、キユ、ク）　宗（ソウ、シユ、ス）　通（トウ、チユ、ツ）　封（ホウ、ヒユ、フ）　勇（ヨウ、イユ、ユ）

（本例中呉音に更に音尾「ウ」を附けることがある）

第六例　「タ」行音の濁音を音頭とする漢字

「タ」行音の濁音即ち「ダ」行音を音頭とする漢字の漢音は、總べて「ナ」行音の同列を音頭とし、音尾を其ままとしたる呉音となる。又「ナ」行音を音頭とする總べての漢字の字音は、皆悉く呉音にして、其漢音は悉く「ダ」行音を音頭とするものである。是には一の例外はない。

第七例　「ハ」行音の濁音を音頭とする漢字

「ハ」行音の濁音即ち「バ」行音を音頭とする漢字の漢音は、總べて「マ」行音の同列を音頭とし、音尾を其ままとしたる呉音となる。又「マ」行音を音頭とする總べての漢字の字音は皆悉く呉音にして、其漢音は悉く「バ」行音を音頭とするものである。是にも一の例外はない。

第六章　漢字の唐音

漢字の唐音を知ることは、之を呉音を知ることに比すれば、一層困難である。併し其唐音を使用すべき漢字は、其數極めて少いのである。而して之を知るに就いて、古來左の二首の和歌がある。

一、一は五に、四は二に通ひ、五は三に、二三のときは、本座反しぞ。

二、引くは撥ね、撥ぬるは撥ぬる、入聲の足を切捨て、三字中略。

第一首「一は五に」といふは、五十連音圖中の第一列、即ち「ア」列音を音頭とする漢字は、第五列即ち「オ」列音を音頭とすること、又「四は二に通ひ」といふは、之に準じ、第四列即ち「エ」列音を音頭とするものは、第二列即ち「イ」列音を音頭とすること。五は三に」といふは「オ」列音を音頭とするものは、「ウ」列音を音頭とすることである。又「二三のとき：……」といふは、第二列即ち「イ」列音、第三列即ち「ウ」列音を音頭とするものは、其まま唐音の音頭に變ずとのことである例へば總べての

（「一は五に」ノ例）

一、漢音「アン」は唐音「オン」

二、漢音「ケン」は唐音「キン」　（「四は二に」ノ例）

三、漢音「ソン」は唐音「スン」　（「五は三に」ノ例）

四、漢音「チン」は唐音「チン」漢音「ツン」は唐音「ツン」　（「二三のとき……」ノ例）

又第二首「引くは撥ね」といふは、漢音の音尾が、長く引くべきものは、之を撥ねること。「撥ぬるは撥ぬる」といふは、音尾の撥ぬるものは、矢張其まま撥ねること。「入聲……」のといふは、入聲即ち音尾に「フ」「ツ」「ク」「チ」「キ」の韻を有するものは、其音尾を除去ること。又「三字中略」といふは、漢音にて三字の假名遣のものは、中間の一の假名を取去ることである。總ての漢字の漢音は、此二法に依つて、其音頭と音尾とを變化せしめるときは則ち唐音となるものである。列へば、

一、東　漢音「トウ」唐音「ツン」　（「五は三」ト「引ぐは撥ね」トノ例）

二、珍　漢音「チン」唐音「チン」　（「二三のとき……」ト撥ぬるは撥ぬる」トノ列）

三、格　漢音「カク」唐音「コ」　（「一は五に」と「入聲の……」トノ例）

四、達　漢音「タツ」唐音「ト」　（同　上）

五、玉　漢音「ギヨク」唐音「ギク」　（「二三のときは……」ト「三字中略」トノ例）

六、略　漢音「リヤク」唐音「リク」（同上）

以上の方法は、唐音を知るべき、最も正確のものとも認めかねることもないではないが、稍〻類似の發音を得るに近いものである。

第七章　長短清濁等に關して、習慣上の讀方をなすべき漢字の字音

從來讀書力の不十分なるものを嘲けるに、「長短清濁さへも辨へぬ」との言葉があるが、漢字の字音の長短清濁は、亦容易のものではない。卽ち通常漢字の字書に記載する字音の長短清濁と、吾人の普通に使用する字音の長短清濁とは、一致しないものも少くないのである。而も文字は通用するために讀むのであるから、或程度までは、普通の習慣を知らねばならぬものである。依つて本章に於ては、是等に關する習慣上の讀方を述べることにする。

第一。漢音にて淸んで讀むべきものを、通常其まま濁つたる呉音にて、讀むべき漢字

左に掲げる漢字は、漢音の場合には、何れも清んで讀むべきものであるが通常何れも濁つて讀むべきものである卽ち字傍の振假名は、通常の讀方を示す。但し「兩用」としてあるは、場合に依り、清濁兩用のものである。以下皆之に準ずる。

部首ノ畫數	故ラニ濁ツテ讀ムベキ漢字表
一	丈(ヂヤウ)上(ジヤウ)（兩用）丞(ジヨウ)乏(バフ)
二	亥(ガイ)代(ダイ)（兩用）伎(ギ)似(ジ)住(ヂユウ)佛(ブツ)（兩用）便(ベン)倍(バイ)偈(ゲイ)傳(デン)僞(ギ)僥(ギヤウ)充(ジユウ)兌(ダ)凱(ガイ)劑(ザイ)助(ジヨ)劫(ゴフ)十(ジフ)
三	合(ガフ)同(ドウ)瑞(ゼン)土(ド)在(ザイ)大(ダイ)（兩用）妥(ダ)存(ゾン)（兩用）孳(ジ)學(ガク)實(ジツ)就(ジユ)（兩用）峙(ジ)嶄(ザン)常(ジヤウ)度(ド)弁(ベン)彈(ダン)徇(ジユン)
四	恕(ジヨ)慈(ジ)愷(ガイ)愾(ガイ)慟(ドウ)戊(ジユ)戲(ギ)打(ダ)技(ギ)抃(ベン)持(ヂ)挫(ザ)撞(ドウ)撰(ザン)擊(ゲキ)斬(ザン)旬(ジユン)曇(ドン)曉(ギヤウ)曦(ギ)朶(ダ)朴(ボク)桐(ドウ)（兩用）極(ゴク)（兩用）次(ジ)（兩用）殉(ジユン)殘(ザン)段(ダン)毒(ドク)滋(ジ)滌(デキ)澆(ギヤウ)烝(ジヤウ)燒(ジヤウ)（兩用）牘(ドク)特(ドク)（兩用）犢(ドク)犧(ギ)狀(ジヤウ)狽(バイ)獨(ドク)
五	玆(ジ)現(ゲン)璽(ジ)甚(ジン)田(デン)畤(ジ)疊(デフ)番(バン)痔(ヂ)瞳(ドウ)瞥(ベツ)砌(ゼイ)磁(ジ)磐(バン)神(ジン)（兩用）童(ドウ)

六	竺筍箭粥糙紓絶絮繩辮繻(兩用)罪罰羣聚(兩用)脫臟臧臺(兩用)舌舒舳艮蒸薨蘗號襄
七	訊託(兩用)諄談謔譚讀(兩用)谺豎象(兩用)豪財賀賊贅贈贍贓跋軍辨辯遵郡
八	銅銃陪雅需
九	鞭頷
十	馴駕駝駭驤髓鬩
十一	鯨
十四	鼻
十六	龕

前述の如く、以上のものは、皆主として故らに、濁つて讀むべき習慣となつて居るものである。其習慣の原因は、皆悉くは明でないが、「艮を故らに濁るのは、易經中、同じ八

卦の中に於て、「坤」との混同を避けるためである。又是は餘り通常ではないから、前表中には掲げなかつたが、「鹹」を五味卽ち辛甘鹹酸苦の場合には、「甘」と區別するために、故らに濁つて讀んだ。又支那の春秋戰國の時に於ける「秦」を「晋」と區別するために、故らに濁つて讀んだこともある。

又「常」は平家物語に「五常樂」と淸んで唱へてあるから、昔時は濁らなかつたのであらう。

第二。　漢字にて濁るべきものを、通常其まま淸んで讀むべき漢字

左に掲げる漢字は漢音の場合には、何れも濁つて讀むべきものであるが、通常何れも淸んで讀むべきものである。

部首ノ畫數	故ラニ淸ンデ讀ムベキ漢字表
二	仰(兩用)分(兩用)刎
三	吻嵬巫
四	撓

五	畝（ホ）
六	羨（セン）
七	誣（フ）賃（チン）赧（タン）
十一	靡（ヒ）

此種類に屬する讀方は、餘り多くはない。

第三、漢音にて長く引いて讀むべきものを、呉音のとき、短く促めて讀むべき漢字

左に掲げる漢字は、漢音の場合には、何れも長く引いて讀むべきものであるが、通常の呉音の場合には、短く促めて讀むべきものである。就中「長不用」としてあるのは、殆ど全く長呼音たる漢音を使用せぬものである。

部首ノ畫數	呉音ノトキ短ク促メテ讀ムベキ漢字表
一	不（フ）（長不用）世（セ）丘（ク）久（ク）

二	三	四	五	六	七	八	九
保修公功受(長不用)	口句(長不用)右后吼(長不用)壽(長不用)夢(長不用)婦(長不用) 守(長不用)富就工後	戊手(長不用)授(長不用)斗(長不用)母(長不用)有油浮(長不用) 流牛狗(長不用)	琉由畝(長不用)留登矛(長不用)硫種(長不用)	綬(長不用)缶(長不用)聚艀(長不用)	罘(長不用)貢遊酒(長不用)豆	阜(長不用)	頭首(長不用)

漢字の音韻中、平聲東、上聲董、去聲送、及平聲尤、上聲有、去聲宥の諸韻に屬するものの漢音は、皆悉く長呼音であるが、其呉音は皆悉く短呼音となるものである。但し其發

音の多少變化するもののあるのは少くない。

第四。　漢音にて短く促めて讀むべきものを、呉音のとき、長く引いて讀むべき漢字

左に掲げる漢字は、漢音の場合には、何れも短く促めて讀むべきものであるが、通常呉音の場合には、長く引いて讀むべきものである。就中「短不用」としてあるのは、殆ど全く短呼音たる漢音を使用せぬものである。

部首ノ畫數	呉音ノトキ長ク引イテ讀ムベキ漢字表
一	乳〔ニユウ〕(短不用)
二	住〔ヂユウ〕(短不用)
三	夫〔フウ〕女〔ニヨウ、ニヨ〕(兩用)寓〔グウ〕(短不用)廚〔チユウ〕(短不用)
四	數〔スウ〕柱〔チユウ〕(短不用)樞〔スウ〕(短不用)注〔チユウ〕(短不用)炷〔チユウ〕(短不用)
六	芻〔スウ〕(短不用)裕〔ユウ〕(短不用)

七八十
註[チユウ](短不用)誅[チユウ]趨[スウ](短不用)躕[チユウ](短不用)遇[グウ](短不用)
鑄[シユウ]隅[グウ](短不用)雛[スウ](短不用)須[スウ]
鬚[スウ](短不用)

漢字の音韻中、平聲虞、上聲麌[グ]、去聲遇の諸韻に屬するものの漢音は、皆悉く短呼音であるが、其呉音は皆悉く長呼音となるものである。但し其發音の多少變化するもののあるのは少くない。

第五。漢音にて「フ」の音尾を有するものを、通常「ツ」の音尾を有する促音等にて讀むべき漢字

左に掲げる漢字は、漢音の場合には、何れも「フ」の音尾を有するものであるが、通常「ツ」の音尾を有する促音等として使用するものである。但し「兩用」としてあるは、場合に依り、「フ」又は「ツ」の音尾を使用するものである。

部首ノ畫數	漢音ノ音尾「フ」ヲ促音ニテ「ツ」ノ音尾トシテ讀ムベキ漢字表

二	三	四	五	六	八	九
入(兩用)	合(兩用)執(兩用)	急(兩用)恰(兩用)拉接揖攝法(兩用)濕	甲(兩用)立(兩用)	笠箚納(兩用)葉(支那人名ノトキニ限ル)蟄衲	雜(兩用)	颯

前表の內「兩用」となるのは、大抵一字一字の單獨の場合でなく、熟字のときに限り「ツ」の音尾を有せしめるものである。是も昔時は熟字の上に在るときに限つたのであつたが、現今では、下に在るときにても用ふることになつた。例へば「立」を「立派」のときに、「リッパ」と讀むことは勿論、「縣立」のときには「ケンリフ」とも、「ケンリツ」とも讀むが如くである。

又是等の漢字は皆悉く入聲の韻に屬するものである。而して「剳」は漢音「タフ」吳音「ナフ」であるが、通常「サツ」と讀むのである。是は「紮」と通ずるのである。又「衲」は漢音「ダフ」吳音「ナフ」であるが、漢音の發音のまゝ、音尾のみを變化させて讀むのである。

第八章　殆ど全く漢音に依らぬ漢字

前述の如く、通常漢文學者は漢字の字音としては、成るたけ漢音を貴重する傾はあるが漢字の種類に依り、必しもさうではない。本章に揭げるものの如きは、佛書又は俗語としては勿論、所謂儒書に至つても、殆ど全く其漢音を使用せぬものである。

左表中字傍に附ける振假名は吳音である。又「……兩用」とあるのは稀に用ふる漢音を示すのである。其他は一々漢音を示さぬ。是は殆ど全く不用であるからである。但し漢音の例として、最初一二字の分を括弧内に記して置く。

部首	殆ド全ク吳音ニテ讀ムベキ漢字表
一	七(シチ)（漢音シツ）

乙	乙(オツ)（漢音イツ）
二	些(サ)（漢音シヤ）
人	仄(ソク)伏(フク)任(ニン)伐(バツ)促(ソク)俎(ソ)俤(テイ)俗(ゾク)倭(ワ)側(ソク)偶(グ)儂(ノウ)億(オク)
儿	兌(タ)免(メン)
入	入(ニフ)
八	八(ハチ)六(ロク)
冖	冥(メイ)冪(ベキ)
力	勇(ユウ)務(ム)勸(クワン)
勹	匐(フク)
十	十(ジフ)南(ナン)
卜	卦(ケイ)
卩	即(ソク)

又	反(ハン)受(ジユ)
口	召(セウ)名(メイ)和(ワ)味(ミ)命(メイ)問(モン)喃(ナン)嗟(サ)嚢(ナウ)
土	埋(マイ)城(ジヤウ)埓(ラチ)域(ヰキ)境(キヤウ)（ケイ兩用）壯(サウ)
夕	夢(ム)
大	央(アウ)
女	妊(ニン)妙(メウ)妹(マイ)妻(サイ)
子	孟(モウ)
宀	守(シユ)密(ミツ)
寸	寸(スン)（是ハ唐音）
尸	尿(ネウ)屬(ソク)
山	峽(ケフ)
巾	幅(フク)幔(マン)

干	年(チン)
幺	幻(グン)幼(エウ)
广	廬(ロ)廳(チヤウ)
戈	式(シキ)
彳	復(フク)
心	忍(ニン)念(チン)怏(アウ)悶(モン)情(ジヤウ)（風(フ)情(ゼイ)ノトキ漢音）惱(ノウ)想(サウ)惻(ソク)愎(フク)慢(マン)應(オウ)懣(モン)
戈	或(ワク)
手	手(シユ)抄(セウ)挂(ケイ)捏(チツ)捺(ナツ)授(ジユ)掛(ケイ)撚(チン)
支	敎(ケウ)數(ス)
斗	斗(ト)
日	明(メイ、ミヤウ)昧(マイ)是(ゼ)（儒書大學壹(イツ)是(シ)ノトキ漢音）普(フ)晶(シヤウ)曇(ドン)曩(ナウ)
曰	曰(ワツ)

月	木	欠	止	母	毛	氏	水	火	牛	犬	玄
服（フク）	朴（ボク）杏（キヤウ）束（ソク）梢（セウ）樊（ハン）梵（ボン）楚（ソ）	歇（カツ）	歳（サイ）（歳暮（セイボ）ノトキ漢音）	母（モ）（ボ兩用）每（マイ）	毛（マウ）	民（ミン）	沐（モク）浹（ケフ）派（ハ）浮（フ）淨（ジヤウ）減（ゲン）測（ソク）溟（メイ）滯（タイ）滿（マン）漫（マン）濃（ノウ）濘（チイ）濛（モウ）	烏（ウ）煩（ハン）熱（ネツ）	犀（サイ）	狙（ソ）狗（ク）狹（ケフ）猛（モウ）獄（ゴク）	率（ソツ）

玉	瑙（ノウ）瑁（マイ）瑪（メ）
瓜	瓣（ベン）
用	甫（ホ）
田	町（チヤウ）畝（ホ）
疋	疎（ソ）
疒	疔（チヤウ）疝（セン）痛（ツウ）瘦（ソウ）
白	百（ヒヤク）
皿	盟（メイ）
目	盲（マウ）眠（ミン）瞑（メイ）瞞（マン）
石	礎（ソ）
示	祭（サイ）福（フク）禰（チイ）
禾	秧（アウ）

部首	例字
穴	空(クウ)
立	竟(キヤウ)
竹	筏(バツ)箙(フク)箝(カン)
米	粘(チン)粟(ゾク)
糸	紺(コン)細(サイ)（古書細男ノトキ漢音）綿(メン)綬(ジユ)網(マウ)緬(メン)縷(ル)繁(ハン)繞(ジヤウ、チウ)續(ゾク)（續(シヨク)日本紀ノトキ漢音）
缶	缶(フ)
网	罔(マウ)罰(バツ)
老	耄(マウ)
肉	肉(ニク)能(ノウ)脈(ミヤク)腦(ノウ)腹(フク)膜(マク)膿(ノウ)
臼	臾(ユ)
舟	艨(モウ)

艸	虫	衣	襾	言	豸	貝	足	車	辰	辵	邑
茂(モ)茗(メイ)莽(マウ)蕃(バン)蒙(モウ)蔓(マン)藩(ハン)	蜜(ミツ)蝮(フク)螟(メイ)	複(フク)襪(ベツ)	覆(フク)	評(ヒヤウ)認(ニン)諏(ス)諷(フウ)譜(フ)	豹(ヘウ)	負(フ)販(ハン)	蹣(マン)	輔(ホ)	農(ノウ)	返(ヘン)迷(メイ)通(ツウ)(支那人名叔孫通(トウ)ノトキ漢音)逼(フク)邁(マイ)	那(ナ)部(ブ)

酉	酒酩醍
金	鈔銘鏝鏡
門	閥闢
阜	阜限陬際
隹	難
雨	霧
面	面
頁	項領題願
風	風
飛	飜
食	饅
香	香馥

馬	鬼	烏	麥	麻	黑	鼠
驚驢(キヤウロ)	魅(ミ)魔(マ)	鳴(メイ)鴦(アウ)鵡(ム)鵲(ジヤク)	麪(メン)	麻(マ)	默(モク)	鼠(ソ)

是等の漢字の漢音を用ひないのは、無意的のものもあるのであるが、有意的のものもある。例へば漢文學者は、「空(コウ)」の漢音を用ひなかつたのは、彼の支那の六官中「司空」を「司寇」に區別するためであり、又「情」の漢音を用ひなかつたのは「性情」の二漢字並出することが多ければ、之を區別するためである。又同一の趣意よりして、「驚」は通常呉音をのみ用ふるが、唯「七情」即ち「喜怒憂思悲驚恐」の場合にのみ、從前は漢音「ケイ」を用ひ、

「恐」の字音と區別することがあつた。又「風諷婦負阜缶」等は、皆漢音「ヒユウ」であり、「復複福逼」等は皆漢音「ヒユク」又は「ヒヨク」であるが、是等の發音は、何れもなだらかでないから、前のは「フウ」呉音にて使用したのみならず、之を短呼音に變じたものもある、後のは何れも「フク」の呉音にて使用することゝしたのである。

第九章　字書に記載せる本音と異なりて讀まれる漢字

通俗に於ては勿論、專門の漢文學者中にても漢字の字書以外、別種の字音を附けて讀み來つて居る漢字も、亦全くないことはない。露骨に言はゞ、嚴格に言はゞ、誤りたるまゝ、因襲の久しき、最早矯正すべき必要のない。一種の讀方をなすべき漢字のことである。西洋にても、「半世紀續いた誤は誤でない」との語學上の諺もあるさうである。即ち左に揭げる漢字は、其右傍の振假名の如く讀むが、夫は通常字書中に記載せざるか、又は記載してあつても、其ときは別種の意義を顯す場合のものである。併し吾人は通常使用する所の字音は、是非其振假名通でなくては通じないのである。但

し本音の例として最初の一字の分を括弧内に記して置く。

誤ノママ讀ムベキ漢字表

部首ノ畫數	
一	不《フ》(義「アラズ」ノトキ漢音「ホツ」呉音「フツ」)
二	借《シヤク》(「カル」ノトキ)冊《サツ》沖《チユウ》匿《トク》
三	員《井ン》喫《キツ》堊《ア》
四	扼《ヤク》枕《チン》沃《ヨク》注《チユウ》派《ハ》炷《チユウ》
六	罫《ケイ》罷《ヒ》(「ヤム」ノトキ)茶《サ》虜《リヨ》蛙《ア》
七	註《チユウ》話《ワ》豌《エン》賄《ワイ》軟《ナン》(軟障《セン》ノトキ本音)
八	院《井ン》
九	鞋《アイ》韻《井ン》
十一	鹼《ケン》

前表中「喫」は本音「ケキ」であるが、「吃」と通じて「キツ」となるのである。

又或漢字中、或熟字となつたために、習慣上一種の讀方をなさねばならぬものは多いが、是は後篇に詳述することゝする。本章に於ては、漢字の單獨の場合、其他如何なる場合に於ても、常に固有の字音と見做されて居るもののみを掲げたものである。

第十章　通常誤り易い字音の漢字

本章に掲げる漢字は、通常誤つて使用するものはあるが、前章のものの如く、殆ど總べての世人が、皆誤るとも限らぬ。又餘り通俗のものとなつて居らぬものもあるから、字書中に示す所の正しい發音に矯正することを、余は適當であると、自認したのである。併し人に依り、久しく誤用して、最早普通の如く考へ、前章のものと同一の取扱をなすことを適當とするものも、全くないではなからう。併し余は余の意見を發表することにする。即ち左に掲げたる振假名は、假令通常世人の多少使用せざるものあるにせよ、余は正しいものに、矯正すべきものと、認めた所のものである。

左表の漢字の一字に、二箇の振假名あるは、上は漢音下は呉音である。誤讀するもの

の例は特に示すに及ぶまい。

部首	誤リ易イ字音ノ漢字表
一	丏(カイ)丕(ヒ)
丿	乖(クワイ)
人	佚(イツ)俛(フ)倏(シユク)倜(テキ)倪(ゲイ)倩(セン)偸(トウ)傅(フ)傀(クワイ)儔(チウ)儡(ライ)
儿	兜(トウ)
冖	冤(エン)
冫	冶(ヤ)
刀	剏(サウ)削(サク)刺(シ)剌(ラツ)剖(ホウ)剔(テキ)剞(キ)劅(タク)
力	劬(ク)勒(ロク)
匕	匙(シ)
口	叫(カウ、ケフ)吶(トツ)咄(トツ)哂(シン)噭(キヤウ)喘(ゼン)喙(カイ)唾(ダ)喟(キ)嗅(キウ)嗄(サ)嗚(ヲ)嗤(シ)嗾(ソウ)嗽(ソウ)嘖(サク)嘔(オウ)嘯(シヨウ)嘲(タウ)嘶(セイ)噦(エツ)囑(シヨク)

土	士	大	女	子	宀	尢	尸	山	巾	广	弓
域(ヰヨク)埸(エキ)堆(タイ)塋(エイ)塡(テン)塹(セン)墅(シヨ)墝(カウ)	壻(ゼイ)	奩(レン)	姪(テツ)娘(ヂヤウ)媼(アウ)嫗(ウ)嫋(ヂヤウ)嫩(ドン)嫡(テキ、チヤク)嬰(エイ)	孕(ヨウ)孱(セン)	宕(タウ)	尨(バウ)	尻(カウ)屑(セツ)屓(キ)	岫(シウ)嵬(クワイ)嵩(スウ)嶸(クワウ)嶼(シヨ)	幗(カク)幟(シ)	庠(シヤウ)廁(シ)廈(カ)廠(シヤウ)	彀(コウ)

彐	彗(スヰ)彘(テイ)
彡	彤(トウ)彪(ヒウ)彬(ヒン)
彳	徙(シ)
心	忖(ソン)忱(シン)忸(ヂク)怡(イ)怯(ケフ)恙(ヤウ)恚(イ)恬(テン)悃(コン)悚(ショウ)悶(モン)悼(タウ)惕(テキ)惆(シウ)㥜(ヰ)惴(ズヰ)惹(ジヤ)慍(ウン)愨(カク)愧(キ)愾(カイ)慂(ヨウ)慊(ケン)(又「カウ」義別)慴(セウ)慝(トク)慵(ショウ)憊(ハイ)憐(レン)懣(モン)懶(ラン)懾(セフ)
戈	戕(シヤウ)截(セツ)
手	抔(ホウ)拉(ラツ)拓(タク)拗(アウ、エウ)拐(カイ)拯(ショウ)挈(ケツ)捏(子ツ)捐(エン)挽(バン)捻(デフ)捺(ナツ)掉(チヤウ)掛(クワイ)掠(リヤク)措(ソ)揖(イツ)揣(シ)搏(ハク)搜(シウ)摺(セフ)摭(セキ)摯(シ)撓(タウ)撚(子ン)撮(サツ)撰(サン)(又「セン」)撒(サツ)播(ハ)擘(ハク)擣(タウ)擢(タク)擴(クワク)擾(ジヨウ)擺(ハイ)攪(カウ)
攴	攸(イウ)斂(レン)
斗	斛(コク)斡(ワツ)
日	昵(ヂツ)晳(セキ)晷(キ)暈(ウン)曩(ナウ)
木	枚(バイ、マイ)析(セキ)杵(ショ)柝(タク)枴(カイ)桎(シツ)核(カク)梳(ショ)梓(シ)棘(キヨク)棹(タウ)椎(ツヰ)椒(シヤウ)椿(チユン)椽(エン)楔(セツ)橇(キヤウ)橐(タク)檉(テイ)檐(エン)櫂(タウ)櫛(シツ)櫟(レキ)

欠	欠(ケン)欸(アイ)欹(イ)
止	歪(ワイ)
歹	殄(テン)
殳	殼(カク)
气	氳(ウン)
水	氾(ハン)汚(ヲ)泄(エイ)泌(ヒ)泛(ハン)(又「フ」)浹(セフ)洒(サイ)洩(エイ)涎(ゼン)涓(ケン)渫(セツ)滈(クワウ)湛(タン)滌(テキ)滓(シ)滲(シン)演(エン)漬(シ)潦(ラウ)潟(セキ)澣(クワン)
	灑(サイ)
火	炙(シヤ)(又「セキ」)炊(スヰ)熾(シ)燿(ヤク)爨(サン)
片	牌(ハイ)牖(イウ)
牛	牝(ヒン)犖(ラク)
犬	狎(アフ)猜(サイ)猥(ワイ)猷(イウ)猾(カツ)獺(ダツ)
玉	璞(ハク)

瓦	田	疒	白	皿	目	矛	矢	石	示	禾	穴
甕（ヲウ）	畷（テツ）疇（チウ）	瘦（シウ）	皓（カウ）	皿（ベイ）盥（クワン）	眇（ビヤウ）眥（サイ、サイ）睥（ヘイ）睹（ト）睾（カウ）瞥（ベツ）瞻（ゼン）	矜（キヨウ）	矧（シン）矮（ワイ）	砥（シ）砧（チン）碎（サイ）碓（タイ）碍（ガイ）碩（セキ）磔（タク）磊（ライ）磧（セキ）磬（ケイ）磠（ダウ）磽（カウ）	祇（ギ）祗（シ）祟（スヰ）祕（ヒ）	禿（トク）秉（ヘイ）秤（シヨウ、ヤウ、アウ）秧（シン）稔（シン）稗（ハイ）稜（ロウ）稠（チウ）穨（タイ）穢（アイ）	窪（ワ）窩（ワ、）窶（ク）竅（キヤウ）竈（サウ）竇（トウ）

立	竹	米	糸	缶	网	羊	羽	而	耒	耳	聿
站(タン)竢(シ)竦(シヨウ)	筍(ジユン)笏(コツ)笞(チ)筇(キヤウ)筠(井ン)箆(ヘイ)箒(シウ)箴(シン)簀(サク)簟(テン)簪(シン)	粤(エツ)粹(スヰ)糯(ダ)糲(レイ)糴(テキ)糵(ケツ)糶(チヤウ)	紊(ブン)紲(セツ)絢(ケン)絳(コウ)絛(タウ)絺(チ)綌(ゲキ)綢(チウ)綴(テイ)綻(タン)綽(シヤク)緊(キン)緒(シヨ)緘(カン)縊(イ)繆(ビウ)繡(シウ)繞(ジヤウ、ネウ)纛(タウ)	罋(ヲウ)	罫(クワイ)署(シヨ)	羸(ルヰ)	翕(キフ)耀(ヤク)	耐(タイ)	耗(カウ)耨(ドウ)	耽(タン)耿(カウ)聾(ロウ)	肄(イ)肇(チヤウ)

肉 臼 舌 艸 虍 虫 血 行 衣 襾 見 言

肋(ロク)肓(クワウ)肘(チウ)肯(コウ)胾(シ)脆(ゼイ)脯(フ)膠(カウ)臀(トン)臂(ヒ)
舁(ヨ)舂(シヨウ)舄(セキ)
舐(シ)
茜(セン)莅(リ)莖(カウ)莠(イウ)莩(ヒヤウ)菌(キン)菅(カン)萱(ケン)蒐(シウ)蓑(サ)蕁(ジユン)蓰(シ)蔗(シヤ)蕈(シン)蕊(ズヰ)薙(テイ)薤(カイ)薔(シヨク)藕(ゴウ)藪(ソウ)蘊(ウン)藹(アイ)藺(リン)
虧(キ)
蛇(ジヤ)蛋(タン)蛛(チユ)蛭(シツ)螫(セキ)螭(チ)螽(シウ)蟄(チツ)螺(ラ)蠅(ヨウ)蠕(セン)蠖(ワク)
衂(ヂク)
衙(ガ)
袂(ベイ)袖(シウ)袌(バウ)裔(エイ)裕(ユ)裸(ラ)裹(クワ)裼(セキ)褫(チ)褰(ケン)褪(ドン)褻(セツ)褶(テフ)
覈(カク)
覓(ベキ)覘(テン)覿(テキ)
訥(ドツ)診(シン)詈(リ)詐(サ)詣(ケイ)誄(ルヰ)誇(クワ)誨(クワイ)誾(ギン)諡(シ)謬(ビウ)謫(タク)謦(ケイ)譖(シン)譌(クワ)譎(ケツ)譬(ヒ)讖(シン)

貝 足 車 辛 辵 邑 酉 釆 里 金 門 阜

貰貽貭賭賽贄贍贔贖

趺踊踣蹠蹴躅躊躍躓躙

軏軛軫輊輒輓輗輟輸轡

辣

迄迤迭迸這逝遒遡遮潾遶避邀邁遂邈

郢

酋酖酢醜醢醪釁

釉

釐

釣釵鉈鍮（呉音）鍼鍛鎌鏗鐃鑄

閘閙閾閴闖闡

阨陟隈隕隗隤

隹	雕(チャウ)　雝(ヨウ)
雨	雹(ハク)　霑(テン)　霎(サウ)　霰(セン)　霾(バイ)　靄(アイ)　靆(タイ)
青	靛(テン)
面	靦(テン)　靨(エフ)
頁	頒(フン)　頡(ケツ)　頞(アツ)　頤(イ)　顋(サイ)
風	颶(グ)
食	飭(チヨク)　飫　飴(イ)　餉(シヤウ)　餒(タイ)　餮(テツ)　饒(ジヤウ)　饕(タウ)　饐(アイ)
首	馘(クワク)
馬	馭(ギヨ)　馴(ジユン)　駁(ハク)　騁(テイ)　駢(ヘン)　騂(セイ)　騃(ガイ)
骨	䯨(ケン)
髟	髫(テウ)　髻(ケイ)
鬥	鬧(ダウ)　鬩(ゲキ)　鬮(キウ)

鬼	魚	鳥	黍	黑	鼓	齒
魑(チ)	鮎(デン) 鯛(チヤウ) 鰓(サイ) 鰥(クワン)	鴇(ハウ) 鴉(ア) 鴨(アフ) 鴟(シ) 鴞(ケウ) 鵠(コウ) 鵲(ジヤク) 鶩(ボク) 鷁(ゲキ) 鷙(シ) 鷸(イツ) 鸝(リ)	黏(デン) 黐(チ)	黔(ケン) 黜(チユツ) 黠(カツ)	鼙(ヘイ)	齪(サク) 齷(アク)

前表中「這」は本音「ゲン」であるが、「者」と通じて「シヤ」となるのである。

第十一章　數音數義を有する漢字

漢字の同じ漢音又は呉音中にても、其意義の轉注よりして、之に相當する字音を有するものである。併し我國にて同一の發音をなしても、支那にては、其四聲の音韻の

異なるに依つて、別種の字音となるものもある。今本章に於ては、主として我國に於て、區別し得べき數種の字音に變ずるものと、其他の重なるものとを揭げることにする。但し本章中のものは、稍〻專門の漢文學者にあらざれば、必要がないであらう。

第一。一字にて全く反對の意義を有する漢字

一字にて全く反對の意義を有することは、隨分極端のことであるが、全くないことはない。之を左に揭げる。

一字ニテ全ク反對ノ意義ヲ有スル漢字表

部首	字	意義	字	意義
乙	乞（キツ）	コフ　求ナリ	乞（キ）	アタフ　與ナリ
乙	亂（ラン）	ミダル　紊ナリ	亂（ラン）	ヲサム　治ナリ
口	咽（エン）	ノド、ノム　―喉	咽（エツ）	フサガル　嗚―
口	囂（ガウ）	カマビスシ　愁歎ノ聲	囂（ケウ）	シヅカ　自得ノ貌
口	嘻（キ）	タノシム　自得ノ貌	嘻（キ）	カナシム　悲恨ノ聲
尸	屈（クツ）	ツク　盡ナリ、カース	屈（クツ）	ツヨシ　―彊
心	怏（アウ）	ココロヨカラズ　情滿足セズ	怏（アウ）	タカブル　自大ノ意
心	慊（ケン）	アキタラズ　不足	慊（カウ）	アキタル　滿足

糸	艸	貝	隹	
懽（クワン）ヨロコブ 喜ナリ	糾（キウ）モトル 紛一	荒（クワウ）アル。スタル 廢ナリ	貸（タイ）カス 予ナリ	離（リ）ハナル 散ナリ
懽（クワン）ウレフ 憂ナリ	糾（キウ）タダス 一彈	荒（クワウ）ヲサム 治ナリ	貸（タイ）カル 假ナリ	離（リ）アフ 遇ナリ

是等の種類は餘り多くはない。右のものも、通常のものではないが、他に氣附かなかつたから、之を掲げることにした。序に古書に在る二三の用例を示さう。

一、乞の本義は、今其用例を示すには及ばぬ。唯轉注のは、晋書に「以豎乞汝」とある。

二、亂の本義も右と同樣である。轉注のは、論語に「予有亂臣十人」とあり。註に「亂治也」とある。又書經にも同一の本文及註がある。併し是には余の異說はあるのである。元來「治」の古字は「乿」であるので、古書には最初此古字を用ひてあつたのを何時の頃よりか、之を「亂」と誤記したのであらう。

三、囂の轉注の用例は、孟子に「人知之囂々、不知亦囂々」とあり、註に、囂々自得無欲貌」とある。

四、快は自大の場合は、王羲之の蘭亭帖に「快然自足」とあり、「快然」の誤ではない。

五、慊は不足の場合は、「歉」と同一の音義となる。故に其不滿足のときは、「○○に歉焉たり」又は「○○に慊焉たり」などと用ふるのである。又滿足の場合には、字音「カウ」となるので、彼の近古の儒者松崎慊堂の雅號等は、是である。是は自ら不平家を表白して居るのではない。某社發行の唯一なる日本人名字書には、「マツサキケンダウ」の見出の下に收めて居る。從來學者間でも、「カウダウ」と稱へて居つたのである。改版のときに、訂正して貰ひたいものである。さうでないと、慊堂は永く地下に瞑することが出來ずそれこそ……ニ慊(ケン)焉タリ」であるかも知れぬ。

六、荒の廢の用例は、掲げるには及ばぬ。「治」の用例は、詩經に、「大王荒之」とあり。註に「荒治也」とある。

七、離の轉注の用例は、彼の屈原の離騷賦といふものがある。「離遇也、騷憂也」とて、

屈原が、世の憂に遇うて、此詞賦を作り、華嚴瀑否汨羅淵に投じたのであつた。

又漢字中熟字となつたために反對の意義を顯すものもあるが、是等は後篇に讓る。

第二。 數音數義を有する漢字

一字にて數音數義を有する漢字は、頗る多い。今其中重なるものを掲げよう。

一字ニテ數字數義ヲ有スル漢字表 （右傍ニ二箇ノ振假名アルハ上ハ漢音下ハ呉音）

部首	字	音	義	字	音	義	字	音	義
一	丁	テイ、チヤウ	ヒノト アタル	丁	トウ、サウ	伐木ノ聲			
	不	ホツ、フツ	アラズ —可	不	フウ、フ	イナ 否ト同ジ			
丿	且	シヤ	カツ、シバラク マサニ	且	シヨ	語詞			
乙	乃	ダイ、ナイ	スナハチ	乃	アイ	フナウタ 欸—			
	乾	ケン	ソラ —坤	乾	カン	ホス、カハク —燥			
二	于	ウ	オイテ ユク	于	ア	クボシ、汙ト同ジ —尊			
	亟	キヨク	スミヤカ	亟	キ	シバラク			
亠	亡	バウ、モウ	ホロブ ウシナフ	亡	ブ、ム	ナシ、無ト同ジ —狀			
	亨	カウ	トホル	亨	キヤウ	ウク、享ト同ジ	亨	ハウ	ニル、烹ト同ジ

人

介（カイ）ハサム、モツパラ　—　介（カ）个ト同ジ　一｜

伯（ハク）アニ　｜仲　—　伯（ハ）霸ト同ジ　王｜

佗（タ）ホカ　自｜　—　佗（イ）蛇ト同ジ　委｜

佛（ブツ）ホトケ　モトル　—　佛（ヒツ）タスク、弼ト同ジ　又姓

借（シヤ）カル　—　借（シヤク）ツム

假（カ）カリ　—　假（カク）イタル、格ト同ジ

僻（ヘキ）カタヨル　—　僻（ヘイ）ニラム、睥ト同ジ　｜睨

入

內（ダイ、ナイ）ウチ　｜外　—　內（ダフ、ナフ）イル、納ト同ジ　出｜

冂

冒（ボウ）オフ　—　冒（ボク）ヲカス、ムサボル　又｜頓

凵

出（シユツ）イヅ　—　出（スヰ）イダス　｜納、｜師

刀

切（セツ）キル　—　切（セイ、サイ）一｜

刺（シ）名｜　｜史　—　刺（セキ）ウカガフ、サシコロス　｜客

副（フウ、フ）ソフ　｜長　—　副（フク）サク、ワカツ

匕

北（ホク）キタ　南｜　—　北（ハイ）ソムク

匚

區（ク）マチマチ　—　區（オウ）カクル　量目　—　區（オウ）歐ト同ジ　姓

十	卩	厂	ム	口	士

十

卒（ソツ）士｜又ニハカ ― 卒（シツ）ツヒニ又死｜

卓（タク）タカシ ― 卓（トク）人名董｜

卩

却（キヤク）シリゾクカヘツテ ― 却（ゲキ）ヒマ

厂

厭（エン）イトフ ― 厭（アン）クラシ黶ト同ジ ― 厭（アフ、アツ）オス壓ト同ジ

厲（ライ）ヤマヒ癩ト同ジ ― 厲（レイ）ハゲシ ―

ム

參（リン）マジハル ― 參（シン）｜差人名、星名

口

句（ク）ヨミキリ｜讀 ― 句（コウ）アタル｜當又姓

台（タイ）官名三｜ ― 台（イ）ワレ

向（キヤウ）ムカフ、サキニ ― 向（シヤウ）地名、姓

否（フウ、フ）シカラズ安｜ ― 否（ヒ）アシ臧｜

吾（ゴ）ワレ ― 吾（ギヨ）｜｜不敢自親ノ貌

告（カウ）上ヨリツグ｜示 ― 告（コク）下ヨリツグ上｜

咎（キウ）トガ ― 咎（カウ）人名

員（エン）カズ｜數 ― 員（ウン）人名伍｜

啞（ア）イハズ ― 啞（アク）ワラフ

單（タン）ヒトヘ ― 單（ゼン）オホヒナリ又｜于

士

堵（ト）カキ ― 堵（シヤ）人名、地名

塞（サイ）トリデ要｜ ― 塞（ソク）フサガル

夕 大 女 子 宀 寸

塡（テン） ミツル ― 塡（チン） シヅムル鎭ト同ジ

墮（ダ） オツル ― 墮（キ） コホリ、ヤブル

壇（ダン） 祭― ― 壇（セン） 野土

夢（ボウ、ム） ユメ ― 夢（モウ） 蒙ト同ジ 人名

大（ダイ） オホヒナリ ―小 ― 大（タイ） ハナハダ太ト同ジ

契（ケイ） チギリ 書― ― 契（セツ） 人名

女（ヂョ、ニョ） ヲンナ ― 女（ジョ） ナンヂ汝ト同ジ

妃（ヒ） ヒメ ― 妃（ハイ） 配ト同ジ

學（カク） マナブ ― 學（ガウ） ヲシフ

宛（ワン、エン） アタカモ ―然 ― 宛（エン） 人名 ― 宛（ウツ） 鬱ト同ジ

害（カツ） ナンゾ、盍ト同ジ ― 害（ガイ） ソコナフ、ヤブル ―

宿（シユク） ヤドル ― 宿（シウ） ホシ 星―

射（シャ） ユミイルコト ―御 ― 射（セキ） イル ―殺 ― 射（ヤ） 地名、人名 ― 射（エキ） イトフ

封（ホウ、フウ） ―爵 ― 封（ヘン） 下棺

將（シヤウ） マサニ ― 將（サウ） ――玉ノ聲

尉（ヰ） 姓 ― 尉（ウツ） 熨ト同ジ 火斗

尸　屮　工　巾　干　广　弓　彳　心

尼（ヂ、ニ）アマ ― 尼（ヂツ）トドム
居（キヨ）ヲリ ― 居（キ）ヤ（感詞）日―月―
屯（トン）タムロ ― 屯（チユン）ナヤム 純ト同ジ 卦名
差（サ）タガフ ― 差（シ）人名 又參―
帑（ド）拏ト同ジ ― 帑（タウ）カネグラ
帥（スヰ）將― ― 帥（シユツ）ヒキヰル
幅（フク）ハバ ― 幅（ヒヨク）ムカバキ ―舄
平（ヘイ）タヒラカ ― 平（ヘン）カタヨラヌト 王道――
底（テイ）ソコ、イタル ― 底（シ）タヒラカ 砥ト同ジ
度（ド）ノリ、ワタル ― 度（タク）ハカル 支―
弔（テウ）トムラフ ― 弔（テキ）イタル
從（シヨウ、ジユウ）シタガフ ― 從（ソウ）高キ貌 ――
御（ギヨ）ヲサム ― 御（ガ）ムカフ、迓ト同ジ
復（フク）カヘル ― 復（フ）マタ
徵（チヨウ）メス、シルシ ― 徵（チ）律ノ名 角―
忸（ヂク）ハヅ ― 忸（チウ）ナル、狃ト同ジ
思（シ）オモフ ― 思（サイ）䰄ト同ジ 又于―

戈　手　支　方　日

悪(アク) アシ、善—　—　悪(ヲ) ニクム、好—
戯(キ) タハムル　—　戯(コ) アア、於—
折(セツ) チル　—　折(テイ) ——安舒ノ貌
拂(ホツ、フツ) ハラフ　—　拂(ヒツ) タスク、弼ト同ジ
拔(バツ) ヌク　—　拔(ハツ) ヤドル、茇ト同ジ
推(スヰ) オシアグ、—賢　—　推(タイ) オス、—遷、相—
揣(シ) ハカル、—摩　—　揣(セン) モテアソブ
數(スウ、ス) カズ　—　數(サク) シバシバ、頻—、—　—　數(ソク) コマカシ、—罟
於(ヲ) 歎息ノ聲　—　於(ヨ) オイテ
易(エキ) カハル　—　易(イ) ヤスシ
暴(バウ) アラシ、ニハカ　—　暴(バク) サラス、曝ト同ジ

抵(テイ) チカス、アタル　—　抵(シ) イタル
拒(キヨ) フセグ　—　拒(ク) 陣名、左—
掠(リヤク) カスム　—　掠(リヤウ) アキラカ、亮ト同ジ
掲(ケツ) カカグ　—　掲(ケイ) ワタル
撰(サン) ツクル、アツム、—文　—　撰(セン) エラブ、選ト同ジ
施(シ、セ) ホドコス　—　施(イ) ウツル、ヒク
景(ケイ) —色　—　景(エイ) カゲ、影ト同ジ

木　殳　比水

杓(ヤク) サカヅキ 杯―　｜　杓(ヒヤウ) 星名　｜　植(シヨク) ウウ　｜　植(チ) タツ(他動)

樂(ガク) 音―　｜　樂(ラク) タノシム　｜　樂(ガウ) コノム　｜　樂(リヤウ) イヤス 療ト同ジ　｜

樂(ロク) サイハヒ 祿ト同ジ　｜　樂(ラウ) 人名 伯―　｜　橈(ダウ) マグ　｜　橈(ゼウ) フネノカイ

殷(イン) サカン 國名　｜　殷(アン) クロアカシ 朱―　｜　殺(サツ) コロス　｜　殺(サイ) ソグ　｜

殺(シ) 上ヲコロス 弑ト同ジ　殿(デン) トノ 官―　｜　殿(テン) シンガリ

比(ヒ) クラブ　｜　比(ヒツ) 比次ナリ、駢―

汙(ヲ) ケガル　｜　汙(ア) クボシ ―樽　汎(ハン) アマネシ　｜　汎(フ) ウカブ

沈(チン) シヅム　｜　沈(シン) シヅム(他動) ―之　汰(タイ) ナミ　｜　汰(タツ) スグル 淘―

泄(セツ) モル　｜　泄(エイ) チル　洩(セツ) モル　｜　洩(エイ) チル

洒(サイ) ソソグ　｜　洒(セイ) アラフ　游(イウ) オヨグ、アソブ　｜　游(リウ) 旒ト同ジ ―纓

湯(タウ) ユ　｜　湯(シヤウ) ―― 水盛ノ貌　準(ジユン) シタガフ　｜　準(セツ) 鼻ノ先 隆―

火　父　玄　田　疋　皿　目

溺（デキ）オボル　｜　溺（ジヤウ、ネウ）イバリ　尿ト同ジ　滑（カツ）ナメラカ　｜　滑（コツ）ミダル　｜稽

漸（セン）ヤウヤク　｜　漸（ザン）高峻　瀆（トク）ケガル　｜　瀆（トウ）地名

灑（サイ）ソソグ　｜　灑（シヤ）｜落

炙（シヤ）アブリモノ　膾｜　｜　炙（セキ）アブル

父（フ）チチ　｜　父（ホ）人名、地名

率（シユツ）シタガフ　｜　率（スヰ）ヒキヰル　將｜　｜　率（ルヰ）オホムネ　大｜　｜　率（リツ）クラブ　比｜

畜（チク）タクハフ　蓄ト同ジ　｜　畜（キウ）ケダモノ　六｜　｜　畜（キク）ヤシナフ

畫（グワ、ヱ）ヱガク　繪｜　畫（クワク）カギル　｜策　｜

疑（ギ）ウタガフ　｜　疑（キヨウ）サダム

盟（メイ）チカヒ　｜　盟（モウ）地名　孟ト同ジ　｜津

直（チヨク）ナホシ　｜　直（チ）アタヒ　値ト同ジ　盾（ジユン）タテ　｜　盾（トン）人名　趙｜

矛　示　禾　穴　立　米　糸　网

矜（キヨウ）メグム、アハレム　｜式　——　矜（クワン）鰥ト同ジ　｜寡

祝（シユク）神主　——　祝（シウ）イハフ　｜杯

稅（ゼイ）ヲサム　租｜　——　稅（ダツ）脫ト同ジ

穀（コク）五｜　——　穀（トウ）チチ　乳ナリ　｜杯

稟（ヒン）ウク　｜議　——　稟（リン）クラ　廩ト同ジ

積（セキ、シヤク）ツム　——　積（シ）ツミモノ

窒（チツ）フサグ　——　窒（テツ）絰ト同ジ

窶（ク）ヤツ　ヤツシ　貧｜　——　窶（ロウ）カゴ

端（タン）ハシ、タダシ　——　端（ベン）カムリモノ　冕ト同ジ　玄｜

粥（ジユク）カユ　——　粥（イク）ヒサグ　鬻ト同ジ

約（ヤク）ツヅマヤカ　——　約（ヤウ）信ナリ　誓｜

糴（テキ）カヒヨネ　——　糴（トウ）姓

綴（テイ）ツヅル　——　綴（テツ）マグ

純（ジユン）モツパラ　——　純（トン）ツツム　又地名

繇（エウ）エタチ　｜役　——　繇（イウ）ヨル、ナホ　由ト同ジ

縱（シヨウ、ジユウ）タテ　｜橫　——　縱（ソウ）ススム　慫ト同ジ

繆（ビウ）マトフ　綢｜　——　繆（ボク）諡號　｜公

罷（ハイ）ヤム　——　罷（ヒ）ツカル

羊　老　臼　舌　艸　虫　行

羹（カウ）アツモノ　｜　羹（ラウ）地名

耆（キ）六十歳　｜　耆（シ）タシム　嗜ト同ジ

臾（ユ）ニハカ　須｜　｜　臾（ヨウ）遹ト同ジ　慫｜

興（キヨウ、カウ）オコル　｜起　｜　興（キヨウ）｜味

舎（シヤ）屋｜　｜　舎（セキ）釋ト同ジ　｜菜

苑（エン）ソノ　｜　苑（ウツ）茂木ノ貌

莩（フ）葭中ノ皮　｜　莩（ヒヤウ）ウウ　餓｜

莫（バク）ナシ　｜　莫（ボ）クレ　暮ト同ジ

葉（エフ）ハ　｜　葉（セフ、セツ）地名、姓

著（チヨ）アラハス　｜　著（チヤク）ツク、キル

蓋（ガイ）オフ、フタ、ケダシ　｜　蓋（カフ）トビラ　闔盍ト同ジ　又地名

蓼（レウ）タデ　｜　蓼（リク）｜｜草長大ノ貌

蔟（ゾク）アツマル　｜　蔟（ソウ）大｜律ノ名

藉（セキ）ミダル　狼｜　｜　藉（シヤ）シク、カル　慰｜、溫｜

蛇（ジヤ）ヘビ　｜　蛇（イ）委｜

蛾（ガ）コガネ　｜　蛾（ギ）アリ　蟻ト同ジ　又人名

術（シユツ）ワザ　心｜　｜　術（スヰ）遂ト同ジ

衡（カウ）タヒラカ　權｜　｜　衡（クワウ）ヨコ　横ト同ジ　連｜

衣　襾　見　言　豆　貝　走

衰スヰ　オトロフ ―― 衰サイ　モフク　齊―

覆フク　クツガヘス ―― 覆フウ、フ　オホフ　―載

覺カク　オボエ、サトス ―― 覺カウ　サム　醒―

詳シヤウ　ツマビラカ ―― 詳ヤウ　イツハル佯ト同ジ

說セツ　トク ―― 說ゼイ　サトス　遊―

說エツ　ヨロコブ悅ト同ジ　不亦―乎 ―― 識シヨク、シキ　シル

識シ　シルス誌ト同ジ

讀トク　ヨム　―書 ―― 讀トウ　ヨミキリ　句―

豈キ　アニ ―― 豈ガイ　愷ト同ジ　―弟

責セキ　セム ―― 責サイ　債ト同ジ

賈カ　アタヒ價ト同ジ ―― 賈コ　アキナフ、アキンド　商―

賁ヒ　カザル　―來 ―― 賁ホン　タケシ　虎―

賁フン　オホヒナリ ―― 質シツ　スナホ

質シ　ニヘ贄ト同ジ ―― 質チ　シチ

越エツ　コユ又國名 ―― 越クワツ　ガマ　―席

趣シユ　オモムク ―― 趣ソク　ウナガス促ト同ジ

足　車　辛　辵　邑　里　金　門

趨(スウ) オモムク ｜ 趨(ソク) スミヤカ

足(ソク) アシ ｜ 足(スウ) スグス ｜恭

較(カウ) クラブ ｜ 較(カク) アキラカ

辟(ヘキ) メス、キミ ｜ 辟(ヘキ、ビャク) ヒラク闢ト同ジ ｜ 辟(ヒ) サク避ト同ジ タトヒ譬ト同ジ　辨(ベン) ワキマフ ｜

辨(ヘン) アマネシ徧ト同ジ

適(セキ) ユク、マサニ、カナフ、タマタマ ｜ 適(テキ) 敵ト嫡トニ同ジ 又｜莫 ｜ 適(タク) 謫ト同ジ ｜戍　選(セン) エラブ ｜

選(ルツ) 金ノ量目　還(クワン) カヘル ｜ 還(セン) カヘス旋ト同ジ ｜師

邪(ジヤ) ヨコシマ ｜ 邪(ヤ) カ耶ト同ジ　部(ホブ) ｜曲 ｜ 部(ホウ) コヤマ

釐(リ) オサム ｜ 釐(キ) 僖ト同ジ ｜王

錯(サク) タガフ、マジハル ｜ 錯(ソ) 措ト同ジ ｜置　鍼(シン) ハリ ｜ 鍼(カン) 地名、姓

闕(ケツ) カク ｜ 闕(クツ) ホル掘ト同ジ 又地名　關(クワン) セキ、アヅカル ｜ 關(ワン) ヒク彎ト同ジ

部	字	音	訓・義		字	音	訓・義
阜	阨	ヤク	フサガル	―	阨	アイ	狹―
	陳	チン	ツラヌ	―	陳	ヂン	陣ト同ジ 軍―
	陶	タウ	スエモノ ―器	―	陶	ヤウ	タノシム又人名 ―然 庚―
	隃	ユ	コユ	―	隃	エウ	ハルカ 遙ト同ジ
	隊	タイ	兵―	―	隊	ツ井	オツル 墜ト同ジ
	隋	ズ井	國名 元ト隨ノ省	―	隋	キ	ヤブル
隹	難	ナン	カタシ	―	難	ダ	ナニヤラヒ 儺ト同ジ
非	靡	ヒ	ナビク	―	靡	マ	摩ト同ジ 山名
革	鞠	キク	マリ	―	鞠	キウ	芎ト同ジ
頁	須	シユ、ス	モチフ、スベカラク	―	須	ハン	斑ト同ジ 魚―文竹
	頌	シヤウ	ホム	―	頌	ヨウ	容ト同ジ 從―
食	食	シヨク	クラフ ―物	―	食	シ	イヒ、ヤシナフ 簞―
	飾	シヨク	カザル 修―	―	飾	チヨク	イマシム 飭ト同ジ 戒―
	餐	サン	クヒモノ	―	餐	ソン	熟食
馬	馮	フ	姓	―	馮	ヒヨウ	タノム、ヨル ―河
	騷	サウ	サワグ	―	騷	シヨウ	地名
鬲	鬻	イク	ヒサグ	―	鬻	シユク	カユ 粥ト同ジ

鬼

- 魄（ハク）タマシヒ 魂— ― 魄（タク）オチフル 托ト同ジ 落—

鹿

- 麇（キン）クジカ ― 麇（クン）ムラガル 羣ト同ジ —至
- 麗（レイ）ウルハシ ― 麗（リ）ツク、地名、人名 高—
- 麑（ゲイ）カノコ ― 麑（メイ）鉏—

黑

- 黨（タウ）トモガラ ― 黨（シヤウ）姓

齊

- 齊（セイ、サイ）ヒトシ、トトナフ ― 齊（シ）モフク —衰 ― 齊（サイ）齋ト同ジ 又ツツシム

龍

- 龍（リヨウ、リユウ）タツ ― 龍（ロウ）壟ト同ジ —斷

龜

- 龜（キ）カメ ― 龜（キン）ヒビキル 不—手

前述の如く本章に掲げた漢字の字音には、所謂使用漢字以外のものも少しはある。就中專門の漢文學者にても、現今にては、區別を附けて居ないものもある。余は前表を掲げたが必しも是等の通に是非使用せねばならぬとも思はないのである。是等の取捨に關しては、後篇熟字の讀方に至つて更に詳說することにする。

第十二章　字訓の如くにして字音である漢字

漢字中字訓の如く思はれて居るが、其實字音であるものも多いのである。尤も其内

菊（キク）　蘭（ラン）（又ハラニ）雁（ガン）　象（ザウ）

の如きは、元と各ゝ相應の字訓のあるものも、現今は主として字音を以て、呼ぶことになつて居て、其字音であることは、誰も承知して居る。併し次に掲げるものに至つては、時として其字音であることを氣付かざるものもある。

亭（チン）（宋音）　圖（ヅ）（呉音）　幕（マク）（呉音）　悔（クヒ）（呉音「ケ」ノ反）　葛（クズ、カツラ、カド）（共ニ字音ノ轉）　梅（ウメ）（呉音ノ上ニウチ添ヘタ）　死（シ）（漢音）

洲（ス）（呉音）　畫（ヱ）（呉音）　緣（エニ）（漢音ノ轉）　繪（ヱ）（呉音）　蟬（セミ）（漢音ノ轉）　襖（アヲ）（漢音ノ古イ假名遣）　鈴（リン）（唐音）　錢（ゼニ）（漢音ノ轉）　馬（ウマ）（呉音ノ上ニウチ添ヘタ）

又「琴（コト）」は「琴（コン）の音（オト）」、「雁（カリガネ）」は「雁（ガン）の音（ネ）」の轉である。又其他寺（テラ）虎（トラ）鍾（チヨク）及盞（サラ）は朝鮮音であるのである。

又諸種の熟字殊に地名氏名等の固有名詞中の漢字の讀方の字音より來つて居るのに、字訓より來つて居る如く思はれるものも、少くないが、今は之を略する。

又次に掲げるものの讀方は、字訓であるか、或は字音を誤つたのであるかは不明である。

雹ヒウ　餡アン　篗ワク

是等は多分「雹」の字音「ハク」の漢音を「ハウ」と誤認し、其呉音「ヒウ」を用ひたのであらう。又「餡」は字音「カン」、篗は字音「ヤク」を誤認したのであらうもの內にて、「豌豆」「鍛冶」等の讀方も同樣の誤認から來つて居るのであるが、是は後篇に讓ることとする。但し「鍛冶」には異說はないことはない。

又其他

笏

を「シャク」と讀むのは、本音元と「コツ」であるが、「コツ」は「骨」の字音と同じくして、緣喜が惡いから、其長さ、普通に、一尺であるより、遂に「尺」の字音を以て、讀んだのである。北海道の千歲村は土語「シコツ」であつたのを、「死骨」の字音と同一であるから、遂に目出度い名に改めたのである。但し湖水だけは人が住まない所であるから、原名を存し、支笏湖として居る。序に述べて置く。

第八篇　熟字の讀方

第一章　熟字

漢字が二字或は三字以上連續して、一語の意義を顯すものを熟字と云ふ。熟字には其各文字獨立にして、共に合同的の意義を顯すものが多い。例へば

天地　山水　草木　禽獸　上下　左右

又下字を主として上字を從とするものがある。例へば

老人　少女　長袖　短脚　紅花　白雪

又上字を主とし、下字を從とするものがある。例へば

儼乎　凛然　卒爾　忽焉　躍如　快哉

又同一の名詞或は形容詞副詞等を疊用するものもある。例へば

事事　物物　山山　川川　赫赫　明明　永永　態態

等の如くである。而も熟字は其連續するときに當つて、音韻の工合に依り、上下の位置は、古來一定の習慣に從ふものである。例へば

迅雷　風烈
伏龍　鳳雛

等の如きは、雷風又は龍鳳が、各々其主要の文字にして相對するに拘らず、其位置が轉倒して居るのである。是等は音韻上の句調に依るものである。

序に一の閑話を附加へようか、

淸人男女爭權、男曰、男天女地、旣曰天地、天上而地下、明矣、女曰、女陰男陽、旣曰陰陽、陰上而陽下、明矣、男曰、男女配乾坤、乾上而坤下、女曰、男女配內外、內上而外下、男曰、男女比剛柔、剛上而柔下、女曰、男女是雌雄、雌上而雄下、男又曰、以夫妻言之、夫上而妻下、女又曰、以牝牡言之、牝上而牡下、於此男怒曰、然則男女二字、果如何、遂不使女復言、若使女更言之、實不知其所窮極也。

第二章　熟字の讀方

漢字の讀方は、前篇に於て述べたるが如く、一字にて各々數種の字音讀と、數種の字訓讀との種類があるのみならず、是等の漢字が二字或は時として三字以上連續し

て、熟字となつたものは、其意義の如何に依り、又習慣上の如何に依つて、一字一字の各種の讀方が、相互に錯綜して、種々の讀方をなさねばならぬのである。

又前述の如く、桓武天皇が、明經の徒に詔して、儒書を悉く漢音にて讀ましめられたから、從來主として儒書中に在る熟字は、主として漢音讀ではあるが、佛書は呉音讀を用ひ、之が通俗に廣まつたし、殊に呉音は多くはなだらかな發音があつて字訓の發音に近いからして、通俗には主として呉音讀を用ひて來たのである。又熟字中の通俗にて制作したものは、字音讀、字訓讀の混同したものと、全く字訓讀のものとの種類もある。其他諸種の音便等のために、又別種の讀方をなさねばならぬものも少くない、故に熟字の讀方に關しては、各熟字に就いて、一々之を吟味せねば、固より明なるものではない。併し大體に於ける標準は次の二種であると思ふ。

一、從來廣く通俗に用ひられたる熟字は、主として呉音讀又は字訓讀のものが多い。

二、從來學者間にのみ用ひられたる熟字は、主として漢音讀のものが多い。又近來新に制作せられたる熟字も漢音讀のものが多い。但し從來漢字中、殆ど全

く漢音を使用しないものは、固より呉音讀を用ふるのである。

以上は固より單に大體の標準に止るのである。其詳細なることは、以下章を追うて、其種類を掲げることとする。

今熟字の讀方の緒言的たる本章を終るに當つて、其讀方の多様なることの數例を示さう。

第一。「生」の一字は、其讀方容易の様であるが、種々の熟字又は固有名詞となつて次の十數種の讀方がある。

生徒（セイ）　平生（ゼイ）　生涯（シヤウ）　誕生（ジヤウ）　生物（イキ）　生田（イク）（[illegible]名）　生花（イケ）

生駒（イ）（氏名）　生絲（キ）　生立（オヒ）　竹生（フ）（地名）　生肴（ナマ）　生形（ウブ）（氏名）　生形（オボ）（氏名）

東生（ナリ）（氏名）　生際（ハエ）　新生（クラ）（氏名）　生付（ウマレ）　生月（ウキ）

其他「彌生」を「ヤヨヒ」と讀む。是は「イヤオヒ」より「ヤオヒ」となり、更に音便となつて、「ヤヨヒ」となるものであるから、此場合「生」の一字が「ヨヒ」或は「ヒ」の如き發音となると見做しても善い位である。

又下野國に

船生（フニユウ）　玉生（タマニユウ）

と云ふ鄰接の二村がある。「船生」は元と「フネフ」より來て居て、前述の「竹生などと同一であるが、其發音が、恰も「生」が「ニユウ」と同様である如ぐ聞える。依つて其發音を「玉生」の「生」にも及ぼしたのである。此類は他にも澤山ある。

第二。「神戸」の地名は、地方に依つて、次の九種の讀方がある。

神戸（カウベ）（攝津）　神戸（カウド）（相摸、大隅）　神戸（ガウド）（美濃）　神戸（カウド）（紀伊）　神戸（カウト）（駿河）
神戸（カンベ）（伊勢、尾張）　神戸（カンド）（遠江）　神戸（ジンゴ）（美作）　神戸（カンナベ）（備後）　神戸（クマシロ）（肥前）

第三。同じ「五十」の二字が、氏名中に在るときは、次の讀方の相違がある。

五十（イソ）　五十山（ヨスヤマ）　五十川（イスズカハ）　五十川（イサカハ）　五十川（イカガハ）　五十子（イカゴ）
五十子（イカンゴ）　五十公（イキミ）　五十公野（ツツシノ）　五十君（イシミ）　五十君（イキミ）　五十君（イギミ）
五十河（イツカハ）　五十棲（イホスミ）　五十棲（イラスミ）　五十嵐（イガラシ）　五十鈴（イスズ）　五十幡（イカハタ）

第四。同じ「成」の一字が、人名となつて居るときは、種々の讀方がある。

成（ナリ）　成（ナル）　成（シゲ）

は大抵の人は、知つて居らうが、其他

成（アキ）　成（アキラ）　成（ノリ）　成（ヒラ）　成（フサ）　成（マサ）　成（ミチ）

等もあるのである。楠木正成は、最初「マサナリ」と呼ばれたが、將軍成良親王の諱を避けて、後に「マサシゲ」と唱へられたのであるさうである。

又「正直」の二字を用ふる場合でも本人に其讀方を聞かねば、一向分り難いものである。故内藤恥叟は元と「正直」の本名であつたが、世人は「マサナホ」「マサタダ」「セイチヨク」……と呼び、まさか「シヤウヂキ」と讀むものはなかつたらうが、本人は「マスグ」と稱へて居られたさうである。中々正直には讀めないものである。

第五。　同じ「上」の一字にても、種々の熟字となり、固有名詞等となつたときには、種々の讀方がある。明治十六七年頃、假名採用論の盛な時分、今の某文學博士の作られた次の文があつた。但し余は多少變更して、一二の字句を增した。

上（カミ）方の上（ウヘツ）方の雲の上（ウヘ）人と、某上（シヤウ）人と、上（カウ）野前橋より、上（ウヘ）野山下まで、上（ジヤウ）下十人、上（カミ）下を著け、汽車に上下（ノリ）し、又汽船の上（ジヤウ）下に乘組んで、海上（ジヤウ）上（シヤン）海に赴く。

第三章　漢音、呉音又は漢音呉音混同にて讀むべき熟字

本章の熟字を細別して、次の四種とする。

第一。上下共に漢音にて讀むべき熟字

是は從來學者間に於て、使用するもの、又は近來新に制作したる熟字の八九割以上であるから、特に其例を擧げる必要はないが、今唯通俗にても使用するものの中、却つて漢音又は漢音の變化より來つて居るもの數種を示さう。

部首畫數	上下共ニ漢音ニテ讀ムべキ漢字表		
二	仁惠(ジンケイ)	入水(ジフスヰ)	入來(ジフライ)
三	執心(シンシン)	尾籠(ビロウ)	
四	愛執(アイシフ)	歳暮(セイボ)	
五	知己(チキ)		

七十	重陽（チョウヤウ）　體裁（テイサイ）

右の內「入」を「ジュ」の如く發音するが、是は「入」の漢音「ジフ」より多少變化したものと見做す方が善からう。「尾籠」は元と「嗚呼（ヲコ）」の字音を「尾籠（ヲコ）」の字訓にて假借し、後に之を字音、即ち漢音讀にしたのである。

第二。上字漢音、下字呉音にて讀むべき熟字

上字下字とは、主として二字より成れる熟字に就いて言ふのであるが、時として三字以上のものもある。是は大體に依つて分類をなした。以下皆同じい。

上字漢音下字呉音ニテ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	
一	一切（イツサイ）　一所懸命（イツショケンメイ）
二	五色（ゴシキ）　介錯（カイシャク）　僧都（ソウヅ）　億劫（オクコフ）　八卦（ハツケ）　利己（リコ）　北陸（ホクロク）
三	同勢（ドウゼイ）　因業（インゴフ）　圍棋（ヰゴ）　天文（テンモン）　天井（テンジャウ）　宣下（センゲ）　彩色（サイシキ）　影供（エイグ）

	四		五	六	七	八	九
幸便（カウビン）	必定（ヒツヂヤウ）	檢校（ケンゲウ）	異口同音（イクドウオン）	簞笥（タンス）	誕生（タンジヤウ）	金打（キンチヤウ）	食物（ショクモツ）
庖丁（ハウチヤウ）	所化（ショケ）	次第（シダイ）	禮式（レイシキ）	自己（ジコ）	談話（ダンワ）	開眼（カイゲン）	餘所（ヨソ）
	所作（ショサ）	歸依（キエ）	眞紅（シンク）	自業自得（ジゴフジトク）	諺文（ゲンモン）		
	斷食（ダンジキ）	法眼（ハフゲン）			身體（シンタイ）		
	書物（ショモツ）	深紅（シンク）			軟障（ゼンジヤウ）		
	最後（サイゴ）				重疊（チヨウデフ）		
	最期（サイゴ）				郵便（イウビン）		
	樣子（ヤウス）						

右の內、通俗には「一所懸命」を「一生懸命」、「簞笥」を「簟笥」と誤用することがある。併し「簟」は字音「テン」意義「ムシロ」のことであるが、有名の某國語の字書にも、「簟笥」と誤用したまゝ數十版を重ねてある。又「諺文」は朝鮮の通俗文のことにして、又「オンモン」と讀む人もある。其他從來「隋煬帝（ズヰヤウダイ）」の「帝」を不倫の帝であるからとて、吳音として讀んだ。

第三。上字呉音、下字漢音にて讀むべき熟字

上字呉音、下字漢音ニテ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	
一	下乘(ゲジヤウ) 乃至(ナイシ)
二	化粧(ケシヤウ) 入魂(ジツコン) 八音(ハチイン)(音樂ノ語) 力士(リキシ) 勇士(ユウシ) 卦算(ケイサン)(文鎮)
三	唯一(ユヰイツ) 圖書(ヅシヨ) 堆朱(ツヰシユ) 夏至(ゲシ) 封印(フウイン) 建立(コンリフ) 律義(リチギ)
四	恰好(カツカウ) 施療(セリヤウ) 是非(ゼヒ) 會得(エトク) 有得(ウトク) 有德(ウトク) 柄杓(ヒシヤク) 模範(モハン)
五	毬杖(キツチヤウ) 油煙(ユエン) 流布(ルフ) 無用(ムヨウ) 生得(シヤウトク) 生涯(シヤウガイ) 由緒(ユヰシヨ) 發心(ホツシン) 發企(ホツキ) 發起(ホツキ) 發端(ホツタン) 矛盾(ムジユン) 禮拜(ライハイ)
六	結緣(ケチエン) 苗字(メウジ) 行列(ギヤウレツ) 初位(ソヰ)
七	豐樂(ブラク) 越度(ヲチド) 遊山(ユサン) 都合(ツガフ) 都度(ツド)
八	鐘樓(シユロウ)

九	頭巾(ヅキン)　風情(フゼイ)
十一	鹽梅(アンバイ)

右の内「圖書」を上下とも、漢音にて「トショ」と讀むこともある。又「模範」は上下とも漢音にて「ボハン」と讀むものもある。又「柄杓」は「ヒサゴ」にて字音にあらずと言ふものもあるが、是は「杓」の字音「ヒヤウ」のみを知つて、別に音「シヤク」義「サカヅキ」のあることを氣附かずして、此説をなしたのであらう。

第四。上下共に吳音にて讀むべき熟字

是は從來佛書中にて使用するもの、及廣く通俗に於て使用する熟字の八九割以上は、之に屬するものである。故に今一々例を擧げるには及ばないが、他の例に倣つて、其重なるものを示すことにする。

部首ノ畫數	上下共ニ吳音ニテ讀ムベキ熟字表
一	一文不通(イチモンフツウ)　一存(イチゾン)　一言半句(イチゴンハンク)　一途(イチヅ)　世間(セケン)

二

今昔（コンジヤク）　供奉（グブ）　修復（シユフク）　假病（ケビヤウ）　功力（クリキ）　功德（クドク）　刹那（セツナ）

三

口授（クジユ）　回向（ヱカウ）　大極殿（ダイコクデン）　夫役（ブヤク）　巨細（コサイ）　希求（ケク）・役人（ヤクニン）

居士（コジ）

四

忍辱（ニンニク）　懈怠（ケダイ）　成就（ジヤウジユ）　按察使（アゼチ）　撞木（シユモク）　數珠（ズズ）　文盲（モンマウ）

文部（モンブ）　明神（ミヤウジン）　景色（ケシキ）　會釋（ヱシヤク）　有卦（ウケ）　無卦（ムケ）　有象無象（ウザウムザウ）

有無（ウム）　有爲轉變（ウヰテンペン）　未曾有（ミゾウ）　杜撰（ヅザ）　棋笥（ゴケ）　正體（シヤウタイ）　殺生（セツシヤウ）

氣色（ケシキ）　烏帽子（ヱボシ）　無碍（ムゲ）　物相（モツサウ）（目分量）

五

甲板（カツパン）　秉燭（ヒヤウソク）　稀有（ケウ）

六

節會（セチヱ）　精舍（シヤウジヤ）　組織（ソシキ）　綠青（ロクシヤウ）　縱横（ジユウワウ）　繪圖（ヱヅ）　莊嚴（サウゴン）　虛空（コクウ）

融通（ユヅウ）

七

言語道斷（ゴンゴダウダン）　請待（シヤウダイ）　謀叛（ムホン）　越年（ヲツネン）　通力（ツウリキ）　遺言（ユヰゴン）　重大（ジユウダイ）

重病（ジユウビヤウ）

八	金色（コンジキ）
九	音聲（オンジヤウ）　饅頭（マンヂユウ）
十六	龍頭（リユウヅ）

右の內、杜撰の讀方をば、普通の音訓以外、別種のものの樣に思つて居るものもあるかも知れぬ。撰の本來の漢音「サン」意義「ツクル」「アツム」であるので、又時として轉注して「選」と意義を同じうするものである。故に「撰文」又は「新撰」等は、其本來の意義に從ふのである。さて、「杜撰」とは「杜默」といふ支那人が、曾て詩を撰つたが、多く律、即ち詩の法則に合はなかつたから、世人は之を嘲つて、事物を制作して、其格に合はぬのを、杜氏の作、即ち「杜撰」と言つたのである、是が我國にも傳り、遂に殆ど通俗となり、呉音讀となつたのである。漢音「ト」又は「トウ」の呉音は、殆ど總べてが「ツ」「ヅ」又は「チユ」「ヂユ」であるのである。又「莊嚴」を佛家は却つて「シヤウゴン」と讀む。

第四章　漢音又は呉音と字訓との混同、或は字訓のみにて讀むべき熟字

本章の熟字は、殆ど總べて通俗にて使用すべきものにして、所謂學者間のみに行はれた熟字は、此種類に加はらぬものである。此種類の熟字を細別して、次の五種とする。

第一．上字漢音、下字字訓にて讀むべき熟字

此讀方は從來の漢文中にはなかつたから、漢文學者は是等の讀方を「本箱讀」と稱して大に擯斥したものであるが、現今の普通文に於ては、是非此讀方をなさねばならぬものも頗る多いのである。是は普通語中、此種類に屬するものが、多くなつたからである。而も今は唯其數例を掲げることにする。

部首ノ畫數	上字漢音　下字字訓ニテ讀ムべキ熟字表
二	介添（カイゾヘ）　両掛（リヤウガケ）　両替（リヤウガヘ）
三	坐敷（ザシキ）
四	本箱（ホンバコ）　枝折（シヲリ）
五	理合（リアヒ）　皆掛（カイガケ）　端物（タンモノ）

七	量目(リヤウメ)
九	頭取(トウドリ)

第二、上字字訓、下字漢音にて讀むべき熟字

是も第一の場合に於ける熟字と同樣にて、從來「湯桶讀」と稱するものである。

部首ノ畫數	上字字訓、下字漢音ニテ讀ムベキ熟字表
二	切符(キツプ)
四	手製(テセイ)　手數(テスウ)　揚句(アゲク)　敷布(シキフ)　有體(アリテイ)　湯桶(ユトウ)　濃醬(コクシヤウ)　物具(モノゲ) 猿樂(サルガク)
六	組長(クミチヤウ)　初陣(ウヒヂン)
七	貸金(カシキン)
八	金佛(カナブツ)　雨具(アマグ)

第三、上字呉音、下字字訓にて讀むべき熟字

是も第一の場合に於ける熟字と同樣にて、從來重箱讀」と稱するものである。併し余は本章に屬する熟字を、便宜上斯く細別したが、從前は「本箱讀」「湯桶讀」又は「重箱讀」をば、同一のものとなし、單に字音と字訓との混同の場合に於て、人々に依り任意の稱呼をなし、之を嘲る言葉として居つたのである。

部首ノ畫數	上字呉音、下字字訓ニテ讀ムベキ熟字表
一	不束(フツツカ)
二	借家(シヤクヤ)
三	征矢(ソヤ)
四	母屋(モヤ)　獻立(コンダテ)
六	紺色(コンイロ)　能書(ノウガキ)
七	重箱(ヂユウバコ)

第四　上字字訓、下字呉音にて讀むべき熟字

部首ノ畫數	上字字訓、下字呉音ニテ讀ムベキ熟字表
三	吹聽(ツイチヤウ)　大都(オホヅ)(大概)　小癪(コシヤク)
四	日歩(ヒブ)　日賦(ヒブ)　相圖(アヒヅ)　株式(カブシキ)
五	直段(子ダン)
六	結納(ユヒナフ)　初産(ウヒザン)

第五　上下共に字訓にて讀むべき熟字

部首ノ畫數	上下共　字訓ニテ讀ムベキ熟字表
一	一入(ヒトシホ)　乘組(ノリクミ)
二	人手(ヒトデ)　假初(カリソメ)　催合(モアヒ)　入相(イリアヒ)　切手(キツテ)　割合(ワリアヒ)　厭果(アキハツ)　取扱(トリアツカヒ) 取組(トリクミ)　取繕(トリツクラヒ)　取締(トリシマリ)　取調(トリシラベ)

三	吹雪(フブキ)　埴輪(ハニワ)　夕凪(ユフナギ)　天晴(アツパレ)　失物(ウセモノ)　妹背(イモセ)　宛名(アテナ)　己惚(オノボレ)
四	市女(イチメ)　得手(エテ)　手形(テガタ)　手負(テオヒ)　手傳(テツタヒ)　手間(テマ)　手當(テアテ)　折敷(ヲシキ) 拵方(コシラヘバタ)　旅籠(ハタゴ)　木靈(コダマ)　相手(アヒテ)　淺手(アサデ)　淺葱(アサギ)　湯女(ユナ)
五	生先(オヒサキ)　生絲(キイト)　產土(ウブスナ)　產湯(ウブユ)　產著(ウブギ)　產聲(ウブコヱ)　稻村(イナムラ)　稻扱(イナコキ) 稻荷(イナリ)
六	組合(クミアヒ)　羽織(ハオリ)　聲色(コワイロ)　肝煎(キモイリ)　萠葱(モエギ)　薄刄(ウスバ)　藥玉(クスダマ)
七	見舞(ミマヒ)　誂向(アツラヘムキ)　賄方(マカナヒカタ)　賣捌(ウリサバキ)　跡目(アトメ)　躾方(シツケカタ)　采女(ウネメ)
八	間隙(マギハ)
九	靫負(ユギヘ)

右の内「稻村」は「稻叢」の假借「稻荷」は元と「稻生」の義である。又「靫負」は元と「ユゲヒ」より轉じたのである。

第五章　意譯にて讀むべき熟字

本章の熟字は、前章に於ける字訓讀のものと、相似て居るが、彼は一字一字に於ける字訓にて讀むべきものであり、此は一字づつに分つべからず、二字若くは三字以上熟したるまま、一種の意譯にて讀むべきものである。而して此種類の熟字は、前章のものと同じからずして、寧ろ從來の漢文中に在るものが多いのである。

部首ノ畫數	意譯ニテ讀むべき熟字表
一	一寸(チヨツト)　一任(サモアラバアレ)　一向(ヒタスラ)　無乃(ムシロ)
二	五十集(イサバ)　五月蠅(ウルサシ)　以爲(オモヘラク)　什麼(ドンナ)　任他(サモアラハアレ)　何如(イカン)　何若(イカン) 何爲(ナンスレゾ)　例之(タトヘ)　假令(タトヒ)　假設(タトヒ)　加之(シカノミナラズ)　十六夜(イザヨヒ)　却說(サテ)
三	可笑(ヲカシ)　只管(ヒタスラ)　周章(アワツ)　土產(ミヤゲ)　大凡(オホヨソ)　奈何(イカン)　如何(イカン)　就中(ナカンヅク) 幾何(イクバク)　從他(サモアラバアレ)　從教(サモアラバアレ)
四	忽諸(ユルカセ)　敦圉(イキマク)　所以(ユヱン)　所有(アラユル)　所在(アラユル)　所謂(イハユル)　日外(イツゾヤ)　日和(ヒヨリ) 春日(カスガ)　月代(サカイキ)　有繫(サスガ)　流石(サスガ)　無慮(オヨソ)　爲換(カハセ)　爲替(カハセ)

五	甚麼(ドンナ)
六	縱令(タトヒ)　縱使(タトヒ)　若干(ソコバク)　若何(イカン)　若箇(イツレ)　苟且(カリソメ)　草臥(クタビレ)　等閑(ナホザリ)
七	這麼(コンナ)　道說(イフナラク)　遮莫(サモアラバアレ)　都盧(スベテ)
八	聞說(キクナラク)　閑話休題(サテ)　青天白日(アリノママ)
九	飛鳥(アスカ)
十二	黃昏(タソカレ)

右の内忽諸「所在」「若干」「苟且」「等閑」「無慮」「閑話休題」及青天白日」「黃昏等は字音讀にすることもある。又「無慮」は元と「概數」を示すものであるが通常之を「多數」の場合にのみ限るものと誤解して居るものもある。

又「春日」は春日(ハルヒ)の加須賀「飛鳥」は飛鳥(トブトリ)の明日香(アスカ)といへる枕詞の字を、直に此地名に當てて讀んだのである。

第六章　唐音又は宋音等にて讀むべき熟字

従來の熟字中唐音又は宋音等にて讀むべきものがある。併し此種類のものは、餘り多くはない樣である。

唐音又ハ宋音等ニテ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	
二	卓袱（シッポク）
三	土瓶（ドビン） 天平（テンピン） 天秤（テンビン） 孟浪（マンラン） 外郎（ウヰラウ）
四	應帝（インデン） 拂子（ホッス） 挑燈（チャウチン） 提燈（チャウチン） 普請（フシン） 椅子（イス） 炭團（タドン） 焙爐（ホイロ）
五	看經（カンキン） 石灰（シックヰ）
六	納戸（ナンド） 綾子（リンズ） 緑礬（ロウハ） 緞子（ドンス） 羊羹（ヤウカン） 胡散（ウサン） 胡論（ウロン） 胡亂（ウロン） 蒲團（フトン） 行在（アンザイ） 行宮（アングウ） 行脚（アンギャ）
七	透頂香（トウチンカウ） 達磨（ダルマ）
八	銀杏（ギンアン） 鐵瓶（テツビン） 雙六（スゴロク）（韓）
九	風鈴（フウリン）

十	馬錢(マチン)
十二	黃絹(ホツケン)
十六	龍膽(リンダウ)

右の內「卓袱」は食卓のこと「天秤」の「秤」は「稱」(音「ショウ」義「ハカリ」)と同音同義であるが「平」と同音であると誤解し、唐音「ヒン」として久しく襲用せられたのである。又「外郎」は元と支那の官名であるが、今は菓子周防岩國の名產名等として存在して居る。又「應帝」は印度より渡來の皮革「透頂香」は藥名「馬錢」は植物名である其他從來漢文學者の中には、支那の地名「松江」に限つて、唐音を用ひ「松江鱸」などを「ズンカウノススキ」と讀んで居つたものもある。其他の地名は日本讀にして居ながら、唯「松江」のみを別種とするには及ばぬではないか。又吟詩家中時として「南朝四百八十寺(シン)」と、故らに入聲を避けて吟ずるものもある。又「杏(アンズ)」は「杏子」の唐音、又「茴香(ウヰキヤウ)」の藥名も。其唐音である。

又「雙六」の外朝鮮語の國語化したるものは、他にも少くはない。「猪口(チヨク)」「味噌(ミソ)」等も朝鮮語から來つて居るし、是は熟字ではないが「寺(テラ)」「尼(アマ)」も是である。又「虎(トラ)」も朝鮮語であるとの

說もあるのである。「虎」は古來我國に居ないものであるから、さもあることであらうが。是は前篇にも述べて置いた。

第七章　梵語にて讀むべき熟字等

漢字の熟字中、梵語を漢字の音譯を以て、記したものがある。而して是は其漢字の呉音を以て讀むべきものであるから、特に一章を設くるには及ばないのであるが、其意義は固より漢字の意義より來つて居るのでないから、其說明を兼ねて、其最も普通なるものを示すことにした。

部首ノ畫數	梵語ニテ讀ムベキ熟字等ノ表
一	三昧（サンマイ）（正定）
二	佛陀（ブツダ）（佛）　伽藍（ガラン）（精舍）　修羅（シユラ）（天）　僧伽（ソウカ）（僧）　優婆夷（ウハイ）（信女）　優婆塞（ウバソク）（信士）　優曇華（ウドンゲ）（元ト瑞應ノ花、實ハ昆蟲ノ卵）　刹那（セツナ）（一秒ノ七十五分ノ一ニ相當スル）　卒堵婆（ソトバ）（方墳）
三	和尚（ヲシヤウ）（僧位）　喇叭（ラツパ）（樂器）　奈落（ナラク）（地獄）　娑婆（シヤバ）（忍界）　娑羅（シヤラ）（堅固）

四	婆羅門(淨行)　賓頭盧(羅漢ノ名)　夜叉(暴惡)
	怛刹那(百二十刹那)　慕何(愚)　摩斯陀(猿)　文珠(妙徳又知識)
	曼陀羅(雜色)　臘縛(六十怛刹那)　檀那(施主)　比丘(乞士)　比丘尼(乞女)
五	毘沙門(多聞)　沙彌(佛門ニ入ル男子)　牟呼栗多(一晝夜ノ三十分ノ一)
	玻璃(水晶)　瑠璃(透徹)　盂蘭盆(倒懸ヲ救フ)
六	羅漢(阿羅漢ノ略)　般若(知慧)　菩薩(佛ノ次位)
七	迦波羅(瓦)　達磨(法)
八	金毘羅(威加王)　鉢(應器)　閻魔(遮止)　阿修羅(天)　阿鼻(無間)
	阿闍利(軌範)　阿羅漢(阿ハ「不」羅漢ハ「生」後世マタ生セヌ知識アルモノ)
九	須彌(微妙ナル高山)　頭陀(修行)　韋陀天(能ク走ツタモノノ人名)

是等の種類は固より數へ盡す譯には往かぬから、數例に止めた。

第八章　西洋語にて讀むべき熟字等

西洋語の國語化せるものに、故らに漢字を當箝め、而も其漢字を本來の字音及意義以外の一種の讀方をなすべきものがある。

左の表中「兩用」と記すものは其振假名以外、通常の音義若くは意義に近く讀むこともあるのである、但し兩用の明白なるものは之を記することを略する。

部首ノ畫數	西洋語ニテ讀ムべキ熟字ノ表			
一	三鞭酒(シャンペン)(フランス)	上衣(コート)(イギリス)	上穿(スリッパー)(イギリス)	乾麵包(ビスケット)(イギリス)
二	丹寧(タンニン)(イギリス)	停車場(ステーション)(兩用)(イギリス)	倶樂部(クラブ)	兩脚規(コンパス)(オランダ)
	亞麻織(リンネル)(イギリス)	刷子(ブッシ)(イギリス)	卓子(テーブル)(イギリス)	南瓜(カボチャ)
	公密錢(コンミツション)			
三	卵糖(カステラ)(オランダ)	吊床(ハンモック)(イギリス)	吳呂(ゴロ)(オランダ)	喞筒(ポンプ)(イギリス)
	合羽(カッパ)(スペイン)	外套(マント)(兩用)(オランダ)	大猩々(ゴリラ)(イギリス)	天幕(テント)(イギリス)
	土撥鼠(モルモット)(イギリス)			

四

天麩羅（テンプラ）（スペイン）
小洋燈（カンテラ）（オランダ）
庭球（ロンテニス）（イギリス）
快走船（ヨツト）（イギリス）
打（ダース）（イギリス）
斷髮器（バリカン）（イギリス）
有平糖（アルヘイトウ）（フランス）
毛布（フランケツト）（イギリス）
油（オイル）（イギリス）
洋犬（カメ）（イギリス）
洋傘（カウモリガサ）
洋燭臺（カンテラ）（オランダ）

天鵞絨（ビロード）（スペイン）
小絨（フランネル）（イギリス）
引火奴（マツチ）（イギリス）
手巾（ハンケチ）（イギリス）
打球杖（ラケツト）（イギリス）
日曜日（ドンタク）（オランダ）
木乃伊（ミイラ）
毛織（モウル）
洋刀（サーベル）（オランダ）
洋杖（ステツキ）（イギリス）
洋琴（ピヤノ）（イギリス）
洋櫓（オール）（イギリス）

安母尼亞（アンモニヤ）（イギリス）
巴旦杏（ハタンキヤウ）
手帖（ノートブツク）（イギリス）
探照燈（サーチライト）（イギリス）
暖爐（ストーブ）（兩用 イギリス）
朱欒（ザボン）
氷滑（スケート）（イギリス）
小洋刀（ナイフ）（イギリス）
洋杯（コツプ）（オランダ）
洋簪（リボン）（イギリス）
沼氣（マーシガス）（オランダ）

小舟（ボート）（イギリス）
帽子（シヤツポ）（フランス）
手套（ミツト）（イギリス）
支那船（ジヤンク）（イギリス）
更紗（サラサ）
橄欖（オリーブ）（イギリス）
汞膏（アマルガム）（イギリス）
洋巾（ハンケチ）（イギリス）
洋針（ピン）（イギリス）
洋燈（ランプ）（イギリス）
浮石糖（カルメ）

五

煙草《タバコ》（オランダ）　煙管《キセル》（スペイン）　煙管竹《ラオ》　煉石灰《セメント》（イギリス）

燐寸《マッチ》（イギリス）　爆薬《ダイナマイト》（イギリス）　牛酪《バタ》イギリス）　毬《ボール》（イギリス）

珈琲《コーヒー》（オランダ）　瓦斯《ガス》（オランダ）　甘藷《ポテトー》（兩イギリス用）　番瀝青《ペンキ》（オランダ）

發電機《ダイナモ》（イギリス）　白墨《チョーク》（兩イギリス用）　短上衣《ジャケツ》（イギリス）　短胴服《チヨツキ》（イギリス）

短銃《ピストル》（イギリス）　短艇《ボート》（イギリス）　短雞《チャボ》　石鹸《シャボン》（フランス）

硝子《ガラス》（イギリス）　礬水《ドーサ》（オランダ）　福島鳥《カナリヤ》　季候風《モンスーン》（イギリス）

六

窒扶斯《チブス》（ギリシヤ）　競走《レース》（イギリス）　目利安《メリヤス》（ホルトガル）

米突《メートル》（フランス）　紅殼《ベニガラ》　紅寶玉《ルビー》（イギリス）　紋羽《モンパ》

絲瓜《ヘチマ》　絲菌《バクテリヤ》（イギリス）　綠門《アーチ》（イギリス）　綢《チツト》（イギリス）

線帶《レース》（イギリス）　縫機《ミシン》（イギリス）　繻珍《シュチン》（ホルトガル）　羅紗《ラシャ》（オランダ）

洋毛織《メリンス》スペイン）　聖書《バイブル》（兩イギリス用）　聖誕生日《クリスマス》　肉叉《ホーク》（イギリス）

肉汁《ソップ》（イギリス）　脂粉《コスメチック》（イギリス）　胴服《チヨツキ》（イギリス）　肩掛《シオール》（イギリス）

七

英寸（インチ）(イギリス)
英尺（フート）(イギリス)
英斤（ポンド）(イギリス)
英里（マイル）(イギリス)

莫大小（メリヤス）(ホルトガル)
虎列剌（コレラ）(イギリス)
衣嚢（ポケット）(イギリス)
袋鼠（カンガルー）(イギリス)

襯衣（シャツ）(イギリス)
覇王樹（シャボテン）

解紗（ガーゼ）(イギリス)
記錄（レコード）
風刺畫（ポンチ）(イギリス)
護謨（ゴム）

貝多葉箄（アンペラ）
蹴鞠（フートボール）(イギリス)
賞牌（メタル）(イギリス)
郵便（ポスト）(兩用イギリス)

野球（ベースボール）
軌道（レール）(イギリス)

八

金巾（カナキン）(ホルトガル)
金平糖（コンペイトー） スペイン
金剛石（ダイヤモンド）(イギリス)
金絲鳥（カナリヤ）

鈕釦（ボタン） ホルトガル)
鈴（ベル）(イギリス)
鉛筆（ペンシル）(兩用イギリス)
鐵丹（ベニガラ）

鐵朶（タガヤサン）
鐵筆（ペン）(イギリス)
鐵葉（ブリキ）(オランダ)
阿片（アヘン）(イギリス)

隧道（トンネル）(イギリス)
電動機（モートル）(イギリス)
青寶玉（サファイアー）

九

鞄（カバン）
風琴（オルガン）(兩用イギリス)
風琴（オルゴール）(兩用オランダ)
飾燈（イルミネーション）(イギリス)

十

馬脾風（ヂフテリア）
馬鈴薯（ジャガタライモ）
骨牌（カルタ）(スペイン)
高脚杯（コップ）

十一　十二

高襟(ハイカラ)　鬪鷄(シヤモ)

麥酒(ビール)（兩用イギリス）　麵包(パン)（ホルトガル）　鳳梨(アナナス)　麝香(ムスク)（イギリス）

黑板(ブラクボールト)（兩用イギリス）　黑汁(インキ)（イギリス）　黴菌(バクテリヤ)（イギリス）

右の內、「南瓜」「合羽」「天鵞絨」「煙草」等は、襲用旣に久しいことである。又「倶樂部」「金平糖」等の如きは、普通の音訓に近いから、別として、其他近來の制作に懸るものは、普通の音訓通りに讀むべきものにあらず。是等は假名にて寫すことを余は希望するのである。併し普通の音訓通りに讀むべき洋館洋服、洋食等は例外である。元來世人は、新奇を好むものである。彼の岸田吟香の調製したる、精錡水は、皓礬即ち硫酸亞鉛水である。此亞鉛の英名「ジンク」を清音(シン)たる「精錡(ジンク)」にて音譯したのである。又彼の胸を空(スカ)す藥に、「ウルユス」といふものがある。是は「空」の行書を分解し、「ウルユ」となし。之に「ス」を加へたのである。又此節感冒の熱を取る藥に、「ネットリ」丸といふものがある。是等は亦故らに外國名を装つたのであらう。但し「空」の正しい字畫は「ル」に从ふのでない。元來「穴」は字音「ケツ」にして、其根元は「八(ハツ)」より生じて居るのである。

第九章　諸種の音便にて讀むべき熟字

凡そ漢字に限らず、二字以上又は二語以上連續して、熟字、熟語となるときは、其連續の如何に依り、各字又は各語の固有の發音を多少變化することがある之を總稱して、音便と言ふものである。

漢字の熟字の音便の種類を、余は細別して次の五種とする。

第一。　音便に依つて促音に讀むべき熟字

此音便は熟字の上字の字音が「フ」「ツ」「ク」「チ」「キ」の音尾を有する入聲の漢字にして、其熟字となつたために、上字の音尾が促音に變ずるのである。今其例を示さう。左表中促音の「ツ」は右傍に書く筈であるが、活字の都合上他の場合と同じく中央にした。

音便ニ依ツテ促音ニ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	
一	一杯（イツパイ）
二	八八（ハツバ）　出版（シユツパン）　北方（ホツパウ）　匹夫（ヒツプ）　十杷（ジツパ）　厄介（ヤツカイ）

三	合併(ガツペイ)　失敗(シツパイ)　學校(ガツカウ)　密閉(ミツペイ)
四	接待(セツタイ)　決定(ケツテイ)　法被(ハツピ)　活潑(クワツパツ)　月俸(グツポウ)
五	疾病(シツペイ)　發達(ハツタツ)　白金(ハツキン)　石橋(セツキヤウ)
六	筆法(ヒツパフ)　節操(セツサウ)　罰法(バツパフ)　肉桂(ニツケイ)　脚氣(カツケ)　薄荷(ハツカ)　結構(ケツコウ)
七	赫赫(カツカク)　逼迫(ヒツパク)
八	閣下(カツカ)
九	頡頏(ケツカウ)
十	鬱陶(ウツタウ)
十二	默許(モツキヨ)

右の內「ク」の音尾を有する「北」「厄」「學」「閣」等の類は、本來の音尾を附けながら、讀方のときのみ、促音に轉呼すれば善いと言ふものもあるが、元來假名は發音を寫すものなれば、成るだけ發音通りにすることを、余は主張する所謂國定教科書に於ても、「學校」を

假名にて寫すときは「ガッコー」としてあることである。

第二。音便に依つて濁音又は半濁音に讀むべき熟字

音便に依つて、熟字の下字を濁音、又は半濁音にて讀むべきものは少くない。之を新濁又は連濁と言ふ。之に對して本來の濁音のものを本濁と言ふこともある。

部首ノ畫數	音便ニ依ツテ濁音又ハ半濁音ニ讀ムベキ熟字表
一	三百（サンビヤク）
二	信心（シンジン）　先輩（センパイ）　出奔（シユツポン）　分際（ブンザイ）　別品（ベツピン）　北方（ホツパウ）　南山（ナンザン）　參拜（サンパイ）
三	問答（モンダフ）　因果（イングワ）　多勢（タゼイ）　大音聲（ダイオンジヤウ）　奉加（ホウガ）　奮發（フンパツ）　安產（アンザン）
	密閉（ミツペイ）　干瓢（カンピヤウ）　平等（ビヤウドウ）　彬彬（ヒンピン）
四	慇懃（インギン）　方方（ハウバウ）　春秋（シユンジウ）　月俸（ゲツポウ）　朋輩（ホウバイ）　活潑（クワツパツ）
五	琵琶（ビバ）　童子（ドウジ）
六	筆法（ヒツパフ）　算法（サンパフ）　船舶（センパク）　船頭（センドウ）　蒙求（モウギウ）　萬卷（バングワン）　萬歲（バンザイ）　萬福（バンプク）

七	辛抱（シンパウ）　連歌（レンガ）　遠方（エンパウ）　遵奉（ジユンポウ）
八	鎭西（チンゼイ）
九	顚沛（テンパイ）
十一	鱗比（リンピ）
十二	黃河（クワウガ）

是等の種類は、字訓讀の場合にも多くあるものであるが、此には字音讀の例のみに止めた。

第三。音便に依つて故らに清んで讀むべき熟字

漢字の本來の濁音なるもの、又は普通の場合に於て、殆ど全く濁音と認められたるものにても、其熟字となつたために、故らに清音にて讀むべきものがある。但し其中には連濁すべき樣子をなしながら、故らに連濁を用ひぬものもあるのである。

音便ニ依ツテ故ラニ清ンデ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	熟字
二	次第(シダイ)
三	寶生(ハウシヤウ)（謠曲ノ流派）
四	無上(ムシヤウ)（副詞）　片時(ヘンシ)
五	神道(シンタウ)
十一	鳩杖(キツチヤウ)

右の內「次第」の「次」は通常字音「ジ」と讀むべきものとなつて居るが、此熟字に限つて清んで讀むのである。

第四．　音便中、所謂連聲にて讀むべき熟字

熟字中、下字の音頭が、母音又は「ヤ」行「ワ」行の準母音であるときは、上字の音尾を受けて、一種の熟音を生ずることがある。之を連聲と言ふのである。而して其場合は、通常下字の音頭が、上字の音尾「タ」行「ナ」行、又は「マ」行に變ずるものである。

音便中、連聲ニテ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	熟字
一	三位（サンミ）
二	云々（ウンヌン）　元和（ゲンナ）　八音（ハッチン）　勤王（キンノウ）　南音（ナンニン）　反應（ハンノウ）
三	善惡（ゼンナク）　因縁（インチン）　天皇（テンノウ）　安穩（アンノン）　山王（サンノウ）　延引（エンニン）
四	源翁（ゲンノウ）　探幽（タンニウ）
五	發意（ホッチ）
六	算用（サンニヨウ）　紛紜（フンヌン）　舌音（ゼットン）　萬葉（マンチウ）　蘊奥（ウンノウ）
七	親王（シンノウ）　親和（シンナ）　觀音（クワンノン）　越王（エッタウ）
八	銀杏（ギンナン）　陰陽師（オンミヤウシ）　闕腋（ケッテキ）

右の内、「三位」の「三」の本來の字音「サム」「マ」行なれば、「位」の音「ヰ」と熟して「ミ」となり、「元和」の「元」の本音「ゲヌ」「ナ」行なれば、「和」の音「ワ」と熟して「ナ」となるのである。他も之に準ずる。

其他謠曲等に於ては、此連聲の音便を使用することは頗る多い。又熟字でない「テニヲハ」等の準母音、即ち「ヲ」などをも、此連聲に依つて讀むものがある。例へば

「御免ヲ蒙ッテ」を「御免ノ蒙ッテ」又は「御免ナ蒙ッテ」

といふ類である。

又外國語に於ても、此連聲は少くないものである。例へば

一、「ワン　オール」(One all)を「ワン　ノール」

二、「イン　エ　ポンド」(In a pond)を「イ　ネ　ポンド」

三、「ドント　ステップ　アポン　イット」(Don't step upon it)を「ドント　ステパ　ポニト」

と發音する類である。

第五。其他の音便にて讀むべき熟字

是も矢張廣き意義の連聲ではあるが是は必しも下字の音頭が、母音でない。唯其連續の如何に依り、習慣上一種の音便にて、各漢字の讀方を多少變化するものである。

部首ノ畫數	其他ノ音便ニテ讀ムベキ熟字表
一	七百(シチヤク)　之遶(シンヂウ)
二	判官(ハウグワン)
三	吼噦(コンクワイ)　大夫(タイフ)　大輔(タイフ)　少督(コガウ)　少輔(シヤウイフ)
四	恰好(カツカウ)　早速(サツソク)　暖簾(ナウレン)　朝臣(アソン)　拍子(ヒヤウシ)　指篦(シツペイ)　格子(カウシ)　楫取(カンドリ)　燒畠(ヤイバタ)
五	甲板(カツパン)　眞先(マツサキ)　眞向(マツコウ)
六	納得(ナツトク)　綠衫(ロクサウ)　脛楯(カイダテ)　蒟蒻(コンニヤク)　褐染(カチンゾメ)
七	贔屓(ヒイキ)
九	革茸(カウタケ)

右の内「之遶」の「之」の字音「シ」の發音を避けたのは「死」の發音と同一であるからである

「大輔」の「輔」の本來の漢音は「ホ」にあらずして「フ」であるのである。之に上字の音尾「イ」を熟して「イフ」となし、恰も「輔」を「イフ」と發音したのである。故に「少輔」の「輔」にも、同一の讀方をなさしめたのである。今此に序を以て、一つ述べることがある。官名等には古來和漢とも「大中小」と區別すべき所に「大中少」と「少」の字を用ひて居る。是は「少」は後世「多少」の「少」となつて居るが、元と「小」と「少」とは同一であつたとの說と、又「少」は「副貳」であり「大」の官の副貳として、此官を置いたので、後に「中」を挿入したのであるとの說とがある。

第十章　故らに延長又は省略して讀むべき熟字

本章のものも、矢張音便の一種と見做して居るものが、あるかも知れぬが、余は特に區別して、之を掲げることにしたのである。

第一。　故らに延長して讀むべき熟字

是は餘り多くはないが、全くないことはない。

部首ノ畫數	故ラニ延長シテ讀ムベキ熟字表
一	主從（シユウジユウ）
三	四時（シイジ）　夫婦（フウフ）　女房（ニヨウボ）　弑逆（シイギヤク）
六	素麪（ソウメン）　至言（シイゲン）
七	詩歌（シイカ）

右の内「四時」「弑逆」「至言」「詩歌」等の讀方は、前章第五に於ける「之遶」の讀方と同じく「シ」の發音を避けたのである。其他「一、二、三、四（イチニサンシ）」と讀むべき數字の「四」をも「ヨ」と讀む習慣となつて居る場合もある。併し皆悉くとはなつて居らぬ。或人が「四條畷」に至つて「ヨヂヤウナハテ」と言つて、土地の人に笑はれた話がある。又夫れかと思ふと、今日にても江戸時代の老人の中には、

「芝（シバ）の神明（シンメイ）」を「ヨバノヨンメイ」

と、發音し、一人にて物知り顔をして居るものもある。

第二。故らに中略して讀むべき熟字

諸種の熟字中、中略又は下略したるものは多い。是には字音讀のものもあり、又字訓讀のものもある。

中略又ハ下略シテ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	
一	上上無上無上(ジヨジヨムジヨムジヨ)
二	准三宮(ジユサングウ)　元興寺(グコゼ)
三	安達太郎(アダタラ)(岩代山名)　寧樂(ナラ)
四	心地(コチ)　搏風(ハフ)　日本(ニホン)　木瓜(ボケ)　本意(ホイ)　棧敷(サジキ)
五	端書(ハガキ)
八	震動雷電(シドラデン)　除目(ヂモク)

是等の種類を列擧すれば、際限はないことであらう。謠曲蓬萊島の中に、持ちたる寶は、‥‥‥じよじよむじよむじよ」とあるは「上上無上無上」のことであると、林羅山は解

釋した、京都地方にて、子供の泣くのを停めるに「グヮゴゼ」が來ると言ふ。是は元興寺に鬼が居つたとの故事からである。又竹田出雲の假名手本忠臣藏の中に「鐵砲霰のしだらでん」とあるは「震動雷電」の「動」の字音を「ダウ」と誤讀して居つたのである。元來漢字の字音は、其まゝにては、發音に角があつて、他の國語と同化し難いことがあるから、通俗のものにては、多少其角を去つて、他の國語と一致せしめたのである。

第十一章　字訓の如くにして字音である熟字

前篇に於て、字訓の如くにして、字音である諸種の漢字を掲げて置いたが、諸種の熟字殊に地名等の固有詞中、此種類に屬するものが少なくないものである。

部首ノ畫數	字訓ノ如クニシテ字音デアル熟字表
一	乙訓(クニ)
二	伊丹(タミ)　佐伯(ヘキ)　伯耆(ハウ)　但馬(タジマ)　依怙(エコ)　贔屓(ヒイキ)　信濃(シナ)　印南(イナミ) 反故(ホグ)

三	員辨（ヰナベ）　因幡（イナ）　安積（サカ）　安藝（キ）　引佐（イナ）
四	敏馬（ミヌメ）　會得（エ）　相模（サガミ）　汙衫（カザミ）　燈心（シミ）
五	珍海（チヌノウミ）　甲斐（カ）　發昭（ハセヲ）（紀長谷雄ノ名 古イ假名遣）　秩父（チチ）
六	紅梅（コウ）（古イ假名遣）　納得（ナツ）　紫苑（ヲニ）　繪馬（エマ）　美作（サカ）　芭蕉（セナ）（松尾芭蕉ノ號 古イ假名遣）
七	讃岐（サヌ）　遠敷（ヲニフ）　豐後（ビン）
八	難波（ナニ）
九	餘所（ソ）
十	駿河（スル）

是等は漢音又は呉音より多少の轉化をなして居るものもある。古い假名遣法を使用して居るものもあるのである。

第十二章　數種の讀方を有する熟字

同一の熟字にても、古今に依り、讀方を異にするものと、讀方に依つて、其意義を異にする熟字もある。

第一。古今に依つて、讀方を異にする熟字

是等の熟字は、古書を讀むときには勿論、現今のものにても、古書の用法と同一の場合には、是非古代の讀方に從はねばならぬことではあるが、其讀方は漸次消滅する傾がある。余は寧ろ其傾向の速ならんことを希望することである。

左に掲げる類例の振假名は古代のもののみとする。

部首ノ畫數	古今ニ依ツテ讀方を異にする熟字表
二	停止(チヤウジ)　刄傷(ニンシヤウ)　分限(ブンゲン)　功力(クリキ)　功名(コウミヤウ)　功德(クドク)　博士(ハカセ)　受領(ズラウ)
三	和名(ワミヤウ)　唱歌(サウガ)　四時(シイジ)　墓所(ムシヨ)　奴僕(ヌボク)　奴隷(ヌレイ)　學生(ガクジヤウ)　家名(カミヤウ)
	宿望(スクマウ)　富饒(フチウ)　差別(シヤベツ)(兩用)　庭訓(テイキン)　從等(ズサ)　得業生(トクゴシヤウ)　微力(ミリキ)
	御坐(オマシ)

四	恪勤(カクゴン)　惡名(アクミヤウ)　愛敬(アイギヤウ)（兩用）　文書(モンジヨ)　文章(モンジヤウ)　放免(ハウベン)　施行(セギヤウ) 日蝕(ニツソク)　未亡人(ミマウジン)　未定(ミヂヤウ)　格式(カウジキ)　正直(シヤウヂキ)　正當(シヤウタウ)　決定(ケツジヤウ) 法度(ハツト)　清淨(シヤウジヤウ)　無益(ムヤク)　無聊(ムレウ)
五	生前(シヤウゼン)　發言(ハツゴン)　積極(シヤクキヨク)
六	節分(セチブン)　罵詈(メリ)　自然(ジチン)　萬象(マンザウ)　腹帶(ハルビ)
七	詩歌(シイカ)　遊戲(イウゲ)　遠國(チンコク)　遺物(ユヰモツ)　邪正(ジヤシヤウ)
八	開發(カイホツ)　障子(サウジ)　障礙(シヤウゲ)
九	音聲(オンジヤウ)　飲食(オンジキ)

右の外、位の階級に用ひられる正一位正二位等の「正」は、古は神の位には淸みて「シヤウ」と讀み、人の位には濁つて「ジヤウ」と讀む習慣であつたが、今は共に淸んで讀む。

又日蝕は今日にては「日食」の熟字を用ふることになつた。

第二。　讀方に依つて、意義を異にする熟字

讀方ニ依ツテ意義ヲ異ニスル熟字表

部首ノ畫數		
一	一切（イッサイ）	一切（ヒトキリ）
	一通（イッツウ）	一通（ヒトトホリ）
	丈夫（ヂヤウフ）	丈夫（ヂヤウブ）
	上下（ジヤウカ）	上下（カミシモ）
	下手（ゲシユ）	下手（ヘタ）
	中間中間（チユウカンチユウゲン）	中間（ナカマ）
二	人體（ジンタイ）	人體（ニンテイ）
	代物（ダイモツ）	代物（シロモノ）
	仲人（チユウニン）	仲人（ナカウド）
	仲間（チユウゲン）	仲間（ナカマ）
	作物（サクモツ）	作物（サクモノ）
	何人（ナンニン）	何人（ナニヒト）
	佛學（フツガク）	佛學（ブツガク）
	公事（コウジ）	公事（クジ）
	出立（シユツタツ）	出立（イデタチ）
	分別（ブンベツ）	分別（フンベツ）
	利益（リエキ）	利益（リヤク）
	功德（コウトク）	功德（クドク）
	十分十分（ジフブン ジフブ）	十分（ジツプン）
三	口答（コウタウ）	口答（クチコタヘ）
	可成（カナリ）	可成（ナルベク）
	名代（ミヤウダイ）	名代（ナダイ）
	唐紙（タウシ）	唐紙（カラカミ）
	地形（チケイ）	地形（ヂギヤウ）
	天窻（テンマド）	天窻（アタマ）
	好事（カウジ）	好事（カウズ）
	工夫（コウフ）	工夫（クフウ）
	布衣（フイ）	布衣（ホイ）
	御前御前御前御前御前（ゴゼン オンマヘ オマヘ マヘ ゴゼ）	
四	戸口（ココウ）	戸口（トグチ）
	成敗（セイハイ）	成敗（セイ・バイ）
	手付（テツケ）	手付（テツキ）
	手向（テムキ）	手向（タムケ）
	手當（テアテ）	手當（テアタリ）
	文書（ブンシヨ）	文書（モンジヨ）
	書物（シヨモツ）	書物（カキモノ）
	正氣（セイキ）	正氣（シヤウキ）

	法度(ハフド)	法度(ハツト)
五	目下(モクカ)	目下(メシタ)
六	能書(ノウショ)	能書(ノウガキ)
七	見合(ミアハセ)	見合(ミアヒ)
八	間數(ケンスウ)	間數(マカズ)
九	預金(アヅケキン)	預金(アヅカリキン)
十一	鳥目(チヤウモク)	鳥目(トリメ)
	立食(リツショク)	立食(タチグヒ)
	變化(ヘンクワ)	變化(ヘンゲ)
	見物(ケンブツ)	見物(ミモノ)
	端物(タンモノ)	端物(ハモノ)
	讀本(トクホン)	讀本(ヨミホン)
	端書(ハシガキ)	端書(ハガキ)
	身代(シンダイ)	身代(ミカハリ)

右の内「好事(カウジ)」は惡事」に對する。「好事魔多シ」などと用ふるものである。又「好事(カウズ)」は好事家などと、物好きもののことを言ふとき等に用ふるのである、又「成敗(セイバイ)」とは德川時代に於ける裁判のことである「法度(ハツト)」は同じく禁令を意味して居る。又「鳥目(チヤウモク)」は錢のことであつた。

第十三章　假借に關する熟字

諸種の熟字中、假借に關するもの、及其假借中、殊に誤用に屬するも、因襲の久しくして、今更殆ど改め難いものもある。

第一。假借に關する熟字

部首ノ畫數	假借ニ關スル熟字表
一	一緒(イツショ) 一點張(イツテンバリ) 丁度(チヤウド) 不束(フツツカ) 世話(セワ) 世話敷(セワシク) 中中(ナカナカ)
	乍去(サリナガラ) 亂痴氣(ランチキ) 三十路(ミソヂ)
二	人柄(ヒトガラ) 仕方(シカタ) 仕舞(シマヒ) 他愛無(タアイナシ) 何卒(ナニトゾ) 仰山(ギヤウサン) 仰仰敷(ギヤウギヤウシク)
	候半(サフラハン) 兎角(トカク) 八釜敷(ヤカマシク) 六ケ敷(ムヅカシク) 具合(グアヒ) 兼而(カネテ) 冗談(ジヤウダン)
	出海(デカイ) 出鱈目(デタラメ) 劍呑(ケンノン) 勿體(モツタイ) 千切(チギル) 去共(サレドモ) 去程(サルホド)
三	叉手(サテ)
	可愛(カアイ) 可愛想(カアイサウ) 如才無(ジヨサイナシ) 同斷(ドウダン) 呑氣(ノンキ) 呉呉(クレグレ)
	嗚呼ケ間敷(ヲコガマシク) 國柄(クニガラ) 圖太(ヅフトシ) 地團太(ヂダンダ) 埒明(ラチアク) 增荒男(マスラヲ)

四

大丈夫（ダイヂヤウブ）　大袈裟（オホゲサ）　天晴（アツパレ）　奥床敷（オクユカシク）　威丈高（ヰタケタカ）　宜布（ヨロシク）

宜敷（ヨロシク）　家來（ケライ）　尾籠（ビロウ）　屈託（クツタク）　屹度（キツト）　岩疊（ガンヂヤウ）　工合（グアヒ）　左程（サホド）

左樣（サヤウ）　巫山戯（フザケ）　年玉（トシダマ）

急度（キツト）　愚圖（グヅ）　成程（ナルホド）　手古摺（テコズル）　折節（ヲリフシ）　振舞（フルマヒ）　改札（カイサツ）

新玉（アラタマ）　本統（ホントウ）　村雨（ムラサメ）　村雲（ムラクモ）　果敢無（ハカナシ）　棚引（タナビク）　武者振附（ムシヤブリツク）

氣立（キダテ）　氣取（キドル）　沙汰（サタ）　派手（ハデ）　洒蛙洒蛙（シヤアシヤア）　洒落（シヤレ）　浦山敷（ウラヤマシク）

淺間敷（アサマシク）　淺猿敷（アサマシク）　淺墓（アサハカ）　滅切（メツキリ）　滅多（メツタ）　滅茶苦茶（メチヤクチヤ）

五

滅茶滅茶（メチヤメチヤ）　漆喰（シツクヒ）　滿更（マンザラ）　澤山（タクサン）　無代（ムダイ）　無茶（ムチヤ）

無茶苦茶（ムチヤクチヤ）　無茶無茶（ムチヤムチヤ）　無造作（ムザウサ）　無暗（ムヤミ）　無駄（ムダ）　無鐵砲（ムテツポウ）

無體（ムタイ）　猫被（ネコカブリ）　緒口才（チヨコサイ）　獅嚙附（シガミツク）　爲間敷（ナスマジク）

玉子（タマゴ）　瓦落多（ガラクタ）　瓦落離（ガラリ）　由由敷（ユユシク）　甲斐（カヒ）　甲斐無（カヒナシ）

申譯（マヲシワケ）　目出度（メデタク）　眞平（マツピラ）　眞逆（マサカ）　矢庭（ヤニハ）　矢張（ヤハリ）　矢鱈（ヤタラ）

六

祝著（シウチヤク）　穴勝（アナガチ）　穴賢（アナカシコ）　突合（ツキアヒ）

笈摺（オヒズリ）　箇樣（カヤウ）　箆棒（ベラボウ）　素的（ステキ）　素破（スハ）　素破拔（スツパヌク）　素氣無（スゲナク）

素敵（ステキ）　耄碌（マウロク）　胡麻化（ゴマカス）　腕白（ワンパク）　腑甲斐無（フカヒトン）　芽出度（メデタ）

荒增（アラマシ）　萬更（マンザラ）　薩張（サツパリ）　羽目（ハメ）

七

見舞（ミマヒ）　覺束無（オボツカナシ）　言譯（イヒワケ）　詮方（センカタ）　誤麻化（ゴマカス）　變手古（ヘンテコ）　變挺（ヘンテコ）

頼母子（タノモシ）　頼母敷（タノモシク）　躍起（ヤクキ）　辻褄（ツジツマ）　這入（ハイル）　途切（トギレ）　達而（タツテ）

八

都合（ツガフ）　都度（ツド）　野呂間（ノロマ）　野郎（ヤラウ）　野暮（ヤボ）　象眼（ザウガン）

銘銘（メイメイ）　間柄（アヒダガラ）　間敷（マジク）　阿房（アハウ）　險呑（ケンノン）

九

面倒（メンダウ）　面當（ツラアテ）　面喰（メンクフ）　頑丈（グワンヂヤウ）　頓狂（トンキヤウ）　頓珍漢（トンチンカン）　頓著（トンチヤク）

頓痴氣（トンチキ）

十

馬鹿（バカ）　馬喰（バクロ）　駄目（ダメ）　駄駄（ダダ）

十一

鱈腹（タラフク）　鳥度（チヨツト）　鹿爪成（シカツメナル）

右の內「三十路」とは「三十年」の「年」の「トシ」の反切「チ」となるからである。尙ほ「二十年」を「ハタチ」「四十年」を「ヨソヂ」と言ふも同じい。此「ハタ」は「フタ」の轉である。序に述べることにした。又「象眼」は「鑲嵌」の假借である。

是等の類を列擧するときは、殆ど際限はなからう。右の內、普通に久しく使用せられて居るものもあるが、中には小說其他下卑な俗語の場合にのみ使用せられるものもある。

右の內「勿體」は「物體」の假借である「同斷」は「同理」の字訓に假借し、後に之を字音讀となした。「尾籠」は「嗚呼」の字音を字訓にて假借し、後に字音讀となしたのであることは、前にも述べて置いた。「家來」は「家隸」の假借又「新玉」は「改マル」或は「新ナル」の假借にて、優美なる漢字を當てたのである。「年玉」は此「新玉」より轉化したのである。「漆喰」は「石灰」の唐音の假借、「無代」は「ダイナシ」の假借、「馬鹿」は秦の趙高の故事に依ると言ふが、又梵語「慕何」即ち痴愚の假借であるとも言ふ。

又其他

眞吉野　眞熊野

等とすべきものを

三吉野(ミ)　三熊野(ミ)

等と假借する類もある。

又其他字音或は字訓にあらずして、意義又は故事等に依り、漢字を假借したるものもある。例へば

五月蠅(ウルサシ)　周章(アワテル)　流石(サスガ)

等の如きは、是等に關する一種の假借の熟字であるのである。

第二。誤用せる假借の熟字

誤用セル假借ノ熟字表

部首ノ畫數	
一	一丁字(イツテイジ)　乙女(ヲトメ)
二	候得共(サフラヘドモ)　候得者(サフラヘバ)
三	四十物(アイモノ)　完利(シトリ)

四	有職(ウソク)　樂書(ラクガキ)　機嫌(キゲン)
五	秀文(シドリ)
六	若續(ワカイロ)　行衛(ユクヘ)
八	鍛冶(カヂ)　靜戸(シヅベ)
十一	麻續(ヲミ)

右の内「一丁字は和漢共に使用する所である「此丁」は元と「个(カ)」の誤用である「个は竹の半に从ふので、今の「箇」と同音同義である「一丁字ヲ讀メナイ」などと言ふのは「一箇ノ字ヲ讀メナイ」と言ふのである。「丁」の篆書は「个」の字の篆書と殆ど同一であつたために、後世之を楷書に書改める際に「丁」と誤認したからである。「乙女」の「乙」の音頭はア行に屬して居るのであるのに「小女」の代に、之を誤用したのである。「候」の語尾はハ行の變化に屬すも、其語尾「ヘ」を「エ」の字音たる「得」を以て、誤用したのである。「四十物」を「アイモノ」と言ふは元と「アミモノ」とて、網を以て捕つた雜魚のことにて、元と「罔(アミ)」の一字を分解して、「四十」と誤用したのである。「完利」は「宍利」の誤用「有職」は物知りにて、元と「有識

であるべきも、是れ亦久しく誤用して、改めないこととなつて居る。「樂書」は「落首」又は「落シ文」より來つて居る「落書」とすべきを誤用したのである。「機嫌」は佛語「譏嫌」の誤用である。「秀文」は「倭文」「若續」は「若績」、「麻續」は「麻績」の字畫類似のための誤用である。併し是等地名又は氏名等の固有名詞等となつて居るものは誤用のまゝ、矢張襲用せねばならぬ。「靜戸」も「靜戶」よりの同樣の誤用である。「行衛」は「行方」の假借にして、「衞」の字音「エイ」又は「エ」に氣附かなかつたのである。「鍛冶」は元と、「カネウチ」より來つたので字音ではないと、言ふものもあるが、余はさうではなからうと思ふ。即ち字音を誤讀して假借否誤用したのであらう。是等字音誤用の例は、他にも澤山あるのである誤用したからとて、是非廢止すべしとは、余は言はぬ。誤用は誤用、襲用は襲用である。襲用するからとて誤用でないと辯護するには及ばぬ。但し「鍛冶」のみは熟字の誤用でない。

第十四章　轉注に關する熟字

諸種の熟字中、其讀方は格別異樣ではないが、本來の意義より轉注して、我國に於ては、寧ろ別種の意義を表すものとなつて居るものがある。第十章に掲げた一種の讀

方をなすべき熟字及第十一章に掲げた殆ど總べての熟字は、大抵是である。又其他我國にて新に制作した熟字も之に屬するのである。今其内數例を掲げることとする。

部首ノ畫數	轉注ニ關スル熟字表
一	不埒(フラチ)　不斷(フダン)　世事(セジ)　世辭(セジ)
二	人間(ニンゲン)　仁免(ニンメン)　伊達(ダテ)　入魂(ジツコン)　内輪(ウチワ)　八公熊公(ハチコウクマコウ)　再緣(サイエン)
	出來(シユツライ)　出張(シユツチヤウ)　利口(リコウ)　利巧(リカウ)　勉強(ベンキヤウ)　勘辨(カンベン)
三	口上(コウジヤウ)　吟味(ギンミ)　吹聽(フイチヤウ)　和談(ワダン)　奧方(オクガタ)　山神(ヤマノカミ)　常住(ジヤウヂユウ)　庖丁(ハウチヤウ)
	張本(チヤウホン)　律義(リチギ)
四	心中(シンヂユウ)　心配(シンパイ)　恰好(カツカウ)　惡口(アクコウ)　愛敬(アイキヤウ)　意見(イケン)　挨拶(アイサツ)　接待(セツタイ)
	料理(リヤウリ)　旅籠(ハタゴ)　普請(フシン)　朝敵(チヤウテキ)　殘念(ザンネン)　注文(チユウモン)　洋服(ヤウフク)　洋食(ヤウシヨク)
	洋館(ヤウクワン)　渡世(トセイ)　澁面(ジフメン)　無心(ムシン)　物騷(ブツサウ)　狼藉(ラウゼキ)

五	六	七	八	十
留守(ルス)	籠城(ロウジヤウ)	調子(チヤウシ)	閉口(ヘイコウ)	馳走(チソウ)
番頭(バントウ)	素直(スナホ)	辭儀(ジギ)	悶著(モンチヤク)	體裁(テイサイ)
當時(タウジ)	結構(ケツコウ)	道具(ダウグ)	難有(アリガタシ)	
稽古(ケイコ)	肝腎(カンジン)	道樂(ダウラク)	難儀(ナンギ)	
立派(リツパ)	脚色(キヤクシヨク)	運動(ウンドウ)	隱居(インキヨ)	
	臆面(オクメン)	運賃(ウンチン)		
	臆病(オクビヤウ)	重寶(チヨウハウ)		
	落書(ラクガキ)			

右の內、洋服洋食洋館等を除く外は應用既に久しいものであるが。近頃に至つて、新に制作したる熟字は、大抵之に屬するのである。所謂專門の漢文學者は、此新熟字の出來るのを非常に嫌つて居るのである。成程從來の熟字にて、事足るのに、故らに新奇のものを制作することは、固より善くはないが、さなくば已むことを得ないのである。是は熟字ではないが、或名詞の末尾に「的」といふ字を附加へて形容詞とすることが此二三十年以前より、非常に流行して居る。實に重寶である。某文學博士は、其出所は元と滑稽に選定したのであるから使用しては善くないとて、大に論ぜられたことがあつたが、余は贊成しないのである。又近頃は

藩閥　　學閥

露探　　日探

といふ熟字が出來、之が轉輾して種々に變化せられて居る。又是は苟も士君子の言文に上すべき文字ではないが、近來所謂新聞の三面記事等には彌次馬」又は彌次ル」「八百長」又は「八百ル」「皮肉」又は皮肉ル」其他一層厭ふべきもの等が、種々の普通名詞又は動詞として使用せられて居る又文字熟字は從來のと同一ではあるが、內容のみの變更して來たものも多いのである例へば

運動　　三百

自然主義　　社會主義

又は「敵本主義等の類である。

所謂漢學者は此假借又は轉注に關する熟字を、和臭とか俗臭とかと言つて、其使用を嫌ふものであるが、事實がある以上は、文字熟字をのみ防遏する譯には往かぬものであらう。此頃在京の清國人但燾と申すものが「日語古微」といふ一書を著し。

普請　披露　造作　道具　結構　奇麗　見物　澤山
亭主　妻君　結婚　旅行　田舍　風俗　色々　面白

等の文字、熟字二百九十五種を掲げ、現今のと同一の意義に使用せられたる古書の用例を示して居る。如何にも支那人的である。是等は必しも古書より出たものではない。併し同書は好事家の一顧に値するものであらう。

第十五章　誤謬のまま讀むべき熟字

本章に屬する熟字中の漢字の發音を一字一字の場合にても誤るものがあるが、多くは、數音數義を有する漢字の或一種の字音のみを以て、他の意義の場合にも適用するのが多いのである。併し殆ど總べての人が使用するから最早訂正すべからざるものであらう。

左に掲げる類例中の括弧內に在るは、其本音である。

誤謬ノママ讀ムベキ熟字表

部首ノ畫數	
一	不可（フッカ）

二

借金《シヤクキン》（シヤキン）　副長《フクチヤウ》（フウチヤウ）　匿名《トクメイ》（ジヤクメイ）　卒去《ソツキヨ》（シユツキヨ）

卒業《ソツゲフ》（シユツゲフ）

三

告示《コクジ》（カウジ）　咄嗟《トツサ》（トツシヤ）　員數《ヰンスウ》（ヱンズウ）　喧呶《ケンド》（ケンダウ）

喫飯《キツパン》（ケキハン）　塹壕《ザンガウ》（センガウ）　失錯《シツサク》（シツソ）　娯樂《ゴラク》（グラク）

四

安否《アンピ》（アンブウ）　射撃《シヤゲキ》（セキゲキ）

抄錄《シヤウロク》（サウロク）　捕虜《ホリヨ》（ホロ）　揭示《ケイジ》（ケツシ）　捜索《ソウサク》（シウサク）

新撰《シンセン》（シンサン）　書册《シヨサツ》（シヨサク）　權帥《ゴンノソツ》（ゴンノシユツ）　歳出《サイシユツ》（サイスヰ）

五

沃土《ヨクド》（ヲクド）　注入《チユウニフ》（シユニフ）　淘汰《タウタ》（タウタツ）

畜生《チクシヤウ》（キウシヤウ）　率先《ソツセン》（シユツセン）　病院《ビヤウヰン》（ビヤウヱン）　白堊《ハクア》（ハツアク）

石鹼《セキケン》（セキセン）　硫黄《ユワウ》（ルワウ）　祝杯《シクハイ》（シウハイ）

六

約束《ヤクソク》（ヤウソク）　絛蟲《デヤウチユウ》（タウチユウ）　綴字《テツジ》（テイジ）　罷業《ヒゲフ》（ハイゲフ）

覆面《フクメン》（フウメン）　覆藏《フクザウ》（フウザウ）

七		八	九	十
註釋《チユウシヤク》(シユシヤク)	適當《テキタウ》(セキタウ)	鍛冶《カヂ》(タンヤ)	韻文《井ンブン》(ウンブン)	高麗《カウライ》(カウリ)
豌豆《エンドウ》(ワンドウ)	醒覺《セイカク》(セイカウ)			
賄賂《ワイロ》(クワイロ)	輔弼《ホヒツ》(フヒツ)			
質物《シチモツ》(チモツ)	輸出《ユシユツ》(シユス井)			

前表中の振假名を括弧中のものに比較し、且つ前篇中數音數義を有する漢字を參照すれば其異同が明になるのであらう。

第十六章　故らに倒讀又は異樣の讀方をなすべき熟字

我國の古文書中、故らに倒讀、又は通常の音訓以外、別種の異樣なる讀方をなさねばならぬものがある。例へば

「定考」を「カウヂヤウ」と讀む。

是は「上皇」の讀方「ヂヤウカウ」を諱んだのである、又

「白馬の節會」を「アヲウマノセチヱ」と讀む。

是は和漢とも、古昔は純白の極は、青であると考へて居つたのである。其例として積雪に穴を明けて覗ふならば、青色に見えると言つて居る、故に純白たるべき「精」は「米」に从ひ「青」に从ふのである。此の如く「青」と「白」とは古來多少の關係を持たせてあつた。

又其他

一、「春宮」を「トウグウ」と讀む。

二、「東宮」を「ハルノミヤ」と讀む。

是は「春宮」は「東宮」と同一に讀み「東宮」を「春宮」と同一に訓ずるのである、又

「上枝」を「ホツエ」と讀む。

是は「上枝」は「末枝」であるから「末」の呉音「ホツ」に依つて讀むのであると思ふ、併し言海にては、是は僻說にして「秀枝(ホツエ)」であると言つてある。何れにしても、「上」を「ホツ」と讀むのは、異樣の讀方である。

「健兒」を「コンデイ」と讀むことがある。

健兒とは身分の輕き昔の武士のことである。健を「コン」と讀むのは、其呉音であるが、兒を「デイ」と讀むのは、別音「ゲイ」の字音があるから、變じて來つたのであらう。是等の類例は、穿鑿すれば、尙ほ澤山あらう。

第十七章　誤り易い字音の熟字

諸種の熟字中、誤り易い字音の熟字は、固より際限はないことである。西洋に於ける諺にも、半世紀間繼續する誤は誤でない」といふものがあるが本章に於ける諸種の熟字中、第十二章のものと同一の取扱をなすべしと言ふものがあるかも知れぬが、本章に掲げるものは、皆悉く通俗のものともなつて居ないものもある又殆ど總べての學者は皆悉く誤つて居るとも限らない。故に余は其正しいものに訂正しても、差支はないことと認めたのである。但し余の今擧げる所の字音は、主として康熙字典に據つたのである。字典の字音と經書諸子佛經の音義などの音とは同じくないものもあれば、余の掲げる字音以外のものは皆必しも誤謬とも限らないかも知れぬ。看者は種々に調査して根據のある限は、成るたけ通俗に遠ざからぬ樣に心懸け

る必要はある。
左に掲げる類例は其誤り易い漢字のみに振假名を附けた。是は却つて檢出するに便宜であらうと思ふ。但し最初二三の熟字に就き、誤讀の例を括弧内に示す。

部首	誤リ易イ字音ノ熟字表
一	一切《サイ》（イッセツ）　上梓《シ》（ジヤウシン）　上澣《クワン》（ジヤウカン）　不撓《タウ》（フギヤウ） 不龜《キン》手（フキシユ）
乙	乾《カン》燥（ケンサウ）
亠	交迭《テツ》（カウシツ）
人	代斲《タク》　佚《イツ》宕《タウ》　使嗾《ソウ》　俛《フ》焉　倜《テキ》儻　倍蓰《シ》　倏《シユク》忽　偸《トウ》安 傳播《パ》
八	六畜《キウ》　兵站《タン》
冖	冤《エン》罪

部首	熟語
凵	出師（スヰ）　出納（スヰ）
刀	分析（セキ）　分泌（ピ）　別墅（シヨ）　利鎌（レン）　刺客（セキ）　削減（サク）　刱造（サウ）
力	勒（ロク）功
十	卓犖（ラク）
厂	厚貽（イ）
厶	參（シン）差（シ）
又	叔姪（テツ）
ロ	句讀（トウ）　咽（エン）喉　哂（シン）然　哀悼（タウ）　啞（アク）然　商賈（コ）　喟（キ）然　唾（ダ）液 嗚（ヲ）呼　嗚咽（エツ）　嗤（シ）笑　嗅（キウ）覺　嘖（サク）々　嘶（サイ）噎（エツ）　噦噫（イ）　囂（ケウ）々 囑（シヨク）託
口	四檐（エン）　困憊（ハイ）　圍繞（ジヤウ、チウ）　圓滑（カツ）
土	地殼（カク）　垂涎（ゼン）　城塹（ゼン）　執拗（アウ）　堪（カン）能　塡（テン）充　塑（ソ）像　墝（カウ）埆

大　女　子　宀　寸　尢　山　工　巾　干　幺

墳塋(エイ)　疆場(エキ)

大猷(イウ)　大廈(カ)　大纛(タウ)　奇璞(ハク)

女婿(セイ)　好惡(ヲ)　妝梳(シヨ)　嫋々(デヤウ)　嫡子(テキ、チヤク)　嫩葉(ドン)

孕婦(ヨウ)　孱弱(セン)

官衙(ガ)　容易(イ)　容喙(カイ)　富贍(ゼン)

射術(シヤ)　射殺(セキ)

尨大(バウ)

山隈(ワイ)　島嶼(シヨ)　崢嶸(クワウ)　崔嵬(サイクワイ)

巨擘(ハク)

巾幗(カク)

幹莖(カウ)

幽藹(アイ)　幽邃(スヰ)

广　彐　彡　彳　心　　戈　手

庠序　彗星　彤弓　徽恙　志殼　悚然　慊焉　懶慵　戒飭　抔土　措大　搏擊

廠舍　忖度　悃款　慊安　戇愚　戒飭　折摺　捺印　摭取

忍耐　惆悵　慴伏　戕定　招拉　掉尾　摯實

忿恚　惡莠　慙愧　截斷　拓殖　掣肘　撮影

忠愨　惘然　慫慂　拔擢　掠奪　撰文

怯懦　惹起　慰藉　捏造　揣摩　撒水

怵惕　惴々　愛憐　挽回　揖讓　播種

恬然　慍恨　懶惰　捻挫　挿秧　撥剌

部首	熟字
	擊柝(タク) 擴(クワク)張 擾(ジヤウ)亂 擺(ハイ)動 攪(カウ)拌
支	支度(タク)
攴	攸(イウ)久 收斂(レン) 放溺(チウ) 敎誨(クワイ) 敵愾(ガイ) 數(サク)次 數(サク)奇 數(ソク)罟
斗	斡(ワツ)旋
方	旗幟(シ)
日	易(エキ)簀(サク) 昵(ヂツ)近 曩(ナウ)日
木	杜(ヅ)撰(サン) 杵(シヨ)臼 松筠(ヰン) 楔(セツ)子 椒(セウ)酒 椿(チン)事 樗(チヨ)櫟(レキ) 橇(キヤウ)車
	櫜(タク)囊 檉(テイ)樹 檢覈(カク) 櫛(シツ)比
欠	欠(ケン)伸 欸(アイ)乃(アイ)
止	正鵠(コウ) 正覈(カク) 歪(ワイ)頭
歹	殄(テン)滅 殘滓(シ)
比	比較(カウ)

气	水	火	片	牛	犬	玉	瓦	甘	田
氤氳(ウン)	氾濫(ハン)、浚渫(セツ)、滑稽(コツ)	炊煙(スヰ)	牖戸(イウ)	牝牡(ヒン)	狎近(アフ)	玉砕(サイ)	甌窶(ロウ)	甘蔗(シヤ)	田畷(テツ)
	汚穢(ヲ・ワイ)、浸漬(シ)、溺没(テキ)	煩懣(モン)			狡猾(カツ)		甕缶(チウ)		疇昔(チウ)
	汎舟(フ)、消耗(カウ)、滲出(シン)	熱鬧(タウ)			狼藉(セキ)				
	洽浹(セフ)、深窪(ワ)、漏洩(エイ)				猜忌(サイ)				
	洗滌(テキ)、湛々(タン)、瀧湍(ロウ)				猥褻(ワイ)				
	洒掃(サイ)、滃然(クワウ)、灑掃(サイ)				獱獺(ダツ)				
	海嘯(シヤウ)、渺邈(バク)				獰猛(ダウ)				
	涓滴(ケン)、減殺(サイ)								

部首	熟字
白	白皙（セキ）　白熾（シ）　皓（カウ）然
皿	盥（クワン）漱（ソウ）
目	眇（ビヤウ）目　眞摯（シ）　睚（ガイ）眥（サイ）　睥（ヘイ）睨（グイ）　睾（カウ）丸　睹（ト）視　瞥（ベツ）見　瞻（セン）視
矛	矛（ム）盾（ジュン）　矜（キョウ）式
矢	矮（ワイ）屋
石	破碎（サイ）　磽（カウ）确　破綻（タン）　砧（チン）聲　砥（シ）礪　碩（セキ）學　磊（ライ）落　磔（タク）殺　硇（タウ）砂
示	神祇（ギ）　神祟（スヰ）　祗（シ）候　祕（ヒ）書
禾	禿（トク）筆　秉（ヘイ）彝　稗（ハイ）史　稠（チウ）密　稟（ヒン）性　稟（ヒン）議
穴	空竅（キャウ）　空竇（トウ）
立	竦（シヨウ）然　端倪（ゲイ）
竹	竹篦（ヘイ）　笄簪（シン）　筇（キヨウ）杖　箕箒（シウ）　箴（シン）戒　簟（テン）席　簞（タン）笥

米	糸	缶	网	羊	羽	耒	耳	聿	肉
糯米	紊亂	罋缶	署名	義捐	翁嫗	耕耨	耽溺	肇國	肋骨
糴買	綽々		罵詈	羸弱	翁媼		耿々		胾羹
糶賣	絶叫				翕然				脆薄
	緒言				耀々				脯脩
	結核								腕臂
	緘默								膏肓
	絢爛								腿臀
	縊死								膠膝
	絳色								膾炙
	縧繩								
	絺綌								
	綢繆								

自	臼	舌	舟	艸	虍	虫	血	行	衣

自慊(カウ)

興(キヨウ)味

舐(シ)飴(イ)　舐(シ)犢

舟棹(タウ)　舟櫂(タウ)

苦窳(ユ)　苗裔(エイ)　荊棘(キヨク)　茜(セン)色　草鞋(カイ・アイ)　菅(カン)公　萱(ケン)堂　落魄(タク)

著(チヨ)名　著(チヤク)服　蒐(シウ)集　蓑(サ)笠　蒼蠅(ヨウ)　薔(シヨク)薇　薙(テイ)髮　藪(ソウ)澤

藕(ゴウ)花　蘊(ウン)奥(アウ)

虎賁(ホン)　虧(キ)缺

蛋(タン)白　蛛(チヨ)網　螭(チ)魅　螽(シウ)斯　螫(セキ)毒　蟄(チツ)居　蠕(セン)動　蠖(ワク)屈

衂(ヂク)血

行潦(ラウ)

衣袂(ベイ)　衣袖(シウ)　袒(タン)裼(セキ)　裒(ホウ)然　裸(ラ)體　褫(チ)奪　褰(ケン)衣　褪(ドン)色

褶(テフ)曲

襾

西域(ヨク)　覆(フ)載

見

覓(ベキ)索　覘(テン)視

角

角徵(チ)　解頤(イ)　解嘲(タウ)

言

訥(トツ)辯　診(シン)察　詐(サ)僞　誇(クワ)大　誤謬(ビウ)　誾(ギン)々　謚(シ)號　謫(タク)居

謦(ケイ)欬　謹識(シ)　譎(ケツ)計　譬(ヒ)喩　讖(シン)言

豆

豈(ガイ)弟　豐稔(シン)　豐饒(ジヤウ)

貝

貧窶(ク)　賁(ヒ)臨　賞牌(ハイ)　賭(ト)博　贖(シヨク)罪

走

越(クワツ)席

足

足蹠(セキ)　足(スウ)恭　踟蹰(チユ)　踣(ボク)仆　蹂躪(リン)　蹙頞(アツ)　蹴(シユク)鞠　躊(チユ)躇(チヨ)

躑躅(チヨク)

車

軋(アツ)轢　軒輊(チ)　軫(シン)念　較(カク)著　輓(バン)漕　輸(シユ)贏(エイ)　轉徙(シ)

辛	辵	邑	酉	釆	里	金	長	門	阜
辣[ラツ]腕	迸[ハウ]發	郢[エイ]正	酋[シウ]長	釉[イウ]藥	釐[リ]正	金釵[サイ]	長蛇[ジヤ]	門閾[ヨク]	陶[タウ]冶[ヤ]
	遵[ジユン]守		酖[タン]醢[カイ]			鏘[サウ]鏗[カウ]		閘[アフ]門	陶[ヤウ]然
	追躡[テフ]		醪[ラウ]酒			釣[チヤウ]魚		闃[ゲキ]然	隆準[セツ]
	避[ヒ]暑		釁[キン]隙			鏖[アウ]戰		闖[チン]入	隕[ヰン]石
	這[シヤ]般					銅屑[セツ]		闡[セン]明	障碍[ガイ]
	邀[エウ]招					鐃[ダウ]歌			隤[クワイ]敗
	造詣[ケイ]					錦繡[シウ]			
	邁[マイ]進					鑄[シユ]鐵			
	遊說[ゼイ]					錯[サク]雜			
	遏[アツ]止					錯[ソ]置			
	遒[シウ]勁					鍼[シン]砭[ヘン]			
	遮[シヤ]斷					鍛[タン]錬			

隹	雀躍(ヤク)　雜駁(ハク)
雨	雹(ハク)霰(セン)　霎(サフ)時　霑(テン)潤　霾(マイ)晦　靉靆(タイ)　靄(アイ)然
面	靦(テン)然　靨(エフ)輔
頁	項(チヤウ)門　頡(ケツ)頏　顚躓(チ)　顧眄(ベン)
風	颶(グ)風
食	餘喘(ゼン)　餘裕(ユ)　餘蘖(ケツ)　餓莩(ヒヤウ)　饕(タウ)餮(テツ)
香	香奩(レン)
馬	馭(ギヨ)者　馴(ジユン)致　馳騁(テイ)　駁(ハク)擊　駐(チユ)在　駑駘(アイ)　騈(ヘン)列
骨	髖(ケン)骨
髟	髫(テウ)童　髻(ケイ)髮
門	鬨(カウ)聲
鬼	魑(チ)魅(ミ)

魚	鳥	鹿	黃	黑	鼓	齊	齒
鰥(クワン)寡	鷁(ゲキ)首　鷙(シ)鳥　鷸(イツ)蚌	麕(キン)鹿　麇(クン)至（群至ト同ジイ）	黃鸝(リ)	黔(ケン)首　黜(チツ)陟(チヨク)　黠(カツ)智	鼓鼙(ヘイ)	齊(セイ)正　齊(シ)衰(サイ)	齷(アク)齪(サク)

前表中の振假名に就いては、第七篇、第十一章數音數義を有する漢字表を參照すれば、便宜なるものは多い。又「躊躇」「餘裕」「駐在」の躊、裕、駐を長音としても善い。

又同一の音義に屬して居る「畜生」の「畜」と「六畜」の「畜」との讀方、及「輸出」「輸入」の「輸」と「輸贏」の「輸」との讀方の如きは各〻前のものを第十二章誤謬のまゝ讀むべきものに收め、

後のものを本章に收めて置いた。是等は前のものは既に普通語となつて居るから、最早訂正すべからざるものである。後のは通俗に廣く使用せざるものであれば、矢張本來の字音通に訂正すべきものとして、本章に掲げたものである。猶ほ英語其他の外國語に於ても、

一「イングリツシ」は通俗にては「イギリス」
二「ハンカチーフ」は通俗にては「ハンケチ」
三「コツトン」は通俗にては「カタン」
四「スチームボート」は通俗にては「ストンポツチ」
五「キヤベージ」は北海道にては「カイベツ」

等と言つたにしても、若し外國語として、其讀方をなす場合には、矢張本來の發音通に訂正せねばならぬと、同様のものであると、余は確認するのである。

第十八章　熟字の疊字に關する讀方

今本篇を終るに當つて、一つ附加へて置きたいことがある。即ち國語國文又は漢語

漢文中に於て、同一の假名又は漢字が相重るときは、時として一種の符號を用ふることがある。今其場合を細別すれば左の如くなる。

第一。假名一字が重りて、之を送るには、「ゝ」を用ふる。例へば

「ちち」又は「ハハ」の代に「ちゝ」又は「ハヽ」とする。

第二。假名二字又は漢字及其語尾の假名が重りて、之を送るには、「〱」を用ふる。例へば「ますます」又は「返ス返ス」の代に「ます〱」又は返ス〲」とする。

第三。漢字のみの副詞にして、其發音が同音重るときは、特に「ミ」を使用するを便とする。例へば

「愈」又は「稍」を「愈ミ」又は「稍ミ」とする。

第四。漢字一字を送るには、我國通俗にては「々」を用ひ、支那にては「ニ」を用ふる。例へば

「世世」は、「世々」或は「世ニ」とする。

第五。漢字二字以上を送るときは我國通俗にては「々々」等を用ひ、支那にては、各文字毎の下に「ニ」を用ふる。例へば

一、感謝感謝」を「感謝々々」又は「感ニ謝ニ」とする。

二、「檢ニ閱之ニ後、記ニ所感一」を「檢ニ閱ニ之ニ後、記所感」とする漢文もある。

現今にては「奇々妙々」等の熟字を普通に「キキミヤウミヤウ」と言つて居るものもあるが、元とは滑稽的に、さう言つたので、從前は「キミヤウキミヤウ」と讀んで居つたのである。

第九編 固有名詞の讀方

第一章 固有名詞の讀方

前篇熟字の讀方中、諸所に揭げた讀例中にも、多少固有名詞に關するものもあつたが、固有名詞に關するものは、別に篇を分つて逃べることが、便宜であると思ふのである。

凡そ固有名詞の讀方は、普通の熟字の讀方に比すれば、一層困難なるものである。歷代の御諡號を始め奉り、年號及其他のものの讀方も、大家の著書に記す所、未だ一致しないものが澤山ある。又歷史上に著れたる名相賢臣の氏名は勿論、現今に於ける大家の氏名さへも、其讀方の普く知られざるものも多いのである。又全國古今に於ける地名に至つては、一層困難を感ずることである。唯夫のみではない。我

大日本帝國

の「日本」の讀方さへ、人に依り未だ一致しないではないか。本居宣長の「國號考」には、「ニホン」とある。又近年に至つては、曾て文部省より米國シカゴの博覽會に出品するた

めに、編纂せられたる英文「にほん歴史」の表題には、變體假名にて「ニホン」歴史と書いてある。而も其他の著書には「ニッポン」の振假名のもののないことはない。現今の國定教科書は、此後のものである。余は曾て本邦歴史専門の某文學博士に、其讀方を尋ねたことがあつたが其答が全く不得要領であつた。殊に少し怪んだのは、歴史専門の博士にても、夫々分科があるものと見え、某博士は始めて其問題に接せられたかの如き樣子であつたのである。同じ「日本」の二字でも「日本銀行」と「日本新聞社」のは「ニッポン」と讀んで居る。兌換紙幣及新聞紙の欄外に記せるローマ字には、各〻「ニッポン」と綴つてある。又「日本橋」は東京のは「ニホン」橋大阪のは「ニッポン」橋である。

我國各地の地名に至つては、中〻面倒なものが多い。全國百に近い國々に於て、各〻二十や三十づつの讀み難い地名を有せぬ所はなからう。殊に北海道に至つては、所在殆ど總べてが、夫れである

一「新冠」は「ニヒカップ」にて和漢洋夷の四國語の混同である。

二「留萠」は元と「ルルモッペ」であつたが、今は「ルモエ」と讀む。

三「劍淵」は元と「ケネブチ」であつたが、今は「ケンブチ」と讀む。

やうに漸次普通の讀方に變化し懸つたから善いが。

一、「以平」は尙ほ「イタラタラキ」と讀まねばならぬ。

二、「花畔」は尙ほバンナグロ」と讀まねばならぬ。

三、「一已」は尙ほ「イチャム」（Icham）と讀まねばならぬ。

曾て某紳士が北海道漫遊の節、花畔を通過して、其地名を其馬車の馭者に尋ねたら、「バンナグロ」と簡單に答へた、紳士は十分解からなかつたから、數回問返した、すると馭者はうるさがつて顏を反らして、大聲に叫んだ、紳士は「ブンナグラレル」のかと思つて、馬車より飛下りたことがあつたさうである。又徵兵檢査のとき、某檢査官が壯丁に原籍を尋ねられたとき、壯丁は「イチャム」と答へた。壯丁名簿にイチャムらしい地名がない。壯丁は「一已」と書いたら檢査官は、ソンナ馬鹿ナ名ハ誰ガ附ケタ」と言はれた時に某中佐（今は少將）は傍に在り、オイそれはオレガ附ケタノダ」とのことであつた。「一已」は最初屯田大隊の兵村となつたが、夷語に相當すべき漢字がなかつたから、當時其大隊長が「我道一而已」とて遂に「一已」の漢字を當箝められたのであつた。

新開地又は新領土の地名に漢字を使用したのは惡しい、寧ろ假名にて原名を記し

た方が、善いと言ふものもあるが、山名が多少變化して國語化せざれば、不便は矢張同一である、北海道第一の高山は、世人には石狩岳であると思はれて居るが、實は旭川の東に聳ゆる「ヌタプカムウシユペ」山である。是は中々記憶し難い。北海通經營を以て有名であつた故某侯爵は、一日に其山名を三回尋ねられたが、後にはとうどう止められたさうである。臺灣の「モリソン」山は曾て「新高山（ニヒタカ）」の名を賜つたから、此「ヌ山」も「北高山（キタダカ）」か或は原名を意譯して「霧立山（ギリタチ）」とかに改名すれば善からうと言つたこともあつた。

又氏名人名に至つても、中々面倒なものがある。

楠木正成

の「木」を除くものが、從前は餘程あつたが、現今では追々復舊の傾がある。讀方は曾て「…マサナリ」とて「…マサシゲ」の弟であると言つた檢定の受驗者があつたさうである。成程楠木公も最初はさう稱へられたさうであるが、後に將軍成良親王の諱を避けて、「マサシゲ」と呼ばれたことは、前篇にも述べて置いた。現今では是には異説はない。併し

石田三成

の人名に至つては、普通には「ミツナリ」であるが「ミツシゲ」「カズシゲ」又は「カズナリ」の異説もある。又

大石良雄

の人名は、普通には固より「ヨシヲ」ではあるが「ヨシタカ」であるとか、「ヨシカツ」であるとかの異説もある位である。

併し本篇に於ては是等の所有固有名詞の讀方を擧げることを止め、唯歷代の御謚號及年號と氏名の稍〻面倒なるものとを掲げることとする、但し地名の一部及人名のことを少し附記することがある。

第二章　歷代御謚號の讀方

歷代の御謚號の讀方は、從來種々になつて居つた、併し近來は餘程一致して來て、何より結構のことと思ふのである。

御謚號の下に記してある數字は、御在位の紀元年代である。又括弧內の假名にて出

所を示さぬのは、松浦伯編輯の御諡號年號讀例に依る。

神武 一—七六	綏靖 八〇—一一二	安寧 一一二—一五〇
懿德 一五一—一八四	孝昭 一八六—二六八	孝安 二六九—三七〇
孝靈 三七一—四四六	孝元 四四七—五〇三	開化 五〇三—五六三
崇神 五六四—六三一	垂仁 六三二—七三〇	景行 七三一—七九〇
成務 七九一—八五〇	仲哀 八五二—八六〇	應神 九三〇—九七〇
仁德 九七三—一〇五九	履中 一〇六〇—一〇六五	反正 一〇六六—一〇七一（ハンゼイ）
允恭 一〇七二—一一一三（インギョウ）	安康 一一一三—一一一六	雄略 一一一六—一一三九
清寧 一一三九—一一四四	顯宗 一一四五—一一四七（ケンゾウ）	仁賢 一一四八—一一五八
武烈 一一五八—一一六六	繼體 一一六七—一一九一	安閑 一一九一—一一九五
宣化 一一九五—一一九九	欽明 一一九九—一二三一	敏達 一二三二—一二四五
用明 一二四五—一二四七	崇峻 一二四七—一二五二	推古 一二五二—一二八八

舒明（ジヨメイ）　一二八九—一三〇一
齊明（サイメイ）　一三一五—一三二一
天武（テンム）　一三三二—一三四六
元明（グエンミヤウ）　一三六七—一三七五（ゲエンメイ）
孝謙（カウケン）　一四〇九—一四一八
光仁（クワウニン）　一四三〇—一四四一
嵯峨（サガ）　一四六九—一四八三
文德（モントク）　一五一〇—一五一八
光孝（クワウカウ）　一五四四—一五四七
朱雀（スザク）　一五九〇—一六〇六
圓融（エンユウ）　一六二九—一六四四
三條（サンヂヤウ）　一六七一—一六七六

皇極（クワウギヨク）　一三〇二—一三〇五
天智（テンヂ）　一三二一—一三三一
持統（ヂトウ）　一三四六—一三五七
元正（グエンシヤウ）　一三七五—一三八四
淳仁（ジユンニン）　一四一八—一四二四
桓武（クワンム）　一四四一—一四六六
淳和（ジユンワ）　一四八三—一四九三
清和（セイワ）　一五一八—一五三六
宇多（ウダ）　一五四七—一五五七
村上（ムラカミ）　一六〇六—一六二七
花山（クワザン）　一六四四—一六四六
後一條（ゴイチヂヤウ）　一六七六—一六九六

孝德（カウトク）　一三〇五—一三一四
弘文（コウブン）　一三三一—一三三二
文武（モンム）　一三五七—一三六七
聖武（シヤウム）　一三八四—一四〇九
稱德（シヨウトク）　一四二四—一四三〇
平城（ヘイゼイ）　一四六六—一四六九（ナラ）
仁明（ニンミヤウ）　一四九三—一五一〇
陽成（ヤウゼイ）　一五三六—一五四四
醍醐（ダイゴ）　一五五七—一五九〇
冷泉（レイゼイ）　一六二七—一六二九
一條（イチヂヤウ）　一六四六—一六七一
後朱雀（ゴスザク）　一六九六—一七〇五

後冷泉　一七〇五—一七二八
後三條　一七二八—一七三二
白河　一七三二—一七四六
堀河　一七四六—一七六七
鳥羽　一七六七—一七八三
崇德　一七八三—一八〇一
近衞　一八〇一—一八一五
後白河　一八一五—一八一八
二條　一八一八—一八二五
六條　一八二五—一八二八
高倉　一八二八—一八四〇
安德　一八四〇—一八四五
後鳥羽　一八四五—一八五八
土御門　一八五八—一八七〇
順德　一八七〇—一八八一
仲恭　一八八一—一八八一
後堀河　一八八一—一八九二
四條　一八九二—一九〇二
後嵯峨　一九〇二—一九〇六
後深草　一九〇六—一九一九
龜山　一九一九—一九三四
後宇多　一九三四—一九四七
伏見　一九四七—一九五八
後伏見　一九五八—一九六一
後二條　一九六一—一九六八
花園　一九六八—一九七八
後醍醐　一九七八—一九九九
後村上　一九九九—二〇二八
長慶　二〇二八—二〇三三
後龜山　二〇三三—二〇五二
(光嚴　一九九一—一九九三
光明　一九九六—二〇〇八
崇光　二〇〇八—二〇一一
後光嚴　二〇一二—二〇三一
後圓融　二〇三一—二〇四二
後小松　二〇四二—二〇五二)

後小松（ゴコマツ）　二〇五二―二〇七二	稱光（ショウクワウ）　二〇七二―二〇八八	後花園（ゴハナゾノ）　二〇八八―二一二四
後土御門（ゴツチミカド）　二一二四―二一六〇	後柏原（ゴカシハラ）　二一六〇―二一八六	後奈良（ゴナラ）　二一八六―二二一七
正親町（オホギマチ）　二二一七―二二四六	後陽成（ゴヤウゼイ）　二二四六―二二七一	後水尾（ゴミヅノヲ）　二二七一―二二八九
明正（ミヤウシヤウ）　二二八九―二三〇三	後光明（ゴクワウミヤウ）　二三〇三―二三一四	後西院（ゴサイヰン）　二三一四―二三二三
靈元（レイクエン）　二三二三―二三四七	東山（ヒガシヤマ）　二三四七―二三六九	中御門（ナカミカド）　二三六九―二三九五
櫻町（サクラマチ）　二三九五―二四〇七	桃園（モモゾノ）　二四〇七―二四二二	後櫻町（ゴサクラマチ）　二四二二―二四三〇
後桃園（ゴモモゾノ）　二四三〇―二四三九	光格（クワウカク）　二四三九―二四七七	仁孝（ニンカウ）　二四七七―二五〇六
孝明（カウメイ）　二五〇六―二五二六（國史眼カウミヤウ）	明治（メイヂ）　二五二七―二五七二	今上（キンジヤウ）　二五七二―萬々歳

右の内括弧内は北朝歴代の御諡號である。

第三章　歴代年號の讀方

歴代年號の讀方も、從來種々になつて居つた、併し是も近來は餘程一致して來たことである。

年號の下に記してある數字は、其年號の紀元時代である。

大化 一三〇五	白雉 一三一〇	白鳳 一三三二	朱鳥 一三四五	大寶 一三六一
慶雲 一三六四	和銅 一三六八	靈龜 一三七五	養老 一三七七	神龜 一三八四
天平 一三八九	天平勝寶 一四〇九	天平寶字 一四一七	天平神護 一四二五	
神護景雲 一四二七	寶龜 一四三〇	天應 一四四一	延曆 一四四二	
大同 一四六六	弘仁 一四六〇	天長 一四八四	承和 一四九四	嘉祥 一五〇八
仁壽 一五一一	齊衡 一五一四	天安 一五一七	貞觀 一五一九	元慶 一五三七
仁和 一五四五	寛平 一五四九	昌泰 一五五八	延喜 一五六一	延長 一五八三
承平 一五九一	天慶 一五九八	天曆 一六〇七	天德 一六一七	應和 一六二一
康保 一六二四	安和 一六二八	天祿 一六三〇	天延 一六三三	貞元 一六三六
天元 一六三九	永觀 一六四三	寛和 一六四五	永延 一六四七	永祚 一六四九
正曆 一六五〇	長德 一六五五	長保 一六五九	寛弘 一六六四	長和 一六七二

寛仁（クワンニン）一六七七	治安（ヂアン）一六八一	萬壽（マンジユ）一六八四	長元（チヤウグエン）一六八八	長暦（チヤウリヤク）一六九七
長久（チヤウキウ）一七〇〇	寛徳（クワントク）一七〇四	永承（エイジヨウ）一七〇六	天喜（テンキ）一七一三	康平（カウヘイ）一七一八
治暦（ヂリヤク）一七二五	延久（エンキウ）一七二九	承保（ジヨウハウ）一七三四	承暦（ジヨウリヤク）一七三七	永保（エイハウ）一七四一
應徳（オウトク）一七四四	寛治（クワンヂ）一七四七	嘉保（カハウ）一七五四	永長（エイチヤウ）一七五六	承徳（ジヨウトク）一七五七
康和（カウワ）一七五九	長治（チヤウヂ）一七六四	嘉承（カジヨウ）一七六六	天仁（テンニン）一七六八	天永（テンエイ）一七七〇
永久（エイキウ）一七七三	元永（グエンエイ）一七七八	保安（ハウアン）一七八〇	天治（テンヂ）一七八四	大治（ダイヂ）一七八六
天承（テンジヨウ）一七九一	長承（チヤウジヨウ）一七九二	保延（ハウエン）一七九五	永治（エイヂ）一八〇一	康治（カウヂ）一八〇二
天養（テンヤウ）一八〇四	久安（キウアン）一八〇五	仁平（ニンビヤウ）一八一一	久壽（キウジユ）一八一四	保元（ハウグエン）一八一六
平治（ヘイヂ）一八一九	永暦（エイリヤク）一八二〇	應保（オウハウ）一八二一	長寛（チヤウクワン）一八二三	永萬（エイマン）一八二五
仁安（ニンアン）一八二六	嘉應（カオウ）一八二九	承安（ジヨウアン）一八三一	安元（アングエン）一八三五	治承（ヂジヨウ）一八三七
養和（ヤウワ）一八四一	壽永（ジユエイ）一八四二	元暦（グエンリヤク）一八四四	文治（ブンヂ）一八四五	建久（ケンキウ）一八五〇
正治（シヤウヂ）一八五九	建仁（ケンニン）一八六一	元久（グエンキウ）一八六四	建永（ケンエイ）一八六六	承元（ジヨウグエン）一八六七

建暦（ケンリヤク）一八七一
嘉祿（カロク）一八八五
文暦（ブンリヤク）一八九四
寛元（クワングエン）一九〇三
正元（シヤウグエン）一九一九
弘安（コウアン）一九三八
嘉元（カグエン）一九六三
文保（ブンハウ）一九七七
元徳（グエントク）一九八九
正平（シヤウヘイ）二〇〇六
元中（グエンチヤウ）二〇四四
觀應（クワンオウ）二〇一〇

建保（ケンハウ）一八七三
安貞（アンテイ）一八八七
嘉禎（カテイ）一八九五
寶治（ハウヂ）一九〇七
文應（ブンエイ）一九二〇
正應（シヤウオウ）一九四八
徳治（トクヂ）一九六六
元應（グエンオウ）一九七九
元弘（グエンコウ）一九九一
建徳（ケントク）二〇三〇
正慶（シヤウキヤウ）一九九二
文和（ブンワ）二〇一二

承久（ジヨウキウ）一八七九
寛喜（クワンキ）一八八九
暦仁（リヤクニン）一八九八
建長（ケンチヤウ）一九〇九
弘長（コウチヤウ）一九二一
永仁（エイニン）一九五三
延慶（エンギヤウ）一九六八
元亨（グエンカウ）一九八一
建武（ケンム）一九九四
文中（ブンチユウ）二〇三二
暦應（リヤクオウ）一九九六
延文（エンブン）二〇一六

貞應（チヤウオウ）一八八二
貞永（ヂヤウエイ）一八九二
延應（エンオウ）一八九九
康元（カウグエン）一九一六
文永（ブンエイ）一九二四
正安（シヤウアン）一九五九
應長（オウチヤウ）一九七一
正中（シヤウチユウ）一九八四
延元（エングエン）一九九六
天授（テンジユ）二〇三五
康永（カウエイ）二〇〇二
康安（カウアン）二〇二一

元仁（グエンニン）一八八四
天福（テンプク）一八九三
仁治（ニンヂ）一九〇〇
正嘉（シヤウカ）一九一七
建治（ケンヂ）一九三五
乾元（ケングエン）一九六二
正和（シヤウワ）一九七二
嘉暦（カリヤク）一九八六
興國（コウコク）一九九九
弘和（コウワ）二〇四二
貞和（ヂヤウワ）二〇〇五
貞治（ヂヤウヂ）二〇二二

應安(オウアン)二〇二八　永和(エイワ)二〇三五　康曆(カウリヤク)二〇三九　永德(エイトク)二〇四一　至德(シトク)二〇四四

嘉慶(カキヤウ)二〇四七　康應(カウオウ)二〇四九　明德(メイトク)二〇五〇　應永(オウエイ)二〇五四　正長(シヤウチヤウ)二〇八八

永享(エイキヤウ)二〇八九　嘉吉(カキツ)二一〇一　文安(ブンアン)二一〇四　寶德(ハウトク)二一〇九　享德(キヤウトク)二一一二

康正(カウシヤウ)二一一五　長祿(チヤウロク)二一一七　寬正(クワンシヤウ)二一二〇　文正(ブンシヤウ)二一二六　應仁(オウニン)二一二七

文明(ブンメイ)二一二九　長享(チヤウキヤウ)二一四七　延德(エントク)二一四九　明應(メイオウ)二一五二　文龜(ブンキ)二一六一

永正(エイシヤウ)二一六四　大永(ダイエイ)二一八一　享祿(キヤウロク)二一八八　天文(テンブン)二一九二　弘治(コウヂ)二二一五

永祿(エイロク)二二一八　元龜(グエンキ)二二三〇　天正(テンシヤウ)二二三三　文祿(ブンロク)二二五二　慶長(ケイチヤウ)二二五六

元和(グエンワ)二二七五　寬永(クワンエイ)二二八四　正保(シヤウハウ)二三〇四　慶安(ケイアン)二三〇八　承應(ジヨウオウ)二三一二

明曆(メイレキ)二三一五　萬治(マンヂ)二三一八　寬文(クワンブン)二三二一　延寶(エンパウ)二三三三　天和(テンワ)二三四一

貞享(ヂヤウキヤウ)二三四四　元祿(グエンロク)二三四八　寶永(ハウエイ)二三六四　正德(シヤウトク)二三七一　享保(キヤウハウ)二三七六

元文(グエンブン)二三九六　寬保(クワンパウ)二四〇一　延享(エンキヤウ)二四〇二　寬延(クワンエン)二四〇八　寶曆(ハウレキ)二四一一

明和(メイワ)二四二四　安永(アンエイ)二四三二　天明(テンメイ)二四四一　寬政(クワンモイ)二四四九　享和(キヤウワ)二四六一

文化（ブンクワ）二四六四	文政（ブンセイ）二四七八	天保（テンパウ）二四九〇	弘化（コウクワ）二五〇四	嘉永（カエイ）二五〇八
安政（アンセイ）二五一四	萬延（マンエン）二五二〇	文久（ブンキウ）二五二一	元治（グエンヂ）二五二四	慶應（ケイオウ）二五二五
明治（メイヂ）二五二八				

右の内括弧内は北朝歴代の年號である。

第四章　姓氏の讀方

古今に於ける所有姓氏の讀方を擧げることは、固より不可能のことである。又必しも必要はない。普通のものは、常識を以て讀むことが出來るものも多いのである。依つて今此に掲げるものは、余の曾て讀み得ずして人に問ひ、或は書に依つて取調べ、多年備忘錄に記して置いたのを取出したのである。中には普通のものもあるが、又普通實際の人に出會つたことのないのも澤山ある。

部首	氏名表
一	一二三（ヒフミ）　一二三（ヒホミ）　一二三（イジミ）・一二三（ウタカチ）　一口（イモアラヒ）　一寸八分（カマツカ）

一戸(イチノヘ)　一方(ヒヂカタ)　一色(イツシキ)　一風迫(イチノハザマ)　一宮(イク)　一宮善(イクゼ)　一萬田(イチマタ)

一噌(イツソウ)　丁(ヨロフ)　丁(ヨウロ)　丁子(ヨホコビ)　丁子(ヨホロコ)　丁野(ヨボノ)　七七五分(ミツツキ)

七七五分(ミツワタ)　七寸五分(クツワタ)　七五三(シメカケ)　七五三懸(シメカケ)　七生(ハブ)

七加家(ナナカマド)　丈部(ハセツカベ)　丈部路(タケベヂ)　三木(ミウキ)　三宅(ミヤケ)　三池(ミケ)　三谷(ミヤ)

三枝(ミエ)　三枝(サイタケ)　三枝松(サイクサ)　三枝部(サイクサ)　三郎阪(サイサカ)　三參岡(ミサヲカ)

三統(ミムチ)　三溝(サンミゾ)　三賀尻(ミカシリ)　三幣(ミユキ)　万刀(マカタ)　万木(ユルギ)　万代(マンダイ)

万代(モズ)　万年馬(マチバ)　万里小路(マデノコウヂ)　上三川(カミノカハ)　上上島(シシマ)　上月(カウツキ)

上毛(カミツケ)　上勾(カトリ)　上有智(カウツチ)　上林(カンバヤシ)　上柳(ウハヤギ)　上神(ニハ)　上神(ヒワ)

上神吉(カミカンキ)　上道(カンミチ)　上道(カンツミチ)　上遠野(カドウノ)　上遠野(アタノ)　下戸(オロシ)

下毛野(シモツケノ)　下斗女(シモトメ)　下石(オロシ)　下生(シモノブ)　下米宮(アメノミヤ)　下耳(シモニ)

下河邊(シモカウベ)　下風(オロシ)　下家(ワタクシ)　下家(ワタラヒ)　下間(シモツマ)　下濃(スソゴ)　不知山(イサヤマ)

世名城(イナグスク)　並始(ヂキハジメ)

丨　丶　ノ　乙　二

中布利（ナカフリ）
中吉（ナカヨシ）
中吉（ナカキリ）
中臣（ナカトミ）
中名生（ナカノメフ）
中枝（ナカツエ）
丸子（マリコ）
丸部（ワニベ）
丹下（タンゲ）
丹下（アカシタ）
丹比（タヂヒ）
丹比（ニヒ）
丹生（ニブ）
丹生（ハニフ）
丹生屋（ミヲノヤ）
丹羽（ニハ）
丹兒玉（タンコタマ）
丹穉（タチヒ）
久下（クゲ）
久久里（ククリ）
久地樂（クチラ）
久里（クカ）
久我（クガ）
久芳（クバ）
久玆（クジ）
久郎（クラキ）
久鄕（クガウ）
久積（クサツミ）
乙竹（オツタケ）
乙面（オトヲ）
乙訓（オトクニ）
乙骨（オツコツ）
乙須（オツス）
九（イチジク）
九戸（クノヘ）
九石（ササラン）
乾（イヌヰ）
二木（フタツギ）
二部（ニイベ）
二瓶（ニヘイ）
五十（イソ）
五十山（ヨスヤマ）
五十川（イツカハ）
五十川（イサカハ）
五十川（イカガハ）
五十川（イスズカハ）
五十子（イカゴ）
五十子（イカンゴ）
五十公（イキミ）
五十公野（ツツシノ）
五十君（イキミ）
五十君（イギミ）
五十君（イシミ）
五十里（イカリ）
五十河（イソカハ）
五十棲（イオスミ）
五十棲（イラスミ）
五十嵐（イガラシ）
五十幡（イカハタ）
五大院（ゴダヰ）
五月（サツキ）
五月女（サヲトメ）
五百井（イサヰ）
五百木井（イオキヰ）
五百木部（イオオベ）

人

五百住(イオスミ)　五百住(エスミ)　五百棲(エオスミ)　五百藏(イオロイ)　五百籠(イオロイ)　五百籠(イオロビ)
五姓田(ゴセタ)　五間(ゴカン)　五器所(ゴキソ)　井上(ヰナヘ)　井代(ヰデ)　井石(ドブリ)　井石(ドンブリ)
井面(ヰノモ)　亙(ワタリ)　亙理(ワタリ)
人首(モス)　仁木(ニツキ)　仁杉(ヒトスギ)　仁和寺(ニワシ)　仁科(ニシナ)　今治(イマハル)　今城(イマキ)
他田(ヲサタ)　仙石(センゴク)　令家(ヌシムネ)　任美(タクミ)　任都栗(ミトクリ)　企救(キク)　伊吉(イキ)
伊次(イツキ)　伊吹(イブキ)　伊形(イガタ)　伊具(イク)　伊砂(イスナ)　伊香(イカウ)　伊香(イカゴ)　伊秩(イツツ)
伊統(イトウ)　伊統(コレムネ)　伊農(イノウ)　伊達(ダテ)　伊蘇志(イソシ)　伯(カウ)　伯壁(カベ)　伴(バン)
伴部(トキベ)　佃(ツクダ)　位田(ニンデン)　佐介(サカイ)　佐介(サスケ)　佐分(サブリ)　佐分(サヲリ)　佐用(サヨ)
佐代(サチ)　佐代(サデ)　佐伯(サヘキ)　佐良(サララ)　佐良(サラキ)　佐佐(ササ)　佐佐(サツサ)
佐佐生(ササフ)　佐佐貴山(ササキノヤマ)　佐取(サトリ)　佐海(サミ)　佐浦(サウラ)　佐脇(サイキ)　佐脇(サウキ)
佐越(サコシ)　何(カ)　余田(アケリ)　余語(ジヨゴ)　住道(スムチ)　住道(スヂ)　來正(クルマサ)　來位(キシフ)
來吹(キキス)　來住(キシノ)　來海(クルミ)　來海(キマチ)　來海(キマラ)　來島(クルシマ)　來臨(コロモ)　依田(ヨダ)

儿 入 八 冂 几 凵

依羅（ヨサミ） 依羅（ヨサミ） 信乃（シナノ） 信夫（シノブ） 信太（シダ） 信田（シタ） 信俣（シノマタ） 信部（シノベ）

信楽（シガラキ） 信農太（シノタ） 保科（ホシナ） 倉員（クラカズ） 倍屋（マスヤ） 値賀（チカ） 倭文（シドリ）

假髪（スエ） 僮（カブル） 儀俄（ケガ） 俣野（マタノ）

兆向（トキ） 兒（チゴ）

入戸野（ニツトノ） 入交（イリマゼ） 入前（ニフゼン） 入野屋（ニフノヤ） 内呉（ナイキ） 全隈（マクマ）

八戸（ハチノヘ） 八戸（ヤヘ） 八月一日（ホヅミ） 八月朔日（ホヅミ） 八田（ハツタ） 八多（ハツタ）

八多（ハタ） 八多（ヤタ） 八谷（ヤタガヒ） 八相山（ヤエヤマ） 八祐（ヤケシ） 八朔（ホヅミ） 八國王（ヤコフ）

八國生（ヤコフ） 八國生（ヤクフ） 八國生（ヤカブ） 公使（クラム） 公門（コウモン） 公門城（クモンジヤウ）

六人部（ムトベ） 六十谷（ムツタ） 六月一日（ウリハリ） 兵本（ヒヤウモト） 兵主（ヒヤウズ） 兼藤（カネトウ）

冠（カフリ）

凡（オシ） 凡河（オシカハ） 凡河内（オホシカウチ） 凡海（オシノウミ） 凡部（オシベ）

出石（イツシ） 出庭（イデハ） 出納（スヰナフ） 出淵（イヅ） 出雲路（イモチ）

刀

分倍（フンハイ）　分倍（フバイ）　切河（キツカハ）　刑部（オサカベ）　刑部（オサヘ）　刑部（タカヘ）　判門田（ハチタ）

初鹿（ハシカ）　初鹿野（ハシカノ）　前波（ゼンバ）　前波（マヘバ）　劉（リウ）

力

功力（クヌギ）　加來（カク）　加集（カシフ）　勇山（イキヤマ）　勇禮（イクレ）　勅使河原（テシガハラ）

勘解由小路（カデノコウヂ）　勝（カチ）　勝田（カツタ）　勝田（スクタ）　勝部（カチベ）　勢馬（セマ）　勢喜門（セキト）

勹

包坂（サギサカ）　勾田（マガタ）

匕

化間（トガ）　北（キタバシリ）　北向（トキ）　北條（ホウヂヤウ）　北郷（キタガウ）　北郷（ホンガウ）

匚

匝嵯（サハサ）　匝嵯（サウサ）

匸

匹田（ヒキダ）　匹他（ヒキダ）　匹壇（ヒキダ）

十

十（モモキ）　十（モギキ）　十二月田（シワスタ）　十二月晦日（ヒヅメ）　十二佛（オツフルヒ）　十二神（オチフルヒ）

十二神（オツブルヒ）　十二神島（オチフルヒ）　十二神島（オツフルヒ）　十二神島（オツルイ）　十七夜（カナキ）

十七夜月（カナツ）　十八女（ワカイロ）　十川（トガハ）　十川（ソガウ）　十寸見（マスミ）　十五月（モチヅキ）

十代田（ソシロタ）　十代田（フシカタ）　十合（ソガフ）　十字（ツジ）　十河（ソガウ）　十時（トキ）　千生部（チイサコベ）

卜 卩 厂 又 口

千子部(チイサベ)
千夫(チブリ)
千本(センボン)
千役湊(チフリノミナト)
千岩(チハヤ)
千屋(チハヤ)
千破屋(チハヤ)

千家(センゲ)
千種(チクサ)
千磐(チハヤ)
廿山(ツヤマ)
半井(ナカラヰ)
南野(ナウノ)
南淵(ナブチ)
南淵(イナブチ)

南雲(ナグモ)

卜部(ウラベ)

印具(イツガヒ)
印具(イグ)
印具(オシスミ)
印部(イムベ)
印幡(インバ)

厚東(コトウ)
厚狹(アツサ)

及川(ヲヒカハ)
及川(ヲヨガハ)
反町(ソリマチ)
反橋(モドリハシ)
取石(トイシ)

口分田(クブンデン)
口分田(クモタ)
口分田(ククテ)
古井出(コヰテ)
古尾谷(フロチヤ)
古船場(コフナバ)

古筆(コヒツ)
古滿(コマ)
可兒(カニ)
各務(カクミ)
各務(カガミ)
合川(カフカハ)
合田(アンタ)
合志(アハシ)

合志(カハシ)
吉川(ヨシカハ)
吉川(キツカハ)
吉志(キシ)
吉良(キラ)
吉身(キシミ)
吉河(キツカハ)

吉事崎(キツシサキ)
吉彌侯部(キミコベ)
名西(ミヤウサイ)
名東(ミヤウトウ)
名理(ナトリ)
吐田(トダ)
吐師(ハシ)

吳(ゴ)
吳(クレ)
吳服(クレハド)
吹田(スヰタ)
吹智(シウチ)
吾河(ワカハ)
吾妻(ワガツマ)
吾妻(アヅマ)

口

周布（スフ）　周參見（スガミ）　周參見（マスミ）　和（ヤマト）　和（ミキタ）　和久兎毛（ワクトモ）　和田（ワダ）

和田（ミキタ）　和布刈（メカリ）　和安部（ハアベ）　和珥部（ワニベ）　和邇（ワニ）　味山（ミヤマ）　員辨（イナベ）

唐人（カラウト）　唐土（モロクニ）　唐牛（カラウシ）　唐和（カラワ）　唁（ホキ）　商長（アキオサ）　問叶（トガ）　問田（トヒタ）

善知鳥（ウトウ）　喜連川（キツレカハ）　喜連川（キレカハ）　喰代（ハラシロ）　喰代（ハフシロ）

四十八願（ヨイナラ）　四十万（シシマ）　四十四院（ツルシ）　四十住（ヨスミ）　四月（ワタヌキ）

四月一日（ワタヌキ）　四月朔日（ワタヌキ）　四戸（シノヘ）　四方（ヨカタ）　四方田（ヨモタ）　四至内（シシウチ）

四至内（シウチ）　四至内（シキフ）　國府方（コフカタ）　國府寺（コフデラ）　國覓（クニマキ）　圓（ツブラ）　圓滿（ハウシヤウ）

團（ダン）

土

土方（ヒヂカタ）　土生（ハフ）　土師（ハジ）　土師（ハニジ）　土浦（ツチウラ）　土浦（ナウラ）　圦（フセヒ）　坂戸（グワンゼ）

坂合部（サカアヒベ）　坂茂（サカモチ）　坂野（バンノ）　坂寄（サカキ）　坊本（マチモト）　垣谷（ハンヤ）　城上（キノカミ）

城所（キトコロ）　城原（キハラ）　城篠（キシノ）　執行（シツカウ）　堀戸（クツト）　埴生（ハニフ）　埴生（ハネン）　埴原（ハイバラ）

堤（ツツミ）　塙（ハン）　塙（ハナワ）　塙坂（ハネサカ）　塘林（トモハヤシ）　塀和（ハダ）　塀和（ハキワ）　塀和塀（ハガイ）

士　夂　夕　大

壊島（エシマ）
壬生（ミブ）
夏秋（ナカバ）
外山（トヤマ）
外山（コンバル）
外池（トノイケ）
外崎（トノサキ）
多（オホノ）
多門（オカド）
多胡（タコ）
多藝（タキ）
大仁（オホヒト）
大分（オホイタ）
大日子（オホヒス）
大日子（オホコ）
大中臣（オホナカトミ）
大田見（オタミ）
大宅（オホヤケ）
大米（オホヤギ）
大米（オホノキ）
大多和（オホタワ）
大多和（オホト）
大江田（オイタ）
大利（オホトシ）
大東（オホツカ）
大私（オホキサイチ）
大佛（オホサラギ）
大佛（オサラギ）
大佛供（ダイブク）
大角（オホスミ）
大角菜（オホツメ）
大角菜（オホツイ）
大角集（オホトツメ）
大豆生田（オホマニフタ）
大豆生田（マニフタ）
大幸（オホサカ）
大河一（タイカイチ）
大河内（オホカウチ）
大和田（オホワダ）
大舍人部（オホトネリベ）
大胡（オホコ）
大迫（オホセコ）
大迫（オホサコ）
大家（オホヤケ）
大神（オホミワ）
大給（オギフ）
大湯座（オホユケ）
大辟（オホサク）
大萱（オホガイ）
大館（オホダテ）
大聲（オホヘ）
天下野（ケガノ）
天丙（アマヒヤウ）
天羽（アマフ）
天海（アマカイ）
天孫（アモヒコ）
天語（アマガタリ）
天語（アマガタラヒ）
太（オホ）
太樂（タラク）
夫馬（フマ）
夫婦木（メヲトキ）
夷隅（イシミ）
奄智（アンチ）

女・子・宀

奈癸私（ナギサイチ）　奥富（ヲクト）

女良（メラ）　奴借屋（ヌカリヤ）　妙見（ヨシミ）　妹尾（セノヲ）　妻鹿（メカ）　姶良（アヒラ）　姶罪（アヒノ）

子子子（チコシ）　子子子（コチコ）　子地上（コチヘ）　孔（コウ）　孔王部（アマニヘ）　孔生部（アナフベ）

孕石（ハラミイシ）

宅（タクラ）　宇自可（ウジカ）　安口（ハタヤス）　安心院（アヂム）　安宅（アタカ）　安宅（アダギ）　安居（アヲ）

安居院（アゴヰン）　安居院（アグヰ）　安食（アヅキ）　安食（アゲヒ）　安孫子（アビコ）　安勅（アトギ）

安勅院（アトギ）　安富（アンフ）　安閑（アベ）　安幕（アマク）　安滿（アマ）　安福（ヤスカベ）　安積（アツミ）

安積（アサカ）　安曇（アクモ）　安曇（アツミ）　安曇（アツモ）　完戸（カント）　完利（シトリ）　宍人（シシド）　宍戸（シシド）

宍甘（シシカウ）　宍甘（シシカイ）　宍草（シシクサ）　宍粟（シシザハ）　宗宇馬（ソウウマ）　宗岳（ムネチカ）　宗岳（ソガ）

宗像（ムナカタ）　室賀（ムロガ）　宮山（ミヤマ）　宮宇地（ミヤウチ）　家内（ケノウチ）　家宜（ソギ）　家原（エハラ）

家城（イヘキ）　家城（ヤギ）　富田（トダ）　富米（トメ）　富所（トミトコロ）　富家（フク）　富處（トドコロ）　富部（トミベ）

富賀見（フカミ）　富樫（トガシ）　寒河（サンカハ）　寶生（ハウシヤウ）

寸　小　尸　山　巛　工　己

寸喜（スキ）
射屋（イヲヤ）
小山内（ヲサナイ）
小子部（チイサコベ）
小女淵（ヲナブチ）
小田切（ヲダギリ）
小田切（ヲダギ）
小布施（ヲフセ）
小宅（ヲヤケ）
小向田（ヲナイタ）
小谷（ヲダニ）
小谷（ヲウナ）
小豆（ヤウドウ）
小豆（アヅキ）
小豆島（アヅキシマ）
小車梅（ヲクルメ）
小長谷（ヲハセ）
小長谷（ヲハセベ）
小柳津（コナイヅ）
小屋貝（ヲヤカヒ）
小倉（ヲグラ）
小倉（コゴヒ）
小家（コヤケ）
小馬（ヲハサマ）
小宮山（コミヤマ）
小椋（コグラ）
小鳥遊（タカナシ）
小間（ヲマサマ）
小郷（サウガウ）
小餘綾（コヨロギ）
小鴨（ヲカエ）
小舊（ヲキ）
小藤（コトウ）
小藤花（コトウヂ）
小鷹坂（コタカサ）
尺（セキ）
尼子（アマコ）
尼子（ヤマネ）
尾喜（ヲキ）
尾藤（ビトウ）
屬（サツクワ）
山田大路（ヤマダウチ）
山谷（ヤツエ）
山於（ヤマノヘ）
山門（ヤマト）
山縣（ヤマガタ）
岡宅（ヲカヤケ）
岩郡（イハクリ）
川面（カハツラ）
川跨（カハマタ）
川鰭（カハバタ）
左今次（サクジ）
左右口（ウハクチ）
左右田（サウダ）
左澤（アテラザハ）
巧力（クヌギ）
巨椋（オホクラ）
巨勢（コセ）
巫部（カウナイ）
己汶（イモン）
己斐（コヒ）
己斐（コノミ）
己智（コチ）

巾　干　广　廴　弓　彡　彳

市允（イチノジヨウ）　市住（イチユキ）　布師（ヌノシ）　師岡（モロヲカ）　帶刀（タテワキ）　帶士（タラシコ）　帶壬（タラシロ）　常世（トコヨ）

常田（トキタ）　常石（トコナミ）　常羽（イクハ）　常昨（トノムカシ）　常喜（ジヤウキ）　常葉（トキハ）　常與（トコヨ）　幡文（ハタム）

幡多（ハタ）　幡美（ハミ）　幣原（シデハラ）

平子（ヒラコ）　平子（タヒライ）　平平（ヒラタヒラ）　平右馬（ヘイムマ）　平郡（ヒラクニ）　平郡（ヘクリ）　平栗（ヘクリ）

平群（ヘクリ）　幸田（カウタ）　幸若（カウワカ）　幸徳井（カウトクヰ）

床次（トコナミ）　府役（カウマチ）　府島（カウシマ）　府島（カウノシマ）　度會（ワタラヒ）　廚（クリヤ）　廣階（ヒロシナ）　廳（コハナハ）

建部（タケベ）　建陽（ユヤ）

弓削（ユゲ）　弓納持（ユナモチ）　引佐（イナサ）　張（チヤウ）　彌郡（イヤコホリ）

彭城（サカキ）　彭城（イバラキ）

役（アフコ）　役賀（ユタカ）　彼杵（ソノキ）　征矢野（ソヤノ）　後月（シリツキ）　後托（ヲサマ）　後河（シツカ）　後閑（ゴカン）

得能（トクノウ）　得純（トク）　御子左（ミコヒダリ）　御土田（ミトダ）　御手代（ミテシロ）　御手洗（ミタラヒ）

御手洗（ミタラシ）　御坐（オマシ）　御巫（ミカナギ）　御使（ミツカ）　御炊（ミカシキ）　御牧（ミマキ）　御返事（オノヘチ）

心　戈　戸　手

御來屋（ミクリヤ）　御看（オロシ）　御座（オマシ）　御宿（ミシユク）　御宿（トノヰ）　御溝（ミコウ）　御厨屋（ミクリヤ）

御饗（オカヒ）　德樂（トクラ）

忌寸（イキミ）　忌町（イトウ）　忌部（イミベ）　忌部（イムベ）　忍（ヲシ）　忍坂（ヲサカ）　忍海（ヲシノウミ）　忍壁（ヲシカベ）

志比（シヒ）　志紀（シキ）　志我閉（シウノヘタツヘ）　志斐（シビ）　志賀穴太（シガノアナホ）　志談（シダミ）　忠見（タダミ）

忽那（フツナ）　息（オキ）　息長（オキナガ）　息津（キツ）　惟任（コレタフ）　惟宗（コレムネ）　愛子（マシコ）　愛甲（アイカフ）

愛多茂（アタム）　愛宕（アタゴ）　愛宕（オタキ）　愛宕（オタギ）　愛洲（アイス）　愛智（アイチ）　愛智（エチ）

愼科（マシナ）　慶滋（ヨシシゲ）　懷島（フドコロシマ）

成相（ナリアヒ）　成相（ナライ）　我彥（アビコ）　我孫（アビコ）　我孫子（アビコ）　戒重（カイヂユウ）　戒能（カイノウ）

戶次（ヘツギ）　戶部（コベ）　扇谷（アフギガヤツ）

打宅（ウタ）　打越（ウデシ）　押小路（オシノコウヂ）　持是（チセ）　指弘（イヒホ）　指保（イヒホ）　指保（イセロ）

捕鳥部（トトリベ）　掃守（カモリ）　掃部（カンベ）　掛飛（カケヒ）　提關（タイナカ）　揖斐（イビ）　揖斐（セガヒ）

搏族戶（ハアラベ）　摩賀部（マカベ）　撫養（ムヤ）　擭（ナツミ）　攀（ヨシ）

支　支　文　斤　　方　日

支倉（ハシクラ）　支倉（ハセクラ）

政所（マンドコロ）　敎來石（ケウライイシ）　敏馬（トシマ）　散吉（サキ）　敷智（フチ）

文司（モジ）　文字（モジ）　文室（ブンヤ）　文珠（モンジユ）　揖斐（イヒ）　斑鳩（イカルガ）

新比叡（イマヒエ）　新田（ニツタ）　新生（ニヒブ）　新生（ニヒクラ）　新見（ニヒミ）　新免（ニヒミ）　新里（ニヒサト）

新村（ニヒムラ）　新良貴（シラキ）　新治（ニヒバリ）　新居（ニヒヰ）　新屋（シンヤ）　新家（ニヒケ）　新家（ニヒノミ）

新城（ニヒキ）　新納（シニフ）　新納（ニヒロ）　新開（シンカイ）　新發田（シバタ）　新渡戸（ニトベ）

方波江（カタバミ）　施（ハル）

日下（クサカ）　日下部（クサカベ）　日日（タチゴリ）　日内（ウツヒ）　日本（ヤマト）　日出山（ヒジヤマ）　日向（ヒナタ）

日佐（ヒサ）　日夜（ヒグラシ）　日夜（ヒタラシ）　日奉（ヒマツリ）　日柳（クサナギ）　日置（ヒオキ）　日置（ヒキ）　日置（ヘキ）

旦來（アツメ）　旦來（アツソウ）　旦來賀（アツウガ）　早乙女（サヲトメ）　早女（サウトメ）　早田（サウダ）　早田（ワサダ）

早尾（サウイ）　早速（ハヤミ）　明珍（ミヤウチン）　明浦（アケラ）　昆（コン）　春日（シユンニチ）　春日（カスガ）　春日部（カスカベ）

春部（カスベ）　春遂（カスカタ）　春藤（シユントウ）　晝飯（ヒルヰ）　暗（ハライ）

曰	月	木

曰理（ワタリ）　曰榶崎（クミサキ）　曲田（マガタ）　曲直瀨（マガセ）　曲直瀨（マナセ）　更衣（ワタヌキ）　曾（ソ）

曾方布（ソハフ）　最上（モガミ）　最寄（モヨリ）　會加（エカ）　會洲（アヒス）

月見里（ヤマナシ）　有智（ウチ）　服部（ハツトリ）　望月（モチヅキ）　朝戸（アサベ）　朝日（アサヒ）　朝日（アサイ）

朝日（アスカ）　朝夷（アサヒナ）　朝明（アサアキ）

木（イキ）　木目（キノベ）　木庄（キノシヤウ）　木甚（キツキ）　木造（コツクリ）　木綿（コバタ）　末包（スヱカネ）　本力（ホソキ）

本告（モトヲリ）　未至摩（ミシマ）　札（マサ）　朴澤（ホホサハ）　朱馬（ハンバ）　朱樂（アケラ）　朽木（クツキ）　朽網（クタミ）

村女（サヲトメ）　村主（スクリ）　村主（スグリ）　村擧（ムラケ）　材瀨（クヒセ）　杠（ユヅク）　杜（アマナシ）　杯作（ツキツクリ）　東（ヒガシ）

東（アヅマ）　東生（ヒガシナリ）　東地井（トチヰ）　東池田（トイタ）　東海林（シヨウジ）　東家（トケ）　東道（アツマチ）

東儀（トウギ）　杵杵（キネ）　枌田（マキタ）　枌田（ソギタ）　板茂（イタモチ）　板部岡（イタベヂカ）　枚方（ヒラカタ）

松任（マツタフ）　柘（ツゲ）　柘垣（ツゲガギ）　柘植（ツゲ）　栁生（ヤギフ）　栁瀨（ヤナセ）　柵瀨（サクラヒ）　案山（アンザン）

栗栖（クリス）　栗栖（クルス）　栗間（クルマ）　栗殼谷（クリカラダニ）　梁田（ヤナダ）　梅暮里（ウメホリ）　椛山（カバヤマ）

梯（カケハシ）　椚田（クヌギタ）　棘木（イバラキ）　椋（イラ）　椋垣（イラカキ）　椋島（ムクノシマ）　椋椅部（イラハセベ）　椿（ツバキ）

欠　止　　歹　殳　比　毛

楊井(ヤナヰ)　楊柳(ヤナイヅ)　楊胡(ヤコ)　楠後(クスジリ)　槻(ミツキ)　棈松(アベマツ)　楢下(ナラゲ)　楯又(タテマタ)

楯縫(タテヌヰ)　楫斐(セガヒ)　極月晦(ヒナシ)　極月晦(ヒツメ)　榮山(サカヤマ)　榎津(エナツ)　榛谷(ハンカヘ)

榛原(ハイバラ)　榛原(ハンバラ)　榛葉(シンエウ)　榛澤(ハンザハ)　槭田(カシケタ)　槭田(カケヒ)　棵澤(クルミサハ)　樂(ラク)

樂世(ナラ)　樂樂前(ササノクマ)　檜前(ヒノクマ)　檢見川(ケミカハ)　櫓原(カチハラ)　櫛比(クシヒ)　櫛代(クジロ)

櫟原(クヌギハラ)　櫟原(イチハラ)

欲賀(オシカ)　歌枕(カツラギ)

止美(トノミ)　正月(ムツキ)　正月一日(アチ)　正田(シタ)　正見(マサミ)　此口(アザ)　武石(フイシ)

武石(フセキ)　武射(ムサ)　武庫川(ムコカハ)　武藤(ムトウ)　武藤(タケフ)

殖月(ウヱツキ)　殖栗(ヱクリ)

殿來(トノギ)

比企(ヒキ)　比叡辻(ヘイツジ)

毛口(モロ)　毛所(チンジヨ)　毛受(メンジユ)　毛受(メンゾウ)　毛牧(モヒラ)　毛馬(メンマ)　毛馬内(ケマナイ)

氏　气　水

氏家（ウヂイヘ）　氏家（ウヂヘ）　氏良（テラ）

氣比庄（ケビノシヤウ）

水子（ミヅネコ）　水口（ミナクチ）　水口（ミゾグチ）　水主（ミヌシ）　水主（カコ）　水主（トンモン）　水足（ミツタリ）　水取（モンドリ）

水取（モトリ）　水速（ミハヤ）　水無瀨（ミナセ）　水滿（ミツミ）　氷（ヒ）　氷上（ヒガミ）　氷室（ヒムロ）　永廣（エヒロ）

池尻（イケガミ）　池後（イケジリ）　江田（エタ）　江田（ガウダ）　江香（カウカ）　江乘（エナシ）　汗（フザカシ）　汾陽（カハキタ）

沙田（マサゴダ）　沙田（イサゴダ）　河勾（カハワ）　河曲（カハクマ）　河曲（カハチ）　河合（カハヒ）　河合（タタス）　河面（カハモ）

河面（カハツラ）　沼垂（ヌタリ）　沼垂（ノツタリ）　泉二（モトジ）　泉亭（イヅミテイ）　泉原（イツハラ）　法花寺（ホツケシ）

波入（ハニフ）　波木井（ハキヰ）　波白（ハシロ）　波波（ハハ）　泊（カベ）　波泊部（ハカベ）　泥谷（ヒヂヤ）

洗波（センバ）　洗馬（セバ）　洲股（スノマタ）　洲流（スナガシ）　浮名（ウチナ）　浮氣（フケ）　海上（ウナカミ）　海上（ウカミ）

海犬養（アマイヌカヒ）　海江田（カイエタ）　海老名（エビナ）　海部（アノヘ）　海野（ウチノ）　淡河（アイカハ）　淡河（アテカハ）

淡河（アカハ）　淡河（アガフ）　深日（フケヒ）　深淵（フカス）　淸科（キヨシナ）　淸海（キヨミ）　淺井（アザヰ）　淺利（アサリ）

渥美（アツミ）　滋生（シゲフ）　滑（ナメラ）　滑川（ナメリカハ）　溫（ヌクイ）　溫井（スクヰ）　溫科（ヌクシナ）　渤海（フカミ）

（水）
滿生野（ミオノヤ）　滿生野（ミツツ）　漆島（ヌリシマ）　漆部（ヌルベ）　漆間（ウルシマ）　漆間（ウルマ）　漢人（アヤンド）
漢主（アヤヌシ）　漢城（アヤキ）　漢部（アナベ）　潟保（カタノホ）　澤瀉（オモダカ）　澁谷（シブヤ）　澁谷（シブタニ）　澁谷（シボエ）
濱東（ハマトウ）　瀨（イワダ）

火
火作（コクリ）　火撫（ヒナデ）　火撫（ホナケ）　煙上（タバカミ）　熊代（クマシロ）　熊谷（クマヤ）　熊谷（クマガヤ）　燕栗（ササクリ）

爪
爪工（ツメタクミ）　爲名（ヰナ）　爲奈（ヰナ）　爲政（ヰセイ）

父
父鬼（チチヲリ）

牛
牛九十（ウシクツ）　牛屎（フシバリ）　牛糞（ウクソ）　牛糞（ゴコエ）　牟庫（ムク）　牟禮（ムレ）　物十（モギキ）
物部（モノベ）　物集（モヅメ）　物集女（モヅメ）　物積（モヅメ）

犬
犬養（イヌカヒ）　狛（コマ）　狛人野（ゴマウドノ）　狛月（コマツキ）　狹間（ハザマ）　猶耳（イカガ）　猶原（マノハラ）　猿子（マシコ）
猿山（サヤマ）　猿尾（マシヲ）

玉
玉祖（タマオヤ）　玉城（タマグスク）　玉島玉（タマシマヤマ）　玉栲（タマカゲ）　玉置（タマキ）　玉宮西（ヲクニシ）　玢玢（チンニフ）
珠洲（スズ）　珠洲（ク）　斑目（マダラメ）　斑鳩（イカルガ）

瓜　瓦　甘　生　　　用　田

瓜生（ウリフ）

瓶尻（カメシリ）　瓶尻（カミシリ）

甘味（カミナベ）　甘味（カミアヒ）　甘南備（カンナビ）　甘樂（カンラ）

生川（ナルカハ）　生天田目（ナマタメ）　生戸（イキト）　生田（イクタ）　生田（シヤウダ）　生石（オロシ）　生出（イクテ）

生地（オヒヂ）　生池（ナチ）　生江（ノクエ）　生夷（イクイ）　生形（ウブカタ）　生形（オボカタ）　生長（オイサキ）　生幾（イクシマ）

生駒（イコマ）　生稻（イナタ）　産田（サイタ）

用瀬（モチガセ）　用瀬（モチノセ）

田（デン）　田下（タゲ）　田公（タノキミ）　田母神（タノカミ）　田名部（タナベ）　田使（タヘ）　田部（タナベ）

田部井（タメガ井）　田麥俣（タモンマタ）　由布（ユフ）　由宇（ユウ）　甲可（カフカ）　甲良（カハラ）　甲能（カツノ）

男衾（ヲフスマ）　畔田（クロタ）　畔田（イロタ）　畔柳（クロヤナギ）　畔柳（イロヤナギ）　畔蒜（アビル）　留束（フツカ）　畝尾（ウネヲ）

畝尾（ウネビ）　畤籠（アゼムロ）　畤籠（アゼクラ）　番長（ハヲ）　番御（ハンモ）　當世（マサヨ）　當宗（マサムネ）　當麻（タウマ）

當麻（タヘマ）

疋

疋田(ヒキダ)　疋壇(ヒキダ)

癶

癸生(ケフ)　癸生川(ケフカハ)　登米(トウヨネ)　發智(ホッチ)

白

白仁(シラニ)　白田(ハクタ)　百元(モモト)　百目木(ドメキ)　百百(トド)　百濟(クダラ)　的部(イタハベ)　皆河(シナカ)　皆藤(カイトウ)

皿

益子(マシコ)　益位(マシ井)　益城(マスキ)

目

目(サックワ)　目堅(メカタ)　眼目(サックワ)　直(アタヒ)　直上(ニカミ)　直下(マシモ)　直見(ナスミ)　相良(サガラ)

相樂(サガラ)　眞人(マット)　眞人部(マビトベ)　眞下(マシモ)　眞木(マキ)　眞木(マナギ)　眞田(マナダ)

眞足(マタセ)　眞柄(マガラ)　眞神(マガミ)　眞神田(マカンタ)　眞崎(マガサキ)　眞部(マナベ)　眞鍋(マナベ)

眞繼(マクレ)　眞繼(マレキ)

矢

矢作(ヤハギ)　矢袋(ヤムロ)　矢集(ヤス)　知夫(チブリ)　知夫(チフリ)　知間(チマ)

石

石上(イシガミ)　石上(イソノカミ)　石下(イシオロシ)　石戸(オロシ)　石井(イシ井)　石井(イハ井)　石內(イハウチ)　石生(オロシ)

石生別(イハナスワケ)　石占(イシウラ)　石占井(イシラ井)　石作(イハツクリ)　石志(イハシ)　石見(イハミ)　石來(イシキ)

示

石和（イサワ）　石城（イハキ）　石栗（イハクリ）　石野（イシノ）　石野（イハノ）　石動（イスルギ）　石動山（イスルギ）

石邊（イソベ）　砂金（スナゴ）　礪波（トナミ）

社戸（コソベ）　祇園（ギヲン）　祈念佛（キネンブチ）　祈答院（ケタフヰン）　祝部（ハフリベ）　祝部（ハフリ）　祝薗（イハソノ）

祖母井（ウバガヰ）　祖母江（ウバガエ）　神（アホ）　神丸（カンマル）　神子上（ミコガミ）　神代（クマシロ）　神田（カンダ）

神田（カウダ）　神奴（カミヤツコ）　神奴（カムド）　神主（カウス）　神去（カミキ）　神在（ジンザイ）　神吉（カミキ）　神私（カミサイチ）

神足（カウタリ）　神足（カウタニ）　神努（カンツコネ）　神志那（カウシナ）　神服（カンハトリ）　神門（カウド）　神波（ジンバ）

神波（カウナミ）　神前（カンザキ）　神前（カウザキ）　神宮司（ジングシ）　神麻積（カンヲミ）　神稲（イマシツ）　神館（カウダチ）

神鞭（カウムチ）　神鑒（カガミ）　禁野（シメノ）　福士（フクシ）　福谷（ウキカヒ）　福家（フケ）　福富（フクトミ）　福當（トンダ）

禰知風（ネチカゼ）

禾

禿（カブル）　秀實（ホツミ）　私市（キサイチ）　私市（キヒチ）　秋鹿（アイカ）　秋賀（アハカ）　租地（チチ）　秦（ハタ）

秦井手（ハタヰテ）　秦當（カンノタウ）　秩父（チチブ）　税所（サイショ）　稗田（ヒエダ）　種田（タ子ダ）　種田（オイダ）

稲生（イナフ）　稲城（イナギ）　稲荷（イナリ）　穀谷（クフタニ）　穆佐（ムカサ）　積組（ツグミ）　潁娃（エノ）　穗保（ホシフ）

穂(ホ)集(アツメ)

穴

穴(アナ)太(フ)　穴(アナ)穂(ホ)部(ベ)　竆(クボ)田(タ)

竹

竹(タケ)束(タバ)　竹(タケ)廻(タバ)　竹(オ)蓋(ブタ)　笛(フ)吹(スヰ)峠(タウゲ)　笠(カサ)合(ヒ)　筆(フンデ)　等(ト)等(ド)力(ロキ)

筈(ツ)本(ボ)　筥(キ)室(ムロ)　筧(カケヒ)　箕(ミノ)曲(ワ)　箕(ミ)作(ツクリ)　箭(ヤ)集(ツメ)　築(ツ)城(キ)　篠(ササ)本(モト)

簑(ミノ)浦(ウラ)

米

米(ヨネ)田(タ)　米(コメ)田(タ)　米(ヨキ)集(ツメ)　米(シ)餅(トキ)搗(ツキ)　粧(ケハヒ)坂(サカ)　粟(アハ)生(フ)　粟(アハ)生(イケ)

粟(アハ)生(フ)田(ダ)　粟(ア)生(ラ)田(タ)　粟(アン)鹿(カ)　粟(ア)飯(イ)原(バラ)

糸

紅(イリ)白(マザリ)　納(ナ)所(ゾ)　素(ソ)　紺(コン)口(ク)　紺(コン)部(ベ)　終(ヒメ)日(モス)　終(ヨス)夜(ガラ)　結(ユフ)城(キ)

結(コン)崎(ゴウ)　結(ケツ)解(ゲ)　給(キ)黎(ヒレ)　綠(ミナ)野(ノ)　綴(ツヅキ)　綴(ツヅ)喜(キ)　喜(ツル)綺(ベ)　綺(カンタ)

綾(アヤノ)小(コウ)路(ヂ)　綿(ワタ)貫(ヌキ)　綣(ヘ)村(ムラ)　綣(ヘソ)村(ムラ)　緣(ヘリ)　緘(イ)藤(トウ)　縣(アガタ)　縣(アガタ)主(ヌシ)

縣(アガタ)犬(イヌ)養(カヒ)　繖(キヌカサ)　纐(カウ)纈(ケツ)　纐(カウ)纈(ケチ)　纐(ハナ)纈(フサ)　纈(イハタ)帶(オビ)

罒

置(オキ)賜(タマ)　置(ナイ)賜(タマ)

羊　羽　老　耳　肉　臣　至　臼　舌　艮　艸

美(ヨシミ)　美(ミ)乃(イ)　美(ミ)努(ノ)　美(ミ)嚢(クキ)　羯(カツ)摩(マ)

羽(ハ)丹(ニ)生(フ)　羽(ハ)生(ニフ)　羽(ハ)束(ツカ)　羽(ハ)束(ツカ)志(シ)　羽(ハ)咋(クヒ)　羽(ハネ)茂(モチ)　羽(ハ)茂(モト)

老(オム)馬(マ)　老(オン)馬(マ)　耆(エツ)度(ト)

耳(シ)名(ナ)宇(ウ)

背(ヘ)評(コホリ)　腹(ハラ)目(メ)　胝(アカギレ)　胝(アカガリ)　膳(カシハテ)

臣(オンコ)　臣(オンノコ)

臺(ウテナ)

臼(ウス)杵(キ)　舂(ツイ)米(シネ)　與(ヨ)牛(ゴ)富(トミ)　與(ヨ)等(ト)　與(ヨ)謝(サ)

舍(トネ)人(リ)

良(マコト)

芋(イク)毛(モ)　芥(アクタ)川(カハ)　芳(ハウ)香(カ)　芳(ハ)美(ミ)　芳(ハ)賀(ガ)　芹(イツ)井(キ)　花(ハナ)駖(ヲコゼ)　苗(ナウ)鹿(カ)

茅(カヤ)生(フ)　若(ワカ)湯(ユ)座(ベ)　若(ワカ)槻(ツキ)　苦(クル)林(リ)野(ノ)　苦(クメ)桃(ラ)　英(ハナフサ)　英(アイ)多(タ)

虫　行　衣

英保（アヤボ）　英保（アホ）　英賀（アカ）　茂木（モテキ）　茅代（チムシロ）　茨田（マンタ）　草井池（クサヰチ）

荎津（タキツ）　莪和（ヲチハ）　荒（アララ）　荒（アララギ）　荒古（アラコ）　荒浦（アキノウラ）　莅戸（ノゾキド）　莅戸（ノヅト）

莫田（アイタ）　荻生（ヲギフ）　菅（カン）　菅（スガ）　菅生（スガフ）　菅生（スガオ）　菅蕪野（スガレノ）　菱河（ヒシカハ）

萬代（モヅメ）　萬軍馬（マネバ）　萬里小路（マテノコウヂ）　萬喜（マキ）　萱野（スガノ）　著座（キマセ）　葛（カサイ）

葛山（カツラヤマ）　葛山（カトヤマ）　葛山（カヅラ）　葛山（カシヲ）　葛井（カヂヰ）　葛井（フチヰ）　葛目（クズメ）　葛西（カツサイ）

葛西（カサイ）　葛原（カツラハラ）　葛野（カトノ）　葛飾（カツシカ）　葦敷（アシキ）　蒲生（ガマフ）　蓼原（タデハラ）　蕃良（ハラ）

蕗（フキカハセ）　蕪坂（カブラサカ）　薄（ススキ）　薄田（ススキダ）　蔣池（コモチ）　薦集（コモツメ）　薤山（ニラヤマ）　藁科（ワラシナ）

藍香（アイキヤウ）　藤下（トグ）　藥袋（ミナヘ）　藪（ヤブ）　藪原（ヤノハラ）　藻寄（モヨリ）　蘰（カツラ）

蜷川（ニナカハ）　蜷川（ミナカハ）　蝮椿（ハマツバキ）　螺（ツブラ）　螺木（ホウギ）　螺田（ニシダ）　螺江（ニシエ）　螺良（ツブラ）

蟲生（ムシフ）

行方（ナスカタ）　行方（ナメカタ）　行命（ギヤウメイ）　行明（キヤウメイ）

衣斐（イビ）　衣摺（キヌシリ）　補鬼（ホキ）

西見角言　谷豆貝　赤走

西大音（ニシモリナイ）　西東（サイトウ）　西洞院（ニシノトヰ）　西能（サイノウ）　西馬音内（ニシモウナイ）　西泥部（ニシヒヂリコヘ）

見目（ケンホク）　見田（ハンダ）　見參岡（ミサヲカ）　見雲（ミクモ）　規矩（キク）

角（ツノ）　角井（ツノヰ）　角田（ツノダ）　角田（カクタ）　角田（スミタ）　角谷（スミヤ）　角南（スナミ）　角倉（スミクラ）

言（ホキ）　言同（コントウ）　計束（トツカ）　設樂（シタラ）　許斐（コノミ）　評（ハカリ）　語（カタラヒ）　調（ツキ）　調月（ツキツキ）

調所（ヅショ）　諏訪（スハ）　諫山（イサヤマ）　諫早（イサハヤ）　諸葛（モロクズ）　護上（ゴジヤウ）　護魔都留（ゴマツル）

譽田（ホンダ）　譽田（コンダ）　讃良（サララ）

谷（タニ）　谷（ハザマ）　谷（ヤツ）　谷川（タニカハ）　谷川（ヤツカハ）　谷谷（タニガヤ）　谷谷（タニガヘ）

豐（ブン）　豐原（トヨハラ）　豐原（トイハラ）　豐階（トシナ）　豐饒（ブネウ）

財津（ザイツ）　財部（タカラベ）　財滿（サイマ）　資延（スケノブ）　賀永（カヤ）　賀良（カラ）　賀來（カク）　賀茂（カモ）

賀茂（カモチ）　賀滇（カヌマ）　賀陽（カヤウ）　賀陽（カヤ）　貴志（キシ）　贄（ニヘ）

赤土（シヤクド）　赤生（ハニフ）　赤埴（アカハニ）

越石（ウチシ）　越生（コシオ）　越生（ヲコオ）　越振（ヲチフル）　越智（ヲチ）　越智直（ヲチノアタヒ）

足　身　車　辛　辵　邑　酉　釆

足立（アダチ）　足羽（アシハ）　足羽（アスハ）　足利（アシカガ）　足助（アスケ）　路（オホチ）
身人（ミウド）　身人部（ミウトベ）
車間（クルマ）　輕我孫（カルアビコ）
辟田（ヒラタ）　辟秦（ハイハタ）
辻葩（カハナ）　迎達（イタチ）　近部（チカベ）　迫田（セリタ）　迹見（アトミ）　迹見（トミ）　這田（ハフタ）　速水（ハヤミ）
連（ツラ）　連海（レンカイ）　逸見（ヘンミ）　道田（オホチタ）　道祖（サイド）　道祖（フナト）　道祖木（サイノキ）　道瀨（ダウノセ）
遠敷（ヲニフ）　遲塚（チツカ）　邊分（ヲイワケ）
邑代（イロシロ）　邑智（ヲクチ）　邑樂（ヲフアラキ）　邑樂（ヲウラ）　郡上（グジヤウ）　郡戶（クニト）　郡東（クントウ）　都甲（トガフ）
都努（ツノ）　都所（トドコロ）　都筑（ツヅキ）　鄉野（ガウノ）
酉水（スガイ）　酒人（サカイ）　酒匂（サカワ）　酒西（スサイ）　酒向（サカワ）　酒作（サカコト）　酒良（サカラ）
酒（ス）　酒酒井（ススヰ）　醫王野（イワウノ）
采女（ウネメ）

里	金	長	門	阜

里

里(サト)　重栖(シゲス)　野一色(ノイシキ)　野三(ノサウ)　野老山(トロノヤマ)　野條(ノサシ)　野殿(ノドノ)　野實(ノミ)　野邊(ノンベ)

金

金(コン)　金太(カナフ)　金出地(カナチ)　金持(カナモチ)　金持(カナチ)　金持(カナヂ)　金春(コンパル)　金勝(コンゼ)　金曾木(カナソキ)　金萬(コンマン)　釜萢(カマヤチ)　鉅(オホシカ)　鉅(オホカ)　鉅鹿(オホカ)　鉅鹿(ササカ)　鉾久(ムク)　鋤柄(スキカラ)　錦古里(ニシコリ)　錦古利(ニシコリ)　錦貫(ニシヌキ)　錦織(ニシゴリ)　鋺師(マリシ)　鎭目(シヅメ)　鏑木(カブラキ)

長

長(チヤウ)　長丸(ヲサマル)　長土呂(ナガドロ)　長田(ナガタ)　長田(ヲサダ)　長束(ナツカ)　長谷(ハセ)　長谷川(ハセカハ)　長谷河(ハセカハ)　長沙(ナガス)　長砂(ナガスナ)　長保(チヤウハウ)　長南(チヤウナン)　長狹(ナガサ)　長部(ヲサベ)　長曾我部(チヤウソカベ)

門

門司(モンジ)　門司(モジ)　門田(モンデン)　門河(モカハ)　門眞(カマト)　門眞(カマド)　開田(カイデン)　開發(カイホツ)　間(ハザマ)　間人(ハシビト)　間人(ハシウト)　間人(マレヒト)　間人(ハシクテ)　間人(マウイ)　間林(カンリン)　間部(マナベ)

阜

防夫(アタト)　阿(ホトリ)　阿刀(アト)　阿子島(アゴシマ)　阿子島(アクガシマ)　阿介(アスケ)　阿支奈(アシナ)

革　面　青　雨　隹

阿支奈（アキナ）　阿多（アタ）　阿曲（アクマ）　阿保（アボ）　阿孫（アビコ）　阿留多岐（アルタキ）　阿閇（アトヂ）

阿閇（アベ）　阿閇門人（アベノカドウト）　阿間（アンマ）　阿蛭（マビル）　阿曾沼（アソヌマ）　阿墓（アヅミ）　阿墓（アバカ）

阿曇（アヅミ）　阿曇犬養（アヅミノイヌカヒ）　阿蘇沼（アソヌマ）　陶（スヱ）　陶山（スヤマ）　陶田（スダ）　陶冠井（スヱ）

陶部（スヱベ）　陶器（スヱ）　陶器（スキ）　陶器所（スヱ）　陶藤（ストウ）　陸（クガ）　陸田（クガタ）　陸路（ムツロ）

隅田（スミダ）　隅田（スダ）　階士（シナト）　階戸（シナト）　陽丹（ヨニ）　陽侯（ヤコ）　隨分附（ナブサツケ）

隨神（ズ井シン）　隨朝（ズ井テウ）

雀部（ササベ）　雀部（ササイベ）　雄家（ヲヘ）　集田（ソクタ）　集堂（スダウ）　雜賀（サイガ）　雜樂（シダラ）　雞冠（カイテ）

雞冠（カヘテ）　雞冠井（カヘデ）　雞冠井（トサカ井）

雨谷（アマガヒ）　雲母谷（ウバガタニ）　雲林院（ウジ井）　雲掃（ウナラ）

青海（アヲウミ）　青襲（アヲソヒ）　靜妻（シヅマ）　靜原（シヅハラ）

面西（メニシ）　面圖（メヅ）

靫負（ユゲヒ）　靫連（ホカル）　靫達（ユカモ）　靫編（ユキアミ）

頁		風	飛	食			首	香	馬		高
須賀院（スガヰ）	額田部（スカタベ）	風斗（フト）	飛鳥井（アスカヰ）	食（ミケ）	飽庭（アイバ）	館野（タテノ）	首藤（ストウ）	香母（カウモ）	馬上（マウヘ）	馬渡（マワタリ）	高力（カウリキ）
頓宮（ハヤミヤ）	額賀（ヌカガ）	風吉（カザキチ）	飛鳥部（アスカベ）	食滿（ケマ）	飽間（アクマ）	餝賀（カシマ）		香西（カウザイ）	馬工（イサラ）	馬喰田（ハバタ）	高市（タカチ）
頓宮（ハミヤ）		風至（フシ）	飛鳴（ヒタ）	飯尾（イノヲ）	飽間（アキマ）	饒石川（オイシカハ）		香芳（ニホカタ）	馬加（マクハリ）	馬頭（バトウ）	高任（タカタウ）
頓野（トンノ）		風至（フケシ）		飯河（イカハ）	養父（カヒフ）	饗庭（アイバ）		香美（カガミ）	馬來田（マキタ）	馬籠（マゴメ）	高志（コシ）
額（ヌカ）		風當（フウタウ）		飯浪（イヒヌマ）	養祖（ヤウソ）			香曾我部（カウソカベ）	馬屋原（マヤハラ）	騎西（キサイ）	高志（タカシ）
額戸（カウト）				飯富（ヲフ）	餘島（ヨシマ）				馬神屋（マミヤ）		高志壬生（コシミブ）
額田（ヌカダ）				飽浦（アクラ）	餘語（ヨゴ）				馬被（マキヌ）		高座（タカイラ）
				飽浦（アイラ）	餘綾（ユルギ）						

	高階（タカシナ）　高境（タカキ）　高境（カウサメ）　高麗（カウヌ）　高麗（コマ）
鬥	鬪雞（ツゲ）
魚	魚井（ナマヰ）　魚返（ウカヘリ）　鮎上（アユミ）　鮭延（サケノブ）
鳥	鳥神山（トカミヤマ）　鳥遊（タカナシ）　鳥籠山（トコノヤマ）　鳰（ニホ）　鳳（オホトリ）　鴨打（カモチ）　鴨足（イテウ）　鴻（オホトリ） 鵤（イカルガ）　鷲見（スミ）　鷦鷯（ササギ）　鷹觜（タカハシ）
鹿	鹿子木（カノコキ）　鹿子木（カコキ）　鹿伏兎（カフト）　鹿伏兎（カンベ）　鹿伏兎（ニンベ）　鹿妻（カツマ） 鹿野苑（ロクヤヲン）　麓（ハヤマ）
麻	麻生（アサフ）　麻生（ヲヘ）
黑	黑股（クロト）　黑股（スノマタ）
齊	齋部（イミベ）
龍	龍山（リユウセン）　龍花（リユウゲ）　龍泉（リユウセン）　龍神（タツカミ）　龍神（リユウジン）

我國人は約五千萬人にして、其戸數は約一千萬であり。各〻一つの氏名を有して居

るからして、固より種々のものがあり、前述のものは、稍々讀み難いものである。

我國人の氏名中、殊に多くあるのは「藤」の字を附けて居るのである。今其氏名の下に用ふるもののみを擧げても、余の知れるもの

上藤　中藤　五藤　井藤　京藤　今藤　仙藤　伊藤　佐藤　依藤
佳藤　光藤　兼藤　內藤　兵藤　前藤　印藤　原藤　加藤　古藤
周藤　嘉藤　圓藤　團藤　城藤　外藤　大藤　奥藤　宇藤　安藤
宗藤　室藤　寄藤　實藤　小藤　尾藤　居藤　山藤　岡藤　岩藤
工藤　常藤　平藤　廣藤　後藤　志藤　恒藤　惠藤　數藤　早藤
春藤　木藤　本藤　杉藤　松藤　東藤　森藤　權藤　武藤　江藤
沼藤　泉藤　波藤　海藤　清藤　澤藤　瀨藤　新藤　爲藤　甲藤
登藤　白藤　皆藤　眞藤　神藤　米藤　紫藤　緘藤　美藤　羽藤
若藤　菅藤　衞藤　西藤　諸藤　谷藤　豐藤　貝藤　越藤　近藤
進藤　遠藤　重藤　金藤　間藤　關藤　阿藤　陶藤　須藤　首藤
高藤　鬼藤　鴨藤　齊藤　齋藤　鶴藤

の百種以上もある。尙ほ考出すなら、隨分あることであらう。是等の氏名を悉く列擧して、其讀方を示すことは固より不可能のことである。

元來氏名其他固有名詞の讀方は、最も困難であるから、普通のものの外は、之を讀み誤つても、格別耻辱ともならないものである。余の知友に「小倉（コゴヒ）」といふ氏の人があるが、最初一二回は眞の讀方を申出したが、他人は誰もさう讀まずして、「ヲグラ」と呼び本人も常に許容して居つた。或時同氏の鄕地へ共に旅行したとき、他の鄕友が本名を呼んで面會に來たら、そんな人は居ないとて、門前拂をなし懸けたことがあつたので、主客一同遂に大笑をなした。併し其後も依然呼稱を改めない。

第五章　人名の讀方

現今にては、人々氏名一箇づつを以て、上下に通ずることになつて居るが、昔時は氏の上に姓を冠らせたことがあり、又人名にも名乘と通稱との二箇を同時に使用したこともあつた。通稱は大抵讀み易いが、名乘となつては、中々讀み難いものが多い、現今の人名中には、此名乘に相當するものと、通稱に相當するものとがあり。讀方の

難易は昔時のものに相應するのである。
名乘に相當する人名は、大抵字訓にて讀むことになつて居る併し漢字には一字にて數種の意義を有する所謂轉注に屬するものが少くない。一二の例を擧ぐれば、

保（タモツ、ヤスンズ）　爲（タナス、タメ）　將（ヒキヰル、マサニ）
盛（サカンナリ、モル）　行（オコナフ、ユク）　重（オモシ、カサナル、シゲル）

等の如くであるが、是等は名乘として、習慣上大抵或一種の意義に從ふものを專用して居る例へば、

保（ヤス）　爲（タメ）　將（マサ）
盛（モリ）　行（ユキ）　重（シゲ）

等の類ではあるが、是等は箇人箇人に就かざれば、眞の讀方は分からぬものである。第八篇に於て、楠木正成石田三成大石良雄の名乘の讀方のことを示し又「正直」の名乘にも、

マサナホ、　マサタダ、　セイチヨク、　マスグ、

等の讀方のあることを述べて置いたことであるが、其讀方は中々困難である其讀

方は普通の字訓と一致しないものも少くないのである。例へば、

一(カツ)　カタキナキ心、

二(ツグ)　一ニ次グ意、

五(トモ)　字訓伍の字ト通ズ、

仁(ヒト)　人ト音韻相通ズルニ依ル、

俊(トシ)　俊逸ノ意、

光(ミツ)　光充ノ意、

知(トモ)　知己即チ友ノ意、

周(チカ)　周親ヨリ來ル、

孝(タカ)　孔安國孝經ニ「孝者人之高行也」トアルヨリ來ル、

昌(マサ)　孔安國ガ昌言ヲ昌當ナリト言ヒシヨリ來ル、

治(ハル)　治田即チ「墾ル」ヨリ來ル、

成(シゲ)山ノ重ナルヲ一成ニ成ト云フヨリ來ル、

賢(カタ)質ヨリ誤ル、又堅ヨリ來ルトモ見ユ、

又「純茂」を「スミモチ」と讀むのは、字音讀である等は、南留別志の說である、又古來音訓兩樣に讀み來れる名乘もある。

賴光(ヨリミツ・ライクワウ)　俊成(トシナリ・シユンゼイ)　定家(サダイヘ・テイカ)　家隆(イヘタカ・カリユウ)

又小野道風の如きは、字音にて「タウフウ」と讀み來つて居る。藤原時平は「時平公」とする場合には「シヘイコウ」と讀み來つて居る。又小野妹子は唐國にては、自ら「蘇因高」と稱して居つた。是は蘇は蘇我の略因高の字音は妹子の讀方に近いからであつた。現今に於ける貴顯又は大家の人名でも、眞の讀方の分らないのが多い。古來名乘の六ケしい文字は「ヨシ」と讀めとの諺もあつたが、穴勝さうも往かない。分るまでは普通の字音にて讀んで置く方が良からう、已むを得ない策である。

故に吾人は人々をして正しく稱呼して貰ふ積なれば、讀み易い文字を選定するに超したことはない。而も高尚な内容を有するものにした方が宜しいのである、是は

少しく注意すれば、適當のものを得られるものである。例へば

畠山兵衞助

と命名すれば、如何にも古武士の面影が氏名の上に浮ぶが、若し

山畠助兵衞

と命名すれば、一見杢兵衞、田吾作の朋輩たる水飲百姓の如き想像が起るものである。又若し彌次又は「權兵衞」と命名しながら、自分のは「イヤツグ又はゴンノヒヤウヱ」と呼ぶのであると言つても、他人は「ヤジ」又は「ゴンベヱ」と申すに相違ない。

姓氏は父祖より傳來のものであるが、人名は子孫のために命ずるものであるから前述の方針を取り、且つ奇異なものを避けることにしたいものである。

古來の人名の讀方を列擧することは、到底不可能であるから、本章は此にて擱筆しようが、餘興的に德川時代に於ける奇氏名を以て、少しく餘白を塡めて置く

享保二十年（二三九五）に幕府より諸侯に命じて、奇氏名を申報せしめたとき、次の如きものがあつた。

一二三四五六　一石八斗兵衛　七寸五分刑部左衛門
七里鎌倉兵衛　三分一所典膳　三方一所典膳
仁禮正膳六　仁禮正膳吾　今一
入交彌六右衛門　内河留守之助　八幡男也
勅使河原四郎九郎十三郎兵衛　古屋敷跡新九郎
加賀自由兵衛　四月朔日夏右衛門　大毛有難左衛門
大岡田村正九郎助之進　大岡村新三郎五郎左衛門
大岡新助之丞九郎左衛門　大恩有難左衛門　太田又三郎兵衛之助
孕高山綾太郎助　嬉野白石社宗彌二郎　嬉野白石諸家太郎
小（コ）助（スケ）助（ジヨ）助（スケ）　平（ヒラ）平（タヒラ）平（ヒヤウ）平（ベイ）　日（タチ）日（ゴリ）日（ニチ）日（カ）
且來賀多右衛門　志多羅九治助　松平梅干之助
松飾目出度左衛門　正月十三日　穴山官内兵衛

疋和田四方四五衞門　百貫滿足兵衞　神下太八左衞門
竹串傳角左衞門　綾戸太郎彥刑部左衞門　綾彥太懷刑部左衞門
草刈鎌太左衞門　草臥鎌太左衞門　菅沼筑紫胎妊高山
谷(タニ)谷(ガヤ)谷(ヤツ)谷(ヤ)　野口山野狐六　長坂血槍九郎

明治の今日にても、隨分奇異な人名を附け、一人にてえらがつて居るものもある。曾て廣島縣に居たとき「木」偏に「鹽」といふ字を旁とするものを附けて居つたものがあつた。是は「キノナ」と讀むのである。最初人の讀めない字を用ひようと思ひ、字書を調べた所が「木」偏の末の方に、此字があり「キノナ」と書いてあつたから「キノナ」といふ意義であると思つて、命名したのであつたさうである。又本年の徵兵檢査のとき、宮崎縣にて、

高倉田子ノ浦ヨリ打出テ、見レハ白砂

といふ氏名のものがあつたさうである。滑稽も既に其度を越して居るではないか。

第六章　敬稱又は官名のこと

是は讀方ではないが、氏名のことを述べたから、序に敬稱又は官名等のことを少し述べて置かう。

現今我國にて、官職位勳氏名敬稱等を並書するときには、

職、官、位、勳、功、爵、學位、氏、名、敬稱、

の順序であるが、略する場合には、

氏、官又は職或は爵、學位、

とし、此場合には敬稱を略することもあるが、敬稱を用ふる場合には、何時も最下に用ふることになつて居る。併し支那にては、官職又は敬稱は、氏の下、名の上に用ふることがあるが、名の下に敬稱を用ふることはない。故に漢文等にては、

李　協　律　翱（李は氏、協律は官、翱は名、韓文公代張籍與李浙東書中に在り）

井上君哲二郎（芳川大臣撰井上博士著勅語衍義の序文中に在り）

とするのである。

此頃某文學士の大部の研究書を見たるに、支那秦始皇帝以後、武帝、文帝、煬帝など云ふ如く、後世の支那語では「帝」なる語が、兎に角其本名の後に附けて呼ばれ、決して帝武とか帝文とかとは言はない。是は「帝」なる語が、天子と云ふ一般的名稱となつたから、支那語の特質たる語序の關係よりして、武帝とか文帝とか云ふ順序の語をなすに至つたのであることは言ふまでもない。然るに支那の五帝時代の名稱には、其逆の順序が往々見られる。即ち帝堯とか帝舜とか云ふが、其好適例である云々とて、之を解釋するに臆測として次のことを記してあつた。

「帝」の音は「タイ」又は「ダイ」が古音で、始め大などの言葉と關係はなかつたか、此場合の帝」なる語は、寧ろ堯なり舜なりの德を讃美するため、其固有名詞の前に置かれた言葉ではあるまいか、但し五帝の内には、黃帝と云ふ如く、後に「帝」の附けられて居るものもあるは、當時其語序が尙ほ動搖して居つたためでもあるか、又は老莊等の後人が後世の呼方から、類推して附けたものが傳つて居るものであるか云々としてある。

成程「帝」は最初其德を讃美した名稱に相違ない「德象天地曰帝」とある。必しも「大」と類似の字音のあることを考ふるには及ばぬ「帝」は霽韻にして「大」は「泰」韻である。霽と泰とは、古來通韻ではないのである。全く關係はない。而して帝は後に主權者の一般的名稱となつたのである、即ち前には讃美の「敬稱」であり、後には「主權者名」主權は官ではないから、直に官名とは言へない」となつたのである。是等は支那の習慣にては、本名の下に用ふる例はなさそうである。武帝、文帝又は煬帝の武、文、又は煬は、生前の本名ではない。死後に至つて、謚法に依り其德に相應したる一種の敬稱であるのである。故に帝といふ敬稱主權者名を其下に加へるのは、怪むに足らぬのである。然るに堯、舜は彼の謚法に依れる敬稱ではないのである。生前の本名であるのである、是には多少異説があるが、申時行の書經會編にも、安井息軒の中庸説にも、舜をば本名として大に辨じて居る。而も堯も舜も其字義が偶然美德を意味せるものであるから謚法を遡つて適用したかの如き誤解を生じたのであらう。

然らば黃帝は如何。是は其前の炎帝と共に矢張本名ではないのである、炎帝は「以火德王。故曰炎帝」黃帝は「以土德王。故曰黃帝」即ち共に生前下より奉つた所の一種の尊

號であるのであらう。死後の謚法に依れるものと酷似して居るのである。支那の三皇五帝の際には、主權者の德を五行に配當し、あらゆるものに之に關する名稱を附けてあるのである。

今序に五行配當表を掲げよう。支那の書を見るとき等には何かの參考となるかも知れぬ。

五行配當表

方位	東	東南	南	西南	中央
五行	木		火		土
十干	甲乙		丙丁		戊己
十二支	卯	辰巳	午	未申	
八卦	辰	巽	離	坤	
四季	春		夏		
五色	靑		赤		黃
	靑龍		朱雀		
五味	酸		苦		甘
五音	角		徵		宮

西	金	庚辛	酉	兌	秋	白	白虎	辛	商
西北			戌亥	乾					
北	水	壬癸	子	坎	冬	黑	玄武	鹹	羽
東北			丑寅	艮					

諡名は其人の德に相應したる敬稱であると言つたが、中には無論其非德を表明したものもある。前例の「煬帝」の如きは是である。諡法に「好內遠禮曰煬」とある。彼の煬帝は不倫の帝にして、帝たるの資格がないとて此「煬」字を贈つたのである。然るに我國にては、一層之を惡み「帝」を他の諸帝と區別して、獨り吳音にて「ダイ」と呼ぶことにして居つたのである。故に「隋煬帝」を「ズヰノヤウダイ」と讀んで居つたのである無意味のことではあるが、習慣は已むを得ないのである。

序に此「隋」を「ズヰ」と讀むのにも、一寸說明が要る。隋は國名として、元と「隨」であつたのである而も隨は「辵」に从ふ。奔走寧からざるの意義がある。因つて之遶を去つて隋となしたのである。是も詰らぬことではあるが、歷史は已むを得ないのである。

敬稱のことを述べたから、序に尊號のことを少し述べようか。新聞雜誌等には、我天皇陛下のことを申上げるに、叡聖文武天皇陛下等としてあるが、　陛下には此尊號を受けさせられたことはない。支那にては漢哀帝が陳聖劉太平皇帝を受けられたことが始であつて、爾後二字四字六字乃至十餘字の尊號の皇帝もあつた。唐憲宗は叡聖文武皇帝を受けられたから、韓文公の上書にも尊號を書いてあるのである。其後淸朝に至つても十餘字乃至二十餘字のものも少くない彼の先頃崩御せられた西太后の尊號は實に慈禧端佑康頤昭豫莊誠壽恭欽獻崇熙皇太后であつた何と長いものではないか。是は無論生前の尊號であつたのである。

我國にては孝謙天皇が唯御一人のみ寶字稱德孝謙皇帝を受けさせられたのみである。私人が勝手に種々の尊號を使用するのは、却つて不敬であるまいかと思ふことである。現今　皇后陛下の御誕辰を「地久節」などと言つて居るものもあるが「天長節」に對して、目出度文字ではあるが、是も私人にて勝手に命名することは、矢張不都合であると思ふことである。

第七章　地名の讀方

固有名詞中地名の讀方は、最も困難なるものである。第八篇に於て述べたる如く、

春日(ハルヒ)の加須賀(カスガ)と言へるより、

「春日」を「カスガ」と讀み、

又飛鳥(トブトリ)の明日香(アスカ)と言へるより、

「飛鳥」を「アスカ」と讀む

等は、枕詞の字を直に其地名に當てて讀んだのである。又

上野(カウツケ)　下野(シモツケ)

と讀むのは、元と上毛野(カミツケノ)、下毛野(シモツケノ)であつたのに、漢字の「毛」を除き、讀方の「ノ」を去つたのてある。又

近江(アフミ)　遠江(トホタフミ)

等の讀方に至つては、今日にては無意識に其讀方をなして居る。故に古今に於ける所有地名の讀方を擧げることは、亦固より不可能のことである。併し地名は大抵突

然として出るものではない。歷史其他の場合に於ても、地名は大抵國名の下にあるか、又は附近の地名、或は類似の事狀の地名と並出するものであるから、其讀み難いものにても檢出することは、他の固有名詞よりは便宜の點があるものである。殊に近頃は地名の字書の隨分完全なるものも出來たから、余は其府縣に屬するものは此に揭げることを止めた。但し北海道に屬するものは、世間未だ完全なる地名字書も多くないから、少しく之を揭げることにした。

元來新領土等の地名の命名法には、三種あるものであらう。第一舊名を音譯すること。第二舊名を意譯すること。第三特別の事狀に依り、更に命名することの三種である。而して北海道にては、主として第一法を採用せられたのである。併し此の第一法は舊名の正しい發音を正しい文字を以て表すことは、困難であるために、多少の變化をなして居ることは勿論である。故に本章に於ける地名の假名は現今に於ける該漢字の字音又は字訓の假名遣法に依らず成るべく發音の儘として置くのである。

北海道地名表

部首	北海道地名表
一	一已（イチヤム）　三泊（サンドマリ）　三樽別（サンタルベツ）　上及部（カミオヨベ）　下方（ゲホウ）　丘珠（オカタマ）
丨	串内（クシナイ）
丶	丹根萠（タンネモイ）
丿	久遠（クドウ）
乙	乙今丑（オトイマウシ）　乙部（オトベ）　乳吞路（チノミチ）
二	二風谷（ニフダニ）　井目戸（イモクベ）　井寒臺（イカンダイ）
人	以平（イタラタラキ）　仙法志（センポッシ）　仙鳳趾（センボウウシ）　伊香牛（イカウシ）　作開（サクカイ）　佐妻（サメ）
、	佐路潤（サロマ）　佐瑠太（サルフト）　似灣（ニワン）　來岸（ライキシ）　來馬（ライマ）　俄虫（ガムシ）　信取（ノブトル）
、	倶知安（クチアン）
入	入舸（イルカ）　入鹿別（ユルシカベツ）　内大部（ナイタユベ）　内保（ナイボ）
八	八垂別（ヤツタレベツ）

冫	冷水(ヒヤミヅ)　凋寒(シボムサム)　淕別(リクベツ)
刀	利別(トシベツ)　別奴(ベッチャロ)　別保(ベツボ)　別飛(ベツトブ)　別海(ベツカイ)　別當賀(ベツトカ)　別樣川(ベヅサマガワ)　初山別(ショサンベツ)　初田牛(ハツタウシ)　割塊(ワリクレ)　劒淵(ケチブチ)
力	力晝(リキビル)　勇仁(イチヤニ)　勇足(イサミタラ)
匕	北龍(ホクリユウ)
十	十弗(トウブツ)　千代ケ岱(チヨダイ)　千舞鼈(チバイベツ)
卜	占守(シユシユ)
厂	厚田(アツタ)　厚苫(アツトマ)　厚眞(アツマ)
又	受乞(ウクルコイ)
ロ	古多糠(コタヌカ)　古武井(コブイ)　古梅(フレメ)　名寄(ナヨロ)　和寒(ワツサム)　咾別(イカンベツ)　唐草恒(トクサツチ)　喜茂別(キモベツ)
口	國縫(クンヌイ)

土	土橋（ドバシ）　堀株（ホリカブ）　塘路（トウロ）　增毛（マシケ）
士	士狩（シカリ）　壯瞥（ソウベツ）　壽都（スッツ）
夊	夏路（ナツヂ）
夕	多寄（タヨロ）
大	大丁岱（タイチヨウダイ）　大谷地（オウヤチ）　大樂毛（オタノシケ）　大樹（タイキ）　天登雁（テントカリ）　天賣（テウリ）　天鹽（テシオ）　太茶內（ブトチヤンナイ）　奥津內（オホツナイ）
女	女那川（メナカワ）　姉去（アチサリ）　姉茶（アチチヤ）　妹背牛（モセウシ）　姨布（オバソ）　婦蟹（ソカニ）　婦羅理（フラリモイ）　嫌侶（キロロ）
宀	安平（アビラ）　安骨（ヤスコツ）　安瀨（ヤスケ）　定山溪（ヂヤウザンケイ）　宿梅（シユクバイ）　宿野部（シユクノツベ）　寒坂（サムイサカ）
寸	對雁（ツイシカリ）
小	小向（コムケ）　小安（オヤス）　小糸魚（コイトイ）　小花井（オハナイ）　小砂子（チイサゴ）　少牛（チエウン）
尸	尺別（シヤクベツ）　尺忍（シヤクニン）　尻別（シリベツ）　尾白內（オシラナイ）　尾札部（オサツベ）　居邊（オロベ）　屈足（クツタルシ）

山	巛	巾	干	幺	广	弓	彳	心	戶
山神付（ヤマカミツキ） 山越內（ヤマクシナイ） 山道（サンドウ） 山輕（ヤマワツカル） 峯延（ミネノブ） 崎無異（サキムイ）	川汲（カワクミ） 川原續（カワラツヅキ）	市來知（イチキシリ） 常呂（トコロ） 幌內太（ホロナイブト） 幌去（ホロサル） 幌似（ホロニ） 幌延（ホロノブ） 幌武意（ホロムイ） 幌蓋（ホロケナシ） 幌滿（ホロマン） 幕別（マクンベツ）	平取（ピラトリ） 平賀（ピラカ） 平鵜（ピラウ） 幸震（サツナイ）	幾春別（イクシユンベツ）	床丹（トコタン） 床潭（トコタン） 庶野（シヨヤ） 庶路（シヨロ） 廣尾（ピロオ）	弟子屈（テシカガ） 張碓（ハルウス）	後志（シリベシ） 後輌（シリトモ） 後靜（シリシズ） 後邊戶（シレト） 御保內（オホナイ） 徹別（テシユベツ）	志文（シブン） 志苔（シノリ） 忍路（オシヨロ） 忠類（チユウルイ） 惠山（エサン） 惠岱別（エタイベツ） 愛牛（アイニウシ） 慶能舞（ケノマイ）	戶蔦（トツタ）

部首	地名
手	手師學（テショマナイ） 押琴（オシコト） 拔海（バッカイ） 振內（フレナイ） 振老（フリオイ） 振別（フリベツ） 捫別（モンベツ）
	掛澗（カケマ） 擇捉（エトロフ）
支	支笏（シコツ）
攴	政泊（マサトマリ） 敷生（シキフ） 敷島內（シキシマナイ）
斗	斜古丹（シヤコタン） 斜里（シヤリ）
斤	新冠（ニイカツプ） 新得（シントク）
方	旅來（タビコライ）
日	日司（ヒツカサ） 早來（ハヤキタ） 春立（ハルタウシ） 春志內（ハルシナイ） 春別（シユンベツ） 春刈古丹（シユンカルコタン） 春採（ハルトル）
	春國岱（シユンコクタイ）
曰	最寄（モヨロ）
月	月寒（ツキサツプ） 有良（ウラ） 有珠（ウス） 有萌（アリモエ） 望來（モウライ） 朝里（アサリ）
木	木古內（キコナイ） 木直（キナホシ） 本目（ポンメ） 本別（ポンベツ） 本桐（ポンキリ） 末廣（マビロ） 札刈（サツカリ）

欠　止　比　水　火　爻

朱圓（シユマトカリ）　杵臼（ケチウス）　杵端邊（ケチタンベ）　東梅（トウバイ）　東沸（トウブツ）　枝幸（エサシ）　枝苫内（チエトマナイ）

桂戀（カツラコイ）　根部田（チブタ）　栗木岱（クリノキダイ）　梅花部（バイクワブ）　椴谷地（タモギヤチ）　植内（ウエンナイ）

植苗（ウエンナエ）　森越（モロコシ）　椴法華（トドボツケ）　標茶（シベチヤ）　標津（シベツ）　様似（シヤマニ）　様舞（シヤママイ）

歌別（ウタベツ）　歌登（ウタノボリ）　歌棄（ウタスツ）　歌露（ウタロ）

止別（ヤムベツ）　止若（ヤムワツカ）　歷舟（ベルフチ）

比布（ピツプ）

江泥部（エトロツベ）　江部乙（エベオツ）　汐吹（シオフキ）　汐首（シオクビ）　沓形（クツカンナイ）　沙留（サルル）　沖根婦（オンチブ）

油駒（アブラコマ）　泊津（ハクツ）　波恵（ハエ）　活汲（クワツクミ）　淸眞布（キヨマツプ）　湯別（ユベツ）　渡散布（ワタラチリツプ）

渡島（ヲシマ）　湧別（ユウベツ）　湧洞（ユウドウ）　渚滑（シヨコツ）　滑若（ナムワカ）　溫根沼（オンチトウ）　漁（イザリ）　潮路（オシヨロ）

濃晝（コキビル）　濤沸（トウフツ）　瀨田來（セタライ）　瀨臥牛（セブシウシ）

烏柵舞（ウサクマイ）　然別（シカリベツ）　熱郛（チツブ）　燒尻（ヤンケシリ）

爾志（ニシ）

部首	地名
片	片無去（カタムサル）
牛	犁野舞内（リヤムナイ）
犬	猿拂（サルフツ）　猿留（サルル）
玉	珍古邊（チンコベ）　珊内（サンナイ）　晤瑤瑁（ゴヨマイ）　琴似（コトニ）　璃瑠瀾（リルラン）　瑠橡（ルロチ）
生	生振（オイフル）　生剛（オベツカウシ）　生鼈（イクベツ）
田	由追（ユイ）　留萠（ルルモツベ）　留邊斯（ルベス）　留邊蘂（ルベシベ）　畚部（フンゴベ）　當縁（トウブイ）
癶	登別（ノボリベツ）　發寒（ハツサム）
白	白人（チロツト）　白老（シラオイ）　白符（シラフ）　白糠（シラヌカ）
目	目梨泊（メナシドマリ）　相ノ内（アイノナイ）　直別（チヨクベツ）　眞狩（マツカリ）　眞駒（マコマ）　眞龍（シンリユウ）
矢	矢木來（ヤギナイ）　知内（シリウチ）　知臼（シリウス）　知床岬（シリトコサキ）　知決邊（チケンベ）
石	磯分内（イソブンナイ）
示	神居古潭（カムイコタン）　神威古潭（カムイコタン）　神崎（カウサキ）　神惠内（カムエナイ）　祝津（シユクツシ）　禮文（レフン）

禾　穴　立　竹　米　糸　网　羊　羽

禮受（レウケ）　禮髭（レヒゲ）

香深（カブカ）　秩父別（チツクシベツ）　秩刈別（チブカルベツ）　稀府（マレツプ）　稚内（ワツカナイ）　稚咲内（ワツカサキナイ）　種前（タチマエ）

穗香（ホニオイ）　積丹（シヤコタン）

突符（トツプ）

端野（タンノ）

竹旗（タケハタ）　笛舞（フエマブ）　笹流（ササナガレ）　篠路（シノロ）　簾舞（ミスマツブ）

米戸賀（ベトカ）

糸櫛別（イトクシベツ）　紗那（シヤナ）　納内（オサムナイ）　納紗布（ノシヤブ）　紋別（モンベツ）　紋鼈（モンベツ）

紫雲古潭（シウンコタン）　網走（アバシリ）

羅臼（ラウス）

美谷（ビヤ）　美唄（ビバイ）　美瑛（ビエイ）　美國（ビクニ）　美幌（ビボロ）　美蔓（ビハウシ）　群別（グンベツ）　群來（クキ）

羽幌（ハボロ）

老　耳　肉　臼　舌　艸　虫　西

老古美(オイコミ)　老門(オイト)
聚富(シユブ)　聲問(コエトイ)
能取(ノトロ)　能津登(ノツト)
興志内(オコシナイ)　興部(オコツベ)
舌辛(シタカラ)　舍熊(シヤツクマ)
芽室(メムロ)　花畔(バンナグロ)　苫多(トマタロ)　苫前(トママエ)　茅沼(カヤヌマ)　茂生(モオイ)　茂草(モクサ)　茂寄(モヨロ)
茂無部(モナシベ)　茂邊地(モヘヂ)　苗穂(ナヱボ)　荒谷(アラヤ)　茶志骨(チヤシコツ)　荊苞(バラトウ)　茨戸(バラト)
荻伏(オニフシ)　荷菜摘(ニナツミ)　萬揃(マンソロイ)　葉朽(ハクチ)　落部(オトシベ)　萩砂里(ハギシヤリ)　蓋派(ケナシハ)
蒜澤(ニンニクザハ)　蒼瑁(アオシユマイ)　蕁菜沼(ジンサイヌマ)　蕨岱(ワラビダイ)　薫別(クンネベツ)　蘇牛(ソスケウシ)　藻岩(モイハ)
藻散布(モチリツプ)　藻鼈(モベツ)　蘂取(シベトリ)　蘭留(ランル)　蘭越(ランコウシ)
虹別(ニシベツ)　蛯谷(エビヤ)　蛾眉野(ガビノ)　蝶多(チヨウタ)
西舍(ニシチヤ)

部首	地名
見	覺生（オボツ）
言	誓牛（チカフウシ）　誓内（チカプナイ）
谷	谷好（タニヨシ）　谷地（ヤチ）
貝	貝取澗（カイトリマ）　負箙（オプエビラ）　貫氣別（ヌツキベツ）　貰人（モウライト）　賀張（カバリ）　賣買（ウレカウ）
走	走古丹（ハシリコタン）　越歳（コシトン）
足	足寄（アシヨロ）　跡永賀（アトエカ）　跡佐登（アトサノボリ）
車	軍川（イクサガハ）　輕川（ガルガハ）　輕舞（カルマイ）　輪厚（ワツツ）
辛	辨華別（ベンケベツ）
辵	近呼（チカヨブ）　逆川（サカサガハ）　遠太（トウブト）　遠別（オンベツ）　遠佛（トウブツ）　遠音別（オンチベツ）　遠野（トノヤ）　達媚（タツコブ）　邊別（ベベツ）　邊訪（ベボウ）　邊富内（ベフナイ）
金	釜谷（カマヤ）　釧路（クシロ）　錢凾（ゼニバコ）　錦多峯（ニシタツプ）　鍋毀（ナベコワシ）　鐺沸（トウブツ）　鐵山（テツサン）
長	長臼（オサウス）　長知内（オサチナイ）　長流（オサル）　長都（ヲサツ）　長萬部（オシヤマンベ）　長滿川下（チヨウマンカワシタ）

- 阜：阿分（アブニ）　阿寒（アカン）　阿歴内（アレキナイ）
- 佳：雁來（カリキ）　雄武（オム）
- 雨：雨垂石（アマタレイシ）　雨紛（ウブ）　雨龍（ウリユウ）　雷別（ライベツ）　雷電（ライデン）　霧多布（キリタツプ）
- 青：靜狩（シヅカリ）
- 音：音別（オンベツ）　音更（オトフケ）　音調津（オシラベツ）
- 飛：飜木禽（ボンキキン）
- 鬼：鬼志別（オニシベツ）　鬼鹿（オニシカ）　鬼脇（オン子ワキ）
- 魚：鯎川（ウグイガワ）
- 鳥：梟舞（ケルマブ）　鵡川（ムカワ）　鶴澗（ツルマ）
- 黄：黄金蘂（オコンシユベ）
- 黒：黒禿（クロハゲ）
- 黽：鼈奴（ベツチヤロ）

齒

齒舞（ハボマイ）

北海道の地名は、前述の如く多少第三法即ち特別の事狀に依り、命名したものもある。例へば

一、永山村　伊達村
二、廣島村　新十津川村
三、月形村　函館港

等の如く、或は創業者の氏名を取り、或は移住團體の原籍地名を取り、又は其地形等に依つて新に命名したものもあるのである。又第二法即ち舊名の意譯に依り漢字を當てたるものもある。例へば

一、二股（フタマタ）（原名「テクヒコヒ」ハ二股ノ意デアル）
二、遠淺（トウアサ）（原名「ウツナイトー」「ウツ」ハ合ハセルコト「ナイ」ハ澤「トー」ハ沼依ッテ沼ノ遠淺ナル所）

等の如くであるが、此類は最も少いのである。而して北海道地名の八九割以上は第一法即ち舊名の音譯に依つて居るのである。今其例として重なる者數種を示さう。

一、札幌(サツポロ)（「サツ」ハ乾ク即チ谷地ニシテ澤ナキヲ云フ「ポロ」ハ大ナリ。故ニ「サツポロ」ハ大ナル肥沃ノ原野ノ意）

二、小樽(オタル)（原名「オタルナイ」「オタ」ハ砂「ル」ハ通路ノコト、「ナイ」ハ澤デアル。今「ナイ」ヲ略シタ）

三、室蘭(ムロラン)（原名、モロラン」「モロ」ハ良灣「ラン」ハ低キ所、即チ良灣ヲ有スル低キ地盤）

四、釧路(クシロ)（原名、クスリ」ハ强クモヤノ懸ル所ノ意）

等の如くである。元來アイヌ語の解釋には、英人バチユラの字書がある。唯此に一つ附加へて置くことがある。是は現今の地名には濁音のものがあるが、元來アイヌは濁音を發することが出來なかつたから、舊名には濁音のある筈はない。是は半濁音であつたのを濁音としたのと、今一つ和人が所謂連濁に依つて讀むことにしたのである。

元來地名は我國のものにても、隨分讀み難いものである。外國のものに至つては、一層甚しいものである。淸韓諸國の如く本來漢字を使用して居るのは、別として其他のものは最初より適當の發音の假名を以て寫すことは至當であつたのであるが、我國開國當時は支那の飜譯書を以て學習したのと學問は文字の穿鑿であるとの所謂漢學者の餘弊とに依り、外國の地名又は人名に中〻六ヶ敷い漢字を使用してあるが、今日にても全く其跡を絕たぬのである。例へば

希臘

を「ギリシャ」或は「グリーキ」と讀むが、淸(シン)音でもさうは讀めない。是は元と「ギリシャ」の大部分たる「ヘラス」(Hellas)の淸音譯であつたのである。其他

埃及

を「エヂプト」と讀まねばならぬとは、隨分困つた話ではないか、是は淸音にて「エヂ」であるのである。又

浦(ウラ)鹽(シオ)斯(ス)德(トツク)(オはホの誤植でない)

は音訓混同である。又近頃になつて

一、剣橋（ケンブリッヂ）

二、牛津（オックスフォード）

などを得意に使用し、且つ之を普通の字音讀にして、獨り「ハイカラ」振つて居るものもある。

清韓以外の外國の地名人名等は、斷然假名を以て寫すことにしたいものである。余は二十年以前より實行して居るが、他人の書いたのは、矢張之を讀むことを知らねばならぬのである。

第十篇　漢字熟字の異同

第一章　偏旁の位置を轉倒しても、尙ほ同字たるべき漢字

漢字中偏旁頭脚等の位置を轉倒しても、尙ほ依然として同字、即ち字音及意義を變せざるものがある。併し其一方は本體の正字にして、他は古字、本字、通字或は俗字たることは勿論である。

古字とは最も古い時代に於て使用せられた正字、本字とは、其次の時代に於ける正字のことである。又俗字とは通常の漢字の字書中に於て、之を示すものもあるが、又示さぬものもある。元來字書中に於て俗字とするものは殆ど誤謬と同一の意義を與へて居るものである。況や字書中にないものは、猶更のことである。併し余は必しもさうは固守しないのである。殊に其俗字中殆ど一般に使用せられて居るものは余は却つて之を正字となし、字書中に於ける之に相當する正字を本字となすこともある。是は余の獨斷的に定めたものであるから、看者中には異議を挿むもののあ

ることは、勿論であらう。又通字とは二種の意義があるものである。即ち本來他の文字でありながら、或場合其文字と同一の字音意義を有するものとなるのと、又俗字中稍〻廣く世人に使用せられるが、未だ必しも悉く之をのみ、專用するに至らぬのとの二種類があるのである。併し其後段に屬するものが、最も多い又前段のは時として「又通」と標傍することもある。

漢字に關する此正字、古字、本字、通字及俗字の區別は、他の諸篇に於ても、余は固より前述の意義を以て、使用するのである。

從來漢文學者及所謂書家は、務めて漢字の偏旁の位置を轉倒し、世人の讀み難いのを見て、獨り悅ぶ傾がある。少しも賞すべきことではなからう。

部首ノ畫數	偏旁の位置ヲ轉倒シテモ差支ナイ漢字表		
三	和 咊(古)	崖 崕(同)	壟 壠(本)
	好 孜(同)	崑 崐(同)	徒 迬(本)
	夙 ⿰歹凡(同)	崙 崘(同)	
	峯 峰(同)	島 嶋(同)	
	峨 峩(同)	幕 幙(同)	

四　五　六　七　八　九　十　十一

慙慚(同)	憚𢥞(同)	憩憇(同)	摩[illegible](古)	摹摸(同)
晚晩(本)	朞期(又通)	松枀(同)	厺(俗)	棋棊(本)
稾槁(同)	概槩(同)	毬耗(同)	氈氊(俗)	
界畍(本)	略畧(俗)	背眦(同)	秋秌(本)	稿稾(同)
羣群(通)	胸胷(同)	脅脇(俗)	腰𦝫(同)	花芲(俗)
蘇蘓(俗)	蝦𧍯(同)	蟆蟇(俗)	蟹蠏(同)	裏裡(俗)
訛𧦝(同)	警識(同)	讎讐(同)	躄蹴(同)	躄躃(同)
鄰隣(俗)				
鑑鑒(同)	闊濶(俗)	雜襍(本)		
鞌鞍(通)	養羪(俗)	馥馢(同)		
魂䰟(同)				
鵝鵞(古)	鷲鹫(同)			

十二	黎 勠(本)

右の內、習慣上別種の用法をなすものもある。例へば「朞月」のときに期を用ふるも、「期待」のときに朞を用ひぬ。脅は正字にして、脇は俗字であるが、「脅迫」のときには、脇を用ひぬ。

右の外「獲」「穫」「護」等の旁の上の「艸冠」を偏旁全部の上に戴き、又「樵」「默」「點」「勳」等の偏又は旁の下の「連火」を偏旁の下に延しても、通ずるものである。

第二章　偏旁の位置を轉倒する等に依つて、別字となるべき漢字

漢字中偏旁頭脚の位置を轉倒しても差支のないもののあることは前章に於て、之を述べたが、其他のものは大抵別字となるか、或は純粹の誤謬となるものが多いのである。

今其偏旁等の轉倒のために別字となるものの類例を示さう。

偏旁ノ位置ヲ轉倒シタ等ノタメニ別字トナルベキ漢字表

部首ノ畫數	字	音	訓	別字	音	訓
二	友	イウ	トモ	双	サウ	ナラブ
三	召	セウ	メス	叨	タウ	ミダリ
	呆	ハウ	アキル	杏	キヤウ	アンズ
	唯	ヰ	タダ	售	シウ	ウル
四	忙	バウ	イソガハシ	忘	バウ	ワスル
	悲	ヒ	カナシム	(悱	ヒ	イカル)
	拾	シフ	ヒロフ	拿	ダ	ツカム
	晰	セキ	アキラカ	晳	セキ	シロシ
	未	ミ	イマダ	東	トウ	ヒガシ
	架	カ	タナ	枷	カ	クビカセ
	椎	ツヰ	ツチ	集	シウ	アツム
	可	カ	ベシ	叮	テイ	ネンゴロ
	含	ガン	フクム	吟	ギン	ウタフ
	啼	テイ	ナク	啻	シ	タダ
	忠	チユウ	—義	忡	チユウ	ウレフ
	愈	ユ	イヨイヨ	愉	ユ	ヨロコブ
	旱	カン	ヒデリ	旰	カン	ヒグレ
	暉	キ	カガヤク	暈	ウン	ヒノカサ
	杲	カウ	アキラカ	杳	ヤウ	クラシ
	栗	リツ	クリ	栖	セイ	スム
	江	カウ	エ	汞	コウ	ミヅカネ
	君	クン	キミ	咿	イ	ウタフ
	員	ヰン	カズ	唄	バイ	ウタフ
	娶	シユ	メトス	娵	シユ	美女 和訓ヨメ
	怠	タイ	オコタル	怡	イ	ヨロコブ
	感	カン	—動	(⿰忄咸	ケン	不安)
	晒	サイ	サラス	(⿱西日	アン	クラシ)
	本	ホン	モト	末	マツ	スヱ
	某	ボウ	ソレ	柑	カン	蜜—
	棘	キヨク	バラ	棗	サウ	ナツメ
	泉	セン	イヅミ	泊	ハク	トマル

五	猶(イウ)ナホ	猷(イウ)ハカリコト	省(セイ)カヘリミル	眇(ビヤウ)スガメ	紫(シ)ムラサキ	(紕(セイ)アヤ)
六	紊(ブン)ミダル	紋(モン)	細(サイ)ホソシ	累(ルヰ)カサナル	蜒(エン)井モリ	(蜑(タン)エビス)
	腐(フ)クサル	腑(フ)臟—	蛙(ア)カハヅ	(⿱圭虫(ケイ)ハチ)		
	衾(キン)寢衣	衿(モン)ヱリ	裸(ラ)ハダカ	裹(クワ)ツツム	褓(ハウ)—襁	褒(ハウ)ホメル
	翌(ヨク)アス	翊(ヨク)タスク(⿰犭立トブ)				
七	蹴(シユク)ケル	⿱就足(シン)不安ノ貌	部(ブ)—分	陪(バイ)—席	郵(イウ)—便	陲(スヰ)ホトリ
八	養(ヤウ)ヤシナフ	⿰飠羊(ヤウ)ヱバ				

右の内括弧を附けてあるものは、所謂使用以外の漢字に屬するものである。

第三章　別字の如くにして同字たるべき漢字

漢字中字畫の異なるに依つて、時として別字の如く思はれて居るが、其實古字、本字、通字又は俗字であるものも少くない。併し本章中に於ては、唯其重なるもののみを

掲げることとする。
其詳細なることは、別に後篇に譲ることとする。

別字ノ如クニシテ同字タルベキ漢字表

部首				
一	世 卋(古)	並 竝(本)		
丿	乃 廼(同)			
乙	乾 乹(俗)	亂 乱(俗)		
人	仙 僊(同)	他 佗 它(又通)	佛 仏(古)	作 做(俗)
	侯 矦(本)	便 [illegible](本)	俯 俛(又通)	傲 傲(俗)
儿	兎 兔(本)			
几	凭 凴(俗)			
刀	刈 苅(俗)	創 刱(本)	劍 劒(古)	
力	勅 敕(本)	勳 勛(古)		

十	升 陞俗	協 叶古			
又	叔 尗俗	叡 睿古	叢 藂古		
口	同 仝俗	含 [illegible]俗	周 週俗	咽 嚥俗	唾 涶同
	嘗 甞俗	噴 濆本	器 噐俗		
囗	回 囘本	廻俗	國 圀 囯古		
土	坂 阪本	堤 隄本	場 塲俗		
士	壻 婿俗				
大	奔 犇同				
女	妊 姙俗	妒 妬俗	娼 倡本	孃 娘俗	
宀	寶 珤古	寳通			
少	尠 尟本				
尸	屆 暨?一説古字				

山	岡 崗俗	嶽 岳古	巖 岩俗		
幺	幾 㡬古				
广	廟 庿古	廬 庐俗			
ヨ	彝 彛俗				
彳	往 徃俗	從 从古	従俗	徧 遍俗	德 悳古
心	怪 恠俗	恥 耻俗	慷 忼本	憩 憇俗	懼 愳俗
戈	戲 戯俗				
手	拿 挐本	拖 拕俗	擣 搗俗		
方	旁 㫄本				
支	收 収俗	效 効俗	敍 叙俗		
日	昵 暱同	晝 昼俗			
曰	書 [illegible]俗				

月	木			欠	止	水	火	爿	犬	玉	田
朞 期又通	村 邨古	梅 楳同	樽 尊本	欣 忻同	歸 帰古	涌 湧俗	煙 烟同	牀 床俗	猿 猨本	珍 珎俗	畝 畞本
朝 晁古	杆 桿俗	棄 弃古	罇俗	歌 謌同	皈俗	涼 凉俗	無 无古	牆 墻俗	獵 獦俗		畆俗
	板 版同	棋 棊本	檐 簷俗	歎 嘆通		準 凖 准俗	然 燃元俗		獻 献俗		畫 画古
	杯 盃俗	棊俗		歡 懽同		濠 壕通	燈 灯俗				畵本
	果 菓俗	棲 栖同		驩 又通		濱 濵俗					

部	正	異
疋	疎	疏本
疒	痴	癡本
皿	盡	尽俗
目	睹	覩古
石	砧	碪同
	碍	礙本
	碇	矴同
示	祐	佑同
	祕	秘通
	禮	礼古
禾	稾	稟俗
	穎	頴俗
	穀	榖俗
穴	窻	囱本
	窻	窓牕俗
	窶	窶同
	竊	窃俗
立	竪	豎本
竹	笑	笑咲俗
	等	才俗
	筍	笋俗又
	箇	個俗
	箋	牋通
	箒	帚同
	算	筭同
	篠	筱同
	簡	柬古
米	粱	粱同
	糧	粮俗

糸	网	老	耒	耳	肉		臼	舌	艸		
紙 帋俗	羇 覉本	考 攷古	耕 畊古	聲 殸古	肉 宍古	臘 臈俗	興 舆俗	鋪 舖本	草 艸古	夢 梦古	蘆 芦俗
綿 緜同	羈 覊本				脈 脉俗				菴 葊古	㝱同	蘇 甦俗
繞 遶同					脣 唇俗				庵同	蒙 [illegible]俗	
					腸 膓通				萬 万同	蓋 葢本	
					腮 顋本				著 着俗	盖俗	

辛	車	足	貝	谷	言	見	襾	衣	行	虫	虍
辭 辝古	軟 輭本	跡 蹟古 迹本	賓 賔俗	谿 溪俗	訛 譌本	覓 覔俗	覇 霸本	衽 袵俗	衞 衛俗	虻 蝱本 𧈪俗	虎 乕俗
辞俗	輩 軰俗		贓 賍俗		詠 咏同	規 䂓本		褒 襃俗			號 号同
					誤 悞同	覽 覧俗		襟 衿又通			虛 虚俗
					諮 咨本						
					讒 䜛俗						

辵	酉	里	金	門	隶	隹	革	飛	音	食	馬
遡 溯同	酬 酧俗	野 埜古	鈔 抄俗	閒 間俗	隸 隷俗	雁 鴈同	靴 鞾同	飛 蜚又通	韻 韵俗	餒 餧同	馱 駄本
	醫 毉俗		鍼 針俗	閙 鬧同		雙 双俗				館 舘俗	驅 駈同
			鏃 䃚又通			雞 鷄古					
			鐵 銕古 鐡俗								
			鑛 礦俗								

髟	髥 髯俗		
鬥	鬭鬪鬦俗		
鬯	鬱 欝俗		
鳥	梟 梟俗		
鹵	鹽𪉩塩俗		
鹿	麗 丽古	麁 麤本	
麥	麥 麦俗		
麻	麻 麻俗		
黃	黃 黄俗		
黑	黑 黒俗	默 嘿俗	點 点俗
鼎	鼎 鼑俗		
龍	龍 竜古		

是等の漢字は、前述の如く、何れも其字音意義を同一とする同字或は通字等ではあるが、通俗に於ては、多少格段の取扱をなして居るものは少くない。例へば

一、「做」は「見做」「看做」「間做」等の如く、他の動詞の下に連續する場合にのみ專用せられて居る。

二、「刱」は「刱設」「刱造」等の如く、意義「ハジム」のときに限り使用せられる。

三、「陞」は「陞叙」「陞任」等の場合にのみ專用せられる。

四、「叶」は元と「協」の古字ではあるが、通常の場合には使用せずして、俗語の場合にのみ專用せられる。

五、「週」は七曜の一週の場合にのみ專用せられる。

六、「廻」は主として動詞の場合に用ひ、名詞には主として「回」を使用する。

七、「犇」は別段の意義を有せしめて居る。是は第四篇に述べて置いた。

八、「珤」は「寶」の古字であり、「寶」の俗字に「寳」を用ふる如く、此「珎」より「珎」をも用ふ。我國最古の銅錢たる「和銅開寶」は「銅」を「同」とし、「寶」を「珎」としてある。是が「珍」の俗字と誤認せられ、從來歷史家も、古錢家も「ワドウカイチン」と言つて居る「開珍」と稱

する錢は古來和漢に其例がない。是は「カイハウ」と稱すべきものであらう。

九、「崗」は「岡」の俗字ではあるが、普通には使用せずして、唯「花崗岩」のときにのみ專用せられる。

十、「巖」と「岩」とは別種の字訓を有せしめて居る。

十一、「从」は「從」の古字ではあるが、是は和漢とも、唯漢字の偏旁の說明のときのみ專用せられて居る例へば「松ハ木ニ从ヒ公ノ聲」と言ふが如くである。

十二、「淮」は昔時の「淮三宮」、現今の「淮教員」等の場合に專用せられる。

十三、「版」は「出版」「活版」等の如く、「版木」の場合に專用せられる。

十四、「然」は元と副詞の場合と「然燒」の意義との兩意義あるが、現今にては「然燒」の場合には「燃」のみを專用せられる。

十五「疎」は殆と「疎密」の場合にのみ專用せられる。

十六、「竪」は「竪横」の場合に用ひ、「竪子」のときには「豎」を用ひぬ。

十七「咲」は「花咲ク」の場合にのみ專用する傾がある。

十八、「柬」は「簡」の古字であるが、「書簡」のときにのみ使用し、「簡易」「簡單」等の場合には

使用せられぬ。

十九、「宍」は地名「宍道湖」氏名「宍戸」の外には殆ど使用せられぬ。

二十、「着」は、「著明」「顯著」等の場合には使用せずして、唯「著席」「著物」等の場合にのみ專用せられる。

是等の習慣も、亦多少注意せねばならぬ。殊に固有名詞に至つては、猶更の注意を要するものである。

第四章　數字に關する通用漢字

戸籍に關する年月日の數字、又は金錢の記錄、證書等に關する數字には、特に法令を以て、又は習慣上別種の漢字を使用することがある。中には本來數に關する意義のものもあるが、多くは其字音を假借し、字畫の容易に變更すべからざるものを選定したのである。

第一。法令に依り、戸籍又は金錢の證書に用ふべき數字

左に揭げる通常の數字の下に在るものは、假借の數字である。以下皆之に同じい。

一―壹　二―貳　三―參　十―拾

第二。習慣上便宜金錢の證書に用ふべき其他の數字

四―肆　五―伍　六―陸　七―漆

八―捌　九―玖　百―陌　千―阡

又是は讀方に關することであるが、序に述べよう。數字を讀上げる場合に於て、他のものとの聽誤を避けるために、特種の讀方をなすべきものがある例へば、

二(フタ)　四(ヨン)　七(ナナ)　九(キウ)　零(トンデ)

等の類である。

第五章　他の文字の略字又は俗字として、專用せられる漢字

漢字中本來の字音意義としては、殆ど使用せられることなく、他の文字の略字又は俗字としてのみ、使用せられるものもある、但し左に掲げる漢字中「兩用」とあるのは、本來の音義をも、時として使用することもあるものである。又同欄中に在る上字は、

本來の漢字にして、下字は其略字又は俗字である。以下皆之に同じい。

他ノ文字ノ略字又ハ俗字トシテ專用セラレル漢字表

部首ノ畫數	二	三	四	五	六		七		八	九
	假 仮	呈 呈	擔 担	濱 浜	絲 糸	莊 庄	託 托	辨 弁（兩用）	陵 淩	須 湏
	僭 僣	圖 啚	枉 抂	町 丁（兩用）	總 惣	蘆 芦	謚 諡	醫 医	雁 厂	餘 余（兩用）
		姬 姫	構 搆	睾 睪	羨 羡	蟲 虫	證 証		鐵 鉄	
		幅 巾（兩用）	狗 犳		膽 胆	蠶 蚕	豐 豊			
		弱 若（兩用）	派 泒		臺 台（兩用）		踏 沓			

十	駒　駒	體　体
十二	黨　党	

是等の漢字は、字畫の類似にして、簡單なるものが多いが、中には類似せざるものもある。又其由來の不明なるものもある。又正字と略字又は俗字と相互に通ずるものではない。例へば、

一、「台」は「臺」の俗字として用ふるが「臺をば台」の場合には用ひない「臺灣」は「台灣」とするが、「台覽」は「臺覽」とするは誤用である。

二、「淩」は「陵」の意義「シノグ」の場合には使用するが、其他の場合には使用しない。

三、「弁」は「辨」の俗字として用ふるが「辨」をば弁即ち「冠弁」等の場合には使用しない。彼の辨慶が武藏坊と稱したのは、此「弁」を分解して「ムサ」となるからであらう。

四、「惣」は元と「總」の草書が「物」「心」の草書の結合に似たるために、總の草書より楷書に改める際、誤つて「惣」となしたのである。

第六章　漢字の略字及俗字

本篇第三章及第五章に於て、漢字の略字及俗字を多少揭げて置いたが、其他略字又は俗字として使用すべきものは、固より頗る多いことである。是等を本章に揭げることは、順序として適當であらうが、便宜上他の漢字の字畫と共に、別に一篇を設けて、後に詳說することとする。

唯此に本章の題目を揭げたから、序に古書に用ひてある極端なる略字を少し揭げて置くこととする。

一、「吳公」は「蜈蚣」の略字として、古事記に用ひてある。

二、「比巴」は「琵琶」の略字として、家長日記に用ひてある。

三、「人車記」は「信範記」の略字として、兵部卿信範卿の日記のことである。

四、「夫木和歌抄」は「扶桑和歌抄」の略字である。

五、「酉酉玉心完」は「醍醐理性院」の略字にして、完鏡集の古抄本に記してある。

又其他佛家の略字として、同じく極端なるものがある。

一、「荎」は「華臺」の省體會意。

二、「𠆩」は「佛頂」の省體會意。

三「椋」は「林泉」の省體會意。

四「俩」は「西佛」の省體會意。

五「釗」は「金剛」の省體會意。

六「𦬆」は「ササテン」とて「菩提」のことである。

七「ササ」は「ササ」とて「菩薩」のことである。

八「タメ」は「シテシテ」とて「聲聞」のことである。

九「ヨヨ」は「ヨヨ」とて「緣覺」のことである。

十「七火」は「シチクワ」とて「涅槃」のことである。是は「炎」より誤つたので「涅槃經を又炎經といふことから來たのである「是は略字ではないが、類似の爲に揭げた。

十一「四四」は「シシ」とて「煩惱」のことである。

十二「忄忄」は「リッシンリッシン」とて「懺悔」のことである。

十三「土犬」は「地獄」のことである。

十四「骨骨」は髑髏のことである。

十五「厺ム」は「華嚴」のことである。是は「華」と「花」とは同意義であり、花の俗字「苍」の字

畫を誤り、之に「嚴」の音尾を附けたのであらう。

是等の種類を列擧するときは、隨分澤山あることであらう。併し是等の事柄は、通常漢字又は漢語等には、應用せられて居ない。而も却つて英語其他の外國語等には、非常に多く使用せられて居ることである。今一々其適例を擧げるにも及ばないのであるが、

一、「エム、アル」(Mr.)と記して、「ミストル」(Mister)の略語とし、矢張「ミストル」と讀んで、他人の尊稱とする。

二、「ユー、エス、エー」(U. S. A.)と記して「ユナイテッド、ステーツ、オブ、アメリカ」Unit-ed States of America)(アメリカ合衆國)の略語とし、矢張「ユナイテッド、ステーツ、オブ、アメリカ」と讀み、郵便の表面に此三字を記せば、四千五百マイルのアメリカ合衆國にも容易に到達するのである。

其他如何なる外國語の字書を見ても、其終の數十ページには、此略語の解を掲げてないものはないから、今之を贅するには及ばないのである。

第七章　他の熟字と同一なる讀方及意義を顯す熟字

漢字中本來の讀方及意義の外、轉注又は假借に依り、他の意義を有するものとなることは、第七篇に於て述べて置いたが、本章に於ては、是等の漢字が、熟字となつて、他の熟字と同一の讀方及意義を顯すものの類例を示すこととする。

他ノ熟字ト同一ノ讀方及意義ノ熟字表

部首ノ畫數	熟字	同一ノ熟字
二	五藏	五臟
	倉卒、倉猝、	草卒
	前后	前後
	千仞	千尋
三	叮嚀	丁寧
	周游	周遊
	執質	執贄
	伎倆	技倆
	僻(ヘイ)睨	睥(ヘイ)睨
	創痍	瘡痍
	名山志、	名山誌
	咨訊	諮訊
	天佑	天祐
	佯狂	陽狂
	出(スヰ)内(ダツ)	出納
	厲(ライ)病	癩病
	合從(ショウ)	合縱(ショウ)
	容舍	容捨
	女工	女紅
	侍坐	侍座
	切斷	截斷
	反復	反覆
	知愚	智愚
	嗚乎	嗚呼
	媒妁	媒酌

四	子細	仔細	孜々	孳々	屈信	屈伸	幷吞	併吞
	戰陳(ヂン)	戰陣	撰擇	選擇	敖慢	傲慢	殷勤	慇懃
	汎濫	氾濫	烏乎	嗚呼	牴觸	觝觸		
五	私欲	私慾	磽确	墝确				
六	筆研	筆硯	糟粕	糟魄	習貫	習慣	耆好	嗜好
	脊令	鶺鴒	脩身	修身	膨張	膨脹	落魄(タク) 落魄(タク)	落拓
	蒲伏	匍匐	薄莫(ボ)	薄暮	蚤夜	早夜	要領	腰領
	要塞	要寨						
七	詞賦	辭賦	誘道	誘導	謹識(シ)	謹誌	豈弟	愷悌
	起原	起源	輔弼	補弼	連衡	連橫		
八	錯(ツ)置	措置						
十一	鳳皇	鳳凰	麇(クン)至	羣至				

國語漢文に堪能なる某博士の演說筆記に選擧の「選」に「撰」を誤用するは惡しいとあつたが、一を知つてまだ二を知らないものである。「撰」は又「選」にも通ずるのである。

第八章　他の熟字と讀方及意義の類似なる熟字

熟字中他の熟字と讀方及意義の類似なるものがある。故に其使用上に於ては、殆ど區別する必要がない程である。但し前章のものの如く、轉注又は假借して、全く同一のものとは、言ひかねるのである。又漢字の右傍に在る振假名は、全く同一の讀方でないもの等を示すのである。

他ノ熟字ト讀方及意義ノ類似ナル熟字表

部首ノ畫數	一	二		
	一韋(ヰ)帶水	亡羊之歎	俊傑　儁傑	勝(シヨウ)利　捷(セフ)利
	一衣(イ)帶水	望洋之歎	倏忽　倏忽	
	一部始終	依賴　倚賴	共同　協同	
	一伍(ゴ)一什(ジフ)	侵掠　侵略	出板　出版	

三　　四　　五

夤緣	因緣
奮發	憤發
布設	敷設
强大	彊大
忿怒	憤怒
暗黑	黯黑
條約締結	
水晶	水精
深切	親切
特立	獨立
玩弄	翫弄
石盤	石板
大抵	大牴
委佗(イ)	委蛇(イ)
布團	蒲團
彷彿	髣髴
招待	請(シャウ)待
書翰	書簡
條約訂結	
洗濯	洗滌(デキ)
澹泊	淡泊
特長	特徵
用捨、容舍、容赦	
磊落	礧落
失(シツ)火	出(シユツ)火
奬勵	獎勵
希望	冀望
徜徉	逍遙
改心	改悛(シユン)
相違	相異
正心	誠心
洒掃	灑掃
焦悴	焦瘁
發企	發起
穿鑿	穿索
失策	失錯
奸智	姦智
幼稚	幼穉
徽章	記章
敖遊	豪遊
梅毒	黴毒
殘刻	殘酷
清算	精算
無要(エウ)	無用(ヨウ)
矜(クワン)寡	鰥寡

六	紀律	規律	終局	終極	綜合	總合	繁雜	煩雜
	聯絡	連絡	自慢	自滿	苦勞	劬勞	蔓延	蔓莚
	薙(ティ)髪	剃髪						
七	訊問	尋問	諳記	暗記	講和	媾和	趣旨	主旨
	邸宅	第宅						
八	間暇	閑暇	阻喪	沮喪	險阻	嶮岨	非難	批難
十	馭者	御者						

右の内「一葦帶水は、一の葦帶を展べた如く狹き幅の水といふことである。同じ帶の中にても、葦製のものは狹いとのことである。葦帶及衣帶の二種は共に古書に用例がある。「失火」と「出火」とは殆ど同意義であるが、現行の刑法には、出火を使用せられてある。又「精算」の熟字は從來のものであるが、現行の商法には「淸算」の熟字を使用せられてある。又「講和」と「媾和」とは同意義であるが、帝國憲法には「講和」の熟字を使用せられてある。

第九章　讀方類似のために誤用し易い熟字

熟字中讀方の類似して、且つ意義或は字畫の類似するために、往々誤用せられるものがある。是等は其類例を擧げるときは、固より際限はないものであるが、今其特に稍〻著しいものを掲げることとする。

左に掲げるものの中、下に記載するものは、誤用の分に屬するものである。以下各章に於けるものも之に同じい。

部首	讀方類似ノタメニ誤用シ易イ熟字表			
一	一所懸命 一生懸命	一韋帶水 一葦帶水	一斑 一班	一篇 一編
人	侵略 浸略	保險 保儉	侯伯 候伯	倉皇 蒼皇
	俸祿 俸錄	俳諧 徘諧	俳優 徘優	偏頗 徧頗
	偕老同穴 海老同穴	傾倒 傾到	僇辱 戮辱	僻地 癖地
	僻見 癖見	僻陬 隦陬	儉約 險約	

部	熟字	異同
八	公卿	公鄕
	兵仗	兵杖
冫	冷淡	冷澹
凵	出立	出達
	出向	出行
刀	判任	伴任
	刮目	括目
	到底	倒底
	剛愎	剛腹
力	勅語奉讀	勅語捧讀
	勇猛	雄猛
十	十分	充分
	協同	恊同
	博粲	愽餐
卩	危險	危嶮
口	古昔	故昔
	名詮自性	名詮自稱
	含笑	啣笑
	知覺	智覺
	唱道	唱導
	啣杯	含抔
	喧噪	喧躁
	嚆矢	藁矢
囗	困窮	困究
	團體	團隊
大	大抵	大低
	大砲	大炮
	太陽	大陽
土	城址	城趾
	場所	場處
	墮落	惰落
	疆場	彊埸

女	好意 厚意、高意ハ別用		委託 委托	婉曲 遠曲
子	學殖 學植			
宀	宸衷 震衷	家庭 家廷	寄贈 寄送ハ別用	密閉 蜜閉
尸	履歴 履暦			
工	差繰 差操			
幺	畿内 幾内			
广	底止 抵止	廢止 癈止		
廾	弁言 辨言	弊害 幣害		
弓	弦月 絃月			
彡	形而上 形似上			
彳	徹底 撤底			
心	志摩國 志磨國	忠告 注告	思想 志想	恐慌 恐荒

意志　意思　　感冒　寒冒　　態度　體度　　愼重　眞重

慢性病　漫性病　　懦弱　惰弱

戈

成績　成蹟　　戰々兢々　戰々競々

手

打毬　打球　　拓殖　拓植　　抵當　柢當　　括弧　括弧

按兵　桉兵　　振起　震起　　振盪　振蕩　　推敲　推考

探檢　探險　　捧腹絕倒　抱腹絕倒　　排列　配列　　掣肘　制肘

換骨奪胎　換骨脫胎　　搢紳　縉紳　　摩擦　磨擦　　撥刺　潑刺

撤回　徹回　　播磨國　播摩國

攴

收穫　收獲　　故事　古事　　故鄉　古鄉　　敵愾　敵慨

文

斑文　班文

斤

斬新　嶄新

日

明治　明治　　明瞭　明瞭　　時候　時侯　　時機　時期ハ別用

日	景況 景况	普偏 普徧	智慧 智惠	晴天 霽天
	暦日 歴日	曖昧 曖昧	曚昧 曚昧	曠世 廣世
	書籍 書藉			
月	朝廷 朝庭			
木	束脩 束修	枯槁 枯稿	栽培 裁培	根柢 根底
	條約締結 條約定結	楷書 階書	槍術 鎗術	構造 搆造
	模様 摸様	模糊 糢糊	權利 權理	
欠	歡娯 歡悞			
止	武弁 武辨			
殳	段階 段楷	毆打 歐打		
气	氣概 氣慨			
水	淘汰 陶汰	淺葱（アサギ） 淺黄	温凊 温淸	演繹 縯繹

部首	正	誤
	漫遊	慢遊
	濫用	亂用
	濃淡	濃濟
	澹泊	淡泊
火	煉瓦	鍊瓦
	無慙	無慘
	煩惱	煩腦
	熱誠	熱精
	熟練	塾練
	爛漫	爛慢
牛	牴觸	抵觸
	特得	獨得
	犒勞	稿勞
犬	狼藉	狼籍
玉	班列	斑列
	理窟	理屈
瓦	瓦全	瓦然
田	甲冑	甲胄
	留守	留主
	畢竟	必竟
	畫策	劃策
疒	癈疾	廢疾
	癖習	僻習
癶	發掘	發堀
皿	盡瘁	盡粹
	盤根	磐根
目	直徑	直經
	眞正	眞成
	矍鑠	钁鑠

部首				
石	研究 研窮	磨礪 摩勵		
禾	稗史 牌史	稱揚 賞揚		
立	競爭場裏 競走場裏			
竹	筆蹟 筆績	管絃 管弦		
米	粃政 批政	粱肉 梁肉		
糸	紀行 記行	純粹 純萃	細謹 細瑾	結構 結搆
	絕對 絕體	絡繹 絡驛	經營 計營	練習 煉習
	緩急 寬急	編輯 篇輯	縝密 愼密	縕袍 溫袍
	縹緲 縹渺	繁殖 繁植	繁簡 繁閑	
网	羈旅 羇旅	羈束 羇束		
羽	翌日 翼日			
肉	脚絆 脚胖	臆病 憶病	臚列 鑪列	

部首	正	誤
臣	臧否	藏否
自	自慢	自漫
艸	萌葱（モエギ）	萌黃
	薫陶	訓陶
	薩摩國	薩磨國
虫	蜜柑	密柑
虍	處置	所置
	處罰	所罰
行	行方	行衞
	行儀	行義
衣	裁判	栽判
	袱紗	服紗
	裔胄	裔冑
見	規模	規摸
	觀念	感念
言	言語道斷	言語同斷
	計畫	經畫
	記念	紀念
	記憶	記臆
	誠意	正意
	課程	科程
	諮詢	諮尋
	辯護	辨護
	讀書百徧	讀書百篇
豕	豫備	預備

貝	貨幣	貨弊			
足	踟躕	踟躊	蹂躙	蹂躪	躊躇	躕躇
車	輕佻	輕跳	輕躁	輕噪	輪奐	輪煥
辵	送迎	贈迎	逕庭	經庭		
里	重複	重復				
邑	鄭重	丁重				
金	銓衡	詮衡	錯綜	錯總	鍊藥	練藥	鍛鍊	鍛練
門	關防	冠冒				
阜	陪臣	倍臣	陶冶	淘冶	陵駕	凌駕	階梯	楷梯
	障碍	障害				
雨	需要	需用（ヨウ）	霄壤	宵壤	震怒	宸怒
隹	雄辯	雄辨				

革	鞠躬	鞠窮
飛	飛驒國	飛彈國
魚	鯁骨	硬骨
黑	點睛	點晴
鼎	鼎鑊	鼎钁

是等の熟字中、揭げる必要のないものもあらう。又現今世人の多數決に依るならば正誤轉倒するものもあるかも知れぬ。例へば、

一、「一所懸命」は現今は殆ど皆一所懸命に「一生懸命」を使用して居るかも知れぬ。

二、「一韋帶水」は前述の如く、狹い水を隔てて居ることであるから「葦」などと淺水に緣故のあるものを使用したのである。

三、「勅語奉讀」は、「捧讀」としても、殆ど同意義ではあるが、當時文部大臣の訓令には「奉讀スベシ」とあるのに從つて、夫々擧行するのであるから、訓令の字句に從ふことを適當と認めるのである。

四、「弁言」とは弁は冠にして書冊の卷端などに記す題辭序文等に用ひ、「弁一言於卷端」などするのであるから、本來「弁」を使用すべき所にも丁寧に書く積にて、「辨」を用ふるのである。是等の誤用は隨分他の場合にも、多く見受けることである。而も却つて何れも學者先生の物せられ居るものの內である。

五、「形而上」とは元と無形物即ち精神界のものを云ふのに、時として「形而下」と轉倒するもののあるは、笑ふべきことである。

六、「推敲」とは詩文などを考へ直すことであるが、元と唐詩「鳥宿池中樹、僧推月下門」の「推」を「敲」に正したときの故事より出でたのである。

七、「束脩」の「脩」は脯脩とて乾魚のことである。昔時弟子が入門の挨拶に、此乾魚を束ねたのを贈つたのである。然るに「脩」は轉注して「修飾」の修と同一となることがある。故に本來の意義の場合に此轉注の同一たるべき「修」を誤用したのである。

八、「槍術」の「槍」の重なる部分は固より金屬ではあるが、「鎗」は酒器或は鼎の類にし

て、武器には用ひて居ないのである。某博士の有名なる國語字書には誤用してある。

九、「氣概」は「慷慨」などと類似であると思つて、遂に誤用せられたのである。序に述べよう。「投山蓋世ノ概アリ」等の「概」も、「氣概」の「概」と同一であるのである。

十、「發掘」の「掘」は動詞である。「堀」は土穴にして、決して動詞となることはない。有名なる國語の字書にも誤用してある同書には之に類似の誤用は、意外に澤山ある。

十一、「記念」と「紀念」との用法は、現今にても時々問題に上ることである。現今多數のものは「紀念」を使用するから、格別咎立をするには及ばぬが、「記念」は古來の熟字であるのである。

十二、「關防」とは書幅などの肩に捺す印のことであるから、冠冒ならんかと誤認せられるでのある。

十三、「障碍」と「障害」とも、近來は兩用の樣になつて居る。「需要」と「需用」とも同樣である。「障碍」の「碍」は「礙」と同じことは、前に述べて置いたことである。

第十章　字畫類似のために誤用し易い熟字

熟字中字畫の類似して、且つ讀方又は意義も多少類似するために、往々誤用せられるものがある。是等も其類例を擧けるときは、固より際限はないものであるが、今其特に著しいものを掲げることとする。

部首	字畫類似ノタメニ誤用シ易イ熟字表
一	一攫(カク)千金　一攫(ワク)千金
人	侍(ジ)史　待(タイ)史　　偸(トウ)安　愉(ニ)安　　傳習　傅(フ)習
儿	元寇　元冠
八	冀望　翼望
冫	冲天　沖天
刀	分析(セキ)　分柝(タク)、分折(セツ)　　刊行　刋(セン)行

部首				
力	勒功	勤(キン)功		
勹	匆々	匆(コツ)々		
口	名刺	名剌(ラツ)	商業	啇(テキ)業
大	大傅(フ)	大傳(デン)	大廈	大夏(サ)
女	姉妹	姉妺(マツ)	娯樂	悞樂
宀	容易	容昜(ヤウ)	容喙(カイ)	容啄(タク)
心	懶(ラン)惰	懶(ライ)惰		
手	撰述	選述		
斗	斡旋	幹(カン)旋		
斤	新潟縣	新瀉縣		
日	明晰	明晣(セツ)		
欠	欸(アイ)乃	款(クワン)乃		

咳嗽　咳漱(シウ)

嗚呼　鳴(メイ)呼

殳	水	瓜	白	皿	石	竹	糸	网	羊	肉	艸
毆打　毆(ク)打	潜然　潜(セン)然	瓢簞　瓢簞(テン)	白皙(セキ)　白皙(テツ)	盥漱(シウ)　盥漱(ソウ)	石鹼　石鹼	簞笥　簞(テン)笥	綱目　綱目	羅病　羅(ラ)病	義捐(エン)　義損(ソン)	膏肓(クワウ)　膏盲(マウ)	菅(カン)公　管(クワン)公
									羸弱　羸弱(エイ)		著述　著述(キウ)
											薩摩國　薩磨國

行	衣	豆	貝	辵	車	金	頁
衛戍（ジユ）	裨益	豐年	贔屓（キ）	進步	輸贏（エイ）	鑵詰	項戴
衛戌（ジユク）	裨益（ハイ）	豐稔（チン）	贔負（フ）	進捗	輸羸、輸羸（ルイ）	鑵詰	項載（サイ）
							頡頏
							頡頑（クワン）

是等の熟字中、前章のものと同様に、大家の眞筆中にもあり、有名なる國語の字書中にも、簞笥等誤用の分を隨分多く見受けることである。

右の内、例に依つて二三の解釋をなさう。

一、「侍史」とは「侍坐する物書き役」といふことにて、書面などを其人まで差出すこ

とであるが、余の所へ來る書面の「侍史の約三分の一は「侍史」とある。是は多分「返書デモ待ッ」積であるのか知らぬ。

二「懶惰」の「懶」は音ラン義オコタルであるが「嬾」は音ライ義キラフである。

三「撰述」又は「撰文」の「撰」は「選」に轉注することがあるが、「選」は「撰」には轉注しない。

四「欸乃」とは舟歌のことである。大家の書幅などでも隨分誤用のものがある。

五「膏肓」の「膏」も「肓」も胸部のことである。「病入二膏肓一」とは今日言はば「肺結核」のことである。其「肓」を「盲」と誤記誤讀するは、盲目も甚しいことである。

第十一章　熟字となつたために本來の意義を失ふ漢字

元來熟字は大抵其組合はせられたる各漢字の意義を合はせたものが多いのであるが、又必しもさうでないものもあるのである。本章に於ては、是等の種類を少し掲げることとする。

第一。主として上字の意義を顯す熟字

取捨　多寡　大小　容舍　弛張
慘憺　瑕瑾　用捨　異同　高低

是等の熟字中、場合に依り、時として上字下字雙方の意義を顯すこともあるが、通常主として上字のみの意義を表すことが多い。殊に

一、「慘憺」の「慘」は「慘酷毒痛」とて「イタム」の意義であり、「憺」は「憾而不憺」とて「ヤスンズ」の意義を有するものである。故に「苦心慘憺」などの場合には唯「慘」の意義のみを示すものである。人に依り「慘憺」の熟字は善くない、「慘澹」に訂正せねばならぬと言ふものもあるが、夫れには及ばぬ。佩文韻府を見れば、雙方の用例がある。

二、「瑕瑾」の「瑕」は世人の知る如く、「玉病」とて「タマノキズ」であり「瑾」は其正反對即ち「玉美」とて「タマノウツクシイコト」である。然るに「瑕瑾」の場合には前のと同様「瑾」の意義を沒却せられるのである。世人は其意義を解せずして、共に「玉ノ疵」と心得ものも亦少くない。故に時として「大行不顧細謹」の「謹」を此瑾にて誤用するものもあるのである。有名なる國語の字書は何を典據として記された

のであらうか。是も瑕瑾ではなからうか。

第二。主として下字の意義を顯す熟字

加減　多少　存亡　安危　榮枯

盛衰　緩急　興亡　興廢　輕重

是等の熟字も場合に依り、時として、上字下字雙方の意義を顯すことも、全くないではない。

第三。無意義に或主要文字に他の文字を附加へたる熟字。

困却―忘却　忙殺―笑殺

執著―愛著　讀破―踏破

是等の「却」「殺」「著」及「破」等は、無意義に他の主要文字に附加へたものである。其他

打聞―打續　取極―取調

有合―持合　日子―金子

是等の「打」「取」「合」及「子」等も同樣である。併し是等にも多少の習慣があつて、任意に何れ

の文字にも附加へるといふことは出來ぬものである。

第四。全然反對の如き意義を顯す熟字

熟字中全然反對の意義を顯すものもある。例へば

一、「有數」は數の少いことである。

二、「無數」は數の多いことである。

三、「莫大」は至大なることである。是は元と「莫大焉」とて「之より大なるものなし」の意義である。「莫加」「莫過」等も皆之に準ずるのである、或人は莫は廣なりとの意義があるから、「莫大」は「廣大」なりとの意義であると言ふものはあるが、余はさうでなからうと思ふ。

四「無念」は「念」である。是は元と小爾雅に「無念ハ念ナリ」とあり。其用例に詩大雅の「無念爾祖」を引いてあるより來つたのである。

五、「其奈」と「無奈」とは同一の意義である。

六、「堪喜」と「不堪喜」とは、同一の意義である。

七不「可知」と「可知」とは、矢張同一の意義を顯すことのあるを知らねばならぬ。漢

文にて「漢字廢止之議、遂至レ不レ可レ行也、亦不レ可レ知焉。」と言へば、「……亦可知矣」と同一の意義となる。又口語にて「明日ハ天氣ガ善イカモ知レヌ」と言へば、主として天氣の善いことを意味するのである。」

八、俗語「怪(ケシ)カラヌ」は「怪シイ」ことである。又「滿遍ニ」といふことを「滿遍ナク」といふものもある。

其他一般に熟字は熟字として、特種の意義を顯すものであることを知らねばならぬ。單に各漢字の意義を知つて居ても、其熟字の意義を直に推測することは出來ぬものである。例へば

一、「目下」は「目ノ下」でないことのあるは、人の知る所である。

二、「自首」は「自分の首」でもない、又「首ヨリ」といふことでもない。

三、「落首」は「落チタ首」でもない、又「首ヲ落ス」といふことでもない。元と「落シ文ノ一首」といふことより來たのである。又此「落」といふ字は種々に使用せられて居る。「落札」と「落選」とは「落」の意義が反對である。又「落欵」とは、書欵などの書手の名の下に捺す印のことにて、元と「落成ノ印(シルシ)」といふのである。

四、「芫菁」は二字共に艸に从ふ漢字であるが、草木ではなく、「アヲハンミヨウ」と稱する毒蟲である。

五、「淡菜」は一見すれば、蔬菜類ででもある樣であるが、「イノカヒ」又は「ヒメガヒ」と稱する貝類である。

六、「連翹」は羽に从ふ漢字もあるから、蝶類の如き昆蟲ででもあるかと思へば「レンギヤウ」と稱する花卉である又「澤瀉」も「オモダカ」と稱する花卉である。

七、「花鰷」は「ハナヲコゼ」と稱する魚類である。

八、「引導」は各漢字の示す如く、誘引の意義を有するもの、即ち僧侶が、亡者を極樂淨土に導くことであるが、「導引」とは按摩のことである。

九、「源翁」と「澤庵」とは、元と共に僧侶の名であつたが、今は一は大工の道具となり一は毎日三度づつ膳の上に上る食料となつて居る。

十、「玉版」は「筍」のことである。是は支那の蘇東坡が客に、燒筍を饗したとき、客は其名を問ふた所が、東坡は其傍に居る和尙の名であるかと思つて、玉版であると答へたからである。

十一、「蹲羝」は「芋」のことである。是も支那にて昔或人が芋を贈つて來た禮狀に、實物を見ずして、書面の「芋」を「羊」と誤讀し、蹲羝と書いて、遺したからである。或人が之を批評して、「蹲羝は蹲鴟の誤植なるべし。……」云々と某雜誌に掲げられた。好意は謝するが、蹲鴟の芋たることは、余も承知して居る。但し此に引用したのは別である。明の丘瓊山著故事成語考の本文蹲羝芋之別名」の註に「昔人遺」芋。主人誤認芋字、作羊字。故謝帖云蒙惠蹲羝云」に本いたのである。

十二、「阿堵物」は「錢」のことである。是も支那の王夷甫は「錢」といふことを言はなかつたとき、妻が之を試みんとし婢をして錢を床の周に繞して置かせた夷甫が早く起きて、錢を見、婢を呼んで、「此阿堵物」を去れと命じたからである。

是等の類を列擧するときは、際限はないことであるから此所にて止めることとする。唯、前例第八に於て、一定の熟字は、猥に之を顚倒しては善くないことを述べたが古來漢詩の平仄又は押韻の都合上、已むことを得ずして、大家が倒用したものが乏くないことはないことを附加へて置かう。例へば

俯仰―仰俯　參差―差參　咨嗟―嗟咨　慷慨―慨慷

棟梁—梁棟　江湖—湖江　爛漫—漫爛　玲瓏—瓏玲

田園—園田　磨滅—滅磨　紅白—白紅　胡盧—盧胡

華袞—袞華　落拓—拓落　蒲團—團蒲　衣裳—裳衣

錯莫—莫錯　顚倒—倒顚　麋鹿—鹿麋　鹵莽—莽鹵

右各欄とも、上のは普通のものにして、下のは倒用のものである。是等は六如上人端隆の葛原詩話に古人の種々の用例を示してあつたのを摘出したのであるが、普通の人には、故らに倒用のものを制作せざることを心懸けて貰ひたいのである。即ち、

少小—小少　心身—身心　方法—法方

不レ知不レ識—不レ識不レ知　業已（ステニ）—已業（ステニ）

等の類である。此内「少小」は「老大」の反對であり「不レ知不レ識」は「知識」よりの反對であることが氣附かば、そんな轉倒はしないことであらう。併し

便利—利便　習慣—慣習　簡單—單簡

等の如く、普通に兩用のものもある。

第十一篇　漢字の字畫

第一章　漢字の字畫の亂雜

英語其他の外國語を使用するものは、其スペルリング即ち綴方を吟味し、其誤れることを非常なる耻辱に感じて居る。然るに我國語に對しては、決して同一の注意を拂つて居ない。殊に夫のみではない。漢字の如きに至つては、其字畫の錯雜又は類似文字の誤用を以て、却て新知識に富める學者を標榜するに足る要具の如く、思つて居るものもある位である。是は果して適當のことであらうか。

漢字の字畫は現今大家先生の筆跡にも、隨分如何はしいものを見受けることであるが、本來の支那にても、古來錯雜であつたらしい。彼の唐の代宗大暦九年(一四三四年)に、顏眞卿が其高祖父顏元孫の撰述した干祿字書を公刊したことに依つても分るのである。干祿字書には漢字を正字通字及俗字の三體となし、其據る所を示してあるが是等を其後に編纂せられた彼の康熙字典などに比べると其相違は非常に多い。又彼の說文に遡つて調査したならば、錯誤も實に少からぬことである。

又彼の康熙字典は淸の聖祖康熙四十九年(二三七〇年)の勅撰であつて、從來漢字の金科玉條とせられて居るものであつた、字典の不足又は錯誤を指摘したる字貫の編纂者たる王錫侯が死刑に處せられた位である。併し其字典も現今にて言はば、幾多の編纂委員の手に成つたものであるから、前後の衝突矛盾のあることは免れぬ。余も既に其衝突及錯誤を偶然發見して居るものも、三箇や五箇ではないのである。こんな有樣であるから、漢字の字畫に就いては、極端な吟味は無論必要はなからう併し漢字を始めて敎授するとき、又は金石に刻し、永遠に保存すべきもののときなどは、多少の注意をなすことは穴勝無益でもなからう。依つて余は特に本篇を草したのである。

余の始めて本篇を草したのは、明治二十七年であつた。當時は公刊はせなかつたが草稿のまま有志のものに示し、又謄寫することを任せて置いたことであつた。其後一二年の後漢字の字音及一般の讀方に關する諸篇に及ぼした。爾來暫く是等の草稿を拋棄して置いたが、此一二年前より又々舊稿を取出し、小閑を得る每に增減訂正を加へ、以て諸篇を取纒めることにしたのである。

第二章　漢字の字畫表

漢字の字畫は、前述の如く隨分困難なる樣ではあるが、少し注意すれば何も格段のことはない。本章に於て余の所謂使用漢字中、特に錯誤し易いものを掲げて表を作つたのである。

漢字の字畫の錯誤に就いて特に注意すべきは、世人の多く錯誤するのは、畫數を多くすることである。漢字の字畫の繁雜の上に一層の繁雜を加へることである。

漢字ノ字畫表

部首	畫數	正字（字音字義）	同字又ハ別字等	備考	主要部類似ノ漢字
一	三	丈	支（本）丈（誤）	丈ハ十尺ニシテ元ト「十又」ノ合體	仗杖
	四	丑	丒（俗）		忸狃紐羞鈕
	五	且（シヤ・カツ）	旦（タン）（別）	且ハ「几二」ノ合體音シヤ、サ、シヨ、ソノモノ皆同シイ	助徂咀岨阻沮爼査殂祖租齟

部首	畫數	字	異體	説明	關係字
丨	五	世	卋古 卋 丗同	世ハ三十年デアル	泄笹貰
	五	丙	丙俗	丙ハ一ノ冂ニ入ルニ象ドル 一ハ陽冂ハ門デアル	炳柄陃病
	五	丞	丞俗 亟キヨク別		拯烝蒸
	八	並	竝本 並俗		普譜
	三	个	个俗	个ハ竹ノ一枝デアル假名「ケ」ヲカト讀ムノハ此俗字デアル	
	四	中	中 中古	中ノ下部ニ點ヲ打ツノハ誤デハナイガ今ハ不用デアル	仲沖沖
丶	三	丸	丸本 丸俗		紈執勢藝
	四	丹	𠁿本 冄誤	丹ガ他ノ偏旁トナルトキハ横畫兩端ニ出デヌ	青
	五	主	丶古 主誤		住往注柱炷註駐
ノ	二	乃	廼同		朶秀
	三	久	夂俗 夊チ別		灸玖柩

乙　亅　二

畫數	字	異體	備考	關係字
四	之	㞢古 之セツ別		乏芝
八	乖	乗俗 乘誤		乗剰
一一	乾	乾 乹俗		戟朝
一二	亂	𠮦同 乱俗 亂誤 乿チ別		辭
八	事	叓古 事俗 𠭏誤 事サウ別		剚
三	于ウ	亐本 干カン別	音ウノモノ皆ジイ	汙字芋迂盂
四	云	厶トツ別	音ウンノモノ皆同ジイ	芸紜耘雲
四	五	㐅本 五 𠄡俗		伍吾梧
六	亙	亙古 亘俗 亘セン別	亙ハ元ト「二舟」ノ合體ニハ兩岸ニ象ドル	恆
八	亞	亜俗		啞堊惡
八	亟	亟俗 丞ショウ別		極

亠

三	亡	亾本 亡誤		忙忘芒盲育虻茫茺
四	亢	亢俗 元(ゲン)別		伉坑忼抗航頏
六	亦	夾本 亦誤		奕迹跡
六	亥	亥 亥俗 亥誤		刻劾咳孩垓核欬該骸駭
七	亨(カウ トホル)	亨俗 享(キヤウ) 烹(ハウ)別	諸々「亠口」ニ从フモノノ俗字皆同ジイ	享亮亭高毫
八	享(キヤウ ウク)	享俗		淳諄醇鶉
八	京	京(ゲン)別	京ハ元ト原ノ俗字今京ノ俗字トモスル	掠涼景諒鯨黥
四	今	今誤	今ハ「人一フ」ニ从フ人一ハ天地人三合ノ形フハ及ノ古字	吟含岑念矜衿衾貪鈴黔
四	介	介俗		芥界疥
四	仇	仇誤		尻究
五	他	佗 它 別又通		

五	仙	僊同		侖圇錀鶬
五	令	令俗		
六	伏	伕誤 伏別		犬吠狀突默
六	仰	仰俗 御誤		抑迎
六	休	体誤		沐
七	但 タン タダ	伹シヨ別		
七	低	伍俗		底邸抵柢牴祗砥觝
七	佛	仏古		拂
七	作	㑅本 做俗	做ハ作ノ俗字デアルガ他ノ動詞ノ下ニ接續スルトキニ專用ス	
七	佞	侫俗 佞誤	佞ハ「女信」ノ省體會意デアル	
八	來	徠古 来俗 耒俗		

九	侯	矦本 侯別	侯ハ侯伯ノ侯字體字音類似ノモノ皆侯ニ从フ	喉猴
九	侵	㑴本 侵俗 浸別		
九	俊	俊俗		峻悛浚梭逡竣皴酸駿
九	俎	爼誤		
九	保	𠈃古 保本	保ハ元ト「子人」ニ从フ人子ヲ抱クニ象ドル、	
一〇	修	修俗 修誤 脩又通		
一〇	候	候 候本	候ハ元ト「人侯」ニ从フ今ノ正字ハ省體デアル	
一一	倏 シュツ タチマチ	倏本 倐別	倏ハ犬ノ疾走、倐ハ別字デハアルガ音義略〻同ジイ	
一一	假	假 假誤 仮別又俗	類似ノ漢字ニハ俗字ヲ用ヒヌ	暇瑕葭遐蝦霞
一一	偶	偶俗		喁寓嵎隅愚遇耦藕
一一	偏	偏俗 徧別	偏ハ偏頗ノ偏、徧ハ普徧ノ徧	篇編翩

一一	健	健 健 健誤		
一二	傳フ	傳俗 傳別（テン）	傳ハ「人、甫寸」ニ从フ音フ、ホ、ハクノモノ皆同ジイ	博搏縛膊薄溥
一二	備	備本 備 備俗 備誤		糒鞴韛
一二	傘	繖本 仐略 傘 傘誤		
一三	傲	傲俗	傲ハ「人士方攴」ニ从フ	遨鼇贅
一三	傷	傷 傷俗 傷 傷誤		塲膓殤觴
一三	僅	僅 僅俗 僅誤	僅ノ旁ハ艸ニ从フニアラズ革省ニ从フノデアル	勤槿瑾謹覲饉
一四	僕	僕同 僕俗		撲璞
一四	僚	僚本 僚誤		潦寮遼療
一四	僭	僣別又俗 僭誤		潛簪譖
一五	儉	倹俗 儉誤		僉劍險嶮檢斂瞼驗鹼

儿

四	元		亢誤 亢(カウ)別		完玩逌寇頑
六	充		㐬本 克 亢誤	充ハ元ト「厶儿」ニ从フ厶ハ音トツ三畫デアル	育流疏
六	兆		兆俗 兆誤		姚挑桃逃眺窕跳銚
六	光		炗古 灮本		恍晃絖輝耀
七	克		克同		兢
七	兌		兊 兑俗		悦税蛻說鋭閲
七	免		免 免本		勉挽晩輓
七	兎	トウサギ	兔 兔本		冤逸
八	兒		児俗 兒 見誤 児(ジ)別		倪睨霓鬩
一二	兜		兜誤		
一四	兢		競別	兢ハ戰々兢々ノ兢	

入	四	內	内（俗）	內ハ外ヨリシテ冂ニ入ルニ象ドル	吶納衲訥
	六	全	全（俗）		栓筌詮銓
	八	兩	从（同） 兩 両（俗）		倆滿
八	四	公	㕣（エン）（別）		松蚣翁訟頌蓊
	六	共	𠔏（本） 共（誤）		供恭拱巷港
	八	其	丌 亓（古） 开 其（俗）	其ハ「甘」「丌」ニ从フ	欺斯期朞棋箕
	八	具	昇（本） 昊（俗） 貝（バイ）（別）	具ハ貨共ノ省體會意	俱惧
	八	典	笧（古） 典（俗）	典ハ「册」「丌」ノ合體	腆
	一〇	兼	𠔥（本） 兼（俗） 兼（誤）	兼ハ元ト「又」ト「二禾」トニ从フ	嫌慊廉歉謙鎌簾
	一六	冀	兾（俗） 翼（ヨク）（別）		
冂	五	冊	笧（古） 冊（本） 册（俗）		

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
冖	九	冑（チウ・カブト）	胄 別	冑ハ甲冑ノ冑肉ニ从フノデナイ	
	九	冒	冐 俗		帽瑁
	四	冗	宂 本　穴（ケツ） 別	通常ノ字書ニハ本字ヲ正字トシ正字ヲ俗字トシテアル	
	九	冠	冦 同　寇 誤		
	一〇	冤	冤 本　寃 俗　寃 誤	冤ハ兔ニ从フ兔冂下ニ在リ走ルヲ得ナイノニ象ドル	
	一〇	冥	冥 俗　㝠 誤		溟暝
	一六	冪	冖 本　羃 誤	字書ニハ冪ヲ俗字トスルモ今之ヲ改メタ	
冫	五	冬	冬 通		終螽
	六	冲	沖 別	冲ハ冲天ノ冲	
几	二	几	儿（ジン）　𠘧（シュ） 別		机肌飢凳
	三	凡	凢 俗　凣 誤		帆汎梵

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
凵	五	出	出 岦誤	出ハ山ニ从フノデナイ	咄屈拙堀掘黜
	八	函	圅本 函俗 凾誤		涵
刀	三	刃	刄 刄俗 刅（サウ） 叉（サ） 㕚（サウ）別		仞訒
	四	分	分俗 分誤	分ハ「八刀」ニ从フ	忿粉紛貧頒
	四	刈	刈古 苅俗		
	四	切	切俗 切 切誤		砌窃
	五	刊	刊（セン）別	刊ハ刊行ノ刊	
	六	刑	刑本 形別		幵形併研笄
	七	別	冎本 别俗	別ハ「口冂」ニ从フ其扁カ叉ハ刀ニ从フノデナイ	
	八	初	初 初誤	初ハ「衣刀」ニ从フ衣ヲ裁ツノ始	
	八	券	劵俗 劵誤		巻倦拳脊眷

力

八	刺	剌（ラツ）別		棘棗策
九	前	歬本　前俗		揃箭
九	剋	尅俗		
一一	剪	葥　翦本　剪誤		
一二	創	戧　刅古　刱本　剏俗	創ハ創造ノ創又創傷ノトキハ瘡ニ通ズル	
一五	劇	劆俗　勮　劇誤		
一五	劍	劒古		
五	功	功誤		幼協脇
七	助	助　助俗	助ハ「且力」ニ从フ	耡鋤
九	勃	勃　敎誤		悖渤誖
九	勅	敕　敕本　勑（ライ）別		

勹

画数	字	異体	説明	関連字
九	勇	勈本 勇俗	勇ハ田ニ从フノデハナイ	
一一	勒ロク	勒誤 勤キン別		
一二	勝	勝本		服朝謄騰
一二	勞	勞古 労 劳俗	勞ハ「熒力」ノ省體會意熒火物ヲ燒ク力ヲ用フルモノ勞レル	熒榮犖營蠑
一三	勢	勢本 勢 勢俗		藝
一三	勤	廑古 勤俗	勤ノ扁ハ艸ニ从フノデナイ革省ニ从フノデアル	
一六	勳	勛古 勲俗 勳誤		薫
一七	勵	励俗		厲礪蠣
三	勺	勺俗		杓灼的約豹釣
五	勿	怱 忽本 勿ゴツ別		
五	包	包誤		泡抱炮胞苞砲袍雹

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
匕	六	匈	匈俗　匃(カイ)別		洶恟胸
匕	四	化	化俗	化ハ匕ニ从フノデナイ匕ニ从フノデアル匕ハ音クワ	花貨訛
匚	五	匝	帀本		
匸	四	匹	疋俗		
匸	一一	區	區　𠪚　区俗		傴嘔嫗嶇奩漚歐毆樞甌驅鷗
十	三	卅	卄同　廿(シツ)別		
十	四	升	外　升　陞俗　外誤　舛(セン)別		昇枡
十	五	半	半本　半俗		伴判拌
十	五	卉	芔古　卉本		奔賁
十	八	卑	卑本　卑俗　卑　畀誤		牌脾髀碑稗
十	八	卒	卒本　卆俗		悴猝萃碎瘁粹翠醉

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
	八	協	叶古 協誤 恊別		
	一二	博	愽 博誤	諸〻尃ニ从フモノ傅ヲ見ヨ	
卜	五	占	占俗		
卩	五	卯	戼本 丣俗	卯ハ冒デアル萬物地ヲ冒シテ出ル門ヲ開ク形ニ象ドル	柳留
卩	六	危	危通 危 危誤		桅脆跪詭
卩	八	卷	巻誤	諸〻关ニ从フモノ劵ヲ見ヨ	倦圈捲
卩	八	卸	卸俗		
卩	九	即	卽通 即俗 郎誤		[illegible]喞節
卩	九	卻	却俗 郄誤		腳
卩	一二	卿	卿俗 鄉別	諸〻卽ニ从フモノ卽ヲ見ヨ	
厂	四	厄	厄誤		危扼

又　ム

九	厚	㫗本　厚誤		
一〇	原	原　厡俗		源愿願
一一	厠	廁本		
一二	厥	厥誤		劂蕨蹶
五	去	厺本		劫怯法
一一	參	𠫭古　叅　参俗		慘滲
三	叉	㕚俗　刃（ジン）　叉（サウ）　刅（サウ）別		扠釵
四	及	及俗	及ハ「人又」ニ从フ	扱吸汲笈
四	友	㕛本　友俗	友ハ元ト「二又」ニ从フ	
四	反	反通	反ハ又ニ从ヒ厂ノ反形ニ从フ	板版返
八	叔	尗古　尌俗　叔誤		淑椒菽督

口

八	取	取俗 冣誤		娶陬最聚諏
八	受	受俗 受誤		授綬
九	叟	叜古 叟 叓俗 臾ユ別		嫂搜瘦艘
一六	叡	睿古 叡誤		
一八	叢	叢古 藂俗		
五	句	勾俗		劬狗枸苟煦鉤駒
五	叫	訆同 叫俗 呌誤		蚪
五	召	召俗		招沼昭迢紹詔超照 韶髫
五	叱	吪クワ別	叱ハ「口七」ニ从フ	
五	右	右俗	右ハ「又口」ニ从フ	佑祐
六	吉	吉俗	吉ハ「士口」ニ从フ	拮桔結詰髻黠

六	同	仝俗		
七	吝	悋俗		
七	含	含俗 含誤	諸〻今ニ从フモノ今ヲ見ヨ	頷
七	吟	唫古		
七	呈	呈別又俗	諸〻壬ニ从フモノ壬ヲ見比べヨ	逞程程聖醒
七	君		諸〻尹ニ从フモノ尹ヲ見ヨ	窘羣裙
七	吳	呉 吴俗		悞娛蜈虞誤
七	告	告俗	告ハ「牛口」ニ从フ	浩造皓誥
七	吾		諸〻吾ニ从フモノ五ヲ見ヨ	悟圄梧寤語
七	呂	吕俗		侶宮
八	周	週 周俗	周ハ「用口」ニ从フ又週ハ元ト俗字デハアルガ今ハ別字ノ如クセラル	倜淍彫稠調雕綢

八	呪	咒俗		
八	命	命俗		
八	和	咊 龢古		
九	咽	胭俗		
九	品	品 只俗	口ヲ二箇並ベ又ハ同ジ偏旁三箇重ネルモノハ上欄ニ準ズル	區單愕操 姦森蟲聶
九	哉	𢦏俗		
一〇	員	貟俗		圓損隕賞韻
一〇	唇	脣本		
一〇	哲	嚞古 悊本		
一〇	唐	唐 唐 唐俗		塘糖
一一	唯	崔俗		

畫數	字	異體	備考	關係字
一一	唾	唾本 涶同		
一一	啄	啄誤 喙(カイ)別		琢
一一	商	啇(テキ)別		
一一	啓	啟本 啓 啓俗		棨肇
一二	善	譱本 善 善俗		膳繕
一二	喙(カイ クチバシ)	喙俗 喙誤 啄(タク)別		椽緣篆
一二	喜	喜 喜俗		嬉禧
一二	喪	𠷎本 喪 丧俗 喪誤		
一二	喬	喬 喬 喬 喬俗	喬ハ元ト「夭高」ノ省體會意	嬌橋蕎驕
一二	單	單 单 單 单俗		嬋彈戰禪簞蟬驒
一三	嗅	齅本 嗅俗		

一三	嗇		嗇 嗇俗 嗇誤		墻牆檣薔穡
一三	嗣		孠古 嗣誤		
一三	嗚	ヲ アア	鳴メイ別	嗚ハ嗚呼ノ嗚	
一三	嗤		嗤俗 嗤誤		
一四	嗽	ソウ	漱シウ別	嗽ハ咳嗽ノ嗽漱ハ盥漱ノ漱	
一四	嘉		嘉 嘉俗		
一四	嘗		甞俗 嘗誤		
一六	器		噐 器俗		
二〇	嚴		嚴 嚴 嚴俗 嚴誤		儼巖
二一	囂		嚻古 囂俗 囂誤		
二二	囊		嚢俗 囊誤		

部首	畫數	字	異體	備考	
口	五	四	𠃢古 囮俗 罒別又俗		駟
	六	回	囘本 廻 迴俗 囬メン別		
	六	因	囙俗		咽姻烟恩
	一一	國	圀 囯古 国 國俗 國誤		幗摑
	一二	圍	囲俗		
	一三	園	園 園俗		猿遠轅
	一三	圓	円俗	諸ゝ員ニ从フモノ員ヲ見ヨ	
	一四	圖	圗俗 圗誤 啚別又略		
	一六	圜	圜 圜俗		寰還環
土	三	土	圡誤		吐
	七	址	阯同 址俗 趾別	址ハ城址交址ノ址趾ハ足趾ノ趾	

七	坂	阪本	諸々反ニ从フモノ反ヲ見ヨ	
七	均	均誤		
七	坐	㘴本 坐誤 座別		
八	垂	𡍮本 埀俗 垂誤		郵陲
一〇	埒	埓誤		
一一	執	𡙁本 執俗 埶ゲイ別		
一一	埼	崎 碕別又通	諸々奇ニ从フモノ奇ヲ見ヨ	
一一	堂	坣古 堂誤		
一一	堅	堅誤	諸々臣ニ从フモノ臣ヲ見ヨ	腎竪緊豎樫賢
一二	堤	隄同		
一二	堯	尭俗 堯誤		僥墝撓澆曉遶磽繞鐃饒

士

一二	報	𡙈本 報誤		服
一二	場	塲俗 場誤 埸(エキ)別		湯揚陽楊腸暢
一三	塚	冢本 塚俗		
一四	塾	熟別	諸〻享ニ从フモノハ享丸ニ从フモノハ丸ヲ見ヨ	
一六	壇	壇俗 壇誤		擅羶饘
一七	壑	㕡古		
一九	壞	壊俗		懷
一九	壤	壤 壌俗		欀攘蘘讓釀
四	壬	王(ワウ) 壬(テイ)別	壬ハ士ニ从ヒ壬ハ土ニ从フ	任妊荏衽賃
七	壯	壮俗 壮誤	壯ハ爿ニ从フ爿ハ片ノ反形音シヤウ	奘莊裝
一二	壹	壱俗		噎懿

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
	一二	壺	壷俗 壼誤 壼(コン)別		
	一二	壻	婿俗		
	一四	壽	寿俗 壽誤		儔擣壔嶹躊鑄
夂	一〇	夏	夏俗 夏誤 复(フク)別		廈嗄榎
夕	三	夕	夕俗	夕ハ元ト三日月ノ地上ニ在リテ其半ヲ見スコトヲ指ス	外多夙夜
	六	多	多 夛俗		侈移
	一四	夢	梦古 夢同 夢 夣俗 夢誤		
	一四	夤	夤俗		
大	五	央	央本		怏泱殃映英秧鞅鴦
	六	夷	夷俗		洟銕
	七	夾	夹俗		峽挾浹狹莢篋鋏

八	奄	奄本 奄誤		掩菴
八	奇	竒俗		倚寄埼崎椅碕畸綺騎
八	奔	犇古	諸々卉ニ从フモノ卉ヲ見ヨ	
八	奈	柰本		
八	奉	奉本		俸捧棒
九	奏	奏俗		
九	契	契俗 契俗	契ハ丯ニ从フ音ガイ	挈喫潔楔
九	奐	奐俗 奐誤		喚換煥
一二	奠	奠誤	諸々酋ニ从フモノ酋ヲ見ヨ	鄭擲躑
一三	奧	奥俗 奧誤 粤ヱツ別		粤墺澳燠襖
一四	奩	奩俗	諸々區ニ从フモノ區ヲ見ヨ	

女

画数	字	異体	備考	
一四	奪	奪古		
一四	奬	奬同 獎誤	諸〻將ニ从フモノ將ヲ見ヨ	
一六	奮	奮 奮誤		
七	妊	姙俗		
七	妒	妬俗		
七	妙	玅本		
七	姉	姊本 姉俗		
八	妻	妻俗		悽凄棲
九	姬	姬 姬俗 姫（シン）別又俗	姬ハ𦣝ニ从フ臣ニ从フノデナイ	頤
一〇	娛	悞別	諸〻吳ニ从フモノ吳ヲ見ヨ	
一〇	娠	娠俗	諸〻辰ニ从フモノ辰ヲ見ヨ	

部首	畫數	字	異體	備考	參照
子	一一	娼	倡本		
	一三	嫌	慊 歉別	諸〻兼ニ从フモノ兼ヲ見ヨ	
	一九	孃	娘俗	諸〻襄ニ从フモノ襄ヲ見ヨ	
	六	存	杍本		
	七	孝	孝別		
	一四	孵	⿰孚卯誤		
	一六	學	學通 學 斈 学俗 學誤		覺黌
	二〇	孽	孼本		
宀	六	安	安通 安俗		按案鞍
	八	宗	宋別		崇淙棕綜
	八	官	宦別		棺菅管館

八	定	㝎本 宆 宆俗		淀碇
八	宛	宛 宛誤		苑怨婉椀腕豌
八	宜	宜本 宜俗 宣(セン)別	宜ハ元ト宀ノ下、一ノ上、多ノ省體ニ从フ	誼
一〇	害	害俗	害ハ丰ニ从フ音ガイ	割豁轄
一〇	宵	宵誤 霄別		
一一	宿	宿本 宿俗		
一一	密	密同 密誤 蜜別		
一一	寇	寇同 寇俗 冠(クワン)別		
一二	富	富 富 富俗 富誤		副逼福蝠輻
一二	寐	寐誤		
一四	寡	寡 寡俗	寡ハ元ト宀ニ从ヒ頒ニ从フ頒ハ分頒デアル故ニ少トナル	

寸

畫數	字	異體	備考	關係字
一四	寤	寤誤		
一四	寢	寢誤		
一四	實	実俗　實誤	實ハ貫ニ从フ貫ハ毋ニ从フノデナイ	
一四	寧	寍古　寧俗　寗誤		嚀濘獰
一五	寫	寫　寫俗　写略　寫誤		瀉
一五	寬	寬　寛俗　寛略		
二〇	寶	琣古　寳通　宝　珎略	和同開寶ハ寶ヲ珎トシテアル	
一一	將	將　将俗		奬漿醬鏘
一一	專	專　専誤　専フ別		傳團蓴轉
一二	尊		諸々酋ニ从フモノ酋ヲ見ヨ	樽遵蹲鱒
一二	尋	尋　尋俗		潯

	小	尢		尸						
一四	一三	四	七	四	五	五	七	八	八	八
對	尠	尤	尨	尹	尻	尼	尾	居	屈	屆
對 対俗	尟本	尢本	尨俗	尹 尹俗	尻誤	尼俗 [illegible]誤	尾本 尾俗	[illegible]古		暨古 屆俗 届別
		尤ハ元ト「乂乙」ニ从フ							諸〻出ニ从フモノ出ヲ見ヨ	
				伊咿笋君 窘羣裙	仇究軌	怩泥抳昵		倨据裾鋸	倔堀掘窟	

屮 山

九	屛	屏本 塀俗		併迸軿駢
一〇	屓 キ チカラヲオコス	負別	屓ハ贔屓ノ屓	
一〇	展	展誤		輾
一五	履		諸〻復ニ从フモノ復ヲ見ヨ	
二一	屬	属 属俗		囑矚
四	屯	乇俗	屯ハ草木ノ初生ニ象ドル卽チ屮ガ一ヲ貫クニ象ドル一ハ地デアル	沌純鈍飩頓
八	岡	岡本 罒同 崗俗 罔誤		剛綱鋼
一〇	島	島 嶋同		
一七	嶽	岳古		
二二	巒	巒通 峦俗 巒誤		
二三	巖	岩俗	諸〻嚴ニ从フモノ嚴ヲ見ヨ	

部首	画数	字	異体	注記	関連字
巛	六	州	刕別		洲酬
	七	巡	廵誤		
	一一	巢	巣俗		剿
	一五	巤レフ	巤 巤 巤俗 鼠ソ別		獵臘蠟
工	三	工	工俗		功巧扛攻虹紅訌貢槓鴻
	五	左	𠂇 左俗		佐
	五	巨	巨俗 巨誤		拒炬矩距渠鉅
	七	巫	巫誤		筮誣
	一〇	差	差 差俗	差ノ下ハ元ト左ニ从フ	嗟嵯瑳蹉
己	三	己キ オノレ ツチノト	已イ スデニ 巳シ ミ別	みハ上ニおのれ、つちのと、きハ下ニいハ半ニテすでに、やむ、のみ	妃忌杞改紀記起配
	九	巷	巷 巷誤	巷ハ「共巳」ニ从フ	港

部首	畫數	正字	異體	備考	同傍
巾	一二	巽	巺通	巽ハ元ト𢀖ニ从フ筈デアル今康熙字典ニ從ツタ	撰選饌
	四	帀	匝 迊俗		
	五	市	巿(ハイ)別		姉柿闇
	八	帙	袠古		
	一〇	師	師 師俗 帥(スヰ)別		獅篩
	一〇	席	席俗 席誤		
	一一	帶	帯俗 帶誤		滯蔕
	一二	幅	巾別又略	諸〻畐ニ从フモノ福ヲ見ヨ	
	一五	幣	幣俗 幣誤 弊別		
干	三	干	于(ウ)別		刊汗奸旰旱杆罕肝竿訐軒
	五	平	平俗		

部	畫數	字	異體	關係字
幺	六	并	幷本	併屏迸軿駢
幺	六	年	秊古 年同	
幺	八	幸	㚔古 㚔俗 羍タツ別	倖睪擇澤繹驛
幺	五	幼	㓜誤	呦拗
幺	九	幽	凼俗	
幺	一二	幾	𢆻古 幾俗 畿別	機璣磯譏饑
广	八	底	厎同 庢俗	低抵柢砥祇
广	九	度	度俗 度誤	渡
广	一〇	庶	庻古 庶 庻誤	摭蔗遮蹠鷓
广	一一	康	康誤	慷糠
广	一一	庸	庸誤	傭

廴

畫	字	異體	備考	參照
一二	廈（カイ、ヘ）	厦（サ）別	廈ハ大廈ノ廈	
一三	廉	亷俗 廉誤		簾
一四	廐	廄本 厩 厩俗	諸〻既ニ从フモノ既ヲ見ヨ	
一五	廛	鄽同 壥俗 𡒄誤		纏躔
一五	廚	厨 廚俗		
一五	廟	庿古		
一五	廢	癈別	諸〻發ニ从フモノ發ヲ見ヨ	
一五	廠（シヤウ）	厰誤		
一九	廬	庐俗	諸〻盧ニ从フモノ盧ヲ見ヨ	櫨蘆爐
二五	廳	廰 庁俗	諸〻聽ニ从フモノ聽ヲ見ヨ	
七	延	延 延俗 延誤		延筵蜒

廾				
七	廷	廷誤	諸々壬ニ从フモノ壬ヲ見比ベヨ	庭挺梃綎霆
八	建	建 建誤		健
五	弁	辨別	弁ハ辨ノ俗字トシテ用フルコトガアルガ辨ヲバ弁ノトキニ用ヒナイ	
七	弄	挊俗		
弋				
一五	弊	獘誤 斃 幣別	諸々敝ニ从フモノ幣ヲ見ヨ	
六	式	式俗 戎誤		拭軾
弓				
三	弓	弓俗	諸々弓ニ从フモノ皆同ジイ	
四	弔	吊俗		
五	弘	弖誤		
七	弟	苐俗		剃悌涕梯
八	弧	弧俗 孤別		

ヨ

一〇	弱	弜通		嫋搦溺蒻
一一	強	强俗	强ハ「弘虫」ニ从フ	襁
一二	弼	弻本		
一三	彀	彀本		殼穀轂
一五	彈	彈別	諸〻單ニ从フモノ單ヲ見ヨ	
一六	彊	彊誤 疆別	彊ハ強ト音義略〻同ジイ疆ハ境ト音義略〻同ジイ	僵畺
一七	彌	镾別	諸〻爾ニ从フルモノ爾ヲ見ヨ	
一一	彗	彗通		慧
一二	彘	彘通 彘誤		
一三	彙	彙同 彙誤		
一八	彝	彝同 彝俗		

部	頁	字	異体	備考	関連字
彡	七	形	形本 形俗	諸〻幵ニ从フモノ及彡ニ从フモノ皆同ジイ	刑研笄彤彬彰
	九	彦	彥 產俗 彦誤		諺顔
彳	八	往	逞古 徃本 往俗		
	九	後	後俗		
	一一	得	㝵本 得 淂俗		
	一一	從	从本 従 従俗		聳縱蹤
	一一	徙シウツル	徙俗 從別		蓰
	一一	御	衘古 御 御俗		
	一二	徧	遍俗 偏別	諸〻扁ニ从フモノ偏ヲ見ヨ	
	一二	復	復俗 復誤		履複
	一三	微	徵俗		薇

心

一五	徵	徴俗 徵誤	徵ハ壬ニ从フ	懲
一五	德	悳古 徳俗 德誤		
一七	徽	徽俗		
七	志	㞢古	志ハ元ト「之心」ニ从フ士ニ从フノデナイ	痣誌
七	快	快誤		決抉鈌袂訣鴂
八	念	念俗 念誤	諸〻今ニ从フモノ今ヲ見ヨ	稔
八	忝	忝本 忝誤		添
八	怪	恠 怪俗		
九	急	㤂本 急俗		
九	怨	怨俗 怨誤		宛苑椀
九	怱ソウ	悤本 匆同 忽コツ別		

一〇	恐	恐本 恐俗	蛩筑跫鞏築
一〇	恥	耻俗	
一〇	恭	恭 恭誤	恭ハ「共心」ニ从フ
一〇	悖	誖同	
一一	悉	悉 悉 悉誤	
一二	惠	恵俗	
一二	惱	惱 惱 悩俗	腦瑙
一二	愕	愕 愕俗	咢諤
一三	愈	愈本 愈俗	偷喩癒諭輸覦踰
一三	愛	㤅本 憂同 爱俗	
一四	慤	慤俗	

一四	慊	忼本		
一五	慕	慕誤		
一五	慶	慶俗 慶誤		
一五	憂	㥑本 憂誤	憂ハ頁ノ下ノ一ト八トガ一トナルタメニ上ハ百トナルノデアル	優
一六	憑	馮同 憑俗		
一六	憩	憇俗		
一六	憲	憲俗	憲ハ「害目心」ノ省體會意	
一七	懇	懇本 懇誤		墾
一七	應	應俗 応略		
一九	懶ラン	懶ライ別	懶ハ懶惰ノ懶	
二〇	懺	懺俗		殲籤織識

戈									戸	
二一	一八	五	七	七	八	一一	一一	一七	一八	四
戄	戇	戊	成	我	或	戚	戛	戲	戴	戶
㦤略 懼誤	戅俗	戍ジュ マモル 戌ジュツ イヌ 戉エツ ヲノ 別	成通	我古 我誤	或俗	戚誤	戞俗	戯 戱俗	載サイ 別	户俗
		戊ハ人脇ノ象形戍ハ人戈ヲ持ツニ从フ戌ハ戊一ニ从フ								諸ゝ戸ニ从フモノ皆同ジイ
衢		茂	城盛誠	哦哦娥峨峨餓鵞	國域摑閾	蹙				

手

畫數	字	異體	注	關係字
八	所	⿰𠂆斤 𠩄俗 處別		
三	才	才俗 戈(クワ)別		材財
七	折	打(ダ) 拆(タク) 析(セキ) 柝(タク)別		逝誓
七	扼	⿰扌戹本 ⿰扌㔾誤		
七	抑	抑俗 ⿰扌卯誤		仰迎
八	承	承俗 承誤		
八	抵	⿷匚氏古	諸〻氐ニ从フモノ低ヲ見ヨ	
八	拂	払別又俗		
八	拔	拔俗 抜誤	拔ノ旁ハ犬ノ走ル指事	
九	拜	𢪿本 拜 拝俗	拜ハ元ト兩手ト下トニ从フ	湃
九	拯(ショウ スクフ)		諸〻丞ニ从フモノ丞ヲ見ヨ	

九	抛		拋俗		
一〇	拿	ダ ウツ	挐 拏本		
一〇	捐	エン スツ	捐俗 損(ソン)別		涓絹鵑
一〇	捏		捏 揑俗		涅
一一	採		採俗		彩菜
一一	捷		捷俗		睫
一一	探		探本		深
一一	掘		堀別	諸〻屈ニ从フモノ屈ヲ見ヨ	
一二	揚		揚 揚誤		湯陽場楊腸暢
一二	挿		插同 揷 挿誤		鍤
一五	撤		撤本		徹

一六	擇	択俗 擇 擇誤		澤繹譯釋驛
一六	操	操俗 摻誤 繰別	諸ゝ品ニ从フモノ品ヲ見ヨ	噪燥繰藻
一六	擔	擔俗 担別又俗		儋澹檐膽瞻贍
一七	擊	擊俗		繫
一七	擣	搗俗	諸ゝ壽ニ从フモノ壽ヲ見ヨ	
一七	擧	[illegible]古 舉俗 擧誤	擧ハ與手ニ从フ	
一八	擥	攬 擥俗 擥誤		覽鑒
一九	攀	攀俗 攀誤		
二一	攝	攝 摂俗		懾躡鑷
二一	攜	攜 擕 携俗		
二三	攫	擭(ワク)別	諸ゝ瞿ニ从フモノ懼ヲ見ヨ 又隻ニ从フモノ隻ヲ見ヨ	

支	四	支	攴俗 攵別		伎妓岐技枝肢翅
支	七	收	收同 収俗 牧誤	諸ゝ支ニ从フモノハ皆同ジ イ	
	七	改	攺イ 𣢁イ別		
	一〇	效	效同 効俗		
	一一	敍	敘同 叙俗		
	一一	敏	勄古 敏誤		
	一一	教	效古 教通		
	一一	敖	敖通	敖ハ士方ニ从フ	傲遨贅
	一二	散	㪔本 散同 散俗		撒霰
	一五	敵	敵俗 敵誤		嫡摘滴適謫鏑
	一五	敷	敷本 敷俗	敷ハ甫方支ニ从フ	

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
	一五	數	數通　数俗	諸〻僉ニ从フモノ儉ヲ見ヨ	屢樓縷鏤
	一六	斂	歛カン別		
文	四	文	攵ホク別		紊紋
	一二	斑	辬本　班別		
斗	一四	斡（ワツ・メグル）	幹カン		
斤	五	斥	斥俗		柝訴
	一三	新	新同		親
	一八	斷	𢿝本　断　断俗　斷誤		繼
方	四	方	方　方誤	諸〻方ニ从フモノ皆同ジイ	
	八	於	於通　於　扵俗		淤
	九	施	施誤		

无日

画数	字	異体	備考	例
一〇	旁	㫄本		傍髈謗
一〇	旂	旂俗 旂誤		
一〇	旅	旅本 旅誤		膂
一一	族	族俗 族誤		嗾簇鏃
一三	旒	旒誤		
一四	旗	旗俗		
一一	既	既俗	諸〻皀ニ从フモノ即チ見ヨ	廐慨漑概
五	旦	且シヤ別		但坦袒靼
六	旨	旨俗 旨誤		指脂詣嘗稽
八	昂	昂俗		
八	昇		諸〻升ニ从フモノ升チ見ヨ	

八	明	朙古 明別		萌盟
八	昏	昬古	諸〻氏ニ从フモノ氏ヲ見ヨ	婚
八	昜	昜俗 易誤 昜(ヤウ)別		剔場惕踼賜鶍
八	昔	㫺本 昔誤		借惜措腊醋錯藉籍
九	春	萅本 萶同		惷椿蠢
九	映	暎同		
九	昵	暱同		
九	是	昰俗		匙堤寔提隄醍題
一〇	時	旹古		
一〇	晉	𣈆本 晋俗 晉誤		搢
一一	晝	昼俗		

日

一二	晩	晉古 晚本		
一二	普	暜本 普俗		譜
一二	晳 セキ シロシ	晢本		
一五	暫	蹔俗		
一五	暴	㬥本 暴誤		
一六	暸	瞭別	暸ハ明瞭ノ瞭諸ミ寮ニ从フ モノ僚ヲ見ヨ	
一六	曆	暦俗 歷別		
二〇	曦	曦俗	曦ノ旁ハ義兮ノ省ニ从フ	犧
六	曳	曵俗		洩絏
七	更	㪅本		便梗硬綆鯁
九	曷	曷俗		偈喝揭渇歇遏葛竭謁藹靄

月

畫數	字	異體	説明	關係字
一〇	書	書通　昏俗		
一一	曹	曺俗		漕槽遭糟
一二	曾	曽　曽俗		僧増層憎贈
一二	最	最通　冣俗	最ハ元ト曰ニ从フノデナイ月ニ从フノデアル	撮蕞
一三	會	會　會　会俗		獪檜膾繪
六	有	有通	有ハ又月ニ从フ	
八	服	服誤	服ハ元ト舟扁ニ从フ	箙
一〇	朕	朕俗		
一一	望	朢本	望ハ元ト月臣壬ニ从フノデアル月滿チテ日ト相望ミ以テ君ニ朝スルノデアル	
一二	朞	期別又通		
一二	朝	晁古　翰本		

木

五	本		本 夲別	
六	朽		杇誤	
七	束		束別	勅刺速疎竦嗽漱
七	杆		桿俗	
七	杉		樧本 杦俗 檻別又通	
七	村		邨本	
八	杯		桮本 盃俗	
八	枉	ワウ マグ	抂別（ミタル）	
八	松		枀同 枩俗 柗誤	菘鬆
八	析	セキ ワカツ	折（セツ） 柝別（タク）	晰蜥
八	枕		杌俗 梡誤	忱沈耽鴆

八	枚	牧(ボク)別		
一〇	柿	柹 柿俗		
九	染	柒誤		
九	某	某俗	某ハ甘木ニ从フ	媒煤謀
九	柏	栢俗		
一〇	桑	𣜌古 桒 桒俗		
一〇	栴(セン)	栴俗		
一一	梁	梁俗 樑別		粱
一一	梅	楳古 梅誤		
一一	條	條同 條通 条略		篠
一一	梨	棃本		

一二	棄		弃古 棄俗	棄ハ𠫓廿木ニ从フ	
一二	棋		棊本 碁俗		
一二	棗		棗誤		
一二	棘		棘誤		
一二	棲		栖同		
一三	楠		枏本		
一三	極			諸〻亟ニ从フモノ亟ヲ見ヨ	
一三	楚		椘俗		礎
一四	榮		荣 栄俗		勞瑩犖熒螢營鶯
一四	構	カマフ	搆別	諸〻冓ニ从フモノ講ヲ見ヨ	
一四	槍	ヤリ	鎗別		

一五	樂	楽俗 樂 樂誤		藥鑠
一五	樓		諸ゝ婁ニ从フモノ數ヲ見ヨ	
一五	樣	樣俗 㨾別	樣ハ元ト橡實デアルガ又樣ニ通ジ義「方」「式」トナル	
一六	樵	樵俗		
一六	樹	尌古 樹俗		廚蹰
一六	橐タク	櫜カウ別		
一六	橋	橋俗		譑鷮
一七	檐	簷俗	諸ゝ詹ニ从フモノ擔ヲ見ヨ	
一七	檢	撿レン別又通	諸ゝ僉ニ从フモノ儉ヲ見ヨ	
二一	欄	欄誤		闌
二一	櫻	櫻俗 櫻誤		嬰嚶瓔纓

部	畫數	字	音訓	異體	備考	關係字
欠	二一	權		權 権俗		勸灌歡觀
	六	次		次俗	次ハ二欠ニ从フ	咨姿恣茨諮資餈
	八	欣		忻 訢同		
	一〇	欸	アイ フナウタ	欵クワン別		
	一二	款		欵古 歀本 款 欵俗		
	一四	歉	ケン アキタラズ	慊別又通	諸〻兼ニ从フモノ兼ヲ見ヨ	
	一四	歎		嘆通 歎誤		漢艱難
	一五	歐	ハク	毆ウツ 敺カル別	諸〻區ニ从フモノ區ヲ見ヨ	
	二三	歡		懽同 驩別又通	諸〻雚ニ从フモノ雚ヲ見ヨ	
止	五	正		正 㱏俗		征政歪鉦整
	六	此		此 此俗		些柴疵眥呰紫訾嘴髭

部首	畫數	字	異體	備考	參照
歹	七	步	歨同 〓 歩俗		渉陟頻瀕
	八	武	〓本 〓誤		
	一三	歲	歳俗 〓 〓誤	歲ハ元ト步戌ノ會意	
	一四	歷	歴 〓俗		攊靂
	一八	歸	〓古 〓 帰 皈俗		
	六	死	〓本 〓同 〓誤	死ハ人ノ離レル所デアル歹人ニ从フ	葬斃
	八	歿	歾本 殁俗		
	一二	殖	植別	殖ハ殖民ノ殖植ハ植物ノ植諸〻直ニ从フモノ直ヲ見ヨ	
	二一	殲	殱俗		籖纖讖
殳	九	段	〓俗 〓 〓誤 叚(カ)別		鍛
	一一	殺	〓俗		刹弒

部首	畫數	正字	俗字・誤字等	備考	關係字
	十二	殼	殼俗		瀫臀
	十三	殿	殿俗		
	十三	毀	毀 毀俗		
母	五	母	毋(ブ) 毌(クワン)別		
	七	每	毎俗 毐誤		侮悔海晦梅誨
	八	毒	毒誤	毒ハ母ニ从フノデナイ	瑇
比	四	比	比俗	諸〻比ニ从フモノ皆同ジイ	
毛	一一	毬	毬同		
	一一	毫	毫別		
	一六	氈	氊俗	諸〻亶ニ从フモノ壇ヲ見ヨ	
氏	四	氏	氏俗 氐誤		祇紙

气　水

五	民	民俗　民誤	泯眠
一〇	氣	⿹气火古　気俗	愾餼
五	氷	冰本	
五	永	永俗	泳詠
五	氾（ハン）	汎同　氾別	
六	汙	汚本　汗（カン）別	
七	決	⿰氵叏本　决　叏俗	抉
七	沈・	沉誤	諸〻冘ニ枕フモノ枕ヲ見ヨ
七	沒	沒俗	
七	沙	砂俗	砂ハ元ト沙ノ俗字デアルガ今ハ殆ド別字トナツテ居ル
七	沛（ハイ）	沛俗	肺芾

七	汽		滊別	汽車汽船ノ汽ハ汽ヲ用フル	踏
八	沓		沓俗 沓誤		
八	治	ヂ	乿古 冶ヤ 次ジ別		
八	況		况俗		
八	法		灋 㳒古		
八	沿		沿俗 㳂誤		
九	洒	シャ ソソグ	灑別又通		
九	派		泒別又俗		脈
九	洩		洩俗	諸〻曳ニ从フモノ曳ヲ見ヨ	
一〇	泰		桊 泰誤		
一〇	涓		涓俗		捐絹

一〇	流		流本　流俗	流ノ旁ハ元ト「𠫓川」ニ从フ𠫓ハ三畫デアル	疏
一〇	淘		淘俗　陶別	淘ハ淘汰ノ淘	
一〇	涅	ネツ　クロ	湼俗		
一一	淫		滛誤		婬
一一	深			諸〻罙ニ从フモノ探ヲ見ヨ	
一一	添		沗同　添誤	添ノ旁ノ上ハ天	
一一	涼		凉俗		
一一	淺		淺　浅俗		棧殘盞箋賤踐錢餞濺
一二	湯			湯○氏ニシテ昜水ノ號ヲ用ヒテ居ルモノガアルガ湯ハ昜水ニ从フノデナイ揚ヲ見ヨ	
一二	淵		𣶒古　渊俗		
一二	減		减俗		

画数	正字	異体	関連
一二	港	渰 港誤	
一二	渺	渺誤	
一三	滅	滅俗	
一三	滔	滔俗 淊誤	稻 蹈
一三	溟	溟俗 溟誤	瞑
一三	準	準 准俗	
一三	溫	温俗	媼 慍 氳 蘊
一四	滿	滿 满俗 满 滿誤	
一四	漏	漏誤	
一四	漆	桼同 漆誤	
一四	漱	嗽別	

畫數	字	讀	異體	備考	熟字
一四	漢		漢俗		歎艱難
一五	潔		潔俗		
一五	潛		潜俗 濳サン別		
一五	潟	セキ カタ	潟 潟俗 瀉シャ別		
一五	澄		瀓本		
一六	澤		澤誤	諸〻睪ニ从フモノ擇ヲ見ヨ	
一六	澣		浣同		
一七	澀		澁俗		
一七	濕		溼本 湿俗		
一七	濱		濱 濵 浜俗		

火

畫數	字	讀	異體	備考	熟字
六	灰		灰俗	灰ハ元ト死火ノ餘デアル火ニ从ヒ又ニ从フノデアル	恢炭

七	災	災 灾古		
八	炎	仌暑		淡啖痰談
九	炮 アプル	砲別		
一一	焉	焉 焉 爲俗 爲誤		
一二	無	无古 無 無俗 旡キ別		憮撫蕪
一二	然	肰本 燃同 然誤	燃ハ元ト然ノ俗字デアルガ今然燒ノトキハ燃ヲ専用スル	
一二	焰	焰俗 燄 焰誤		陷諂閻餡
一三	煙	烟同 煙俗		
一三	煉	煉誤		柬練諫錬闌
一三	熙	熈 熙俗 熙誤		姫頤
一六	燕	燕 燕誤		嚥

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
	一六	燈	灯俗	諸〻燈ニ从フモノ登ヲ見ヨ	
	一七	燭	焗略　烛別又略		獨
	一八	燿	耀俗		
爪	八	爭	[illegible]古　爭　争俗		崢淨箏靜
	九	爰	[illegible]誤	爰ハ元ト爪又于ニ从フ	媛援猨暖
	一二	爲	爲　為俗　为略		僞譌
父	四	父	父誤		斧釜爺
爻	一一	爽	爽俗		
	一四	爾	尒同　爾　尔俗　爾誤		彌邇禰瀰璽
爿	八	牀	牀俗　床別又俗		
	一七	牆	牆本　牆　墻俗		檣

部首	畫數	字	異體	説明	備考
片	四	片	片 誤	諸〻片ニ从フモノ皆同ジイ	
	八	版	板 同	版ト板トハ元ト同ジイガ今出版活版ノトキ版ヲ殆ド專用スル	
	一二	牌		諸〻卑ニ从フモノ卑ヲ見ヨ	碑
	一五	牖 イウ マド	牗 誤	諸〻戸ニ从フモノ戸ヲ見ヨ	
牙	四	牙	㸦 本 / 牙 俗	牙ハ元ト上下互ニ錯ル形ニ象ドル	邪 芽
牛	七	牢	窂 誤		
	八	牧	秋 誤 / 枚 別		
	八	物	扌勿 誤		
	一一	牽	牽 誤		
	一二	犀	犀 俗		
	二〇	犧		諸〻羲ニ从フモノ曦ヲ見ヨ	

犬

画数	字	異体	備考	関連字
五	犯	犯 誤		範
八	狀	状 俗		
八	狗 ⊖	豿 別又俗		
一二	猥		諸々畏ニ从フモノ畏ヲ見ヨ	隈
一二	猫	貓 本		
一二	猪	豬 本		
一二	猴		諸々侯ニ从フモノ侯ヲ見ヨ	
一二	猶	猶 犹 俗		
一三	猿	猨 蝯 本	諸々袁ニ从フモノ園ヲ見ヨ	
一六	獨		諸々蜀ニ从フモノ燭ヲ見ヨ	濁燭躅觸
一七	獲	獲 俗 獲 誤		穫護鑊

玄　玉

畫數	字	異體	備考	關係字
一七	獵	獵俗　猟略		臘蠟鬣
一九	獸	獸俗　獸誤		
二〇	獻	獻　献　獻俗		
五	玄	玄俗	玄ハ康熙字典ニハ康熙帝ノ諱玄曄ヲ避ケテ闕畫シ遂ニ久シク俗字トシテ存シタノデアル	弦眩絃舷衒牽
一〇	玆	兹通　茲別又通		孶滋慈磁
五	玉	王古　玊（キウ）別		
九	珍	珎　珎俗		
一〇	班	斑別		
一二	琢	琢俗		
一三	瑞	瑞俗	瑞ノ旁ハ山ニ从フノデナイ	端
一三	瑙	瑙　瑙俗		惱腦

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
	一四	瑣	瑣 誤		鎖
	一四	瑤	瑤 俗、瑶 俗、瑤 誤		搖遙
	一七	環			寰圜還
	一九	瓊	璚 古		
瓜	五	瓜	瓜 通	瓜ハ元ト象形文字デアル	
瓦	五	瓦	瓦 同	瓦ハ元ト象形文字デアル	
甘	五	甘	甘 古	甘ハ元ト「口一」ニ从フ	
	九	甚	甚 俗	甚ハ「甘匹」ニ从フ	勘堪湛斟碪
生	五	生		生ハ元ト艸木ノ土中ニ生出スルニ象ドル	
	一一	産	産 俗		薩
用	五	用	用 古	用ハ元ト「卜中」ニ从フ「卜中ル」乃チ用フベキデアル	

田

頁	字	異體	關係字
七	町	甼俗 丁別又略	
九	界	畍本 𤰶俗 畁誤	
九	畏	㽓誤	猥隈
一〇〇	留	畱本 畄 畄略	溜榴瘤
一〇〇	畝	畮本 畆俗	
一〇〇	畜	蓄別	
一一一	畢	畢本	蹕
一一一	略	畧俗	
一二二	番	畨俗	審播蕃繙藩
一二二	畫	画古 畵本	劃
一二二	異	異 异俗	

正　疒

一三	當	⿱⺌乚同 當 当俗 當誤		
一五	畿	畿誤 幾別		
一九	疆	壃俗 彊別		僵薑
二三	疊	曡本 疉同		
一二	疏	疎俗		凝擬癡礙
一四	疑	疑俗		
一〇	疾	疾誤	疾ハ矢ニ从フ病ノ流行スルコト速ナルコトノ會意	
一三	痴	癡本		
一三	痹 シビレ	痺別		
一五	瘦		諸〻叟ニ从フモノ叟ヲ見ヨ	
一七	癈	廢別	癈ハ癈疾癈兵ノ癈	

部	画数	字	異体	備考	関連字
	一七	癒	瘉同		
癶	九	癸	癸誤		揆葵
	一二	登	登誤		澄燈橙證鐙
	一二	發	發 発俗 發誤		潑撥廢癈
白	八	的	的本 的俗	諸〻勺ニ从フモノ皆同ジイ	
	一一	皐	皐本		
皮	五	皮	皮俗	諸〻皮ニ从フモノ皆同ジイ	
皿	九	盈	盈俗		
	一〇	益	益俗 益誤	益ハ元ト「水皿」ニ从フ	搤溢隘縊
	一二	盜	盗俗		
	一三	盟	盟古 盟 盟誤		萌

目

一四	盡	盡　尽俗　盡誤		儘燼藎贐
一五	監	監同　監誤		濫擥檻藍艦鑑襤覽鑑
一五	盤	磐別		
八	直	直　直俗	直ハ「十目乚」ニ从フ	値植殖置
九	貞	貞俗		偵禎
九	看	看　看誤	看ハ「手目」ニ从フ手ヲ目ノ上ニ擧ゲルニ象ドル	
九	眉	𥃩本	眉ハ元ト仌及目ニ从フ仌ハ眉ノ形ニ象ドル	
一〇	眞	真俗　眞誤		嗔塡寘愼縝鎭顚
一三	睥（ヘイ ニラム）	睥誤		
一三	督	督　督俗　督誤		
一四	睾（カウ フグリ）	睪（エキ）別		

矛 矢 石

一七	瞀	瞀誤		
二〇	矍スコヤカ	矍 矍誤	矍ハ矍鑠ノ矍	
九	矜	矜誤		
七	矣	矣俗 矣 矣誤	矣ハ元ト矢ニ从ヒ已ノ聲	俟挨埃竢
五	石	石誤	諸〻石ニ从フモノ皆同ジイ	
一〇	砥	砥誤		
一〇	砲	礮 礮本 炮別		
一〇	砧	碪同		
一一	研	研俗		刑形笄
一三	碑		諸〻卑ニ从フモノ卑ヲ見ヨ	
一三	碍	礙本		

示

畫數	字	異體	備考	類字
一五	確	礭 俗		鶴
一五	磊	礧 通		
一七	磨	摩 別	地名播磨ハ磨	
九	祇 キ カミ	祗 シ ツツシム 別		
一〇	祐	佑 同		
一〇	祕	秘 通		
一〇	祟 スヰ タタリ	崇 別	祟ハ「出示」ニ从フ	
一一	祭	祭 祭 誤	祭ハ元ト月又示ニ从フ即チ手ヲ以テ肉ヲ持ツ意	察際擦
一四	禍	禍 同 禍 俗		渦過窩蝸鍋
一四	福	畐 古 福 俗		副逼蝠輻
一八	禮	礼 古 禮 誤	禮ハ豊ニ从フ豊ニ从フノデナイ	

内				
禾				
一二	禽	禽本 离俗		擒 擒 離
七	私	私誤		
八	秉	秉俗	秉ハ元ト「又禾」ニ从フ	
九	秋	龝古 秌本		啾 湫 愁 萩 鍬
一〇	秦	秦俗 桊[illegible]		蓁
一〇	秤	稱同		
一二	稀	稀本 希別又通		
一三	稔 シン ミノル		諸〻念ニ从フモノ念ヲ見ヨ	
一三	稜	稜俗		
一三	稟	禀俗 稟誤		廩
一四	稱	称俗 穪誤		

穴

畫數	字	異體	備考	參照
一五	稷	禝同 稷誤		
一五	穉	稺俗		
一五	穀	穀俗 穀別又俗		
一五	穆	穆俗		
一六	穎	頴俗		
一九	穩	穏俗 穩誤		隱
一九	穫	穫俗 穫誤 獲別	穫ハ收穫ノ穫・獲ハ捕獲ノ獲	
七	究	究誤 宄 窮別		
八	空		諸〻工ニ从フモノ工ヲ見ヨ	倥控腔
一五	窮	竆本 究別		
一六	窻	囪本 窻 窓 牕俗		

部	畫數	字	異體	備考	
立	一六	窶	窶同	諸々婁ニ从フモノ數ヲ見ヨ	
立	一六	窺	窺俗	諸々規ニ从フモノ規ヲ見ヨ	
立	一八	竄	竄俗 竄誤		
立	一八	竈	竈本 竃俗		
立	二三	竊	竊 竊 窃俗		
立	五	立	大本 亣俗	立ハ一ノ上ニ立ツ大ニ从フ大ハ人一ハ地デアル	
立	一一	章	章俗		嶂障彰樟璋
立	一一	竢		諸々矣ニ从フモノ矣ヲ見ヨ	
立	一三	竪	豎本	竪横ノトキハ竪ノミヲ專用スル	
竹	二〇	競	競 竸俗 兢別		
竹	一〇	笑	笑 咲俗	「花咲ク」ノトキハ殆ド咲ヲ專用スル	

一一	第		苐 才俗	
一二	等		䓁 才俗	
一二	筋		筯チヨ別	
一二	節		节俗	
一二	筑		筑本 筑俗	築
一二	答		畣古	
一二	策		筞俗 䇿誤	刺 朿 棘
一三	筵	ムシロ	莚ハビコル別	
一四	箇		個 笸俗	涸 錮
一四	算		筭同 算 笇俗	
一四	箘		箘誤 菌別	

一四	箝	篏俗	
一四	管クワン クダ	菅カン別	
一四	劄	紮 剳俗	
一四	箋	牋通	諸ゝ戔ニ从フモノ淺ヲ見ヨ
一四	箒シウ	菷 帚同	
一五	箆	篦同	
一五	範	笵又通 範誤	
一五	篇	編別	篇ハ名詞編ハ動詞、諸ゝ戸ニ从フモノ戸ヲ見ヨ
一六	篝	篝同 煹通	諸ゝ冓ニ从フモノ講ヲ見ヨ
一六	篡ウバウ	纂アツム別	
一六	篤	[illegible]俗	

米

畫	正字	異體	備考
一七	篠	筱 同	
一八	箪	簞（テン） 別	簞ハ簞笥ノ簞
一八	簡	柬 古	
一八	簪	簮 俗	
一九	簫	簘 俗	
一九	簿	簿 俗　簿 誤	
一九	簾	簾 俗	諸々廉ニ从フモノ廉ヲ見ヨ
二〇	籍	籍 俗　藉 別	
二一	籐	藤 別	
二三	籤	籖 俗	殲纎讖
六	米	米 俗	諸々米ニ从フモノ皆同ジイ八十八歳ヲ米壽ト云フハ少シ誤ル

糸

一二	粧		妝（ジョ）別		
一二	粤			諸ゝ冂ニ从フモノ奥ヲ見ヨ 丂ニ从フモノ朽ヲ見ヨ	
一三	粱		梁同　粱俗		
一三	粲	ワラフ	粲俗　餐別		餐燦
一八	糧		粮俗		
七	系		系俗	諸ゝ系ニ从フモノ皆同ジイ	
七	糺		糾　糺同　紏誤		
一〇	紙		帋俗		
一一	絃		弦別		
一一	累		纍本		螺縲
一二	結		結誤	諸ゝ吉ニ从フモノ吉ヲ見ヨ	

一二	絲	糸略　絲誤	
一二	絳アカシ	絳俗	
一二	經	経　経俗	勁徑莖痙輕
一三	綿	緜同	
一四	綠	緑俗　綠誤　緣エン別	剝碌祿錄
一四	綴	綴俗	畷
一四	網	网同　網俗	
一四	緊	緊誤	堅腎賢
一五	練	練誤	煉鍊
一六	縣	縣縣　県略	懸
一七	總	緫同　總通　総俗	牕悤聰

缶　网

一七	繁	緐本 繫誤		
一八	繩	縄俗		蠅
一九	繡	綉別又俗	諸〻肅ニ从フモノ肅ヲ見ヨ	
一九	繫	繋		
一九	繼		諸〻𢇍ニ从フモノ斷ヲ見ヨ	
二一	纏	纒俗 纏誤		
二三	纔	纔 纔俗		讒
六	缶	缶俗	諸〻缶ニ从フモノ皆同ジイ	
一〇	缺 カク	鈌本 缼別 欠別又略		
八	罔	网本		惘網魍
一三	罫	罫俗		

羊

画数	字	異体	備考	関連字
一四	罰	罰本 罸誤	罰ハ元ト刀ヲ執ツテ詈ルノデアル	
一六	羅	罹俗 羅別		
二二	羇	覉本		
二四	羈	覊本		
六	羊	𦍌本 𦍋俗	羊ハ「ハ」ニ从フノデナイ「ソ」ニ从フノデアル「ソ」ヲ羊頭トイフ	
八	羌	羗俗		
九	美	羙本 美誤		
一三	羣	群俗		
一三	羨	羡別又俗		
一三	義	義俗 義誤 義別		儀 礒 艤 蟻
一四	羹	羹本 羮同		

部	畫數	字	異體	註	類字
羽	一九	羸 ルヰ ツカル	羸俗 羸誤 羸別 エイ		羸
	六	羽	羽俗	諸〻羽ニ从フモノ皆同ジイ	
	一一	翌	翼別		
	一六	翰	翰俗		
	一八	翻	飜同		
老	六	老	老俗 老誤		
	六	考	攷古 考俗	考ハ老丂ノ省體會意	
	九	者	者俗		堵者猪居都煮著楮暑署睹緒箸諸賭
而	九	耐	耏同		
耒	六	耒	耒俗		
	一〇	耕	畊古 耕俗		耕耜藉籍

耳

畫	字	異體	備考	
一一	耜	耜俗		
六	耳	耳同	耳ハ元ト象形文字デアル	
九	耶	邪本	今ハ別字ノ如クナツテ居ル	
一一	聊	聊本 聊誤		
一三	聖	聖俗		
一三	聘	聘 聘誤		騁
一四	聚	聚俗	諸ゝ取ニ从フモノ取テ見ヨ	
一四	聞	𦖞古 閺俗		
一七	聯	聨俗		關
一七	聲	殸古 声略		
一八	職	軄俗 職誤		

部首	畫數	字	異體	備考	關係字
	二二	聽	聽 聽 聽俗 聽誤		廳
聿	一三	肄イ	肆シ別		
	一三	肅	肅本 粛俗		嘯蕭簫繡鏽
	一四	肇	肈誤		
肉	六	肉	宍古		
	六	肋ロク	助ジヨ別		筋
	七	肓クヮウ ムナサキ	盲マウ別	肓ハ病膏肓ニ入ルノ肓	
	八	肺	肺俗	肺ノ旁ハ四畫デアル	沛芾
	八	肩	肩本		
	八	育	育本 毓同		
	九	背	背俗		

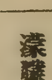
九	胄	冑 胃別 井	胄ハ胄裔ノ胄デアル甲冑ノ冑トハ別デアル	
九	胤	𦙍古 胤 胤誤		
一〇	胯	胯俗 胯誤		刳袴跨誇
一〇	胸	胷同	諸〻匈ニ从フモノ匈ナ見ヨ	
一〇	能	能俗		態熊罷羆
一〇	脅	脇俗 脅 脇誤	脅ハ腋下ト脅迫トノ二義アリ併シ今ハ殆ド脇ト別用スル	協
一〇	脆	脃本		
一一	脈	脈通 脈 脉俗		
一一	豚 トン ブタ	豚俗 豚別		
一一	脩	修別	脩ハ脩脯トテ干魚ノコトデアル束脩ハ元ト是デアル	
一三	腮	顋本		

部首	畫數	字	異體	備考	
	一三	腴	腴俗	腴ノ旁ハ臼ニシテ臼デハナイ	
	一三	腦		諸〻囟ニ从フモノ惱ヲ見ヨ	
	一三	腸	腸俗		
	一七	膽		諸〻詹ニ从フモノ擔ヲ見ヨ	
臣	六	臣	臣俗		
	一四	臧	臧古 臧俗 藏別		藏
	一七	臨	臨誤	諸〻品ニ从フモノ品ヲ見ヨ	
自	一〇	臭	臭誤	臭ハ元ト鼻犬ノ省體會意	
至	九	致	致俗 致誤	夂ヲ旁トスルモノハ唯致ニ限ルガ故ニ多ク攴デアルベキ攵ニ誤ル	
	一四	臺	臺古 臺俗 台別又俗		擡 臺
臼	六	臼	臼誤		

部	畫數	字	字體	備考	从フ字
	九	臾	臾 臾俗 臾誤		腴萸
	一〇	舁（ヨ・カク）	舁本 舁俗		
	一一	叟	叟 叜俗		搜瘦艘
	一三	與	与同 與誤		譽歟礜
	一六	興	興 興俗 㒷略		
	一八	舊	舊 舊俗 旧略 舊誤		
舌	六	舌	舌 舌本	舌ハ元ト「干口」ニ从フノデアル	刮恬括活筈話闊
	八	舍	舍本 舍俗		捨舒
	一〇	舐（シ・ネブル）	舓本 舐誤		
	一三	舖	舖本		
舛	六	舛（セン・ソムク）	舛誤 升（ショウ）別	諸ゝ舛ニ从フモノ皆同ジイ	

舟	六	舟	舟俗	舟ハ元ト象形文字	
艮	七	艮	良俗	艮ハ元ト「畐亾」ノ省體會意	
色	六	色	色同	色ハ元ト「人㔾」ニ从フ	
	二四	艷	豔本 艶俗		
艸	八	花	花 花 苍俗	諸〻廾ニ从フモノ皆同ジイ	
	九	苑	苑 苑誤 菀別		
	九	若	若俗	諸〻右ニ从フモノ右ヲ見ヨ	匿惹慝諾
	九	茂	茂誤		
	一〇	芻	芻 蒭俗		皺趨雛
	一〇	草	艸本 草誤		
	一〇	荒	巟本 荒誤		慌

一一	莊		荘俗 庄別又俗		
一一	莽		莾本 莽誤		
一二	菅	カン スゲ	管クワン別		
一二	堇		菫本 蓳別	（僅勤謹等ハ堇ニ从フノデアル堇ハ元ト「革土」ノ會意、之カ艸ニ从フタメニ上ニ省クノデアル）	
一二	華		蕐本 華俗 崋別	山冠ノモノハ山名デアル又華山トモナス	樺嘩譁
一二	菴		葊古 庵 蓭同		
一二	萄			諸〻缶ニ从フモノ缶ヲ見ヨ	
一二	菌		菌誤		
一二	萌		萠誤		
一三	萬		万同		
一三	萼		蕚同		

画数	字	異体	備考
一三	著	着俗	著ハ音チヨ義「アラハル」音チヤク義「ツク」デアル併シ着ノ俗字ハ著明、著述ノトキニ用ヒヌ
一三	葬	塟本 塟同	
一四	蒙	蒙 𫎇俗	
一四	蒸		諸〻丞ニ从フモノ丞ヲ見ヨ
一四	蓋	葢本 盖俗	
一四	蓑	簑俗	
一五	蓰シ	蓰〻別	蓰ハ倍蓰ノ蓰
一五	蔑	蔑誤	
一五	蔥	葱通	
一六	蕊	蘂同 蕋俗	
一六	蕩	盪別	

虍

畫數	字	異體	備考	參照
一七	薄		諸ゝ尃ニ从フモノ傅ヲ見ヨ	
一八	藏	藏　蔵俗		
一九	藝	秇古　埶本		
一九	藤	藤俗　藤誤		
二〇	蘆	蘆　芦俗		爐艫轤
二〇	蘇	蘓　甦俗		
二〇	蘊	薀別	蘊ハ蘊奥ノ蘊、諸ゝ𥁕ニ从フモノ溫ヲ見ヨ	
二一	蘭	蘭誤　藺(リン)別		
八	虎	虎　乕俗		彪號遞褫
一〇	虐	虐俗		瘧
一〇	虔	虔俗		

虫

一一	處	処古 處俗		
一一	虛	虚本 虚俗		
一三	虜	虜俗	虜ハ元ト虍ト毋力トニ从フ男ニ从フノデナイ	
一三	號	号同		
一七	虧	虧俗		
八	蚪	蚪誤		
八	虱	蝨本		
一〇	蚤	蚤俗 蚤誤		搔騷
一二	蛙	鼃別		
一三	蜀	蜀俗		獨燭
一四	蜜	蜜同 宻別		

部	畫數	字	訓	異體	備考
	一五	蝦		⿱叚虫 同	
	一八	蟲		⿱虫乂 俗　虫 別又俗	
	一八	蠅		蝿 俗	
	二一	蠟		蠟　⿰虫葛 俗	諸〻巤ニ从フモノ獵ヲ見ヨ
	二三	蠹	ト	蠧 同	
	二四	蠶		蠺 俗　蚕 別又俗	
血	一〇	衄	ハナヂ	衄 俗　衂 誤	
	一二	衆		从 古　眾 同　衆 誤	衆ハ元ト三人ニ从ヒ次ニ目ト三人トニ从ヒ今ハ血ト三人トニ从フ
行	一一	術		術 俗　術 誤	述
	一一	衒	テラフ	衘 別	
	一六	衞		衞　衛 俗	

衣

一六	衡	衡俗 衡誤	衡ハ「行角大」ニ从フ魚ニ从フノデナイ	
二四	衢	衢俗 衢誤		
六	衣	亣本 衣 衣誤	衣ハ元ト二人ヲ覆フノ形ニ象ドル衣ノ上ハ二デハナイ	依 裔
一〇	衷	衷俗 衷誤 哀(アイ)別		
一〇	衽	袵俗		
一一	衰	衰俗		
一一	衮	袞誤		
一二	袴	絝同 袴俗 袴誤		
一三	裏	裡 裏俗 裏誤		
一三	裔	裔誤		
一三	補	補誤		

西									見	
一四	一五	一六	一七	一七	二五	六	九	一二	一九	七
裨	複	褫	襄	褻	襻	西	要	覃	覇	見
裨誤	複誤 復別	褫誤	襄 襄俗	褻俗 褻誤	襻和字同義	覀本 卥古 覀俗 襾アー別	要俗 要誤	覃誤	霸本	見俗 見誤
諸〻卑ニ从フモノ卑ヲ見ヨ					諸〻攀ニ从フモノ攀ヲ見ヨ		要ノ頭ハ「一冂日」ニ从フ諸〻覀ニ从フモノ皆同ジイ			見ハ「目儿」ニ从フ
			壤孃攘躟讓釀			晒洒栖茜迺		潭蕈譚鐔		

部	畫	字	異體	備考	參照
角	一一	規	規本		槻窺
	一一	覓	覔誤		
	一六	親	親 親本		
	一〇	覺	𧢲古 覚 斍俗 覺誤		學嚳
	二一	覽	覽 覧 覽俗 覽誤		
	二五	觀	覌略	諸〻雚ニ从フモノ權ヲ見ヨ	
	七	角	甪古 角俗	角ハ元ト「刀肉」ニ从フ諸〻角ニ从フモノ皆同ジイ	
	二三	解	觧俗 觧誤	解ハ「刀牛角」ニ从フ	廨懈蟹邂
	一八	觴		諸〻𥏫ニ从フモノ傷ヲ見ヨ	傷
言	七	言	言俗	諸〻言ニ从フモノ皆同ジイ	
	一〇	託 タク マカス	托別 ヒク		

一二	訴		訢(キン) 詐(サ)別		
一三	誄		誄俗 誺誤		
一三	詰	ツム	誥(カウ)別		
一三	誇			諸〻夸ニ从フモノ胯ヲ見ヨ	
一四	誤		悞同	諸〻吳ニ从フモノ吳ヲ見ヨ	
一四	誡		戒別又同		
一五	諂		諂俗 謟誤		
一六	謚		謚別		
一七	謄		謄本 騰別		
一七	講		講俗 譁誤		溝購
一八	證		証別又俗		

谷

一九 譌クワ	訛別 僞ギ別		
一九 譚	談別		
二〇 譽	誉俗	諸々與ニ从フモノ與ヲ見ヨ	
二一 護	護俗 護誤		獲穫
二二 讀	讀本 読 讀俗		瀆牘犢續
二三 變	變俗 変略		巒彎戀蠻
二三 讎	讐同		
二四 讒		諸々毚ニ从フモノ纔ヲ見ヨ	
二六 讃	讚俗		攢纘
七 谷	谷 㕣誤		俗卻浴欲裕綌
一七 谿	溪俗		

部	畫數	正字	異體	備考	關係字
豆	一〇	豈	豈俗		凱愷剴
	一五	豎	豎俗		
	一八	豐	豐俗 豊俗又別		
豕	一二	象	象俗 象誤		像
	一六	豫	豫誤 預別又通		
豸	一〇	豺	犲俗		
	一四	貌	皃古 貇俗 貎別		邈
貝	七	貝	貝俗 貝誤		
	九	貞	貞俗		
	九	負	負俗 屓(キ)別	負ハ「人貝」ニ从フ即チ人貝ヲ守ルニ象ドル人ノ篆ハ刀ト似ル	
	一一	貪	貪俗 貪誤		

一一	貫	貫誤		慣實
一二	貳	貮俗 貳誤		膩
一二	貴	貴本 貴誤		匱潰櫃簣饋
一四	賓	賓 賔俗		濱擯殯臏鬢
一五	賣	賣誤		
一五	賜		諸〻易ニ从フモノ易ヲ見ヨ	
一五	賢	臤 賢古 賢俗 賢誤		堅腎竪
一五	質	質俗 質誤		
一六	賴	賴 頼俗		瀨獺癩籟
一九	贈	贈 贈俗		增層
一九	贊	賛俗		攢讚鑽

部	畫	字	異體	備考	
	一九	贋	贗本		
	二〇	贏	贏誤		贏
赤	七	赤	烾古		
	一二	赧	赧誤		
走	七	走	𧺆本 赱俗	諸〻走ニ从フモノ皆同ジイ	
	九	赴	赴俗		
	一二	超	超俗		
	一二	越	越俗 越誤		
	一五	趣	赴別	諸〻取ニ从フモノ取ヲ見ヨ	
足	一一	趾	址別		
	一三	跡	蹟古 迹本		

身　車

畫數	字	異體	備考	關聯字
一五	踏	踏俗　踏誤		
二三	躪	躪別	躪ハ蹂躪ノ躪	
七	身	身俗		
一〇	躬	躬古		窮
九	軌	軌俗　軋(アツ)・軏(ゲキ)別		
九	軍	軍本　軍誤	軍ハ包車ノ省體會意	揮渾暉暈運葷褌
一一	軟	輭本		
一四	輒	輙俗		
一五	輜	輜俗		緇
一五	輩	輩俗		
一七	轂	轂俗		

部	畫數	字	訓	異體	備考	關係字
辛	七	辛		辛俗	諸々辛ニ从フモノ皆同ジイ	
	一二	辜		辜俗		
	一四	辣	ラツ	辣誤		
	一六	辦		弁別又俗 辯 辮別		
	一九	辭		辤通 辝 辞俗		
辰	七	辰		辰 㫳俗	諸々辰ニ从フモノ辰ヲ見ヨ	唇振宸脣蜃賑震
	一〇	辱				溽耨縟褥
	一三	農		農古		儂濃膿
辵	七	迂		迂本 迁カン別		汙盂
	八	迎		迎俗 迎誤		仰
	九	迴	ハルカ	迴誤		

九	迪	廸誤		
九	述	述俗　逑キウ別		術
一〇	逃	迯俗	諸ミ兆ニ从フモノ兆ヲ見ヨ	
一一	逢	逢俗	諸ミ丰ニ从フモノ皆同ジイ丰ハ音「ホウ」デアル	峯烽縫蓬鋒
一一	逝	逝誤		
一一	造	造俗	諸ミ告ニ从フモノ告ヲ見ヨ	
一二	逮	逯古　迨通　逮誤		
一二	逸	逸俗	逸ハ兎ニ从フノデアル兔ニ从フノデナイ	
一三	過	過　過俗		堝渦窩禍蝸鍋
一三	達	達同　達俗	達ハ幸ニ从フノデナイ音ハ之ニ本ヅク	
一三	遊	遊俗　游別又通		

一三	遂	遂俗		隊隧燧邃
一三	違	違　違俗　違誤		偉圍葦緯諱
一四	遙	遙　遥俗　遙誤　遥(イン)別		搖瑤謠
一四	遞	遞　遞俗　遞誤		
一四	遡	溯同		
一五	遲	遟古　遲同		
一六	遷	遷　迁俗		僊躚
一六	選	選通　撰(サン)別又通	選ハ元ト巽ニ从フ筈デアル今康熙字典ニ從ツタノデアル	撰
一七	遽	遽俗　遽誤		劇據醵
一九	邊	邊　邊　邉　邊俗　辺略		
邑				
七	邦	邦俗		

酉

七	那	那俗		娜
一一	部	卩略		
一一	郵		諸々垂ニ从フモノ垂チ見ヨ	
一三	鄉	鄉通 鄕俗 卿別		嚮饗響
一四	鄙	鄙 鄙俗		
一五	鄰	隣俗		
七	酉	酉俗 酉誤	諸々酉ニ从フモノ皆同ジイ	
九	酋	酋俗		奠猶猷楢鰌
一〇	酒	酒俗		
一三	酬	酧俗		
一八	醫	毉俗 医別又略		

部首	畫數	字	異體	備考	參照
釆	八	釆	采 別		採彩菜
	二〇	釋	釈 俗	諸ゝ睪ニ从フモノ澤ヲ見ヨ	
里	九	重	𡔈 本 重 俗		董衝
	一一	野	埜 古 壄 俗		
	一八	釐	𨤲 俗		
金	八	金	金 本 金 誤	諸ゝ金ニ从フモノ皆同ジイ	
	一〇	針	鍼 本		
	一〇	釜	鬴 本 釡 俗		
	一三	鉤	鈎 俗 勾 略		
	一四	銜	衘 啣 俗		
	一四	銓	詮 別	諸ゝ全ニ从フモノ全ヲ見ヨ	

一五	鋪		舖俗	鋪ハ賈肆デアル	
一六	錢		戋略	諸〻戔ニ从フモノ淺ヲ見ヨ	
一六	錄			諸〻彔ニ从フモノ綠ヲ見ヨ	
一七	鍾	サカヅキ	鐘別		
一七	鍊		錬(トウ) 煉別		
一八	鎖		鎻誤		瑣
一九	鏃		礶又通	諸〻族ニ从フモノ族ヲ見ヨ	
二一	鐵		銕 鐡古 鐡 鐡俗 鉄別又俗		
二三	鑛		礦又通		
二三	鑢	ヤスリ	鑪別		
二五	鑰		鑰 鑰俗		龢

長 門

二五	鑿	鑿本 鑿俗		
二六	鑵	鑵同	諸ゝ雚ニ从フモノ權ヲ見ヨ	
八	長	镸古 長誤	諸ゝ長ニ从フモノ皆同ジイ	
一〇	閃	閃誤		
一二	開	開本 開俗 開誤		
一二	閏	閏誤	閏ハ「門王」ニ从フ閏ニハ王門内ニ在ツテ出デヌ	潤
一二	閑	閑俗		
一二	閒	間俗		澗燗癇簡
一七	闃ゲキ	闃誤		
一七	闊	濶俗 濶誤		
一七	闌	闌誤		欄蘭

阜

一八 闕	闕誤 欠略		
一九 關	闗 関俗		
七 阨	阸誤		
七 防	妨別		
九 降	降俗		絳
一一 陳	陳誤		
一一 陰	侌古 阴同 隂俗		
一一 陵	陵俗 凌別又俗		
一一 陷	陥俗 陷 陷誤		焰諂閻餡
一二 隆	隆俗		
一二 隈		諸々畏ニ从フモノ畏ヲ見ヨ	猥

隶　隹

畫數	字	異體	注
一二	階	楷別	階ハ階梯ノ階、諸〻皆ニ从フモノ皆ヲ見ヨ
一二	陽	昜 昜古 阳同 陽誤	
一三	隙	隟誤	
一六	隧	墜別	隧ハ隧道ノ隧、諸〻遂ニ从フモノ遂ヲ見ヨ
一六	隨	随俗	
一七	隱	隠俗	
一七	隸	隷俗	
一〇	隻	隻誤	諸〻隻ニ从フモノ皆同ジイ
一一	雀	雀俗 雀誤	雀ハ「小隹」ニ从フ「少」ニ从フノデナイ
一二	雁	鴈同 厂略	
一二	雄	雄誤	

穩讔

雨

畫	字	異體	備考	
一三	雍	廱誤		
一六	雕	彫同		
一七	雖	錐俗 虽略		
一八	雙	双俗 雙誤 隻(セキ)別		
一八	雜	襍本 雑俗 雜誤		
一八	雞	鷄古		
一八	離	離俗 离略		籬
一九	難		諸ニ漢ニ从フモノ漢ヲ見ヨ	歎漢艱
一一	雪	雪俗		
一五	霄	宵別		
二一	霽	霽誤	諸ミ齊ニ从フモノ齊ヲ見ヨ	

青	二四	靈	靈 霊 灵俗		
	八	靑	青俗	諸ゝ靑ニ从フモノ皆同ジイ	倩凊情淸猜晴菁靖精蜻請錆靜鯖
	一六	靜	静俗		
非	一八	靡	靡俗		
面	九	面	囬古 靣俗	諸ゝ面ニ从フモノ皆同ジイ	
革	九	革	革誤	諸ゝ革ニ从フモノ皆同ジイ	
	一三	靴	鞾同		
	一六	鞌	鞍通		
韋	九	韋	韋俗 韋誤		偉圍違葦緯諱
韭	一三	韮	韭同		
音	九	音	音俗		暗諳闇黯

頁

一九	韻	韵俗		
一九	頁	頁俗 負別		
一一	頃	頃誤		
一二	須	湏別又俗		
一三	預	預誤		
一三	頓	頓俗 頓誤		
一五	頤		諸〻𦣝ニ从フモノ姫ヲ見ヨ	
一六	頹	頽誤		
一六	頻	頻俗		瀕賓
一八	題	題同		
一八	顏	顔俗	諸〻彥ニ从フモノ彥ヲ見ヨ	

風					飛	食				
一九	一九	二一	二三	九	一六	九	一二	一三	一三	一四
願	類	顧	顯	風	颶	飛	飧	飭 チョク	飯	飾
願俗	類俗 類 類誤	顧 顧俗	㬎古 顯本 顕俗	凬古 風 凨俗 风略	颶誤	飛俗 蜚又通	飧 飡俗	飭同 飭誤	飰俗	餙誤
諸〻原ニ从フモノ原ヲ見ヨ					諸〻具ニ从フモノ具ヲ見ヨ					
				嵐楓飃		飜				

部首	画数	字	異体	備考
	一五	養	養 羪俗 養誤	
	一六	餐	餐俗 粲別	
	一六	餘	余別又略	
	一七	館	舘俗	
首	九	首	𩠐本	
香	九	香	皀古 杳別	
	一八	馥	馥同	
馬	一四	駄	馱本	
	一七	騁		諸〻甹ニ从フモノ騁ヲ見ヨ
	二一	驅	敺古 駈同	
骨	一〇	骨	骨 骨 骨俗	諸〻骨ニ从フモノ皆同ジイ

部首	畫數	字	異體	備考	從フ字
	二三	體	軆俗　体別又俗		
高	一〇	高	髙俗		塙嵩敲槁犒稿縞藁
髟	一四	髯	髥俗		
	一五	髮		諸〻犮ニ从フモノ抜チ見ヨ	
門	一八	鬩	鬩俗		
	二七	鬭	鬭本　鬪　閗俗		
鬯	一〇	鬯	鬯誤		
	二九	鬱	鬱		
鬲	二二	鬻	鬻		
鬼	一〇	鬼	鬼　鬼俗		塊嵬愧隗魂槐蒐瑰魄醜魏巍
	一四	魂	䰟同		

魚	一一	魚	𩵋古 奐俗
	一七	鮮	鱻古
	二一	鰥	鱞俗 鰥誤
鳥	一一	鳥	鳥誤
	一三	鳧	鳬俗
	一三	鳩	鳩同
	一四	鳳	鳯誤
	二〇	鶩	鶩誤
	二一	鶴	鶴 䳽俗
鹵	一一	鹵	鹵誤
	二〇	鹹	鹹誤

部首	畫數	正字	異體	備考	關聯字
	二四	鹽	塩同 塩俗		
鹿	一一	鹿	庲 鹿俗	諸〻鹿ニ从フモノ皆同ジイ	
	一三	麁	麤本		
	一八	麓	𣘦古		
	一九	麕	麏同		
	一九	麗	丽古 麗俗 麗誤		儷灑
麥	一一	麥	麦俗 麥誤	諸〻麥ニ从フモノ皆同ジイ	
	二〇	麵	麪本 麪誤		
麻	一一	麻	麻俗 广略	諸〻麻ニ从フモノ皆同ジイ	
	一四	麼	麽俗		
黃	一二	黃	黄俗 黄誤	諸〻黃ニ从フモノ皆同ジイ	廣橫擴曠鑛

	二五	釁	釁誤		
黍	一二	黍	黍誤		
	一五	黎	[illegible]本 黧別		
黑	一二	黑	黒俗	諸ゝ黑ニ从フモノ皆同ジイ	
	一六	默	嘿同 黙俗		
	一七	點	點俗 点略		
	二〇	黨	党別又俗		
	二一	黯	黯俗		
黹	一二	黹	黹誤		
黽	一三	黽	黽 黾俗	諸ゝ黽ニ从フモノ皆同ジイ	蠅繩竈
	二四	鼇		諸ゝ敖ニ从フモノ倣テ見ヨ	

	鼎	鼓	鼠	鼻	齊			齒		龍
二五	一三	一三	一三	一四	一四	一七	二一	一五	二〇	一六
鼈	鼎	鼓	鼠	鼻	齊	齋	齎	齒	齡	龍
	鼑俗	皷俗	鼡 鼡俗 [illegible]別	鼻 鼻俗	亝古 斉 齊俗	[illegible]古 斎同 [illegible]俗	賫俗	歯俗	齢俗 令別又略	竜古 龍 龍 龍俗
諸ゝ敝ニ从フモノ弊ヲ見ヨ	諸ゝ片ニ从フモノ爿ニ从フモノ片牀ヲ見ヨ				諸ゝ齊ニ从フモノ皆同ジイ			諸ゝ齒ニ从フモノ皆同ジイ		
		鼕	竄鼬		儕劑濟臍霽					籠

	龜	龠
二二	一六	二二
龕	龜	龢
龕古	龜本 亀 亀俗	龢 龢俗
	鬮	籥 鑰

前表中主要部分に就いては、備考欄に概説して置いた。餘り多數であるから、詳細なることは略することにした。世間にては小野篁（一四六四―一五一〇）の歌字盡と稱するものがある。余も傳寫して居る。大分誤謬もある。併し原本に據れば、無論そんなことはなく、非常に參考となるのであらう。

余は曾て先哲百家の拙稿中、篁を詠じて次の如くした。

書記姓名誰復訛。　魯魚之誤果如何。　毫釐欲辨須吟詠。　字訣編成百韻歌。

第十二編 結論

第一章 國語改良には順序がある

余は漢字の研究に就いて、前篇まで十一篇に渉つて、其結果を編述した。漢字は研究をすればする程、複雜を感じ、困難を覺ゆる。凡そ人事は複雜を感じ、困難を覺ゆるもの程、趣味を増し、又相應に效果を生ずるものではあるが、一先づ此所にて止めることにした。

從來國語改良に關する諸種の意見には、余は多大の趣味を以て傾聽して居るのである。又是等に關しては、自力不相應に、多少の意見を有して居るのである。併し夫等の意見は意見として現今にては、是非或程度までの漢字の知識を有せねばならぬ。其使用にも熟せねばならぬ。是は余の確認する所である。

國語改良詳しく言へば、國字改良、國文改造は、將來如何に解決するにしても、現今の國字國文は、直に廢止する譯には往かぬものであらう。又急劇に變更することは、到底不可能のことであらう。

世間總べての事業には、改良の順序がある。國語改良に於ても、固より其順序があるものである。若し建國草創の際に於て、國語も國文も幼稚であり、不完全であるならば、如何なる方法を採用しても、固より差支はないことであらうが、我國の如く、高度の文明に達し、百般の文物、相應に發達したる國民にして、在來の國語國文を一變することは、實に容易のことではなからう。

若し從來の國字を一變して、新國民には改良せられ改造せられたる國字及國文のみに習熟し、使用せしめることにするときは、我國建國以來三千年間に於ける悉皆の記錄は、全く讀めないことになる。其悉皆のものを讀むことは、專門家の事業に讓ることにしても、其幾部分は之を飜譯せねばならぬではないか。此事業は亦中〻容易のことではないではないか。

第二章　國語は國民思想に影響を及ぼす

凡そ國語は國民思想の根柢に影響を及ぼすことは大なるものである。又常に或國語を使用するときは、知らず識らずの間に於て、其國民的の思想を馴致するもので

ある。

我國に於ても、彼の(荻生徂徠(二三二六―二三八八)は、大學者であつて、學術上の功勞は、決して少いとは言はぬが、彼は常に目を漢文に曝したから、其人物は既に支那化して居つた。總べて支那を中華、中國と稱して、種々の議論をなし、甚しきは、我國を東夷と稱して居つたのである。卽ち徂徠が孔子賛に、東國夷人物茂卿と書いたこともある。余は曾て先哲百家の拙稿中徂徠を詠じて、次の如くした。

辯論卓拔壓㆓群儒㆒。學識深長驚㆓世愚㆒。只恨眼中無㆑有㆑國。自稱㆓夷狄㆒不㆑容㆑誅。

是から見ると、山崎闇齋(二二七八―二三四二)は、國語的の讀書をもなしたから、思想に根柢がある。余は先哲百家の拙稿中、闇齋を詠じて、次の如くした。

孔孟來攻我豈憂。蹶然直欲㆑作㆓俘囚㆒。能明㆓本末㆒破㆓迷夢㆒。千古眞儒無㆓匹儔㆒。

又プロシャの大王フリドリッヒが、佛國のウオーテルを聘して、佛文を自國に流行せしめんとしたとき。ゲーテ、シルレル、フォッス等が、大に奮起して、自國語を以て、大篇雄作の著述をなさなかつたならば、迚もチユートン、ブンド(チユートン民族の同盟)黨の團結は出來なかつたであらう。

又露國が今より二百年前に歐州の中央に廣がつたるポーランドを占領したとき、其國民をして速にポーランド的の思想を除去らうとして行つた政策は、第一に強制的に露語を使用せしめたことである。此點は吾人の參考になすべき價値は、十分にあるものと認めるのである。

閑話休題歐洲に於ける現今の諸文明國は、夫々自國語を以て、日常は勿論學術上に於ける言語も、辨じて居るのであるが、今より二百五十年前までは、學術上に於ては、一切ラテン語でなくてはならなかつたのである。當時若し自國語を以て、學術上の書籍を編述したならば、決して中流以上の人士の相手にはならなかつたのである。恰も我國に於て、德川時代までに於ける學術上の書籍に、漢文を用ひたと同樣であつたのである。當時歐洲人の考にては、自國語即ち言文一致にて、書籍は作れるものであらうか、又言文一致を以て、所謂美文は作れるものであらうかとの疑問は、十分にあつたものである。我國に於ては、最近四十年以來は、最早普通に漢文を顧るものはなくなつたのは、大なる進步にて、固より悅ぶべきことではあるが、現今活きつつある言語を其まま寫出したものは、まだ國文とは認められぬ。公文として受理もせ

られぬことがある又書籍として發行するにも多少遠慮しなくてはならぬ有樣である。何と困つたものではないか。

現今に於ける多數の人の考には、吾人の日常使用する言語は、眞の國語ではないと思つて居るのであらうか。

第三章　外國語の改良

歐洲の諸文明國は、今より二百年前以來、漸次自國語を以て日常の記錄は勿論、學術上の編述をもなして來たので、自然漸次改良發達をなして居るのである。併し惰性の勢力は亦至大なもので、現今に於ても露國及ドイツの鬚文字、龜の甲文字を全く改良することが出來ない。ドイツに於て、曾て改良の議のあつたとき、彼の鐵血宰相と呼ばれたビスマークは絕對的の反對をなした。ドイツの今日あるは、此龜の甲文字のお蔭であるとのことであつたさうである。爲めに其議も一時其まゝに止んだことがあつた。併し又此頃は追〻改良せられ懸つて來た又英語には文字改良の議はないが、其綴方に就いては、從來時々議論に上つたことがある。米國にては、カーネ

ギーが出資して、マッシーが總裁となつて居る簡便綴方調査部といふものが、組織せられて居る。米國大統領ルーズベルトが、明治三十九年八月、印刷局長に訓令して、自今大統領の敎書及大統領官邸より發する文書は、簡便綴方調査部の勸告通に綴るべきことを以てしたために、多少の反對を受けた。英語の本國たる英國は、豫ねて總べて保守主義を以て、有名である國柄であるから、其反對は中ゝ盛であるのである。

今簡便綴方調査部に於て、勸告した綴方改良の數例を示さう。

一、gauge (尺度)ハ gage.
二、headgear (頭飾)ハ hedger.
三、kissed (接吻スル)ハ kist.
四、pedagogue (敎師)ハ pedagog.
五、possessed (所有スル)ハ possesst.
六、throngh (全ク)ハ thro.

是等の類、既に三百餘に達して居るさうである。而も未だ一般には容易に使用せら

れぬさうである。

而も是等の外國語の使用者は、年々增加し、十九世紀の初期と、二十世紀の初期とには、左の相違があるのである、

	十九世紀	二十世紀
英語	二二〇〇、〇〇〇〇、	一、三六〇〇、〇〇〇〇
獨語	三五〇〇、〇〇〇〇、	八二〇〇、〇〇〇〇、
露語	三〇〇〇、〇〇〇〇、	六九〇〇、〇〇〇〇、

而してウォーヅ、ウォーク雜誌に掲げるバビットの統計に依れば、世界の文字を解する人口は四億七千三百萬人であつて各國語の使用百分數は、英語は二十七强獨語は十六强、露語は六であるのである。

第四章　國語改良の順序

國語改良國字改良、寧ろ國文改造は、將來如何なる點に歸著するであらうか。世界に例のない新字の制作は、不得策にして、到底望がない。余の意見では假名も不便利で

ある。多分ローマ字の採用に歸著するであらう。速に其時期に到著して、他の不便利不都合なるものを除去つて仕舞たいものである併し彌〻其時期に到著するにしても、現今の漢字交り文は、全く驅逐し得られるか否かは甚だ疑問である。果して驅逐しても、國運の發展上、別に不都合を感せざれば、至極結構ではあるが、是は到底望がないことゝ。余は確認するのである。

彌〻國語改良に關する余の意見として、目下取るべき順序方法は、次の通であるのである。

第一。言文一致の國文を奬勵して、上下一般に普及せしめること。

第二。國語中の類語を成るだけ用ひずして、所謂標準語を制定使用すること。

第三。假名を純粹の音符文字とすること。

第四。假名文の使用を擴めること。

第五。國文には總べて句讀點を附すること。

第六。國文の横書を使用すること。

第七。ペンの使用を國文に及ぼすこと。

第八。西洋紙の使用を一般に普及せしむること。
第九。漢字の制限法を擴めること。
第十。漢字の字畫を簡單にすること
第十一。漢字の字音を多少改正すること。
第十二。ローマ字の使用を漸次擴めること。

是等の事柄の實行は、決して面倒なるものではない。普通の國語改良論者は、兎角或一つの方法を先決し、直に其事柄をのみ實行しようとして、あせるから、何時も實行せられずして、共倒となつて仕舞つたのである。

右の内余の本論たる「漢字の研究」には直接に關係しないものもあるが、第六乃至第十一は、餘程關係して居るのであるから、以下章を追うて之を述べ、次に他の分をも概說することとしよう。

第五章　國文の横書

漢字を一字づつ吟味して見よ。其横畫は常に筆を左より右に運ぶのである。是は手

腕の運動上、自然の順序である。故に世界各國苟も文字のある以上は、何れの文字も皆同様である。然るに此漢字を連續せしめて綴つた漢文は如何なるはずみに依つてか、上下に連ね、又漸次左方に行を逐つたのであつた。余は此形式を右起縱書と言ふ。元來眼が左右に在つて、近距離に於ける視界は、横に廣いから、顔面を上下に動かして、書寫又は讀書するよりは、左右に動すことは勞少くして、益が多いと言はば、多少滑稽的であるとて、冷評する人があるかも知れぬが、事實は確にさうである。實驗心理學の證明した所である。又執筆は右手を以てするものであるから、左方左方へと行を逐るために、既に書寫したる部分が、常に手の蔭となつて、新しい行の字配をなすに不便である。故に書家などの認めた書幅、又は額面などを見ても、不慣のものの分は、書幅では、二行目と三行目との間、額面にては、二字目と三字目との間の距離は不釣合のものが多いのである。余の曾て知れる某清國人は細楷の書幅、又は額面を認めるに、豫め字配をなし彌ゝ筆を下すに當つては、常に左方より横書にしたことがあつた。是は自然に適つた方法であると思ひ、余も其後實行して居る。又人物の肖像の賛などの場合に、左向になつて居るものの分は、賛詞を左記縱書となすもの

となつて居る是等は其弊は偶然幾分か取除かれて居ることである、

我國文は元と漢文の形式から來たので無意識に同形式を踐んで居るのである。余は二十年前より自己の用ふる手帖等は、全く左記横書にして居る。世間にては、數學書、音樂書等には左記横書を使用して居る。又最も迅速を貴ぶ速記錄の原稿は、是非此左記横書を行はねばならぬのである。又會計に關する諸表簿類は、公私とも之を使用して居ることである。

余は廣く外國語を研究したことはないが、米國聖書會社に於て、編纂したる聖書の二百四十二箇國語及土語の解明を繙いて見たるに、右記縱書は十六種にして、右記横書は十九種、左記横書は實に二百七種である。殊に其右記縱書の十六種は、皆蒙古系統に屬する僅か數箇國の國語及其土語に限つた樣である蒙古系統に屬する數國民は、此右記縱書の國文の形式より受けて居る不便は、幾許であらうか。

故に余は假令國文の他の現狀を維持する期間にても、此左記横書の形式を使用して、其便利だけでも得たいものである若し此形式を改良するにしても、急に一般に强制するには及ばない、唯之を奬勵し、一般の書籍には勿論、公私の日用文にも任意

に使用せしめたいのである。

第六章　ペンの使用及西洋紙の使用

ペンの使用を奬勵することも、國語改良の一要素である。毛筆を以て大きな紙にべたべた書附けるのは不便である。隨つて用紙も澤山要せねばならぬ。將來に保存すべき書類は、現今の半切用紙に認めるのは、檢閱にも保存にも不便である。小學校等に於て、實用上細字の練習を如何に奬勵しても、實際無用のために、多くの勤勞と時間とを消費させて居る。

若しペンの使用を公私の書類に、普く應用するならば、用紙の改良の必要は、無論のことである。自然西洋紙の使用を一般に普及せしめることになるのである。

是まではは公文にインキを使用することを禁ぜられてあつたが、近頃其禁を解かれた。世の一段の進歩であると、余は確認するのである。

第七章　漢字の制限

漢字の制限法は、明治三十三年、文部省より小學校令施行規則中に現れた。是は尋常小學校に於て、敎授する漢字の種類として、約千二百字の漢字表を示されたのである。當時我國民に必要なる「米」「鹽」等の漢字もないとて、非難の聲はないでもなかつたが、是等必要の漢字も、決して敎授すべからずと、限定せられた譯でもなかつたから、大體に於て、適當の措置であると、余は確認したことであつた。併し余の意見にては尚ほ過多であるのである。果然其後に於ける國定敎科用書にては、大に其數を減せられたのである。

併し實際世間の有様にては、學者は勿論、俗人にても、兎角面倒な漢字を使用したがるのである。自分の書いたのは、容易に人に理解せられたならば、自分の知識思想は、淺薄であると、人に認められやうかと恐れるのに相違なからう。諸學校に於ては勿論、通俗に於ても、成るだけ平易な漢字を使用することを社會に對する德義の一種であることを認める傾向を持たせたいものである。

昨年以來尋常小學校に於ける漢字の制限を擴め、國定敎科用書中の漢字の數を增加すべきか否かの議が、諸所にて論せられる様になつた。今年に至つて遂に文部省

より其諮問を發せられた。諸種の新聞雜誌に現れた種々の答案を見るに、固より減少論者もあれば、現狀維持論者もあるが、又增加論者もある。而して是等を總括して見れば、多少增加の方に傾いて居るやうであつた。殊に帝國教育會の漢字制限調査案は、同會內小學教育調査部に於て決定し、更に評議員會に於て可決したのは、左の如くである。

	現在振假名ナキ漢字數	增加スベキ數	計
第一學年	一〇	〇	一〇
第二學年	七三	二〇	九三
第三學年	一六一	四〇	二〇一
第四學年	二五六	四〇	二九六
	五〇〇	一〇〇	六〇〇

備考增加シタル百字中、讀本編纂上ノ都合ニ依リ、比較的困難ナル文字ノ下級ノ讀本中ニ現ルル場合ニハ、一二回振假名ヲ附スルハ妨ナシ。

併し余は何時でも增加するよりも、正確なる知識としたい論者である。

第八章　漢字の字畫

漢字の字畫の繁雜であることは、事實である。殊に通俗に於て、又は學者に於ても、一層繁雜なる漢字を使用し、誤用して居るのである。多少注意をすれば、固より漢字相應の趣味のある、字畫を發見せられ字音に於て、又意義に於て理解を助ける媒介となるのである。併し字畫を減少して、十分他と混同もせず、用を辨ずるものならば、其繁雜を避けるに超したことはないのである。文部省に於て、曾て、漢字を制限せられたときに當つて、

禮を礼

とすることに定められた。又其後國定教科書に於て、

一、蠶を蚕

一、鹽を塩

として使用せられた。又其他

一、絲を糸

二、蟲を虫

として使用せられて居る。礼は元來禮の古字である。又此蚕糸、虫は各〻元と別字ではあるが、其本來の音義として、吾人は使用することは決してないのである。故に文部省に於ける此措置は、余は至極贊成であるのである。若し此方法を擴めるならば隨分多數の簡單なる漢字を發見し、若くは制作せられることであらう。

若し礼を以て、今日普通に使用せられる禮の代に、使用せられた旨趣を擴めば、左表の如く、其古字本字又は同字中字畫の簡單なるものがある。但し一欄中、上字は普通に使用するもの、下字は字畫の簡單なる古字、本字又は同字である。

漢字ノ簡單ナル同字表

部首ノ字畫								
二	佛 仏	冪 冖	協 叶	叡 睿	叢 䕺			
三	囂 嚣	國 囯	堂 坣	塚 冢	壑 㕡	夢 梦	宜 宐	寧 寍

寶 瑤 嶽 岳 幾 兇 廟 庿 從 从

四 慷 忼 擧 㪯 敎 效 棲 栖 爾 尒 棄 弃 歸 归 淵 𣶒

瀞 浣 無 无

五 畫 画 當 当 碇 矴 祐 佑 福 畐 窗 囱

六 算 笇 箒 帚 篠 筱 網 网 繁 緐 耕 畊 聲 殸 臺 臺

與 与 草 艸 荒 巟 萬 万 藝 秇 處 処 號 号 衆 众

七 覺 𧠑 詠 咏 誤 悮 諮 咨 貌 皃 遲 遅 野 埜

八 陰 会 陽 昜

一一 麗 丽

一四 齊 亝 齋 亝

一六	龍	竜

又若し蚕壚、糸又は虫を以て蠶、鹽、絲又は蟲の代に、使用せられた旨趣を擴めば、左表の如く其俗字又は略字中、字畫の簡單なるものがある但し一欄中、上字は普通に使用するものであることは、前表の通である。

漢字ノ簡單ナル俗字略字表

部首ノ畫數								
一	乾 乹	亂 乱						
二	亞 亜	來 来	儉 倹	傘 仐	兒 児	兩 両	勵 励	區 区
	卽 即							
三	同 仝	圍 囲	圓 円	圖 啚	堯 尭	學 斈	實 実	屬 属
	巒 峦	巖 岩	幽 凼					

四	應応	拂払	擇択	斷断	晝昼	書昏	會会	淵渊
	燈灯	爲为	牀床	條条	獨犹	獻献		
五	異异	當当	發発	稱称	竊窃			
六	等才	筆笔	箇個	糧粮	紙帋	總総	繡綉	繩縄
	膽胆	舊旧	莊庄	蓋盖	蘆芦	蘇甦		
七	證証	譽誉	變変	谿溪	覺覔	豺犲	貳弐	質貭
	辭辞	遷迁	邊辺	醫医				
八	鉤勾	錢戋	鍼針	鑛礦	陵陵	雁厂	雖虽	雙双
	離离							
九	風凡							

一〇	驅 駈	體 体	鬪 閗
一一	麥 麦		
一二	點 点	黨 党	
一三	鼎 鼑		
一五	齒 歯		
一六	龜 亀		

右各欄中の下字の如きは、俗字又は略字として、從來久しく採用せられつつあるものの例として少しく揭げたのであるが、又更に此旨趣を擴めるときは、其他字畫の少い諸種の漢字を制作し得られることであらう。

余は第十一篇に於て、漢字の字畫に就いて、全く一篇を費し、殊に其分量全部の紙數の約四五分の一に匹敵する程ではあるが、是は現今に於ける亂雜を矯正するため

なので本章に於ける意見は、將來簡單なるものに改正しようとするためなのであつて、其意見は少しも撞著はしないのである。

第九章　漢字の字音

漢字の字音及一般の讀方に就いては、第七八の二篇及其他の諸篇に於て、陳述したるが如く隨分複雜である上に、世人の亂雜は亦一層甚しいのである。而も其字音も現今にては、最早本來の支那のとも、大に其趣を變じて居るので、他の諸國には通せないのである。故に我國のみにて任意に之を改正しても、上下一般に採用せられるならば、他の諸國、即ち同一の漢字を使用する諸國の發音に頓著するには及ばないのである。某大家は若し漢字の字音を吟味し、正しき往古の假名遣法を實行するならば、清韓語を研究する上に於て、多大の便宜であると言はれた。成程夫は尤であるに相違ない。併し我國人中清韓語を研究せねばならぬものは、至極の少數であつて、固より意に留めるには及ばないのである。

余は第七八の二篇に於て、世人の亂雜を矯正するために、所謂本來の正當なる字音

のものを多數に掲げて置いた。是は世人中各自任意に亂雜にするのであつて、國家の法令に依つて、又は學術社會の決議に依つて、改正せられたこともないのであるから、是非或程度までは、本來のものに從ふべきことを述べたのである。併し是等は或方法を定め、或標準の下に或種類の字音を改正し上下一般に普及せしめることは、余は決して不同意ではないのである。

第十章　其他の改良事項に關する概說

第五章乃至第九章に陳述したる事柄等を實行するは、國語改良に關する第一著手のものであると思ふ。而も是等の事項を實行しても、現今に於ける思想交換上に差支を生ずることは、無論ないのである。又古來の所有文書を見るにしても、多少形式の相違點をさへ知らば、亦少しも差支はない。唯漢字の制限を擴め又は字畫の改正等のために、不便を感ずることは、多少は免れ難いことではあるが、漢字に關する基礎的知識がある以上は、其調査手續さへ理解すれば、足るのであると思ふ。

其他是等の事項と同時に、第四章に掲げたる第一乃至第五の事項を實行し、又第十

ニローマ字の使用を漸次擴めることにするのを、余は希望して已まないのである。是等の改良意見は、直接に「漢字の研究」には關係しないが、序に少しく述べることとする。

第一。言文一致の國文を奬勵して、上下一般に普及せしめたい。此文體の當否は今は多く論ぜぬこととしようが、自然の趨勢上拒ぐべからざる傾を持つて居る。余は十年以前より自ら起草する國文として、常に實行するのである。諸種の私信は勿論、自己の諸記錄より、公私に於ける祝詞告辭の類でも同樣にやつて居る。唯公文書等に於て一定の書式のあるものは、諸官衙に於て受理せられないから、已むを得ず、其書式に從つて居ることもある。余は此文體に就いて失敗に近いことに出會つたことが、二度あつた。一は明治三十五年に或地方より他の地方へ轉任したとき、禮狀を前任地某新聞の主筆に送つたことがあつた。其主筆は豫ねて交際して居たが、此文體には、常に正反對であつたために禮狀を紙上に掲げ、一句每に滑稽的の批評を加へた。併し同人は中心より余に反情を持つて居るのでない。故に內容に關しては、好意を表したのであつた。其後後任地に關する狀況を詳報してやつた時は、丁寧に謝意

を表して登載し、且つ同文體の禮狀をも送つて來たことがあつた。又一つは三十七年中、公務に關する復命書を某官衙に提出したことがあつたとき、某課長たる某視學官より普通文體に訂正せよとて返附して來た。余は口上にて復命する言葉を其儘文字文章を以て寫したのであるから、差支ないと言つて、交涉に應せなかつたら、二箇月程後には、依命通牒を發せられた、職務を奉ずる以上は此依命は鶴の一聲である。最早議論すべき餘地がないのである。併し當時の往復書類は記念のために、大事に保存して居るのである。

前段は普通の國文としての實行の場合である。余も時として漢文を撰ることもある、又漢詩を作ることもある、是は擬古文又は外國文を作ることのあるのと同じことである。決して衝突はしないことである。

第二。國語中の類語を成るだけ用ひずして、所謂標準語を制定使用することにしたい、類語とは一語にして、二種以上の意義を表す言葉を云ふのである、此類語は何れの國語にもある。歐米の諸國語中にもあるさうである。

或日本人が曾て米國ロッキー山中の汽車にて、頭を窓外に出して、風景を眺めたと

き、或外國人が、

ルック　アウト、(Look out)

と申したから「外ヲ見ヨ」といふのであると思つて、一層頭を外に出して、外方を見廻した。外國人は頻に同語を叫び、遂に上體を擁して、窓内へ引入れたさうである。是は言ふまでもなく、ルック、アウトは一の熟語となり、危險であるから「氣ヲ附ケヨ」といふ意義であるのである。又こんな文章もある。

アイ　ネバー！　ソー　エー　ソー　ソー　エー　ソー、

(I never saw a saw saw a saw.)

右の文章中、同じ綴りの「ソー」(saw) が四つあるが、第一のは「見タ」といふ動詞、第二と第四とは「鋸」第三のは「鋸ノ物ヲ切ル」動詞である。故に「余ハ決シテ鋸ヲ引切ル鋸ヲ見タコトハナイ」といふことである。

其他清韓語にも、類語はないことはないが、我國語程、澤山の類語のあるものはなからう。同じ「イコー」(Ikō)の發音にても、「以降」「異口」「意向」「衣桁」「異香」「威公」「偉功」「遺功」「遺稿」「威光」「息フ」「嚴ウ」等の類語もある。又其他

一、ひ(日月ノ日) ひ(月日ノ日) ひ(火) ひ(樋) ひ(干物ノ干)

二、かき(柿) かき(垣) かき(牡蠣) かき(書手ノ書)

三、はし(橋) はし(箸) はし(端)

四、ごぜんが、ごぜんに、ごぜんを ごぜん めしあがつた。

五、このみ をは さる に くはせて、このみ をは さる に くはせて もらふ さるひき。

六、いつかて あふみちあらむ ついにみの あはては いかが いきかひもなし。

七、うかりけり たひはきしかた ゆくさきも すかたやつると ひとのみむかも。

八、こりすふたよ いもねすみしか きみこざる うしやくまなき つきのかねこと。

九、あさましや あふひもしらに こもりゐて うとしさびしと なきやあかさん。

十、おもひつつ　しのひはすてし　きみなくは　なにとかならん　ながきゆくする。

十一。ほととぎす　ほととききすきす　ききすきすに　まうまつわれに　はつねきかせよ。

此最後の分に至つては、若し本文の如く濁點を附けねば、殆ど讀み得ることは、六ケ敷いものである。其他是等の例を列擧するときは、固より際限はないから、止めようが、我國の和歌、俳句、狂歌、川柳等より諸種の語呂合等に至つては、此類語を利用することは、實に多いことである。併し余は普通の國語中よりは成るだけ此類語を廢する樣にしたいとの希望を持つて居る。國文の形式が、全く假名文になるにしても、ローマ字になるにしても、是等の類語を大切に保存して居ては、到底意義の通じ樣はないのである是等の內容を平氣で濟して居て、形式のみに汲々するのは、徒勞であると言はねばならぬことと余は思ふのである。

第三。假名を純粹の音符文字とすることにしたい。假名の制作は元とは音符的に出來たに相違ない。併し言葉及發音は時代に從つて變化したが、假名は依然として居

るから、現今にては音符的の任務を盡して居ないのである、是は是非整理の必要はある、文部省に於ける國語調査會等にて、英斷の措置を取られんことを、余は希望して居ることである。今日にては假名に更に他の假名を附けるか、甚しきはローマ字の力を借るか、或は漢字の力を借らねば、讀方も意義も通じ得ないことになつて居るではないか。

第四、假名文の使用を擴めたい、假名文を公私一般に使用しても、差支のないことにしたいのである。曾て某官衙にて、假名文を受理せられなかつたため、或上納品の代金を受取らなかつた奇人もあつたことがある。併し電信文だけは差支ないことになつて居る、序に一層寛大にせられたいものである。我國の普通教育の御蔭に依つて、就學歩合が九十何人に達して居るが、壯丁檢査の現狀を見るに、今尚ほ其約一割は假名を以て自分の氏名をも記されぬものがある。一方教育の程度の低いもののために、又一方ローマ字の專用になる見込のあるといふもののためにもなるのである。

假名文を奬勵する場合に必要缺くべからざる一つの方法がある、是は分別書のこ

とである。假名文に分別書をしないと、彼の

一、べんけい　がな　きなた　を　ふ　りまはーし　りまはーし‥‥

二、かなしや　くやしや　せいべゑい　が　めいど　に　ひきこし　まをし　さふらふ。

などととんだ誤讀をすることがある。又次の樣な實例も是まであつたことである。

但し此例は原文分別書をせないのに、讀者が誤つて讀んだ通に、分別したのである。

一、嘗て大學理科敎室箕作博士に電報が來たとき、小使が宛名を

ダイガク　リクワケウシ　ツミツクリ　ハクシ

と讀んで、そんな名の人は此大學には居ないとて、大に怒つたことがあつた。

二、嘗て廣島農工銀行頭取以下行員二十餘名秋季運動として伊豫松山に遊んだとき、翌日大阪新聞電報欄に、

‥‥頭取以下拘引二十餘名衆議其筋へ運動中‥‥

と揭げてあつたため、一同驚いて引返したことがあつた。

三、先般韓國皇帝北巡の歡迎のために國旗を描きたる提燈を我大阪に注文し

たとき其下に何か書くかと、電報にて尋ねたら、先方より

バンコクキミヨ（萬國旗見ヨ）

と返電して來たために、遂に「萬國君代」と書いて送つたさうである。

四、下野國那須郡の或路標に、次の假名文がある。

ばとうからすやまとりのこみち

是は馬頭、烏山、鷲子（トリノコ）道であるのであるが、或旅人は「鳩、鵜鳥、山鳥の小道」と讀んださうである。

其他假名文には、濁點を正確にすることを注意せねばならぬ。さうでないと。

一、まかりでて　ばかけに　みゆる　さくらかな。

二、のどがなる　はやしに　かかる　おにはまつ。

三、のどがなる　かすみそのへの　にほひかな。

四、ゑのしよまう　めつらしうにして　がきにふだう。

等の誤讀を生ずることがある。

第五。國文には總べて句讀點を附けることにしたい。歐米の諸外國語には、皆句讀點

を附けてある。淸韓語でも句讀點を附けないと種々の意義に解せられるものである。例へば

一、論語に在る「唯酒無量不及亂を朱子は

唯酒無量。不及亂

と句讀點を附けたが若し

唯酒無量。不及、亂

としたならば「……及バザレバ亂ル」とて、十分に飮まねば、亂暴をするといふこととなる。

二、或禪僧が頻に酒を飮んだとき、或人が御門前に

不許葷酒入山門。

と書いてありませぬかと尋ねたら、禪僧はあれは

不許葷、酒入山門。

と讀むので「葷ヲ許サナイガ、酒ハ山門ニ入レ」と言ふのであると答へた。

國語にても句讀法を誤ると、種々の誤謬を生ずるものである例へば

一、德川時代にも天氣豫報的のことがあつて、毎朝天文係は將軍に提出した豫報文は、何時も

今日者雨降申天氣に而者無御座候

併し將軍の晨起は遲くして、當日の天氣の十分に見定つた頃であるから、近侍のものは、晴天ならば一氣呵成に「……雨降リ申ス天氣ニテハ……」と言上し、雨天ならば「……雨降リ申ス」にて讀切り、次に「天氣ニテハ……」と言上せしめる樣に、豫め喋し合つて置いたさうである。

二、元祿年間に大阪町奉行に新任した松野河内守は當時與力共の不正を矯正せんとして、自ら左の落首をなした。

たうぞく　は　おほさか　より　きしう　に　ある。

依つて與力共を招集し、其意義を語らしめた。與力共は異口同音に「盜賊ハ大阪ヨリ紀州ニ在ル」とのことを以てしたら、河内守はさうではない。盜賊ハ大阪與力衆ニ在ル」とのこととて、大に戒飭をなした。

是等の句讀法の間違は、調法ではあるが、夫にて完全な國文であるといふことは、誠

に困つたことではないか、我國語にても、書籍にては、句讀點を使用するが、其他公私の通俗にては、未だ使用せぬ慣例となつて居る。併し余は此句讀點を使用することを奬勵しないのである。

詰り國語改良が、如何に解決せられ、假令假名採用になるにしても、又はローマ字採用になるにしても、其なるまでには、漢字の研究は、無論必要である。是は現今の國文其れ自身より、又は他の改良の國文に移る準備としてより、雙方共に必要であるのである。又彌〻改良せられた國文が、實行の曉にしても、或程度までの漢字の全廢は到底不可能のことである、是は專門家として、古文書の調査上は勿論であり、通俗に於ても、自國語の多數の語源たるべき漢字及漢語の或程度までの知識を有せなければ、到底自由に其國語を使用することが出來ないからである。是等の理由に依り余は淺學を顧みず、此漢字の研究の結果を發表したのである。

本書第一版乃至第三版發行の前後より、漢字の研究に關する諸會は、大に勃興し、漢

字の研究に關する諸書は、頻に發行せられて來た。頗る悅ぶべき現象であると、余は確認するのである。最近銅牛氏とかの「漢字雜話」は、雜話としては極めて奇拔なもので、自說に違ふものは、一も二もなく誤謬と罵倒し、單刀直入（同書には短刀直入とある）若し長刀ならば曲入か）に古今を撫切り、傍若無人の概がある。且つ日本語の虐待同書には逆待とある）を救濟しよう順待にか）として居る。而も氣焰が記憶（同書には記臆とあるが、記臆の熟字は、古來用例を見ない。南史、齊書、宋史、杜甫詩、柳宗元文等皆記憶としてある）に殘るから面白い。學海に貢獻せられたる成績（同書には成績の熟字を非難し、成蹟とせねばならぬとあるが、成蹟の熟字は、古來用例を見ない。書經を始め、南史より柳宗元文、羅隱詩等皆成績としてある）は、何と偉いものではなからうか、それでこそ所謂「無きに優れる書」位ではなからう。近來文壇百花爛漫、何と文運の隆盛を謳歌せずには居られようか。今第四版印刷校正の際、欣喜の餘此一節を挿入した。

おお此に尙ほ餘白があるから、最後に一の拙稿を題して置かう。

學海茫々縱又橫。津梁何物極ニ紛爭ー。拮据聊許從ㇾ隗始。
遼豕任他人所ㇾ評。

漢字の研究　終

附錄 字音假名遣一覽表

韻礎	オウ	コウ	ソウ	トウ	ノウ
東董送、冬腫宋、蒸拯證、尤有宥、	嘔漚歐毆甌謳鷗應○鷹○	工功攻汞虹紅貢控鴻口叩扣后垢逅拘苟鉤公蚣弘肱互恒肯厚後洪閧侯候喉猴寇溝煹媾構篝購薨興	匆忽葱聰總驄走宋宗淙崇○綜蹤奏湊輳叟送曾僧增憎層繒贈嗽椶叢藪	冬疼同洞桐胴筒銅彤投豆頭東凍棟桶動慟董偸兜登燈童僮憧瞳艟透等統耨謄騰藤籐讀竇鬬	能○農○儂○濃○膿○

韻礎	アウ	カウ	クワウ	サウ	タウ	ナウ
江講絳、肴巧效、豪皓號、陽養漾、庚梗敬、	央○怏○殃○鞅鴦拗奧澳襖媼麼櫻鸚鶯	爻交効咬郊校效絞較亢伉抗坑忼阬杭頏航卬○仰○昂尻巧攷號江扛杠肛項腔行衡好向告浩皓誥亭更梗硬鯁孝哮酵肴殽昊庚幸倖睾岡剛崗綱鋼降絳香○巷港耿耗耕高膏稿藁毫豪羔羹餻莖敖傲慠遨鼇康慷糠强○皐槔翺鄉○膠磽講鏗囂顥	光恍胱晃幌絖宏紘閎肓荒慌皇徨遑蝗篁黃廣橫簧曠礦鑛黌嶸轟	爪爭崢箏諍早草艸壯○莊裝臧藏臟贜鏘相○想○箱霜倉傖創槍蒼瘡○蚤搔騷掫桑顙巢勦曹漕遭槽糟造慥糙爽掃象○像○棗喪葬嫂艘操噪燥藻譟愡窻雙竈	刀叨宕碭到倒唐塘糖桃逃討島堂棠膛當黨儻陶淘萄湯蕩盪悼棹盗道導滔稻蹈韜嘲撞濤禱橙撓鐃獰纛	惱○腦○瑙○囊○嚢○

韻礎	アフ	カフ	サフ	タフ	ナフ
合、洽、	凹押狎○閘鴨壓	甲匣岬狎合洽恰盒蛤袷閤夾峽盍溘闔	匝挿鍤颯霎雜	沓踏答塔納衲搨榻蹋	納○衲○

ホウ	丯峰烽逢蜂蓬鋒縫豐矛袠戊牟眸奉俸捧朋崩繃鵬封帤某謀剖貿裒鳳	ハウ	亡忙妄忘芒茫望方坊彷妨防芳房放訪髣旁滂榜謗包咆抱泡庖胞苞炮砲疱袍鉋鮑卯邦蚌保褒茅冒帽旄烹棒棚蒴報彭澎膨貌暴	ハフ	乏法
モウ	蒙濛朦艨	マウ	亡盲罔網毛耄孟猛艋莽	マフ	○
ヨウ	用俑踊慂孕宂溶蓉鎔庸傭雍擁膺鷹蠅癰	ヤウ	(在後)	ヤフ	○
ロウ	弄陋漏稜樓鏤髏瀧壠瓏朧聾籠	ラウ	老牢郎浪狼琅朗廊粮糧勞潦醪	ラフ	拉臘蠟鑞臈
ヲウ	翁蓊瓮甕	ワウ	王汪尫旺枉往泓皇鳳黃横	ワフ	○
韻礎	東董送、冬腫宋、	韻礎	尤有宥、	韻礎	緝
イユウ 即ユウ	勇邕雄、裕熊融	イウ	又友右佑祐有侑宥囿尤疣由油柚攸悠酉幽猶猷游遊郵牖憂優誘	イフ	邑悒揖
キユウ	弓穹躬窮宮	キウ	九仇究鳩久灸咎柩牛丘邱蚯休臼舅舊求救毬裘朽糾糺廄	キフ	及吸汲級笈急泣給翕噏歙
シユウ	主充銃戎絨宗崇崧嵩從縱蹤終螽菘衆	シウ	囚收州洲酬舟周週紬袖帚箒秀綉銹秋啾愁狩酧臭酋遒柔揉蹂修脩祝羞就搜瘦漱聚驟蒐醜繡獸讐	シフ	入十什汁拾執習集葺輯濕澀襲
チユウ	中仲沖忡忠衷、注、炷柱、註駐重蛛誅頭廚躕蟲	チウ	丑紐鈕肘紂酎宙抽紬冑胄惆稠晝儔疇籌躊鑄糅	チフ	蟄
ニユウ	乳	ニウ	柔	ニフ	入
ヒユウ 即フウ	風楓諷封	ヒウ	彪繆謬	ヒフ	○

音	字
ミユウ	○
イユウ 即ユウ	在前
リユウ	隆○龍
キユウ	○
韻礎	冬腫宋、蒸拯證、
ミウ	○
イウ	在前
リウ	柳劉留溜榴騮流琉硫旒
キウ	
ミフ	○
イフ	在前
リフ	立粒笠
キフ	○

音	字
イヨウ 即ヨウ	在前
キヨウ	凶兇匈恟胸共供拱恭蛬恐蛩跫鞏筇矜兢興凝
シヨウ	冗升昇陞仍丞拯烝蒸承松訟頌鬆茸悚乘剩舂從慫聳縱蹤腫尰衝踵鍾鐘勝誦稱慵繩證
韻礎	蕭篠嘯、
エウ	天妖殀幼○拗○窈杳要腰陶搖遙謠曜燿耀
ケウ	叫○敎○梟喬嬌橋蕎矯驕堯僥澆曉翹驍邀竅
セウ	小少抄○鈔○肖宵哨消悄梢○逍硝霄銷召招沼邵昭紹照詔笑焦憔蕉樵醮椒燒遶繞鐃嘯蕭瀟簫篠擾
韻礎	陽養漾、庚梗敬、青迥徑、
イヤウ 即ヤウ	羊佯徉洋恙痒漾樣養陽揚楊煬瘍颺
キヤウ	卬○仰○卿鄕嚮饗響兄○況貺競匡狂○筐誑向餉行○刑○形羌杏○京亨香○竟○境○鏡○梗强敬○驚○慶彊疆薑
シヤウ	上井○生○性○姓○牲○星○笙○猩○正○政○鉦○匠成○城誠○妝戕狀牀莊將○奬漿醬牆檣昌倡唱娼菖晶青○淸○請尙常甞裳嘗賞廠省○祥翔詳相章彰障樟璋淨○靜商象傷殤觴聖○聲○襄壤攘穰讓
韻礎	葉、業、
エフ	葉燁曄靨
ケフ	叶協脇脅劫怯夾俠挾狹、峽莢愜篋鋏頰業
セフ	妾接浹涉捷睫楫慴摺葉懾攝躡

音	字
チョウ	重冢塚澄澂徵懲寵
テウ	弔兆挑晁窕眺跳銚尿迢超貂髫凋彫調雕鯛鳥釣條溺嫋朝潮趙肇糶
チャウ	丁町停頂丈仗杖長悵帳張脹漲定錠挺貞聘提娘孃釀場腸暢聽廳
テフ	帖貼捻喋牒蝶諜輒褶疊
ニョウ	女
ネウ	尿溺遶繞饒鐃
ニャウ	娘孃
ネフ	捻
ヒョウ	氷馮憑
ヘウ	表俵苗廟描猫秒眇渺票剽漂標瓢飄猋飈廟
ヒャウ	平評萍兵鉼病屏
ヘフ	○
ミョウ	○
メウ	妙苗猫
ミャウ	名茗明命冥
メフ	○
イョウ 即ヨウ	在前
エウ	在前
イャウ 即ャウ	在前
エフ	○
リョウ	凌陵菱稜綾龍
レウ	了料聊僚寮燎瞭遼獠繚鐐鷯寥蓼
リャウ	令領良兩輛魎亮喨凉諒梁粱粱量糧靈
レフ	獵鬣
キョウ	○
ヱウ	○
キャウ	○
ヱフ	○
イ	已圯以伊衣依扆夷洟矣怡貽飴易倚猗椅移意肄頤縊彝醫懿
イキ	○
イク	育昱郁澳燠
イチ	一壹
イツ	一佚佾逸壹溢
イン	引蚓因姻茵氤印胤音殷慇陰蔭淫婬寅湮飲隱
ヰ	位委萎逶韋偉圍葦緯闈胃渭帽蝟謂洧鮪畏威恚惟帷唯維慰彙遺
ヰキ	域閾
ヰク	○
ヰチ	○
ヰツ	聿鷸
ヰン	尹允員隕殞韻院筠
エ	衣依哀埃愛
エイ	永泳咏詠曳洩泄映英瑛霙盈楹郢瑩榮營裔叡影鋭穎嬰纓翳贏
エキ	亦奕役疫易場益液掖腋懌斁繹驛
エツ	咽悅閱噎謁
エン	沿鉛炎奄淹掩延筵咽烟衍愆宴偃堰捐焉椽緣焔閻煙厭饜演鳶燕嚥臙檐簷鹽艷

音	漢字
ヱ	回°廻°淮°惠°畫°隈°會°繪°衛°慧°穢°壞°
ヱイ	衛
ヱキ	○
ヱツ	曰越鉞粵噦
ヱン	宛苑怨婉蜿豌°鴛爰援媛猨垣袁園猿遠轅寃淵圓
オ	於、
オク	億憶臆
オチ	○
オツ	乙°
オン	音°恩陰°蔭°飲°隱°
ヲ	汙於烏嗚塢惡
ヲク	屋
ヲチ	越°
ヲツ	膃
ヲン	苑°怨°溫褞園°遠°穩
カ	下个箇牙芽雅可何河呵柯苛荷舸歌加架笳賀嘉駕我俄哦峨娥蛾餓鵞佳夏廈檟家嫁稼假暇遐瑕霞賈價衙
カイ	乂刈艾介芥界亥垓咳欬駭佳厓崖涯街戒械誡改屆拐枴皆偕階楷諧害海豈凱愷塏鎧愾解廨懈邂蟹漑慨槪蓋礙
カク	各客格閣擱額骼角岳革核愕腭鰐隔較樂赫確鶴學覺嶽覈
カツ	刮曷渇喝葛遏褐戞割轄滑猾
カン	干奸汗旱旰竿甘柑邯痯勘堪函涵含頷龕岩柬諫姦看咸感憾眼乾幹翰瀚韓闞閑澗簡菅陷岸雁贋監檻艦鑑漢艱顏巖
クワ	火戈化花訛靴貨禾和科蝌瓦瓜果菓夥課顆臥華嘩譁畫誇過禍蝸蝸寡
クワイ	外回廻徊灰恢詼快恠乖悔晦誨淮傀塊嵬隗魁槐瑰會獪檜膾繪潰隤壞懷
クワク	郭廓畫劃擴霍矍獲穫蠖攫馘
クワツ	月°活挌括豁
クワン	丸紈元°完玩冠頑翫丱寬串患卷°圈官棺管館桓原源°願°貫慣款換煥渙湲緩澣盥寰圜環還勸歡懽罐觀鑵關鰥
ジ	二次貳示而自字寺侍恃時耳珥餌兕似姒兒事茲孳滋慈磁爾邇璽辭
ジキ	食°
ジク	肉
ジツ	日實
ジン	人仁刄仍忍認壬任妊荏衽迅訊甚神尋腎盡燼藎
ジヤ	邪者闍蛇惹麝
ジヨ	如恕絮汝序抒舒助鋤徐敍

ジュ	ヂ	ヂュ
戍受授綬取娶聚呪就竪壽需儒孺濡襦樹	尼地治柱峙持痔除膩	○
ジュキ	ヂキ	ヂュキ
○	直	○
ジュク	チク	ヂュク
粥熟塾	竺衄舳軸	○
ジュツ	ヂツ	ヂュツ
戍恤述術	帙昵	朮怵
ジュン	ヂン	ヂュン
旬荀殉筍詢巡順馴盾循楯准隼準純淳惇諄醇鶉閏潤蓴遵	沈陣陳塵	屯
ジャク	ヂャ	ヂャク
昔鵲若弱雀寂籍	○	著
ジョク	ヂョ	ヂョク
辱溽蓐縟褥	女除	匿慝濁

ズ	ヅ
手受珠從誦數	豆頭杜徒途都圖
ウヰ	外茴
スヰ	水吹垂陲錘帥祟衰彗萃粹瘁遂墜惴瑞隋隨髓推誰雖蕊穗
ツヰ	追椎對
ユヰ	由惟唯維遺
ルヰ	涙累壘類

備考

一、本表後段特に濁點を附けたものの外は、故らに清濁の區別をなさぬ。是は普通に自ら明であるからである。

二、前段に韻礎を示したのは、普通には必要はないが、假名遣の基く所の理由を知らんとする者に便するためである。

三、漢音吳音の發音同一にして假名遣の異なるものは、漢音に依つた。又字傍に

「○」符を附けたのは、呉音である。又◎」符を附けたのは、唐宋音である。但し是は唯僅に二字のみである。

四、漢字には習慣上、字書に示す所の字音以外、通俗にて一種の字音を有せしめて居るものがある。余は之を俗音と云ふ。字傍に「、」符を附けたのは此俗音である。又反切に依らぬ通俗の假名遣のものにも「、」符を附けた。

五、漢字中發音殆ど同一にして其發音の根元となる子字同一であるものは、同一の假名遣をなすべきものであらうが、我國にて最初之を假名にて寫すに韻礎の如何に依り、別種の假名遣をなした。故に字音假名遣は、必しも類推すべからざるものである。例へば東董送韻に屬する「工」に从ふものの漢音は「コウ」なるも、江溝絳韻に屬する「工」に从ふものの漢音は「カウ」として居る。此等の韻は支那にては古來通韻と稱して居るのである。故に我國にても同一の假名遣をなすべきものなるに、矢張其習慣に從はねはならぬ。從來普通の字音假名遣法にては、或少數の假名遣のみを示し。他は何であるとして居るが、右の次第なれは、とても類推は出來ない。依つて余は假名遣に關する殆どあらゆる漢字を示した。但

し余の研究に依れる左の約三十種の異同に注意せば、其何れに屬するかは、明なることであらう。

功(コウ)—江(カウ)、控(コウ)—腔(カウ)、肱(コウ)—宏(クワウ)、溝(コウ)—講(カウ)、總(ソウ)—窻(サウ)、叟(ソウ)—嫂(サウ)、燈(トウ)—橙(タウ)、艠(トウ)—艟(タウ)、丰(ボウ)—邦(ハヴ)、崩(ホウ)—棚(ハウ)・矛(ボウ)—茅(バウ)、捧(ホウ)—棒(バウ)、貿(ホウ)—卯(バウ)、邑(イフ)—邕(ユウ)、揉(ジウ)—糅(ヂウ)、條(デウ)—篠(ゼウ)、讓(ジヤウ)—孃(ヂヤウ)、海(カイ)—晦(クワイ)、刮(カツ)—括(クワツ)、菅(カン)—管(クワン)、幹(カン)—澣(クワン)、時(ジ)—持(ヂ)、貳(ジ)—膩(ヂ)、女(ヂヨ)—汝(ジヨ)、徐(ジヨ)—除(ヂヨ)、割(カツ)—豁(クワツ)、述(ジユツ)—怵(チユツ)、

六、 蕭篠嘯韻に屬するものは、古來肴巧效韻及豪皓號韻に通じて居る。故に「ア」列音を音頭とし、「ヤウ」の聲を附けることを適當とする。漢字の字書中には、此假名遣法に依れるものが多い。拙著中の字音假名遣も之に依つて置いた。併し本居の假字用格には、其呉音を漢音としてある。而して世間普通には、之に從つて居るものが多いから、本表には暫く之に從つた。由來此韻の假名遣法には沿革がある。即ち「エ」列音を音頭とし、「ヲ」の聲を附けたこともあつたのである。

七、 字音假名遣法は一見すれば、錯雜して居るやうではあるが、韻礎より推定すれば、最も明なるものである。又韻礎を知らぬものにても、共通の法則は全くないことはない。是も數回本表にて檢出すれは、自ら明なるに至るものである。今

其二三の例を示さう。

イ、「ウ」列音に「イ」の聲を附けるものは、必ず「ヰ」である。而も其他の列のものには、決して「ヰ」を附けない。例へば

外（ウヰ）　水（スヰ）　追（ツヰ）　由（ユヰ）　類（ルヰ）

ロ、「エ」列音に「イ」の聲を附けるものが、拗音になるときは、必ず「イ」列音に「ヤウ」の聲を附ける。例へば

京（ケイ・キヤウ）　生（セイ・シヤウ）　丁（テイ・チヤウ）　平（ヘイ・ヒヤウ）　名（ベイ、メイ・ミヤウ）　令（レイ・リヤウ）

ハ、「ア」列音に「ウ」の聲を附けるものは、拗音のとき「イ」列音に「ヤウ」の聲を附く、又「オ」列音に「ウ」の聲を附けるものは、拗音のとき「イ」列に「ヨウ」の聲を附ける。例へば

强（カウ・キヤウ）　相（サウ・シヤウ）　又　興（コウ・キヨウ）

ニ、「ウ」列音のみか、又は「イ」列音に「ユ」を附けたるもの、長音になるときは、「イ」列音に「ウ」又は「ユウ」の聲を附けるか、或は「オ」列音に「ウ」の聲を附ける。例へば

右（ウ・イウ）　久（ク・キウ）　洲（ス・シウ）　留（ル・リウ）　又　由（イユ即ユ・イウ）　就（シユ・シウ）　宮（ク・キユウ）　或　工（ク・コウ）

ホ、「ツ」の首尾を有し、又は他音に重りて促音になるものが、長音となるときは、必

ず「フ」の聲を附ける。例へば

合（ガツ・ガフ）　執（シツ・シフ）　急（キツ・キフ）　恰（カツ・カフ）　拉（ラツ・ラフ）　接（セツ・セフ）　揖（イツ・イフ）　攝（セツ・セフ）　法（ハツ・ハフ）　濕（シツ・シフ）　甲（カツ・カフ）　立（リツ・リフ）　納（ナツ・ナフ）

蟄（チツ・チフ）　雜（サツ・サフ）　颯（サツ・サフ）

へ、「ウ」列音に「ウ」の聲を附けるものの音頭は「オ」列音に變ずることがあるも「ア」列音に變ずることはない。例へば

空（クウ・コウ）　通（ツウ・トウ）　封（フウ・ホウ）

ト、「ツ」の音尾を有するものは、呉音のときは、何れも「チ」の音尾に變ずるものである。又「チ」の音尾を有する漢音は一つもない。例へば

一（イツ・イチ）　吉（キツ・キチ）　七（シツ・シチ）　日（ジツ・ニチ）　秩（チツ・チチ）　必（ヒツ・ヒチ）　律（リツ・リチ）

八、假名遣法に關しては、余は假名を以て、音符的のものとなし、何時にても、其發音を直接に寫すものとなしたき希望を有して居る。而して從來行はれて居る假名遣法は早晩之が整理をなすべき時機が到達することを確認して居ることである。

漢字の研究附録　終

明治四十二年十一月十五日印刷
明治四十二年十一月二十五日發行
明治四十三年二月五日訂正再版印刷
明治四十三年二月十日訂正再版發行
明治四十三年三月十二日訂正三版印刷發行
明治四十三年十二月十五日訂正四版印刷發行
明治四十四年十月一日訂正五版印刷發行
大正六年七月一日訂正六版印刷發行

定價金壹圓五十錢

改正定價金貳圓

著作者　安達常正
栃木縣宇都宮市西原町二千五百八番地

發行者　林平次郎
東京市日本橋區數寄屋町九番地

印刷者　渡邊八太郎
東京市牛込區榎町七番地

印刷所　日清印刷株式會社
東京市牛込區榎町七番地

發行所
東京市日本橋區數寄屋町九番地
六合館
振替口座東京二三七一